小泉八雲全集

第三卷

東京

第一書房

小泉八雲舊居前面　（松江市塩見繩手根岸邸）

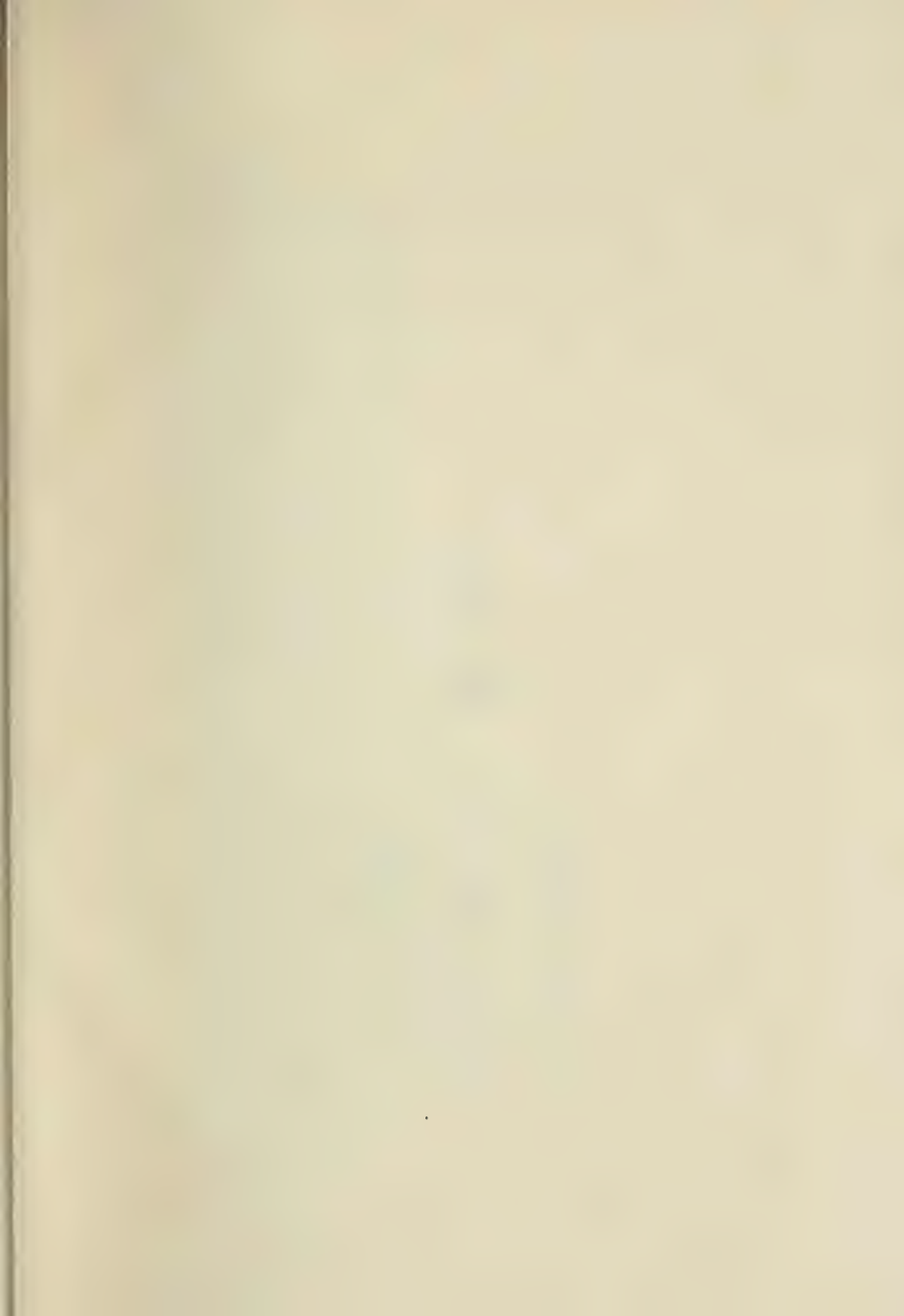
私の東洋に於ける滯留を、全くその厚意によりて、成さしめたる友人――

米國海軍主計監ミチエル・マクドナード君、竝に東京帝國大學名譽教授

ベズル・ホール・チエムバリン君に、

愛情及び感謝の記念として、この二卷を捧ぐ。

譯者

落合貞三郎
大谷正信
田部隆次

知られぬ日本の面影

序

一八七一年、ミットフォード氏は、あの面白い『舊日本物語』の緒言に、つぎの如く書いた。『輓近日本に關して書かれた書籍は、單に官廳の記錄から編纂したものか、或は通り一遍の旅客の簡粗なる印象を內容としたものに過ぎない。日本人の內的生活に就ては、世界一般は殆ど知つてゐない。日本人の宗敎、日本人の迷信、日本人の事物の考へ方、日本人の行爲の裏面に隱れたる動機——すべて是等は未だ神祕である』と。

ミットフォード氏が說き及んで居る、この內的生活は、卽ち『世界にあまり知られぬ日本』であつて、それを私は幾らか覗き得たのである。讀者は私の瞥見したものの數の乏しいのに失望するかも知れない。それは、この國民の中に入つて——しかも國民の風俗習慣を採用しようと試みてさへ——四ヶ年ほどの居住ては、外人をしてこの奇異の別世界に於ては、そろそろ落著いた氣分を起させるにも足らぬからである。誰人も本書の成果のいか

に貧弱にして、然かも殘れる事業のいかに多大なるかを、著者以上に痛感することは出來ない。

新日本の知識階級は、本書に述べたる俗間の佛教思想――殊に佛教より發したるもの――及び奇異なる迷信を殆ど有しない。一般抽象的思想、殊に哲學的思索に對して冷淡であるといふ特徴を除けば、今日の西洋化された日本人は、殆ど修養ある巴里人或はボストン人の智的平面上に立つてゐる。しかし彼は一切の超自然に關する觀念を過度に蔑視する傾向を有し、且つ現代の宗教的大問題に對する態度は、全然無關心のそれである。大學に於ける近代哲學の修業が、彼に何等社會學的又は心理學的諸關係の獨立研究を促がすことも稀である。彼に取つては迷信は單に迷信である。迷信と國民の情的性質の關係は、彼に何等の興味をも與へない。此冷淡に對して、顯著なる對照は、鳥尾子爵の堅固にして合理的、且つ遠大の見地に立てる保守主義である――一個の崇高なる例外。して、これは彼がよく國民を了解してゐるからのみでなく、また彼の屬する階級が、無理解にも――全く當然ではあるが――舊い信仰を恥辱と思つてゐるからである。現今不可知論者と自稱する我々の多數は、佛教に比して遙かに不合理的なる信仰から新らたに解放を得た時代に、我々がいかなる感情を以て祖先の陰慘なる神學を見返へしたかを覺えてゐるだらう。日本の知識階級は、僅々二三十年間に不可知論者となつた。して、この智的進展の急速が、佛

教に對する優秀階級の現今の態度の主要なる——全部てなくとも——原因を說明する。目下の處ては、その態度は實に不寬容に近い。しかも、迷信と劃然區別せる宗教に對する感情が、かやうてある以上は、宗教と區別せる迷信に對する感情は、更に甚しいものに相違ない。

しかし日本人の生活の稀有なる魅惑——一切諸他の國のとは非常に異つた——は、その歐化された範圍に見出さるべきてはない。それはすべての國に於ける如く、日本に於て國民的美德を代表し、且つ今猶その樂しい舊習、華かな服裝、佛像、家庭の神棚、美はしく、また哀れにも殊勝な祖先崇拜を固守する大民衆の間に見出さるべきてある。これこそ外國の觀察者が、もし、それに深入りするほどに幸運、且つ同情的てあれば、決して倦むことの出來ぬ生活てある——時としては、彼をしてその傲然得意になつてゐる西洋文明の進路は、果して精神的發達の方へ向つてゐるかを疑はしめる生活てある。年經るにつれて、日每にこの生活の中に、ある奇異な、思ひもよらぬ美が、彼に顯はされてくるてあらう。いづこも同じこと、ここにも暗黑方面はある。それても西洋生活の暗黑方面と較べて見れば、これは寧ろ光明てある。この生活も弱點、愚劣、惡德、殘酷を有つてゐる。が、此生活に接すること多きに隨つて、ますますその異常なる善良、奇蹟的の忍耐、いつも渝らぬ慇懃、

單純素朴の情、直覺的の慈愛に驚嘆させられる。して、いかに東京に於ては輕蔑されてゐても、その最も普通の迷信さへ、西洋の一層博大なる見解に取つては、日本人の生活に於ける希望、恐怖、その善惡に對する經驗――幽界の謎に對する解決を見出さんとするその原始的努力――の書籍に載らぬ文學の斷片として、最も珍重すべき價値がある。いかばかり民衆の比較的輕快柔和なる迷信が、日本人の生活の美を增してゐるかは、長く內地に住んだ人によつてのみ理解される。稀には邪惡な信仰もある――例へば狐憑のやうな信仰で、それは一般の教育によつて、急速に滅んで行つてゐる。しかし、大多數のものは、空想の美に於て、今日最高の詩人も猶ほその中に感激を發見する希臘神話とさへも比肩すべきものである。またその他、不幸の人々に對する同情、動物に對する親切を促がす幾多の信仰は、ただ道德的最好果を齎らすばかりてある。家畜の可笑げな得意顏、幾多の野獸が人間の前て比較的平然と怖氣の無さ、喰べ屑の施しを當てに、入り船毎に群がり寄る鷗の白雲、參詣者が撒き散らす米を拾ふため社寺の檐端より舞ひ下る鳩の旋風、古い公園の人馴れた鶴、菓子と愛撫を待つ神社の鹿、人影水に映る時、神聖なる蓮池より頭を擡げる鯉――是等及びその他いろいろの美はしい光景は、たとひ迷信的と呼ばるる空想に起因するにせよ、それらの空想は、萬有生命の渾一といふ高尙なる眞理を、最も簡易の形式て懇切示教して

ゐるのだ。して、是等のものほどに興味のない信仰――その奇怪さ加減、一笑を禁ぜざらしめるやうな迷信――を考察するに當つても、公平なる觀察者は宜しく史家レッキーの語を念頭に浮ぶべきである。

『多くの迷信は神に對する卑屈なる恐怖といふ希臘的觀念と一致するものに相違ない。して、述べ盡くせぬほど不幸な結果を人類に及ぼしたのもある。が、また異つた傾向の種類も頗る多い。迷信は吾人の恐怖に訴へると同じく、吾人の希望にも訴へる。それは屢〻心情最奥の憧憬に合致して、滿足を與へる。それは理性がただ出來さうなこと、有りさうなことを提供するに過ぎない場合に、確實を惠んで吳れる。それは想像の材料として玩ぶに好ましい想念を供給する。それは時としては、道德的眞理に新しい是認を與へることさへある。それによつてのみ滿足を得らるる要求を創造し、且つ、それのみが鎭め得る恐怖を起して、それは幸福の要素となること屢〻てある。して、慰安が最も必要とせらるる倦怠或は煩悶の際、その慰安力の効驗は最も多く感ぜられる。吾人は吾人の知識に負ふ處よりも、吾人の幻覺に負ふ方が多い。思索の方面にては主として批評的、且つ破壞的なる理性よりも、全然建設的なる想像力こそ吾人の幸福に貢献する處、恐らくは多大であらう。危險又は困苦に臨んで、野蠻人が信賴して、しかと胸に抱きしめる粗末な守り札、賤が伏

岸に神神しい保護の光明を注ぐと信ぜらるる聖書は、人生の惱みの最も暗き際に於て、哲學の最も崇高なる學說によつて與へ得られるよりも、一層現實な慰安を與へることが出來る。……批判的精神が普及する時には、好ましい信仰がすべて殘つて、痛ましいもののみ滅びるだらうと想像するのは、これほど大きい間違はない』

國民の質朴にして幸福なる信仰を破壞して、これに代ふるに、西洋では智的に夙に時世後れとなつた殘酷なる迷信——宥恕せぬ神と永遠の地獄といふ空想——を以てせんとする頑迷外人の努力に向つて、近代化された日本の批判的精神は、今や反抗よりも寧ろ間接の援助をなしつつあるのは、實に遺憾とせねばならぬ。百六拾年以上も昔に、ケンペルは日本人について、『道德の實行、生活の淸潔と信仰の儀禮に於て、彼等は遙かに歐洲人に優つてゐる』と書いた。して、開港場に於ける如く、固有の風儀が外來の汚染を蒙つてゐる土地を除けば、この語は今日の日本人に關しても實際である。私自身、竝に幾多公平にして、且つ一層經驗ある日本生活の觀察者の確信によれば、日本は基督敎に歸依することによつて、道德的にも、その他の點にも、何等得る處無く、却つて失ふ處が頗る多い。

本書上下二卷の內容二十七篇に就て、四篇はもと數個の新聞組合に買收されたのを、大

いに改竄を加へて、ここに再錄せるもの。また、六篇はアトランチック・マンスリー雜誌（一八九一―九三年）に發表されたるもの。その他、本書の大部分を成す諸篇は、新らたに書いたものである。

一八九四年五月日　本九州熊本にて

ラフカディオ・ヘルン

小泉八雲全集第三巻目次

知られぬ日本の面影　上

知られぬ日本の面影

上卷

第一章　私の極東に於ける第一日

日本に着いて間もなく出逢つた親切な英國人の教授が、『是非とも成るべく早く第一印象を書いておきなさい。すぐ散つて了ひますから。一度消えたが最後、また心に浮びませんよ。しかもこの國で、いろいろ奇異な感に打たれなさるでせうが、最初の印象ほど魅惑を與へるものはありますまい』と告げて呉れた。私は今當時の急いだ手控に據つて、第一印象を寫し出さうとしてみると、魅惑的と云はんよりは寧ろ漠として捕捉し難い方で、何か一種の思ひ出せないものが、追憶の中から雲消霧散したことがわかる。私は友情の籠つた勸告に隨はうと決心し乍らも、それを閑却してゐたのであつた。あの最初の數週間は、室内にじつとして筆に身を委ねる譯にゆかなかつた。日本の驚嘆すべき都會の日光を浴びた街頭には、見たり聞いたり感じたりすべきものが、まだ其際なかなか澤山であつたから。が、假令あの最初の經驗のあらゆる忘れた感想を復活し得るにしても、それを言葉に表し、書いて留めておくことが出來るか、どうか疑はしい。日本の始めての妙趣は薫香のやうに

觸れ難く發散し易い。

横濱の外人居留地から、日本町の方へ初めて車に乗つて出掛けたのが、私に取つては日本の美に觸れた發端なのである。その車上の見物について思ひ出せるだけ、これから書く。

譯者註。英國人の教授といふのは、當時の東京文科大學御傭教授チエムバリン氏を指す。

一

一切新しく面白くて堪まらないので、何處へでも到る處へ轉がり行けと示す狂氣じみた手眞似の外は、何も車夫には通じない。こんな風にして、初めて日本の町を通つて行くと、今肉眼でまのあたり分かる如く、從來書物では讀み夢にも描いてゐたが、全然知らなかつた極東に來て居るのだといふ實感が、心地よい驚異を以て感ぜられる。このやゝ平凡な事實を初めて充分に意識するのにさへ、幾分空想的な趣がある。しかし私に取つては今日の天氣が神神しいほど麗はしいので、何ともいへなくこの意識が美化されてゐる。日本の春の冷かさと、雪を戴いた圓錐形の富士山から吹く嵐の浪で、ひんやりした朝の空氣には、名狀し難い快味がある。これは何等目立つた色合よりも寧ろ最も柔かで明澄な性質による

らしい。異常に透明清潔な空氣は、ただ少許の青味を帶びたばかりて、極めて遠方にある物象も驚くばかりにくつきりと焦點に集まる。日光はただ心地よいほどの暖さで、人力車はこれほどこぢんまりとした小さな乘物はない。して、草鞋をつけた車夫の被つた、踊るやうな、白い、松蕈形の帽子越しに見える町の通景は、いくら眺めても飽きないと思はれるほどの誘惑を有つてゐる。

一切のものが一寸法師らしく見える。青い屋根を戴いた小さな家家、青暖簾を吊つた小さな店頭、青い着物をきて微笑を含んだ小さな人々など、人間と同様に一切のものが、小さくて、奇異で、神祕的だからである。折折通つて行く丈の高い西洋人と、無茶な英語を使つた色々の廣告看板によつてのみこの幻覺は破壞される。が、かかる不調和は却て現實を高調するばかりて、決してこの可笑な小さな町の面白味を大層減じはしない。

町の上手から下の方を見通すと、見渡す限り旗が翻つたり、紺暖簾が搖れたりして、それに皆和漢の文字が書いてあるので、美しく、また神祕に見える中に、最初は妙に面白い混亂があるだけである。それは、すぐ目につくやうな構造裝飾の法則がないからである。建物は一軒一軒獨自の架空的な美しさを有して、一つとして他のものにきつかり似寄つたものはなく、且つ皆途方もなく斬新である。しかし、その附近で一時間も過ごした後には、

奇異な破風を有して、多くはペンキを塗らぬ生地そのままで、一階は全部街路に向つて開き、また薄く細長い屋根が店頭へ日庇のやうに前へ傾いて、後ろは障子の立つてゐる二階の小露臺にまで及んでゐる、是等の低い、輕さうな木造の家の構造には、ある一般的方式のある事が漠然とわかつてくる。街路面よりも可なり高くした床に疊を敷いた小店の普通の様式も、理解されてくるし、表號の文字は、暖簾の上に浮動してゐるのも、金や漆で塗つた看板面に光つてゐるのも、一般に垂直の排列である事が悟られる。大概の服裝に於て優勢を占めてゐる紺色は、商店の暖簾に於ても矢張り大部分を占めてゐるのが目に立つ。それから尤も、晴やかな青や白や赤（綠と黄はない）など、他の色もちよいちよい見える。それから勞働者の衣服にも暖簾と同様、不思議な文字が書いてあるのが目につく。どんな唐草模様でも、これ程の趣が出るもので無い。裝飾上幾分恰好を更へて書いた是等の文字には、一切意味を有せざる意匠圖案に於ては、とても見られぬ躍如たる均勢がある。職人の法被の背中で、紺地に眞白く、且つ遠くからでもよく讀める程、大きく文字が現れてゐると、（その法被を著た人が、或る組合員だとか、會社の使用人であるとかを示して）粗末な安い衣服も派手な技巧的の趣を呈する。

して、最後に、まだ事物の神祕に首をひねつてゐる内に、これらの町町の不思議な美麗

さの大部分は、全く白、黒、青又は金色て、一切のものを――玄關柱や障子の表面さへ――飾れる漢字と日本字が、充滿横溢してゐるに甚くといふ事が、渺然開悟されてくるだらう。恐らくはその刹那、これらの魔力的文字に代ふるに英字を以てした結果が、想像に上る事もあるだらう。すると、少しでも審美情操を有する人は、それを思つただけてさへ、殘忍なる激動を感ずる事てあらう。して、私と同じく、羅馬字會――日本語を書くに英字を使用するといふ、醜惡なる實利のため創められた會――の敵となるだらう。

二

表意文字が日本人の頭腦に作る印象は、字母或は字母の連結――聲音の漫然生氣なき符號――が、西洋人の頭腦に作るのとは、同樣てはない。日本人の頭腦に取つては、表意文字は躍如たる繪畫てある。活きて、物を言ひ、身振りをする。然かも日本の町には、滿目かやうな活きた文字――絶叫して眼に訴へる字形、顏の如く微笑したり顰蹙したりする言語――が一杯てある。

我我の生命なき文字と比べて、かかる文字が如何なるものてあるかは、極東に住んだ人

人によつてのみ理解される。日本文字或は支那から輸入された漢字の印刷文字では、同一の文字を碑文の裝飾として、彫刻用として、或は最も卑近の廣告用として、いろいろ變更修飾して書いた美しさに就て、暗示だも與へる事が出來ないからである。何等の窮屈な月並の規則が、書家や意匠家の空想を束縛しない。銘銘が他人に勝つて、その文字を立派にしようと努力する。して、世世の藝術家が茫乎たる大昔から、かく競爭的に骨折つてきたので、その長い世紀の倦まざる勉勵研究によつて、原始的象形文字又は表意文字が、云ひやうなく美しいものに發達した。この文字はただ幾つかの筆畫から成立つてゐる。が、一畫毎に、優美、均勢、微細な曲線に關して、端倪すべからざる祕法があつて、その文字を全く生かして見せ、また藝術家が揮毫の電光石火の瞬間さへ、その文字の頭から尾に至るまで、始終一樣に全字畫を通じて、理想的恰好の形を出さうと、筆を以て摸索してゐたことを示す。しかし字畫の妙諦が全部ではない。字畫を連結する祕法こそ、魅力を生ずるものであつて、屢々日本人自身をさへ驚倒させる。貴い名人が筆を揮つた文句が化身して、扁額から降りてきて、人間と言葉を交はしたといふ書道の不思議な傳說が存在するのは、實際日本文字の奇異に人格的な、生生した、祕傳的の方面を考へると、敢て怪むに足らぬ。

三

私の車夫は『チャ』といふ名である。大きな松茸の笠のやうな白い帽子を被つて、短い青の濶袖の短衣と、緊衣の如くきちんと尻に合つて踝まで達した青の股引を著け、軽い草鞋を棕櫚の纖維の紐で裸足にしめてゐる。彼は車夫仲間の有する、あらゆる忍耐と、巧みに機嫌を取る力を代表してゐるに相違ない。彼は既に私をして定則以上に拂はしむる能力を發揮した。然かも私は彼について用心するやう警告を受けても駄目であつた。人間が馬に代つて、梶棒の間へ身を入れて速歩して、數時間も倦むことなく眼前で跳ね上つたり下つたりして呉れるといふ初めての感じだけでも、憐憫を惹起すに充分だからである。して、斯く梶棒の間で速歩し乍ら、希望、追憶、情操、理解力、總べて具備せるこの一個の人間が、最もやさしい微笑を有し、最少の厚意に酬ゆるに無限の感謝を見せる力を有した場合には、この憐憫は同情となり、犠牲に對する盲目的衝動を挑發する。その流汗淋漓たる狀も亦幾分この感情を促したことと思ふ。嘸ぞ動悸が打つたり、筋肉が萎縮するだらうし、また惡寒、充血、肋膜炎などに罹ることもあるだらうと、思はれるからである。車夫の壽

物は汗びつしよりになつてゐる。そして走るとき手首に卷きつけて持てる、竹の枝と雀の形を白に染め拔いた小さな蒼空色の手拭で顏を拭く。

が、この車夫——動力としてでなく、人間として考へて——の性質で面白い點を、私共が小規模の町町を走つて行くとき、こちらへ向けられる澤山の顏の中にもずんずん認め出した。恐らく今朝の印象で最も愉快なのは、公衆の凝視が奇妙にも優しいので生じた印象である。誰も物珍らしげに眺めるが、その凝視に何も不快なことは毫もない。況して敵意を含むどころか、微笑又は半ばの微笑が伴つてゐるのが最も普通である。それで結局、これらの親切な好奇的の顏と微笑は、旅人をして仙鄕を想はしめる。かう書くと、あまり陳腐常套を脫しないから、殆ど腹を立てる人もあるに相違ない。誰も彼も日本の第一印象を描くとき、土地をお伽噺の國だといひ、人民をお伽噺の國の人物だといふ。が、初めての試作として、これ以上精確に描寫することは殆ど不可能だから、描寫の語句の選擇が、斯く一致するのは自然の理である。一切が我我のものよりは小さく優美な規模で出來てゐる世界——すべての動作は悠長柔和で、聲音の閑靜な世界——地も人も天も、悉皆餘所とは似もつかぬ世界に、忽然自身を見出すといふことは、英國の昔噺ではぐくまれた想像に取つて、正しく一寸法師の國の古い夢の實現である。

四

旅行者が突然社會的變化の或る時期に遭逢すると――特に封建的過去から民本的現在への變化――美しい物の滅亡と新しい物の醜惡を殘念がる場合がある。私はこれから日本て美醜兩者のどんなものを發見するかを知らないが、今日この異國的な町町ては、舊と新が非常によく混じて、相互に引立て合つてゐるやうてある。和漢混淆の文字て印刷した新聞紙へ、世界各國の報道を齎らす小さな白い電信柱の列、謎の如き東洋の文句が、象牙のボタンに並んて貼られた茶亭の電鈴、佛師の店に隣つた米國製裁縫機械、草履屋と並んだ寫眞館、總べて是等のものが目障りになるほどの矛盾を呈しない。といふのは、西洋て發明した一一の見本が、如何なる繪にも適用の出來るかと思はれる東洋の額緣に嵌つてゐるからてある。しかし少くとも最初の日には、異邦の旅客に取つては、舊いもののみが新しいのてあつて、全然彼の注意を吸收する。して、日本風のものは一切綺麗巧緻、歎賞に値することがわかる――表に小さな繪をかいた紙袋に入つてゐる、一對の普通の木箸や、三通りの色て文字を書いた包紙に卷いてある、一包の櫻の木の妻楊枝や、雀が飛んてゐる模樣

が附いて、車夫が顔を拭くに用ゐる、小さな青手拭さへもさうである。紙幣や極普通の銅貨も美的の品である。客の最後の買物をくるため、商人の使用する組んだ色絲の切片さへ、綺麗な珍品たることを失はない。雅品珍什の夥多なること、人を驚かせる。右にも左にも何處へ眼を轉じても、まだ譯のわからぬ不思議なものの限が無い。

が、それを眺めるのは危い。思ひ切つて眺めようとする度毎に、何となく買はねばならぬやうになる――往往ある通り、微笑を含んだ商人が、一個一個は頗る望ましく、また全部は堪まらなく欲しいやうな、ある一品の非常に澤山な種類を見せて呉れるので、購買心の衝動に對して我乍ら怖はくなつて、逃げだすこともあるが、それは例外である。店主は買ふやう請求しない。が、商品に魅力があつて、一たび買ひ始めると、破滅である。抵抗し難い藝術的安價品が無盡藏だから、安價は破產を招く誘惑となるばかりである。太平洋航路の最大の汽船にも、買ひたいものが積み盡せないだらう。それは旅客自身では、判然さう思つてゐないかも知れないが、眞に買ひたいのは一艘の船に積み込む內容ではなく、商店も、商人も、反物や住民を含めて商店の町も、それから都會全體、それを繞る灣や山山、その上の晴空に懸つてゐる富士山の白皚皚たる美景、實を云へば、不思議な樹木と輝ける空氣、さまざまの都市社寺と、世界で最も愛らしい四千萬の人民を有する日本全部が

欲しいからである。

日本の大火事のことを聞いた實際的な一米人が、『日本人は火事があつても介ひませんよ。費用のかからぬ建築ですから』と云つたのを聞いたことが、今私の念頭に浮んでくる。成程、普通人民の脆い木造の家屋は、低廉に且つ急に代りが建てられるが、家屋の内を飾る品の代りは、またと出來ない。だから火事は、その都度藝術上の一悲劇である。といふのは、この國は手工品の無限な國であつて、（凡俗な市場に適するため劣等な趣味を外國から注文に及んで、それに應ずる場合は別として）まだ機械が安價な製品に千篇一律の同形と、實用一天張りの醜惡を注入し得ないので、美術家又は職人の作品は一個毎にまた他人の作品とは異つて居り、自分の別個の作品とも異つてもゐるからである。して、火事で或る立派なものが滅びる毎に、ある一個人獨特な觀念を現したものが、無くなつた譯である。

幸ひにもこの火事の多い國にて、藝術的衝動そのものが生命を有してゐて、代代の藝術家が死んだ後に生き殘つて、彼等の勞作を變じて灰にしたり溶かして形を無くしたりする火災に打克つてゐる。象徴の滅んだ觀念も多分一世紀も立つと、他の創作品の中にまた再

現することとなる。尤も、修飾は加へてあるが、それでも明かに過去の思想と親類筋なのである。だから有らゆる藝術家は幽靈のやうな制作家である。多年暗中に摸索したり、刻苦の犧牲を拂つて、最高の表現を發見するのではない。犧牲となつた過去が、作家の腦裡に潛んでゐる。彼の藝術は遺傳を承けたものである。彼の指は祖先に導かれて、飛ぶ鳥、山の霞、朝夕の色彩、枝の形狀、春の花の咲いた光景などを描くのである。代代の熟練した作家が彼にその巧妙を與へ、彼の傑作の中に復活するのである。初めは意識的努力であつたものが、後世に及んでは無意識的となり、現存作家の身に取つては、殆ど自働的となり、本能的藝術となる。だから、もとは一錢よりも安く賣られた北齋や廣重の一枚の浮世繪のうちに、日本の或る町内全部の價値よりも市價の高い幾多の西洋畫以上に、眞の藝術味の多いことがある。

五

ここに北齋畫中の人物が往來してゐる。蓑笠をかぶり、草鞋をつけて、風と日に色赭くなつて、四肢を露はした百姓。それから忍耐强い顏をした母達が、微笑んだ裸坊主の赤ち

やんを背に負ひ、下駄（騷騷しい音のする、高い木製の下駄）を穿いて、ちよこちよこ步いて行く。數へきれぬ不可思議な商品の間に坐つて、小さな眞鍮の煙管で、煙草吸ひ乍ら、商人らしいゆつたりした服を着けた商店の人々。

それから私は人々の足が細くて恰好のよいことに氣がつく——百姓の褐色の裸色も、小さな小さな下駄をつけた子供の美しい足も、雪のやうな足袋を穿いた若い娘の足も。指狀をなせる白い足袋は、細く輕やかな足に、神話的の趣——牧神婦の足の白い裂けた美——を與へる。足袋をつけても、露はであつても、日本人の足には古代的均勢がある。西洋人の足を畸形にした、悟むべき靴によつて歪められてゐないから。

日本の下駄は一對毎に、それぞれ步く人によつて、クリングといふ音がクラングといふ音と相異る位、少々異つた音を發する。だから、跫音の響には、音調の交互的な拍子がある。停車場のやうな鋪道の上では、これが非常によく響いてくる。して、群衆が故意に步調を整へることがある。すると、最も可笑しい、のろのろした木質の音となる。

六

『寺へ行け』

私はホテルへ歸らねばならなくなつた——晝食の時間さへ惜しいのだから、そのためではなかつた。佛寺を訪ねたい希望を車夫に通ずることが出來なかつたからである。今は車夫も理解した。ホテルの主人が神祕なやうな言葉を發音したから。

『寺へ行け』と。

庭園や、費用のかかつた醜い洋館が竝んだ廣い大通りを數分間馳せて、それから異常な構造で、ペンキを塗らない、舳の尖つた船が、澤山入込んでゐる運河の上の橋を渡つてから、また日本町の別の部分へ突進する。して、車夫は下部よりも上部の狹い、小さな櫃形の家屋の更に竝んでゐる間を通つたり、まだ見馴れぬ、開放した小店の連つた中を拔けたりして、全速力を出して走り行く。しかも、いつも商店の上には、二階の障子を建てた室の處まで、青瓦を敷いた、細長い帶のやうな屋根が、傾斜面をなしてゐる。また正面からは、紺、白、又は濃紅の暖簾が垂れてゐる——一尺幅の織物で、美麗なる日本字が、青地

には白く、黒には赤く、白には黒く現れてゐる。が、すべて悉く飛んで去つて行つて、夢のやうだ。今一度運河を渡り、山へ向つて、勾配が高くなつた狹い町を、無理押しに上がつてから、車夫は突然廣い石段の澤山ある處の前で停まつて、私が降りるやう、梶棒を地上に置き、石段を指し乍ら『寺』と叫んだ。

私は降りて石段を上つて、廣い高臺に達すると、反つて尖つた角の多い支那風の屋根が載つた驚くべき門に面と對つた。この門は全部妙な彫刻が施してあつて、開いた戸の上の彫刻帶には龍が絡まつてゐるし、戸の腰板も同樣に彫刻してある。それから奇怪な獅子の頭の形をした樋嘴鬼瓦が檐から突出してゐる。して、全部が灰色で、石の色をしてゐる。が、私には刻んだものが彫刻の有する固定性を有つてゐると見えない。蛇類龍類すべて水の如く渦を卷いて、群をなして移動し、捕捉し難く浮動してゐるやうに見える。

私は晴やかな光の中を霎時振返つてみる。海と空が、同じ淸らかな薄青色をなして交り合つてゐる。眼下には、青じみた屋根が、右手の穩かな灣の端までと、市の兩側に位して、樹木の生えた綠色の丘陵の麓まで、大濤のうねつた如く連つてゐる。その半圓形を描いた綠色の丘陵の先きに、藍色の影法師のやうな鋸齒狀の高い山脈が聳えてゐる。して、この山脈の線から非常に高く何とも云へなく愛らしい幽靈がぬつと屹立してゐる——一つの特

立せる雪の圓錐形は、纎絲の如く精美て、心靈的な清淨の白さなので、もし古くから見慣れた外形でなかつたならば、誰もこれを雲と考へるだらう。その麓は、空と同じい美はしい色だから見えない。ただ永久の雪線の上に、夢のやうな圓錐形が、輝ける陸と輝ける空の間に吊り下つたやうに、峻峰の幽靈となつて出現してゐる――神聖にして無比の富士山。

譯者註。ヘルン先生の著書中に、富嶽を描いた、否、歌つた文章が四ケ所ある。先づ第一に、本全集第五巻に收められた「異國情趣と懷古のことども」の巻頭を飾れる「富士の山」の章の末段には、絶頂から見おろした黎明の巨峯の眺めが寫してある。第二に、本全集四巻に收められた「心」の第十章は、長き海外の放浪から歸朝の航路中にある日本の一青年が、太平洋の甲板の上から望み見た富士を寫して、彼が國粹保存的精神に目醒めた決心を以て結んである。第三に、本全集第十二巻遺稿雜纂中の一篇「日本への冬の旅」には、横濱港の沖から仰いだ富士。それから第四に、ここには横濱郊外の丘上から見た光景が寫してある。その昔、萬葉歌人の千古の絶唱によつて、讃美された富士山は、この英文に於ける散文的詩人に於て海外に對して天晴れ立派なる謳歌者を得たのである。原文の朗朗誦すべき美に對して、譯者は殆ど冒瀆の恐れを禁じ得ない。

すると、私はこの怪しい彫刻を施した門前に立ちながら、俄然奇異な感覺――夢と疑ひの感覺に襲はれた。石段も、群龍の門も、市街の上に渡れる蒼空も、富士の幽靈のやうな

美も、灰色の敷石の上に擴つてゐる私自身の影も、やがては一切悉皆消滅するに相違ないやうに思はれた。何故そんな感じがしたのだらう。疑もなく、私の眼前の形態――反つた屋根、とぐろを卷いた龍、支那風の奇怪な彫りもの――が、實際私には新しいものとしてでなく、夢にみたことがあるやう見えるからである。この光景が、忘れられた繪本の記憶を活かしたに相違ない。それも瞬間、忽焉幻想は消えて、遠くまで不思議に澄み渡つた空氣、活きた繪畫の驚くべき優美な色合、夏の高い青空、白く柔かな魅力的な日本の日の光など、滿目一切、清新快爽の鮮かな意識と共に、現實の詩趣が返つてきた。

七

進んで、もつと石段を上つて、同じ鬼瓦と群龍のある第二門を經て、優美な寄進の石燈籠が、記念碑の如く立つてゐる境内へ入つた。二つの大きな怪異な唐獅子――佛陀の雌雄の獅子――が左右に坐してゐる。向うの方に長い低い輕さうな建物があつて、屋根は青瓦て、彎曲して破風がついてゐる。入口の前には三段の木造りの階段がある。側面は薄い白袱て張つた簡單な木造の障子がある。ここが寺である。

階段で私は靴を脱いだ。一人の青年が入口の障子を開けて、慇懃に歡迎の禮をした。內へ入ると、私は寢臺の褥の如く、厚い疊の柔かな足觸りを感じた。非常に廣い方形の室が私の面前に開けた。して、芳ばしい異香――日本の薰香が滿ちてゐる。が、太陽の强い輝きの後では、ここの紙から濾過してくる光線は、朦朧たる月光のやうで、しばしば柔かな暗中に金色がぴかぴかする外、何も見えない。やがて眼が暗さに慣れてくると、內陣の三面を圍んだ襖に映つた巨大の花形が、ぼんやり白い面へ影法師を見せてゐる。近寄つてみると、紙の造花で、美しく染めた象徵的の蓮華なのである。渦卷いた葉の表は金色、裏は綠色に光つてゐる。玄關に面して、內陣の暗い奥に、高い、華麗な佛壇がある。壇の上には、靑銅製の美術品や、金色の什器が、黃金作りの一小寺院の如き厨子を擁して、左右に群がつて載つてゐる しかし、佛像は見えない。厨子と壇の後方に當つて、最奥の內陣か、凹んだ場所か、私には識別されぬ眞暗さに對して、幾つかの金屬製の不思議な形のものが、一ト際目立つて輝くばかりてある。

先刻の若い案內者が近寄つて來て、私の驚いたことには、立派な英語を用ゐて、壇上に燭臺の竝んだ間にある、華麗な金塗りのものを指して云つた。

『あれが佛さまの厨子です』
『私は佛さまへ供物を致したい』と、私は答へた。
『それには及びません』と、彼は丁寧な微笑を浮べて云つた。
が、私が云ひ張つたので、彼は私のために壇上へ僅かのものを捧げた。それから、私を彼の室へ招いた。建物の側面にある、大きな明かるい室で、家具はなく、綺麗に疊が敷いてある。して、私共は坐つて談話をした。彼はこの寺に住んでゐる一學生だと、私に語つた。彼は東京で英語を學んだ。して、奇異なアクセントで話をするが、立派に選擇した語を使つてゐる。最後に彼は私に尋ねた。
『貴下は基督信者ですか』
して、私は眞實に返答した。『否』
『貴下は佛教信者ですか』
『全くの信者といふ譯ては無いのです』
『信者でなくて、供物をなさいますのは、どうした理由ですか』
『私は佛さまの教への美しさを尊敬し、またその教へを奉ずる人々の信仰を尊敬するのです』

『英米にも佛教信者がありますか』

『少くとも佛教の哲理に興味を有つものは澤山居ります』

それから、彼は床の間から一冊の小さな本を取つて、私に見せた。それは英書のオルコット氏著『佛教問答』であつた。

『何故この御寺には佛像がありませんか』と私は尋ねた。

『壇上の厨子の中に、一つ小さな佛像があります』と、學生は答へた。『しかし、厨子は閉ぢてあるのです。それから、この寺には、數個の大きいのもあります。が、佛像は毎日開帳致しません――御緣日だけです。一年に一二回しか開帳しないのもあります』

私の坐つてゐる處の、障子を開け放した間から、男や女が階段を登つて、寺の入口の前で、跪いて祈るのが見える。非常に優美で、また天眞爛漫たる歸依の趣があつて、これに比べると、西洋の敬虔家が跪くのは、無作法に躓くのだと思はれるほどである。兩手をただ合はせるのもあれば、高音を立てて、ゆつくり三回拍くのもある。それから、頭を下げ、瞬間默禱してから、起ち上がつて去つて行く。祈りの短いのが、私には餘程珍らしく、面白い。折々入口にある大きな木造の賽錢箱に投げ込まれる貨幣の、ちりんと響き、からが

ら鳴るのが聞えた。

私は若い學生の方に振向いて尋ねた。

『何故祈る前に、三回兩手を拍くのです』

彼は答へた。『天地人の三才に對する三回です』

『しかし、それに向つて、召使を呼ぶやうに手を拍くのですか』

『否、さうではありません』と、彼は答へた。『手を拍くのは、たゞ長夜の夢から醒めたことを表します』

註。私はこの説明が正鵠を得てゐるとは考へないが、これは私がこの問題に關して得た最初の説明として興味がある。嚴正に云へば、佛教の禮拜者は手を拍つべきでなく、たゞ輕く兩手を合はせて擦るべきである。神道の信者はいつも四回手を拍つ。

『何の夜、何の夢ですか』

少時躊躇してから彼は答へた。

『佛は申されました。一切衆生は、この無常迅速、有爲轉變の世に在つて、空しく夢をみてゐる』

『では、手を拍つのは、祈りの折に心が、そんな夢から醒めるといふ意味ですか』

『左樣です』

『君は「心」といふ語の、私の意味が御わかりでせうね』

『え〻、わかつてゐます。佛者は心は無始無終の存在と信じてゐます』

『涅槃に入つてもですか』

『左樣です』

こんな談話をしてゐる處へ、非常に年老いた、この寺の大和尚が、二人の若い僧をつれて、入つてきた。私は彼等に紹介された。彼等は極低い辭儀をしたので、滑かに剃つた頭のつや〳〵した頂を見せて、端然と座に就いた。私は彼等が微笑を洩らさないことに氣が付いた。私が見た日本人では、これが初めての微笑しない人々で、顏は像の如くに平靜である。が、長く切れた眼は、私を熟視してゐる。學生が彼等の質問を通譯し、私は英國のカーン諸氏の事業のことを幾らか彼等に告げようと試みた。彼等は始終容貌を動かさずに『東方聖典』に於ける梵文經典の飜譯のこと、ビール、バルヌーフ、フィーア、デヴィヅ、傾聽して、學生が譯する私の説話に對して一言も發しない。しかし、茶が運ばれて、蓮の葉の形の小さな眞鍮の茶托に載せられたる、小さな湯呑茶椀に入れて、私の前へ置かれた。

また小さな菓子を薦められた。菓子に印せる形は、古代の印度の法輪の象徴たる卍巴だと私は悟つた。

私が立つて去らうとすると、皆も立上つた。して、階段の處で、學生が私の名と宿所を尋ねた。

『御宿を承つておきますのは』と、彼は附加へた。『私はその內に、この寺を出ますが、私から貴下を御訪ね申上げますから』

『して、君の名は』と、私は問ふた。

『晃（あきら）と申します』と、彼は答へた。

敷居の處で、私は別れの禮をした。彼等は皆極めて低く頭を下げた——一人は靑黑の頭て、三人の光澤ある頭は、象牙の球のやうであつた。して、私が去つて行くとき、晃だけが笑顔を呈してゐた。

八

『寺ですか』と、私が階段の下で、また人力車に腰をおろした時、車夫は大きな白い笠

を手に持つたまゝ私に尋ねた。これは、私がもつと他の寺を見物したく思つてゐるのか、といふ問に相違ない。實際さうだ。まだ佛像を見ないのだ。

『左樣、寺』

不思議な商店、反つた檐、一切のものに書いてある奇異不可解の文字、そんなものの長く連つたパノラマがまた始まつた。車夫がどの方向に走つてゐるか、一向わからぬ。わかつたのは、行けば行くほど町が狹くなるらしいこと、ある家屋は大きな枝編細工の鳩籠の觀あること、それから、數個の橋を渡つてから、また他の丘麓で停まつたことだけである。こゝにも高い石段がある。その前に立てる一個の構造は、門でもあり、象徵でもあることを私は知つた。堂々たるものだ。しかし、毫も先きに見た佛寺の大きな山門には似てゐない。驚くほど簡單な輪郭を呈してゐる。彫刻も無く、彩色も施してなく、文字も書いてない。しかも、恐ろしい莊嚴、不可思議の美がある。これは鳥居なのだ。

『宮』と車夫が云つた。今度は寺でなく、この國の一層古い信仰に屬する神々の社祠である。

私は神道の一つの象徵の前に立つてゐる。少くとも繪畫以外では初めて鳥居を見たのだ。寫眞や版畫でさへも鳥居を見たことのない人には、どういふ風に說明しよう。門柱の如き

二本の高い柱が、二本の梁を水平に支持して、下の方にある輕い梁は、その兩端が二本の柱の頂から少し下の處へ嵌つて、上の方の大きな梁は二本の柱の頂に載つて、更に左右へ相當延び出てゐる。これが鳥居である。材料は石でも木でも金屬であつても、構造の意匠はあまり變らない。しかし、この說明では鳥居の恰好、その莊嚴な趣、門口として神祕的暗示を含めることなどに就て正確なる觀念を與へ得ない。初めて氣高い鳥居を見る人は、恐らくは美麗な漢字の大きな雛形が天に聳えてゐると想像するであらう。それは、鳥居のすべての線は、生氣躍如たる文字の優美を有し、書道の名人が四たび筆を揮つて書いた文字のやうな、奔放な角と曲線を有してゐるからである。

註。日本通のサトウ氏の說を奉ずる人々は、鳥居はもと神道の社祠に於て、神々に獻げられたる雞——食料としてでなく、黎明を報ぜんがため——の棲木であつたと書いてゐる。ある學者達は語原を鳥居、即ち鳥の休む處としてゐる。しかし、これに劣らぬ大家のアストン氏は、單に門といふ意味を有する言葉から出でたものと說いてゐる。チエムバリン氏の『日本風物誌』四二九、四三〇參照。

　鳥居を過ぎて約百階もある石段を上ると、その頂に第二の鳥居があつて、下の方の梁からは神祕な注連繩が花綵のやうになつて垂れてゐる。この注連繩は、殆どその全長を通じて徑二寸位の麻繩で、その兩端は蛇の如く次第に尖つてゐる。鳥居が青銅の場合には、

注連繩も青銅で出來てゐることがある。が、慣習に隨へば、藁で作るべきであつて、また普通さうなつてゐる。その譯は、天手力雄命が天照大御神をひき出してから、太玉命が大神の背後へ張つた藁繩を表すからである。これはチエムバリン教授の譯した、かの神道の古い神話に物語られてゐる。

註　チエムバリン教授は日本の帝國大學に於て、日本語の教授といふ、異常なる地位を持つてゐる。英國の言語學界に取つて、なか／＼の名譽である。

して、注連繩の最も普通且つ簡單なのには、その全長に沿つて、一定の間隔毎に、藁の總が垂れてゐる。傳說によれば、もとは根から引拔いた稻で作つたので、根が繩の撚り目から突き出てゐたからである。

この鳥居を越えて進むと、丘陵の頂にある一種の公園又は慰み場所に來た。右方に小社があるが、閉鎖してある。私は神社の中が空虛で、人を失望に了はらせるといふことを、澤山讀んでゐるから、社司の不在を殘念に思はぬ。すると、私の目前に、もつと一層面白いものが見えた。名狀すべからざるほど美しいものが、一面を蔽つてゐる。それは櫻の林――一本一本の大枝小枝に、夏雲の白い片の如く絡りついた、雪白の花の爛漫たる霞だ。

して、その下の地面と私の前の路上は、柔かな厚い、芳ばしい落花の雪で眞白になつてゐる。
この美しい處を越えてから、數個の小祠を繞る花壇がある。また岩に彫つた龍や、神話的人物などの怪物に滿ちた驚くべき洞窟がある。矮樹の小森林、小型の湖、顯微鏡的な小形の川、橋、瀑布など、小規模な山水の風景がある。こゝに又子供達のために鞦韆がある。丘端に乘りかかつた見晴らし臺もある。そこから綺麗な全市街と、針頭大の漁船の帆が散點せる靜灣全部と、海に延びて遙かに遠い微かな高い岬が、心地よく一眸の中に收まる―ー名狀し難く美しい幽靈のやうな靄の中へ、青鉛筆で描いたやうに。
何故に日本では樹木が、かくも美しいのだらう。西洋では、花の咲ける梅や櫻が、驚くべき光景を呈しないのに、こゝではあまり不思議な美しさなので、いかほど書物で以前に讀んだことがあつても、實景は人を啞然たらしめる。葉は見えないで、ただ一枚の大きな薄膜の如き、花瓣の靄である。この神國では、樹木は永く土地に馴らされ、人間に愛撫されたため、魂を生じて、恰も愛する夫のために女が容を作る如くに、人間のために一層美しくなつて感謝を表はさうと努めるのであらうか。たしかに樹木は美しい奴隷の如くに、その美で人間の心を懷け得たのである。即ち日本人の愛情を占め得たのだ。この遊園へ野

卑な種類の外客が來たものと見える。『樹木ヲ損ズベカラズ』と英語で記したものを掲げるのが必要と考へられてゐるから。

九

『寺ですか』

『左樣、寺』

が、ただ僅かの間、日本町を橫切つただけで、人家が分離し、丘麓に沿つて散らばつてくる。市は小さな谷の中を段々細くなつて行つて、たうとう背後に消えてしまつた。それから、海を見おろす迂回した道を通つて行く。右手には、靑い丘が道際まで嶮しく傾斜してゐる。左手には、遙か下方に鼠色の沙濱や、海水の溜滌が擴がつて、遙かに一本の白絲が動いてゐるとしか見えない磯浪の線へまで續く。潮は引いてゐる。て、澤山の鳥貝拾ひが濱邊に散らばつて、遠くの方で屈んだ姿の、ちら〳〵する干潟の面に散點して見えるのは、蚊の大いさに過ぎない。して、滿載の笊を提げて向うから私どもの道を歸つてくるのもある――娘達の顏は、殆ど英國の娘と同じほど薔薇色を呈して。

人力車の轉じ行くに從つて、路傍の山は高くなつた。忽然車夫は、今までの中で最も高峻な、寺の階段の前で、また停つた。

私は登り登つて行く。四頭筋の烈しい痛みを和げるために、止むなくやがて休む。頂上に達すると、全く息が切れさうであつた。して、左右に獅子の像があつて、一方のは齒牙を露はし、他方のは口を噤いでゐる。前面には三方低い崖に圍まれて、樹木の無い、狹い高臺の先端に、古色蒼然たる一つの小寺が立つてゐる。建物の左に當る岩壁から、小さな瀑布が梱を繞らした水溜へ奔下する。その轟きに壓せられて他の一切の音は聞えない。刺すやうな風が海に吹いてきて、日を受けた場所さへ冷かに、荒涼たる境内は、百年も祈りの聲が聞かれなかつた如く物淋しい。

寺の磨滅せる木造の階段で、私が靴を脱ぐ間、車夫はコッコッと叩いて呼びかける。少し待つた後、紙障の後ろから、包んだやうな跫音の近づくのと、空咳の音が聞えた。紙障が開かれると、白衣の老僧が現れ、低い辭儀をして、私に入るやう身振で示した。彼は親切さうな顏をしてゐて、その歡迎の微笑は、私が受けたうちの最も優しい一つであつたと思ふ。それからまた彼は咳をした。その咳は餘程苦しげだつたので、今後私が再びここへ來ることがあつても、彼に逢へるか知らんと思はれた。

私は內へ通つた。すべて日本の建物の床が蔽はれてゐる、あの柔かな、淸い疊を足の下に感じた。寺に必要缺くべからざる鐘と漆塗りの机の前を過ぎてから、また他の紙障が立てられて、床から天井へまで達してゐる。老人はまだ咳をしながら、一枚の紙障を右に開けて、薰香の微かに漂ふ暗い內陣へ、手眞似て私を導き入れた。太い軸に金龍の纏れた唐金の大燈籠が、私の眼についた最初のものであつた。して、その傍を通るとき、私の肩が觸れて、その蓮花狀の頂から垂れてゐる、小さな鈴生りの花綵を鳴らした。それから、まだ判然物形を識別しかねて、摸索し乍ら、佛壇に達した。が、僧は紙障を一枚一枚繰つて、金色の眞鍮製裝飾品や、刻銘に光を注いだ。そこで私は渦卷形の燭臺の立並んだ間に、神又は主靈の像を探した。すると、私はただ鏡——磨いた金屬の光淡き圓盤を見た。しかも、その中に私の顏が映つてゐて、更に私の似顏の後ろには、遠くの海の幻影があつた。

ただ鏡！何を象徵するのだらう？幻想を？それとも、宇宙は我々の心の反映としての存在に過ぎないといふことを？或は自己の心中にのみ佛を求めねばならぬといふ支那の古い敎を？恐らくは他日私にすべて是等のことのわかる折があるだらう。

辭して行かうとして、階段に腰をかけ、靴を穿きかけてゐると、親切なる老僧は、また近づいてきて會釋をして、茶椀を進めた。私は佛敎の喜捨鉢と思つて、その中へ幾らかの

貨幣を落してから、湯が一杯入つてゐるのを發見した。が、老人の美はしい慇懃さは、私をしてその過失の無作法さを感じないやうに、救つてくれた。一言も云はずに、厚意の微笑を湛へたまま、それを持去り、やがて別に空の茶椀を持出てて、小さな湯沸から湯を注いて、私に飲むやう身振で示した。寺では、參詣者に茶を薦むるのが、最も普通であるが、この寺は極めて貧しいので、この老僧は一般誰人も缺くべからざる品に窮することも折々あるらしい。私が風當りの強い坂を道路へ下るときに、彼はまだ私を見送つてゐて、今一度彼の嗄れた咳が聞えた。

それから、私はまた鏡の愚弄を想ひ出した。私の求めるものを私自身以外、即ち私自身の想像以外に、發見し得ることがあるか知らんと疑ひ出した。

一〇

『寺?』車夫がまた問うた。

『寺、否——遲くなつたから、ホテルへ』

が、車夫は歸り途に、狹い町の角を廻つてから、一小祠の前に車を停めた。それは日本

の店肆の最も小さな位のものに過ぎないが、これまで見た更に大きな社寺よりも、私に取つては一層の驚異であつた。といふのは、門の兩側に二個の怪像が、裸身、赤血色を帶びて、惡魔の如く、筋肉怖しげに、足は獅子に似て、兩手に金色の稻妻を振り廻はし、無我夢中に激怒せる眼を持つて立つてゐるからである。これは神佛の守護者、仁王である。

註。しかし、私が初めて見た是等の仁王は、頗る拙いものであつた。東京、京都その他の土地にある、大きな山門には、壯麗なる仁王が見られる。最も壯大なのは、奈良の巨刹、東大寺の仁王門にあつて、八百年の星霜を經たものである。是等の巨像に現るゝ暴風雨の威嚴と颶風の力は、感歎せざるを得ない。仁王に向つて、人々は祈りを捧げる。巡禮は特にさうする。大概の像は、白紙を嚙んで軟塊としたのが、投げつけられて汚れてゐる。紙塊が像に附着すれば、願が叶ひ、これと反對に、もし地に落ちたときは、願が叶はぬといふ妙な迷信がある。

して、この深紅の怪物の眞中に、少女が私達の方を見て立つてゐた。銀鼠色の著物をつけ、虹の青紫色の帶をしめた彼女の細姿は、門内の薄暗に對して、立派な反映を呈した。落付いて、珍らしいほど優美な彼女の顏は、何處で見ても美しいだらうが、ここで兩側に恐しい怪奇のものを控へた對照の效果は、何とも想像外のものであつた。そこで私は、か

くも美しい少女が敬畏に適はしいものと思つてゐるからには、私がこの兩個の怪像に對する嫌厭は、果して全然正當を得てゐるのか知らんと疑ひ始めた。かくて、そこの中間に立てる彼女を注視してゐると、仁王像も醜くは見えぬやうになつた。華麗なる蛾の如く、纎細優雅な彼女は、凝と無邪氣に外國人を視つめつつ、その外國人には仁王が醜惡の魔神と映じたかも知れないと、思ふ風情さへ見えなかつた。

仁王は何者か。藝術的には、梵天と因達羅の佛教轉化である。佛教の包攝的、萬化的魔力の雰圍氣につつまれて、インドラは彼を黜けた宗旨を擁護するためにのみ、その稲妻を揮ひ得ることとなつた。彼は寺門の番人となつた。否、彼は菩薩の從者に過ぎなくなつた。ここはまだ佛陀の域に達せざる慈悲の女神、觀音菩薩の祠堂なのだから。

『ホテル』と私はまた叫んだ。道は遠く、日も沒せんとしてゐるからだ。夕陽は黄玉石のやうな極めて柔かな光を放つてゐる。私はまだ釋迦牟尼佛の像を見てゐない。多分明日は何處か、この木造の街、または未だ訪ねてゐない山の頂上で、見ることが出來るだらう。

日が沒し、黄玉石のやうな光は消えたので、車夫は止まつて提燈に火を點じた。そして、店頭に吊せる彩色の提燈が、長く連つて二線を成せる間をまた急いで走つた。その二線が

密接し平準を得てゐるので、火の眞珠を列ねた二本のはてしない絲のやうに見える。すると突然、莊嚴で底力の籠つた大きな音が、町の屋根を越えて私の耳へ響いた。野毛山の大きな寺鐘が鳴つたのである。

あまりにも一日が短かく思はれた。が、私の眼は既に長時間、燦爛たる白日のまぶしさと、また不思議な看板の限りなく連續する町の通景が、すばらしい魔術書を一瞥したやうに思はせる昏迷のために、矢張り魔術書の本文から取つたと思はれる文字を一杯書いてある、これらの提燈の柔かな光にさへ疲れはてた。して、私はたうとう、魅惑の後につづく眠氣の催すを覺えた。

二

『按摩上下五百文』

女の聲が夜の中に響く。妙にうるはしい調子で歌つてゐるその文句は、一語一語私の開放した窻から、笛の音の小波の如くに入り込む。少し英語を話す私の召使が、その言葉の意味を説明してくれた。

『按摩上下五百文』
して、いつもこの長いうるはしい呼び聲の間を置いて、悲しげな呼子の笛が聞える。初め一つ長い音を發し、それから二つの短い音を別の調子で出す。按摩の笛なのだ。病人や疲れた人を揉んで糊口してゐる貧乏な盲女で、その笛は徒步者又は車を曳く者に對して、當人は目が見えぬから氣を付けてくれと、警戒を與へる。それから、また疲れた人や病人が呼んで吳れるやう文句を歌ふ。

『按摩上下五百文』

いとも悲しい曲調だが、また頗る美しい聲だ。この女の叫聲は、五百文の金高で、疲れた人の身體を上部も下部も揉んで、疲勞とか苦痛を無くして了ふといふ意味である。五百文は五錢に相當する。十厘が一錢、十文が一厘となる。この聲の奇異な、うるはしさは、心に浸んで纒綿する――少々痛い處あれかし、それを取去つてもらふため、私も五百文を拂ふことが出來るからとさへ思はせる。

私は眠に就いて夢を見た。無數の氣味惡るい神祕な漢字の文句が、悉く同一の方向に私の側を疾走して行く。白い字、黑い字が、看板の表に、障子の面に、或は草鞋穿きの男の

背に載つてゐる。字といふ字が悉く意識的生命を有して、活きてゐるやうだ。七節蟲の如く奇怪で、昆蟲が四肢を動かす如く、部分々々を動かしてゐる。私は車輪の音を立てない幻の人力車に乘つて、低い狹い輝いた町の間をいつも走つて行く。して、走り行く車夫の大きな白い松茸形の帽子が、絶えず私の前で上下へ踊つてゐる。

第二章　弘法大師の書

一

弘法大師は僧中の高僧、且つ眞言宗――晃（あきら）の屬する宗旨――の開祖で、日本人に平假名といふ書體、伊呂波といふ表音字母を書くことを敎へた最初の人であつた。して、彼自身書家中の最も驚異すべき能書家であつた。

それで、弘法大師一代記といふ書に、かういふ話が載つてゐる。彼が支那に居つた時のこと、宮殿の或る室の名を書いてある文字が、古くなつて磨滅したので、帝は彼を召して新たに室の名を書かせた。そこで、弘法大師は右手に一本、左手にも一本の筆を取り、左足の指間に一本を挾み、また右足の指間にも一本を挾み、更に一本を口に啣へて、五本の筆をかやうに持ち乍ら、壁上に文字を書いた。して、その文字は流れに浮ぶ漣の如く滑かで、支那に於て空前の美しいものであつた。それから、また一本の筆を取つて、遠方から

壁の上へ墨滴を跳ね飛ばした。すると、墨滴は落ちるに從つて、忽然變じて美麗なる文字となつた。かくて、帝は大師に五筆和尚の名を賜はつた。

また或る時、大師が京都に近き高雄山に住んでゐた際、天皇は金剛上寺といふ大寺院の額を書かせようと思召し、使者に額を持たせて、大師の許へ遣はされた。しかし、使者が大師の住所へ近づいた時、前面の河は、雨に漲つて渡られなかつた。が、その內に大師が對岸に現れ、使者から聖旨を承はつたので、彼は使者に額をさし上げさせた。して、彼は對岸に立ち乍ら、筆を揮つて文字を空中へ書いた。すると、同時にその文字が、使者の支へてゐる額の上に現はれた。

二

その頃、弘法大師は獨り河畔て冥想をするのが常てあつた。ある日、かやうに冥想の際、ふと氣がついて見れば、彼の前に一人の童子が立つて、物珍らしげに大師を凝視してゐた。童子の衣服は貧乏人の着るものであつたが、顏は立派であつた。大師が怪んてゐると、童子が『貴僧は同時に五本の筆もて、字を書く五筆和尚なるか』と尋ねた。『我はその者な

り』と大師が答へた。すると、童子は『貴僧もし、その人ならんには、願くは天に字を書き玉はんことを』と云つた。そこて、大師は立上つて、筆を取り、天に向つて字を書くやうな擧動をした。して、間もなく天空に極めて美しく、文字が現れた。それから、童子は『この度は我試みむ』と云つて、大師がしたやうに、天へ書いた。また童子は『願くは我がため、河の水面に書き玉はんことを』と云つた。大師は水をほめたゝへた歌を水面に書いた。暫らくは文字が、木の葉の降つたやうに、水面に美しく留まつてゐたが、やがて流と共に動いて、浮び去つた。『この度は、我試みむ』と童子が云つて、草書で龍といふ字を書いた。その字は流水の面に留まつて動かなかつた。が、大師は字傍にあるべき一つの小さな點が無いのを見て、『何故、點を打たざりしぞ』と尋ねた。『げに忘れて侍べり。我がため點を打ち玉へかし』と答へた。そこて大師が點を打つと、不思議！龍の字が一匹の龍となつて、水中て激動し、虚空は雷雲に晴く、電光燃え上がり、渦卷く嵐の中に龍は昇天して了つた。

て、大師は『そなたは誰ぞ』と小童に聞いた。小童は『我は呉臺山に祀らるゝ智慧の主、文珠菩薩なるぞ』と答へた。斯く語つてゐる内に、小童は變形して、神佛の美にかゞやき、四肢から柔和な光を放つて、微笑み乍ら空へ登つて、雲の外へ消えた。

三

しかし、弘法大師自らも嘗て御所の應天門と題した扁額に、應字の傍へ點を打つのを忘れた。天皇がその譯をお尋ねになつたとき、大師は『忘れて侍べり。されど今、點をば加へ參らせん』と答へた。最早額は掛けられて、高く門の上にあつたから、天皇は、梯子を運んで來させ玉ふた。が、大師は門前の敷石の上に立つたまゝ、單に筆を額に向つて投げつけた。すると、立派にそこへ點が出來て、筆は手へ戻つてきた。

弘法大師はまた御所の光華門の扁額を書いた。その門の近くに紀ノ百枝といふ男が住んでゐたが、弘法の書いた文字を罵倒し、その內の一字を指して、『虛勢を張る力士に似たることよ』と云つた。が、その夜、百枝の夢に力士が現れ、臥床の側へきて、彼にとびかかり、拳骨でなぐりつけた。毆打の痛さに泣き出すと、彼の目は醒めた。見れば、力士は空に上つて、彼が罵倒した文字に變形し、門の上の扁額へ返つて行つた。

また小野道風といふ、非常に巧妙て、名高い書家があつた。彼は弘法大師の書いた秋觴門の額字を嘲笑つて、秋の字を指して、『秋の字さながら米の字とも見ゆ』と云つた。す

ると、その夜、彼の嘲笑つた文字が人となつて現れ、彼に襲ひかゝつて、彼を打ち、幾たびも顔の上へ、跳び上つたり下りたりして——丁度米搗が米をつく杵を動かすために、はね上つたり下りたりする如く——その間『いかに、我は弘法大師の使者なるぞ』と云ひつづけた。彼が目を醒まして見ると、ひどく蹂躙されたやうに、傷ついて出血してゐた。

弘法大師の歿後、餘程の歳月がたつてから、大師の揮毫した美福門と光華門の額字が、殆ど磨消してゐることがわかつた。天皇は大納言行成に扁額の修繕を命ぜられた。が、行成は他の人々の身の上に起つたことに鑑みて、勅命を實行するのを憚つた。して、弘法大師の御怒りを恐れて、供物を捧げ、許可の現示を祈つた。その夜、夢中に大師が現れ、やさしく微笑して『帝の望みたまふまゝに取行ふべし。恐るゝことかは』と云つた。そこで、彼は寛弘四年正月、額を修復した。このことは本朝文集に錄してある。

すべて是等の事實は、私の友人晃が私に話して呉れたものである。

第三章　お地藏さま

一

私は神社佛閣の間に彷徨して、また一日を過ごした。幾多の珍しいものを見た。が、まだ佛陀の顏を見ない。

每度長い退屈な石段を登つて、鬼瓦——象の頭や獅子の頭の恰好をした——の多い門をくゞり、それから、靴を脱いで、薰香の匂ふ薄暗い室へ入り、造花の金蓮を飾つた不可思議な花園のやうな所で、私の眼が朦朧さに馴れてくるまで待つたが、佛像は見當らなかつた。ただ夥しくぴかぴかしたものが、半分だけ見えて、ごちやごちやして、妙な形に捻じけた金塗の眞鍮、名狀し難き容器、謎の如き金字の經文、きらきらする神祕的な、垂れ下つたものなど取りとめのない、はてやかな壇上の什器裝飾品——これらのものが、堅く戸を鎖した厨子を圍んでゐるだけてあつた。

私に最も多くの印象を與へたのは、一般民衆の信仰が、いかにも愉快らしいことである。私は獰猛な、嚴肅な、或は自己抑壓的なものを毫も見ない。眞面目に類するものさへ目にとまらない。社寺の陽氣な境内や、石段にさへ、珍しい遊戲をして、嬉々たる子供が群がり、お祈りのため堂内へ入りくる母は、赤兒を疊の上に這ひ回はらせ、歡聲を揚げるままに放任して置く。誰も宗教を輕快に、樂しいものに考へてゐる。大きな賽錢函へ貨幣を投げ入れ、手を拍つて、極めて短い祈りを囁いてから、振り向いて入口の前で笑つたり、話したり、細い煙管で煙草を吸つたりする。ある堂では、參詣者が内へ入らないのを私は見受けた。單に戸の前に立つて、數秒間のお祈りと、少しばかりのお賽錢を捧げるだけだ。自分で作つた神佛を、あまりに甚しく恐れない彼等こそ幸福である。

二

晃が私の室の戸口で、辭儀をして微笑んでゐる。彼は草履を脫ぎ、白足袋を穿いたまま入つて、今一度微笑んで辭儀をしてから、靜かに進めた椅子に就いた。晃は愉快な青年である。鬚のない滑かな顏、清らかな青銅色の皮膚、それに紺色の蓬髮は、目元まで額に垂

れてゐるので、濶袖の長い衣を著てゐると、殆ど日本の若い娘の姿に見える。

私は手を叩いて茶を呼んだ。葉卷煙草を薦めたが、彼は辭退した。しかし、私に斷わつて、彼の煙管で喫煙すると云つた。そこで、煙管入れの鞘と、煙草入れの嚢を聯結したものを帶から外づし、煙管入れからは、漸つと豌豆大の雁首の皿が附いてゐる眞鍮製の小管を引き出し、嚢からは毛のやうに細かく刻んだ煙草を取り出して、それを小さく丸めて煙管に詰め込んで、吸ひ始めた。煙を肺に吸つては、鼻孔からまた吐き出す。半分間ほどづつ間を置いて、三回輕く吸つて、煙管を空けてからもとの鞘に收めた。

その内に私は晃に私の失望談を語つた。

晃は答へた。『何、今日私と藏德院へ散歩に御出でになれば、御覽になりますよ。今日は佛生會に當りますから。が、極小さい、五六寸の高さです。もし大きな佛像を御覽になりたいなら、鎌倉へ御出掛けにならねばなりません。そこには蓮華の上に大佛が坐つてゐます。五丈の高さです』

それて、私は晃の案内て出かけた。『何か珍らしいものを御目にかけませう』と彼は云つた。

三

寺から澤山愉快な聲が響いて、石段には微笑んだ母や、からから笑ふ子供達が群がつてゐる。入つてみると、玄關の前の漆塗りの臺の邊に、女や兒が押合つてゐる。臺の上に甘茶を容れた桶の形のものがあつて、茶の中に一方の手は上を指し、他方の手は下を指した小さな佛像が立つてゐる。女達は例のお賽錢を捧げてから、妙な形の木製の柄杓で茶を少し汲んで、佛像に灌ぎ、つぎにまた汲んで自身で呑み、赤兒にも一口吸はせる。これが灌佛の式である。

甘茶の壇に近く、一段低い臺に大きな鉢の形の鐘が載つてゐる。襷を當てた木槌を手に持つた僧が近寄つて、その鐘を叩く。が、鐘が適當に響かない。彼は喫驚して、その中を覗いて、屈んで、中から微笑んでゐる赤兒を取り上げる。母が笑ひ乍ら走つて行つて、僧からその兒を受取る。して、僧も母も赤兒も皆、私共を見てからからと興じ笑ふ。それに私共も仲間入りをして面白がる。

晃がちよいちよいと私を置いて行つて、寺の番人と話をして、やがて珍らしい漆塗りの箱を持

つて歸つた。長さ約一尺、幅厚各四寸位のもので、一端に一つの小孔があつて、蓋らしいものは無い。

『さあ、二錢を納めると、神佛の御思召による私共の運命がわかります』と晃がいつた。私は二錢を拂つた。して、晃が箱を振つた。出てきたのは細い竹片て、漢字が書いてある。

『吉！』と晃が叫んだ。『幸運てす。番號は五十一番』

また彼は箱を振つた。また竹片が隙孔から出た。

『大吉！非常な幸運。九十九番』

もう一度、箱を振つて、もう一度、竹片が出た。

『凶！』と晃が笑つた。『禍が私共にふりかかつてきます。六十四番』

彼は箱を僧に返へし、竹片の番號に相當する三枚の不思議な紙を受けた。これらの小さな竹片を御籤といふ。

五十一番の紙に書いてゐる文句の大意は、晃の飜譯によれば、つぎの通りてある。

『この御籤を抽く人、天則を守り、觀音を拜めば、病苦は去り、紛失品は返へり、訴訟に勝つべし。女を求むるに、たとひ待つことありとも、必ず獲べし。猶ほ澤山の幸福來ら

む』
大吉の籤も殆ど同じ文句に讀まれたが、ただ異るのは、觀音の代はりに、福と富の神なる大黑、毘沙門、辨天を拜むべきことと、戀した女を手に入れるのに、待つに及ばないことである。が、凶の籤はつぎの如くであつた。

『この御籤を抽く人は、天則を守り慈悲觀世音を拜するをよしとす。病氣はますます重くなり、失せ物は出ることなく、訴訟には勝つことなく、女を戀すと雖も獲る見込なかるべし。極力信心を勵みても、僅かに最大の災難を免がるるに止まらむ。福運毫もあることなし』

『でも、私共は幸運ですよ』と晃は斷言した。『三回の内、二回まで吉でしたから。さあ、これから、また別の佛像へ參りませう』

して、彼は多くの奇妙な町々を通つて、市の南端へ私を案內した。

四

杉と楓の茂つた間を、幅の廣い斜面の石段が通じてゐる。私共はこの阪を登つて行くと、

二頭の佛陀の唐獅子――雄は威嚇の口を開き、雌は口を閉ぢて――が待つてゐる。その間を通つて、寺の大きな境內へ入つた。先きの方には、また茂つた丘が聳えてゐた。

寺の屋根は、青銅の瓦、反りを打つた檐、鬼瓦、龍、悉く風雨にさびて、一面に模糊たる色合となつてゐた。障子は開いてゐるが、內から洩れる拍子を帶びた悲しげな誦音は、眞晝の勤行と知られた。僧達が法華經――梵經の漢譯――を讀誦してゐるのだ。一人の僧は讀經し乍ら、綿を卷いた木槌で、滿面深紅と黃金色に漆を塗つた、海豚の頭のやうな怪異なものを叩いて、拍子を取つて、單調な冴えない響を出す。これは木魚である。

寺の右に當つて小さな堂がある。その邊、線香の薰りが滿ちてゐる。灰を一杯容れた小爐に立てたる六本ほどの線香柱から、靑煙が卷き上がつて行く。その間から覗き込むと、暗い奧に、冠冕を被つた、煤けた佛像が拜まれた。その稽首合掌の狀は普通の人々が、寺の入口に立つて、外から祈りを捧げてゐるのを、私はよく見受けるが、丁度それに似てゐた。木像の彫刻も彩色も粗末ではあるが、平靜安穩の顏は、暗示的の美を呈してゐた。

境內を橫切つて、建物の左手へ行くと、前面に今一つ石段の阪道が、巨大な樹木の間の不思議さうな、高いものの方へ通じてゐた。私はまたこの阪を上つて、二頭の小さな象徵的な獅子に護られた頂に達すると、忽然ひいやりした蔭になつて、しかも、全く見慣れぬ

光景に驚いた。

くすんだ——殆ど眞黑な土地、一面に空を塞ぐ老樹の梢間から、ところどころへ僅かの日光が洩れる欝然たる綠蔭、柔かて森嚴な薄明りの光に現された異樣なものの一大集團——灰色て、柱の如く、苔が生えた石のやうて、漢字を刻んだ記念碑らしい無數の群。その邊にも、その背後にも、沼べりに繭の簇つた如くに、木のやうな高い細い板片に、矢張り同樣な奇妙な文字を書いたのが、蒼然たる闇の中を貫いて數千となく聳えてゐる。

して、私は他の微細な點を觀ない內に、古い古い佛教の墓場に來たことを知つた。

是等の木摺を日本語で卒塔婆といふ。すべて頂點に近い兩側の緣に、五ヶ所の切り目が入れてある。して、すべて兩面に漢字が書いてある。死者の戒名のすぐ下には、必ず『爲菩提』といふ文句がある。他の一面は、いつも梵語の文句であるが、葬儀を司る僧侶もその意味を忘れてゐる。墓が出來ると同時に、背後へ一本の卒塔婆を立てる。それから四十九日間、七日目に別の卒塔婆を立てる。次には百ヶ日目に、更に一年毎に、三年毎にと、百年間段々長い期間を隔てて別のものを立てる。

大概いづれの卒塔婆の集團にも、その中には、新しく削り立ての白木のものが、古びて灰色又は黑くさへなつたのと並んで立つてゐる。また多くの更に古いのは、文字が全く消

えたのもある。陰氣な地面に倒れたのもある。土地に挿したまゝ、緩くなつたのも澤山あつて、僅かの嵐にも衝き當つて、がたがた音を立ててゐる。
形狀は卒塔婆と同樣珍らしくて、しかも更に興味あるのは墓石である。ある墓の形は佛敎の五原素を現してゐるのを私は知つた。立體形の上に球形、その上に尖塔形、その上に半月狀の緣と、反つた角を有する淺い四角の杯形の石が載つて、杯中には梨形のものが尖端を上にして立つてゐる。是等の形のものは、人體が形成される五要素、卽ち『土、水、火、風、氣』を象徵する。第六要素の『識』に對する象徵が缺げてゐることは、いかなる象徵法でも企及し得ないほどに感動を與へる。しかも、象徵の目的上、この省略は西洋人の心に浮ぶのと、同一の考で企てたのでは決して無い。
墓石の內には、低い、扁頭の角柱形に、文字を黑や金色で現したり、或は單に石へ刻んだのが、また澤山ある。それから、いろいろの形や高さを有し直立の平板で、大槪圓頂、文字は普通浮彫なのもある。最後に、珍らしい角のある石、卽ち天然岩の唯一面に形をつけて、滑かに磨いた部分に、意匠を鏤刻したのも多い。是等の石板の不規則な形狀にさへ、何かの意味があるらしい。石を岩床から切り離す際には、必ず五つの角點で破碎したものと思はれる。して、石が臺の上に平衡を得て、垂直に立てるさまは、初めて匆卒に見ただ

けては解かりにくい祕術である。

墓石の構造もさまざまで、多くは墓碑の前部の臺面に、三つの孔がある。一つは大きな楕圓形の凹所で、その兩側に小さな圓孔がある。二つの小孔は線香のため役に立ち、大きな窪みは水が滿ちてゐる。私はよくその譯を知らないが、たゞ私の日本人の伴侶は、『このやうに死者に向つて水を灌ぐのは、日本の古い習慣です』と私に告げた。墓の兩側には、また花を挿す竹筒もある。

彫刻は冥想或は說法中の佛陀を現したのが多い。日本の子供のやうに穩かに夢みた顏をして眠つた佛陀も少々ある。これは涅槃を意味する。大抵の墓に、莖を交叉した二個の蓮花が、普通の意匠となつてゐるらしい。

ある所に、英人の名を現して、名の上には粗末に刻んだ十字架のある墓石を私は見た。いかにも佛敎の僧侶は、惠まれたる寛容を有つ。これは基督敎徒の墓なのだから!

すべての墓石は、缺けたり、崩れたり、苔が生えたりしてゐる。して、灰色の石はたゞ僅かばかり離れて、無數の列をなして、相接近して、巨樹の蔭に立つてゐる。上の方では澤山の鳥が、その歌ひ聲で空氣を和らげてゐる。背後の阪の下には、蜂の群が唸る如き、微かに悲しげな讀經の聲がまだ聞えた。

晃は無言のまゝ、もつと古くて、暗い墓地へ下る阪の方へ私を案内した。して、私は右手に、阪の頂上に、一團の巨大なる墓碑を見た。その高く、太く、星霜のため苔蒸した灰色の石には、二寸以上も深く字が刻してある。その背後には、高さ十二尺乃至十四尺で、寺の屋根の梁材の如く厚い、大卒塔婆が立ててある。是等は僧侶の墓てある。

五

蔭のさした阪道を下りると、三尺位の高さの六個の小さな像が、一枚の長い臺石の上に、一列に立つてゐるのに、私は出逢つた。第一の像は佛教の抹香函、第二は蓮華、第三は巡禮の杖を持ち、第四は數珠を爪繰り、第五は合掌祈禱の姿、第六は頂端に六個の輪の附いた錫杖を片手に持ち、他の片手には諸願成就の力ある神祕的な、如意寶珠を持つてゐる。が、六つの顏はすべて同じい。各たゞ姿勢と標章の性質が異るだけだ。して、皆同じ樣な微笑を洩らしてゐる。いづれの像の頸にも白木綿の嚢が下がつてゐて、皆小石が一杯入つてゐる。して、像の足許にも、膝の上にも、肩の上にも、小石が高く積み上げてある。石造の後光の上にまで、細い小石が落ちないやうに載せてある。すべて是等のやさしい子供

らしい顔は、古風て、不思議て、しかし、何とも云へなく人を感動させる。

これは普通六地藏と呼ばれ、かゝる群像は幾多日本の墓地に見られる。これは日本の通俗信仰に於て、最も美はしく優しい像、子供の靈魂の世話をして、心配な場所て慰め、惡鬼から救つて吳れる、あの殊勝な佛を現したものである。『しかし、あの像のほとりに積み上げた小石は、どうした譯てす?』と私は問うた。

『それは、或人の說に、子供の靈魂は、死後に子供が行く場所の賽ノ河原て、懺悔の苦業として、小さな石塔を建てねばならぬからてす。鬼が來て、子供が塔を築くや否や倒すのてす。して、鬼は子供を嚇したり、苦しめたりしますが、子供達が地藏の方へ走つて行くと、地藏は大きな袖の下へ子供を隱して、慰めてやつて、鬼を去らせます。だから、誰ても心から祈つて、地藏の膝や足の上へ一つの石を置く每に、賽ノ河原のある子供の靈魂の爲めに、長い苦行の助けをしてやる譯になります』

地藏の笑の如く優しい笑を帶びて、右の話を私に語つた佛敎の靑年學生は、また云つた。『すべて子供は、死ぬると、賽ノ河原に行かねばなりません。そこて地藏と一緒に遊ぶのてす。賽ノ河原は私共の下、土地の下にあります。

註一　地藏及び他の神佛の前へ石を積む習慣の眞正の起原は一般民衆には、解かつてゐない。それは有名なる法華經の一節に基く。

若於曠野中　　積土成佛廟

乃至童子戲　　聚沙爲佛塔

——妙法蓮華經卷第一、方便品第二

註二　地藏はもと梵語のクシテイ・ガルバ（地藏）だと東洋學者は云つてゐる。チエムバリン氏の說の如く、地藏と耶蘇(ジーザス)の音が類似せるは、『全くの偶合』に過ぎない。しかし日本では、地藏は全然變化してしまつて、正しく日本の諸佛中での最も日本的なものと云ひ得る。『賽ノ河原口吟之傳(クチズサミノデン)』といふ佛敎の珍らしい古書によると、賽ノ河原傳說は悉く日本に起原を發し、西曆九百四十六年に崩御された朱雀天皇の御宇、天慶六年に空也上人が初めて書いたものである。空也上人が京都に近い西院といふ村の賽ノ川（現今の芹川だと云はれる）の河原で、一夜を過したとき、冥途に於ける子供の靈魂の狀態につき御告げを受けたのだといふ。〔その書には、傳說が斯くの如くに載つてゐる。が、チエムバリン敎授は現今書かるゝ賽ノ河原といふ文字は、『靈魂の河原』を意味することを說いてゐる。また現代の日本の信仰では、その河を冥途に置いてゐる〕この神話の眞正の歷史はどうであらうとも、これは正しく日本のものである、して、地藏を死んだ子供の愛護者、遊び相手とする觀念は日本のものである。

通俗的形式の地藏は、まだ他にいろ〳〵ある。最も普通のは姙婦が祈願をかける子安地藏である。日本の道路に地藏の像の見られないのは殆ど稀だ。地藏はまた巡禮者の守護者だから。

『して、地藏の衣には、長い袖がついてゐますから、子供達は遊ぶとき袖をひつぱります。それから、地藏の前へ小石を積んで面白がります。あの御覧の通り、像の邊に積んであるのは、子供達のために人々が置くのですが、大抵死んだ子供の母親が、地藏に祈願する際積むのです。尤も大人は死んでから、賽ノ河原へ行きません[註]』

註　結婚しなかつた人は例外である。

六地藏を去つてから、青年學生は墓の間を案內し乍ら、他のさまざま奇異な彫刻の像を示してくれた。

中には妙に可憐なのもある。何れも皆面白い。數個の極めて美しいのもあつた。大抵光背を持つてゐる、古い基督敎藝術に於ける聖徒の像に酷似した合掌の狀を現し、跪いてゐるのが澤山ある。あるものは、蓮華を持つて、冥想の夢に入つてゐる。大蛇のとぐろを卷いた上に安坐せるもの、冠冕のやうなものを被つて、手が六本、一對は合掌祈願、他の手を擴げて、諸種の物をさし出し、平伏せる惡鬼の上に立てるものなどがある。今一つは、淺い浮彫の像て、無數の腕を持つてゐて、第一對の手は掌を合はせ、兩肩の背後から影が差した如くに、數へ切れぬほどの腕が諸方に朦朧と伸び出でて、諸種の物を示して

ゐる。これは祈願に對する答と、また恐くは全能の慈悲を象徴したのである。これは慈悲の女神、人の魂を救はんが爲めに涅槃の安樂を捨てた温和なる觀音の、諸形式の一つであつて、よく日本の綺麗な少女の姿に畫いてある。こゝのは千手觀音となつて現れてゐるのだ。すぐ側の大きな扁板に、その鑿削を加へた面の上部には、蓮座冥想の佛陀が浮彫になつて、下部には、兩手で目を塞いだのと、耳を塞いだのと、口を塞いだのと、三頭の奇怪な猿が刻んで現してある。『これは何の意味だらう?』と私が質ねた。私の友は三個の彫像の恰好を、一つ〳〵眞似ながら、不明瞭な聲で答へた。

『私は惡いものを見ませぬ。私は惡いことを聽きませぬ。私は惡いことを言ひませぬ』

　再三の說明のお蔭で、段々と私は一見して、幾らか色々の佛像の見分けがつくやうになつた。手に劍を持ち、ぴか〳〵光る火に圍まれつゝ、蓮華の上に坐せる像は不動樣である。劍は智、火は力を示してゐる。こゝには片手に一ト卷きの繩を持つた冥想の像がある。これは佛陀であつて、繩は情慾を縛するのである。また最も穩かな優しい日本人の顏――小兒の顏――をして、眼を塞いで、頰に手枕をもたせ乍ら、涅槃の中に、眠れる佛陀もある。美しい處女の像が百合の上に立つたのは、日本の神聖處女(マドンナ)の觀音樣である。こゝに端然と

坐つて、片手に瓶を持ち、片手を教師の態度らしく擧げたのは、靈魂の醫者、一切を癒す佛の藥師樣である。

それから、また私は動物の像をも見た。佛陀誕生譚の鹿が、いかにも優美に雪白の石に彫られて、燈籠の頂上にゐる。ある墓には立派に彫つた魚、と云はんよりは寧ろ魚の觀念を、希臘藝術の海豚の如く、彫刻の目的上、美しく奇怪に作つたのが、石柱の頂を飾つてゐる。廣く開いて鋸齒を示せる顎は、死人の戒名を書いた石の上に載つて、背鰭と振り立てた尾は、企及し難き裝飾的意匠を凝らしてゐる。晃が木魚だといつた。僧侶の讀經の際、褥片を卷いた木槌で叩く、あの深紅と黄金色に塗つた、木製の空洞狀のものと同種の象徵である。最後に、ある處で私は、獵犬の如く、たわやかな形をした神話的種類の一對の動物が坐つてゐるのを見た。晃が狐だと云つた。成るほど今、その像の目的が解つてから眺めて見ると、狐であつた。理想化され、靈化されて、云はん方なく優美な狐である。灰色の石で刻まれ、細長く意地惡い、輝いた眼を有ち、嘲んでゐるやうに見える怪獸である。米の神、お稻荷樣の從者で、正當に云へば、佛教の偶像ではなくて、神道に屬する。

これらの墓に刻んだ文字は、決して西洋の碑銘に似てゐない。ただ家族の名――死者及びその緣類の名と紋章だけだ。普通は花の紋章である。卒塔婆には、たゞ梵經の文字があ

る。

更に進んでから、私は他の數個の浮彫の地藏を見た。一つの像は、餘りに立派な作品なので、私はそこを通り過ぎて了ふのが苦しかつた。この死兒の伴侶を白い石で刻んだ、夢のやうな像は、美しい小兒の如くに、親切な眼を半ば閉ぢ、佛教藝術のみが想像し得たやうな微笑、無限の愛らしさと最上の柔和を持つた微笑を湛へて、天人らしい顏を見せてゐるのは、たしかに如何なる基督の像よりも美はしい。實際、地藏といふ理想は、極めて優れたものであるから、通俗の言葉に於ても、美麗な顏を地藏に譬へて、『地藏顏』と云つてゐる。

六

して、私共は墓地の端の大きな森の處へきた。

森の彼方には、何といふ愛撫するやうな、やさしい日光、何といふ靈的に美はしい空！熱帶の空は、低く懸つてゐて、どこの屋根から手を伸ばしても、その生温い液體のやうな青色の中へ指が浸るばかりに、いつも私に思はれたが、こゝの空は、もつと柔かて、色が

淡く、一層大きな遊星の天かと思はるゝほど、廣漠渺茫たる穹窿に亙つてゐる。それから、雲さへも雲でなくて、靄然として、たゞ雲の夢である。雲の幽靈、透明な怪物、幻影！

突然私の前に一人の子供が立つてゐるのに、私は氣が付いた。極、若い娘が不思議さうに、私の顏を見上げてゐる。彼女の輕い跫音は、鳥の聲と木葉の囁きのために聞えないほどであつた。服裝こそぼろ〳〵の日本服であるが、眼眸とゆるやかな金髮は、日本風のみてはない。他の人種——恐くは私と同じ人種——の幽靈が、彼女の美しい碧眼から覗いてゐる。この子供に取つて、こゝは奇異な遊び場に相違ない。この周圍一切の事物が、その小さな魂に取つて、いかにも不思議と見えないか知らん。が、否、彼女には私がたゞ不思議に見えるだけだ。この子供は前生とその父の世界を忘れてゐる。

この異國の港に於て、美しくて、貧しい、混血兒！御身のためには、こゝの墓中の人人と共にゐた方が更によからう！この輝いた柔かな青空の下にゐるよりも、暗黑界が更によからう！そこでは、柔和な地藏が御身を護り、大袖の下に匿して、禍を避けしめ、一緒に遊んでも呉れるだらう。それから、御身のために今私に慈善を乞ひに來た、夫に捨てられたる御身の母親は、忍耐强い日本人の微笑をたゝへ乍ら、御身の珍らしい美しさを無言て指示しつゝ、御身の平安のため、地藏の膝の上に小石を積み上げるだらう。

七

『もつと地藏のこと、賽ノ河原の子供の靈魂のことを話してくれ玉へ、晃君』

『もう澤山お話することが御座いません』と、晃は私のこの面白い佛に對する興味を笑ひ乍ら答へた。『しかし、久保山へ御一緒に參りまして、そこの或る寺にある、賽ノ河原と地藏と靈魂の審判の繪を御目にかけませう』

そこで私共は二臺の人力車を連ねて、久保山の琳光寺へ向つた。狹い、種々の色を帶びた日本の町を一哩、それから兩側には庭園が並んで、その刈込んだ生籬の後ろには、柳枝細工の籠のやうに瀟洒な住宅が見える綺麗な郊外を半哩、走つてから、車を捨てて徒歩で、迂曲した路を經て綠丘に上り、野や畠を越え、暑い日の下を長いこと歩いてから、殆ど社寺ばかりの或る村に着いた。

境內とは離れて、三個の建物が一つの竹垣に圍まれた靈所は、眞言宗に屬する。入口の右に當つて、小さな開放した堂が先づ私共の目についた。それは駐棺所で、一個の日本式棺架があつた。が、殆ど門と相對して、驚くべき諸像を載せた壇があつた。

忽ち注意を惹いたのは、多くの小像の上に聳ゆる、滿面朱色の怖ろしい像――洞穴の如き巨眼を有つ惡鬼であつた。廣く開いた口は怒つて物を言つてるやうで、激しく眉を蹙めてゐる。赤色の長鬚が、赤色の胸に垂れてゐる。頭に被つた異樣の帽は、黑と金色で、三葉の奇異な裂片がある。左片には月の形、右片に日の形をつけ、中央の片は眞黑である。が、その下の深く金縁をとつた黑紐に、王といふ意を示す神祕的の文字が輝いてゐる。また、この帽紐の下端の左右兩角から、金塗りの笏の形のものが二つ突出してゐる。この王は片手に更に大きな笏を持つてゐる。それから晃が說明した。

『これは冥界の主、靈魂の判官、死者の王なる閻魔王です。怖しげな顏を日本では「閻魔のやうな顏」と申します』

註　梵語の閻摩王（ラマラージヤ）。しかし、印度思想は日本の佛敎によつて、全然轉化してゐる。

その右には、白い地藏樣が多瓣の紅蓮の上に立つてゐた。

左には、老婆の像があつた。幽界を流れる三途川の堤畔で、亡者の衣を奪ひ取る、凄い三途の老婆である。衣は靑白く、髮も皮膚も白く、顏は異樣に皺がよつて、細い銳い眼は險しい。像は頗る古く、彩色が處々剝げて、蒼然たる癩病人の態を呈してゐる。

また海の女神の辨天と觀音樣の美しく彩色を施した像が、珍らしい排置の小規模な山水の頂上に坐つてゐる。この風景が納めてある堂の前面に沿つて、强い金網を張つて、不注意な指觸りを拒いてある。辨天は八本の腕を有つて、二本は合掌祈願、他は高く揚げて種種の物　刀劍、車輪、弓矢、鎖鑰、魔力の寶玉——を持つてゐる。彼女の玉座の下、山の傾斜面には長い衣をつけた十人の侍女が、祈願の態度で立つてゐる。更に下方には白の大蛇が胴體を露はし、一つの岩孔から尾を垂れ、他の岩孔から頭を出してゐる。山麓には辛抱强い牛が臥てゐる。觀音は千手觀音て、彼女の無數の慈悲の手から、種々の贈物を捧げてゐる。

が、これを私共は見ようとて來たのてはない。地獄極樂の繪が、すぐ近くの禪宗の寺て私共を待つてゐる。そこへ私共は足を向けた。

途中て私の案內者は、次の話をした。

『人が死ぬると、死體を洗ひ、髮を剃り、巡禮姿の白衣を着せるのてす。それから、頸のまはりへ三衣袋を掛け、三厘の錢を入れます。この錢は死體と共に葬るのてす。

『その譯は、亡者はすべて、子供の外、三途の川て三厘を拂はねばなりません。亡靈がその川へ達すると、葬頭婆が待つてゐます。この女は夫の天達婆と共に、その川の土手の

邊に住んでゐまして、もし三厘を貰はないと、亡者の着物を剝いで木にかけるのです」

註　葬式及びそれに關聯せる信仰は、日本の各所で餘程異る。東國のと西南諸國のとは異つてゐる。棺中へ貴重品――婦人には金屬製の鏡とか、武士には刀劍など――を納める古風は、今では殆ど廢れた。しかし、棺へ錢を入れる習慣は、依然として行はれる。出雲では金額が六厘で、六道錢（ろくだうせん）と呼んでゐる。

八

寺は小さく、清らかで、障子を廣く開けた中へ、明るい光がさし込んでゐた。晃は僧侶達とよほどの識り合ひに相違ない。彼等の挨拶が非常に慇懃だ。私は少しの寄進をして、晃は私共の訪問の目的を告げた。すると、私共は建物の一方の翼にある、明るい大きな室て、可愛らしい庭園を見おろす處へ招ぜられた。座布團が運ばれ、煙草盆が出され、また八寸許りの高さの漆塗りの小机が据ゑられた。して、一人の僧が押入れを開けて、掛物を探す內に、今一人の僧が茶と一皿の菓子を進めた。菓子は砂糖と米の粉を煉り合はせて作つた、種々の美しい形のものから成る珍しい糖菓であつた。一つの形は菊花そのまゝで、今一つは蓮華の形、その他のものは面白い意匠――飛んでゐる鳥、水を渉つてゐる鶴、魚

類、小型の風景さへ――を現した、大きな薄い深紅色の菱形であつた。晃は菊花を挾み取つて私に食べるやう强ひた。私はかゝる美麗なものを傷めるのを痛惜しつゝ、砂糖の花瓣を一片づゝ壞はし始めた。

やがて四幅の掛物が持出され、擴げて、壁上の懸釘から吊るされた。して、私共は立つて眺めた。

非常に美しい掛物で、線畫と色彩の奇蹟である。日本藝術の最盛期の色なる和らいだ色を呈してゐる。餘程の大幅で、高さ優に五尺、幅三尺以上、絹本である。

掛物の畫譚は次の通りである。

第一の掛物は――

畫の上部には、私共が現世と呼ぶ人間の世界『娑婆』の一場面がある――墓地に花の咲いた樹木があり、哀悼者が墓前に跪いてゐる。空はすべて柔かな青い光の日本日和。下部は幽冥界で、地殼の中を亡靈が降つて行く。墨のやうに暗い中を眞白く飛んでゐる。もつと先きの方では、氣味惡い薄明りの中で、三途の川の流を徒渉してゐる。右の方に待受けてゐるのが、相貌凄く、灰色で夢魔の如く丈高い、三途の老婆である。彼女に衣服を奪はれてゐるのもあつて、先きにこゝへ來た亡靈どもの衣類が、その邊の樹木に重げにか

かつてゐる。

更に下の方では、逃げて行く亡靈が惡鬼に追ひつかれてゐる。怖しい血の如き赤鬼で、獅子のやうな足と、半ば人間の顏、半ば牛の顏を有ち、怒れる『人身牛首の怪物』(ミノトール)(譯者註)の形相てある。一つの鬼は亡靈を寸斷に裂いて居る。今一つの鬼は、亡靈どもを驅り立てて、馬や犬や豚に、化身させてゐる。して、かやうに化身したものは、暗影の中へ飛んで逃げる。

譯者註　希臘神話の怪物。

第二の掛物は——

潜水者が深海で見るやうな暗く青白い薄明かり。その眞中に黑檀色の王座、その上に憐憫のない怖ろしい、死者の王、亡靈の判官なる閻魔が坐つて、周圍には武裝せる鬼が、番兵として徘徊してゐる。王座の下の前方、左方に當つて、靈魂の狀態と世の中の一切の出來事を反映する、不可思議なたばりの鏡が立つてゐる。今しも鏡面には、ある風景の影が射してゐる。絶壁と沙濱と海が見え、沖には船がある。沙濱の上に刀で斬り殺された死人が倒れてゐて、殺戮者は逃走しつゝある。この鏡の前に、鬼に掴まれて恐怖戰慄せる亡靈がゐる。鬼は亡靈に迫つて、否應なしに顏を上げて、鏡面の殺戮者を見て、自身の顏であることを認めさせる。王座の右に當つて、寺院で供物を載せるやうな、高い脚のついた、

扁平な臺の上に、奇異なものが見える。新しく斬つた兩面の顏ある頭を、斷餘の頸の上に眞直に立てたやうだ。二つの顏は證人て、『視る目』といふ女の顏は、娑婆で行はれる一切萬事を見、『嗅ぐ鼻』といふ髯男の顏は、一切の臭氣を嗅いで、人間の所業を知るのである。その側の文机の上に、一大書册が開かれてあるのは、所業の記錄帳である。して、鏡と證人の間に、戰慄せる白い亡靈が審判を待つてゐる。

もつと下の方には、最早宣告を受けた亡靈の苦痛を甞めてゐるのが見える。娑婆で虛言者であつたものが熱した釘拔で鬼に舌を拔かれてゐる。他の亡靈どもは、數十となく火の車に抛り込まれて、苛責の場所へ引かれて行く。車は鐵製であるが、形狀は通常跣の日本の勞働者が街頭で『ハイダ、へー、ハイダ、へー』と、同一の哀れげな、折返へしの言葉を交互に發し乍ら、引いたり押したりする荷車に似てゐる。しかし、眞裸かで、血の色をして、獅子の足と牛の頭を有てる、是等の鬼の車夫共は、火炎の車を人力車夫の如くに引いて走る。

以上の亡靈は、皆成人のてあつた。

第三の掛物は――

亡靈を燒く爐火が、暗黑の空へ燃え上つてゐる。鬼が鐵棒で火をかきまぜる。暗黑の上

空から、眞倒さまに他の亡靈が炎の中へ墜ちてくる。
この光景の下に、漠然たる風景が擴つてゐる――淡青淡灰色の山や谷の連つた處を賽ノ河原が迂曲してゐる。青白い川の堤に群がつた子供の亡靈が、石を積上げようとしてゐる。非常に綺麗な子供達で、實際の日本の子供等の如く綺麗てある。（日本の畫家が、いかにもよく子供の美を感じ、且つ現すのは驚くばかりだ）子供は銘々、短い小さな白衣をつけてゐる。
前面に、鐵棒を持つた恐ろしい鬼が、今しも一人の子供の築いた石の山を打ち碎いて散らしてゐる。小さな亡靈は、その廢墟の邊に坐つて、綺麗な兩手を眼に當てて泣いてゐる。鬼は嘲笑してゐるらしい。他の子供等も傍で泣いてゐる。が、そこへ輝いて美しい地藏が、大きな滿月のやうな後光を照らし乍ら來て、錫杖――强い神聖の錫杖――を伸ばす。すると、子供等はそれを捉へ、それにすがり附いて、地藏の保護圈内へ引入れられる。それから、他の幼兒どもは地藏の大きな袖を摑む。また地藏の胸まで抱き揚げられるのもある。
この賽ノ河原の場面の下に、別に冥界の竹林がある。たゞ女の白衣の姿が、その中に見えるだけだ。女達は泣いてゐて、指先から血が出てゐる。彼等は爪をもぎ取られた指で、緣の鋭い竹の葉を永遠に摘んで行かねばならぬ。

第四の掛物——

光耀の中に浮んだ大日如來、觀音、阿彌陀佛。それから地獄と極樂が隔たるほど遙かの下方に亡靈の浮んだ血の池が波立つ。池畔の絶壁には、鮫の齒の如く、密に刀身が林立してゐる。鬼は裸の亡靈をこの刀劍の山へ追ひ上げる。が、赤い池から麗はしく淸らかな噴水のやうに、一種の透明なものが出てる——一莖の花——不思議な蓮華が——一個の亡靈をもたげて、崖端に立てる僧の足許へ出す。僧の祈念の功德によつて、この蓮華が現れて、苦しめるものを救ひ上げたのである。

惜しいこと！もはや掛物はこれだけてある。まだ他に數幅あつたが、逸失したのだ。否、それは幸にも誤であつた。寺僧は或る隱れた隅から、更に一つの大きな掛軸を發見して、それを展べて、他のものと並べて吊るした。實に一幅の美景！が、これは信仰又は亡靈と、何の關係がある？前景は洋々たる一大碧湖に沿つた庭園——神奈川にある庭園の如く瀑布、洞窟、燕子花の池、石に刻んだ橋、雪のやうな花樹、靜かな青池の上に突き出てた瀟洒な亭など、美しい山水の小景に富んでゐる。背景には、輝いて柔かな雲の長い帶が棚引いてゐて、その上の方には、夏の蒸氣の如く輝いた靄の中から、屋根の上に屋根が重つて、不思議に華麗な、夢の如く輕い、青い宮殿が泛んでゐる。庭園には客——可愛ら

しい日本の少女――が遊んで居る。が、彼等は後光を帶びてゐる。彼等は幽冥界の女達である。

といふのは、こゝは極樂なのだ。是等の神々しい姿のものは、菩薩である。して、もつと近寄つて見てから、私は初め氣が付かなかつた美しい奇異なものを認めた。

是等の美しい菩薩どもは、園藝を營みつゝあるのだ！蓮華の蕾を撫てさすり、何とも知れぬ天上界のものを花瓣に灑いて、花の開くやう手傳つてゐる。して、また何といふ蓮華の蕾！色はこの世のものでない。蕾の破れたのもある。その輝いた花瓣の、黎明の如き光耀の中に、小さな裸の幼兒達が各ゝ小さな後光を帶びて坐してゐる。是等は亡靈が新たに佛となつたので、極樂に生まれた佛である。非常に小さいのもある。大きいのもある。皆目に見えて成長して行くらしい。それは彼等の愛らしい乳母は、一種の神仙の食物を以て彼等を養育するからである。ある一人、蓮華の搖籃から立出て、地藏に導かれて、遙かにかなたの一層華麗な域へ行くのが見える。

最も上方の蒼空に、佛教天國の天使、鳳凰の翼ある少女、所謂天人が浮んでゐる。その人は、舞妓が三味線を奏でる如く、或る絃樂器を象牙の撥で奏でてゐる。他のものは、今猶ほ大寺院の聖樂に用ひる十七管の唐笛を鳴らしてゐる。

晃はこの極樂は餘り下界に似てゐると云つた。庭園は極樂の蓮華あるにも拘らず、寺院の庭園のやうであるし、宮殿の青い屋根は西京のお茶屋を想出させると彼は斷言した。が、結局如何なる信仰の天國も、幸福なる經驗の理想的反復と、延長に外ならぬではない？——往日の夢を私共のために復活させ、永遠的にしたものではない？若しこの日本の理想は餘りに簡單、あまりに初心であつて、天國の光景を描くには、日本の庭園や寺院やお茶屋に於ける經驗よりも、もつと適はしい物質生活の經驗があると云ふ人があらば、それは、その人が日本の優美な青空、その柔かな水の色、その晴れた日の穩かな輝き、その何とも云へぬ魅惑的な內地——そこでは些細な物品でも、製作したのでなくて、愛撫の餘、發生せしめたのだといふ美感を與へる——を知らぬからであらう。

九

晃は壁間の棚から、餘程破損せる青表紙の本を取つて云つた。『こゝに地藏の和讃があります。讃美歌のやうなものです。これは二百年も古い「賽ノ河原口吟の傳」といふ本です。して、これが和讃です』それから、彼は歌の如く拍子を取つて、私にそれを讀んで聞

かせた──

是は此世のことならず
死出の山路の裾野なる
賽ノ河原のものがたり
聞くにつけても哀なり
二つや三つや四つ五つ
十にも足らぬみどり兒が
賽ノ河原に集りて
父戀し母戀し
戀し〳〵と泣く聲は
この世の聲とはこと變はり
…………………………
…………………………

第四章　江ノ島巡禮

一

鎌倉。

樹木の生えた低丘の間に散在せる一つの長い村落。その中を一本の堀が通じてゐる。古い陰氣な、どつちつかずの色をした日本の田舍屋敷。その板壁と障子の上には、勾配の急な草葺の屋根がある。屋根の斜面に行渡つて綠色の斑點がある。これは一種の草だ。屋根の頂上の背には屋根菖蒲が繁つて、綺麗な紫色の花が咲いてゐる。生温るい空氣の中に、酒の香、海草の汁の臭ひ、強い國産の大根の臭ひなど、さま〴〵の日本特有の臭氣が混じてゐる。して、一切のものに勝つて、芳ばしい濃厚な重い抹香のにほひがする。

晃は私共の巡禮のために、二臺の人力車を雇つた。一片の雲なき蒼空が弓形に張つて、地は欣ばしい日光を浴びて輝いてゐる。しかし、私共が屋根に草の生えた、見すぼらしい

家並の間を流れてゐる小川の岸を、車を走せて行くとき、一種の悲哀荒凉の感が私を壓しつけた。といふのは、この一つの廢村が、賴朝の古都、將軍の覇府——忽必烈の使節が貢献を迫まりに來て、その無禮のために首を斬られた處——の殘つたすべてを代表してゐるから。して、甞て壯麗であつた都會の數へきれぬほどの寺院の中で、高い場所に建てられてゐたのか、或は大きな境內又は森のため、錯綜せる巷衢から離れてゐたので、十五世紀と十六世紀の大火を脫れて殘存するのが、僅かあるのみである。當年の囂々海潮音の如き繁華な都會のどよめきが、蛙の聲に代つた、淋しい田圃に圍まれて、參詣者もなく、收入もない廢頽せる社寺の閑寂裡に、まだ昔の神佛が住んでゐる。

二

最初に圓覺寺の大寺院が、私共を招いて、その外門——彫刻は無く、立派な支那風の輪廓を有つた、屋根のある門——に面せる一つの小橋を渡らせる。それを渡つて、欝然たる森の間に通ずる、幅の廣い、長く續いた堂々たる坂を登つて、高臺に達すると、第二の門がある。この門は驚異である——素ばらしい二階建て、勢よく彎曲した屋根と巨大な切妻

があつて、古風な支那式の壯麗なもの、これは四百年も經てゐるが、殆ど星霜の影響を受けないやうに見える。上部の重々しく、且つまた込入つた構造全體は、白木の圓柱と橫梁を組合せただけで支へてある。檐際には鳥の巢が滿ちてゐて、屋根から響く囀り聲は奔流のやうだ。此門は偉大な建築で、そのどつしりとした力强い趣は堂々たるものである。が、一種の嚴正を有してゐる。彫刻も、鬼瓦も、龍もない。それでも、檐の下に幾多の凸出した梁木が錯綜してゐるのは、期待を促がし且つ欺くであらう。それはいかにも怪奇幻異の彫刻を暗示する。獅子、象、龍などの頭があるかと思つて探がしても、たゞ四角な梁木の端だけて、失望よりも寧ろ驚異を感じさせられる。この建築の偉大莊嚴は、そんな彫物で增すのではない。門を入つてから、また廣い石段が長く續き、老樹が鬱蒼としてゐる。して、始めて寺の臺地に達すると、入口に二個の美はしい燈籠が立つてゐる。寺の建築は小規模ではあるが、山門のそれに似てゐる。玄關の上に漢字で『大光明寶殿』と書いた額がある。しかし、重げな格子作りの木柵で、內陣が閉ぢられ、內へ通してくれる人もゐない。格子の間を覗いてみると、薄明りの裡に、先づ四角な蠟石の鋪床、次に暗い高い屋根を支へて、太い木柱の連れる通廊、して、最も奥には柱と柱の間に、黑顏金衣の巨大なる釋迦が、周圍優に四十尺もある大蓮華の上に坐してゐる。その右手に、香箱を捧げて、白い不

可思議の像が立ち、左にもまた合掌祈念の白い姿が見える。二つとも超人間の像であるが、佛弟子か、神か、上人か、堂内が暗くて識別が出來ない。

この寺の先きには、大きな森の老杉古松の間に、直立せる巨竹が密生して、樹葉竹葉相交はつて、熱帶風な壯大の趣を呈してゐる。この蓊鬱裡に通ずる緩かな石段を上ると、もつと古い堂に達した。こゝの門は、先きに私共が通つた堂々たる支那風の山門より小さいけれども、澤山の龍が刻まれて、驚くべく怪奇なものである。この種の龍――龍卷の風波の中から昇つて、またその中へ降つて行く、翼の生えた龍　　は、最早今では彫刻家も刻まないし、また刻む方法をも忘れ果てたのである。左方の門扉の龍は、口を閉ぢ、右方のそれは威嚇的な顎を開けてゐる。彼等は佛陀の二頭の獅子と同様、雌雄の龍である。龍卷の渦と波頭は、星霜のため石の如く硬化した灰色の板から、際立つた浮彫となつて顯然露出してゐる。

先きの方にある小堂には、別にこれといふ像は祀つてない。たゞ天竺からの佛舍利を藏してある。私は今しも不在の番人を探し當てるまで待てないので、それを見なかつた。

三

『今度は大きな鐘を見物に行きませう』と、晃が云つた。

私共は、山を切り開いた兩側が、七八尺の崖壁を成して、青苔蒸々たる間を登つて、左に折れ、非常に頽廢せる石段に達した。隙間毎に草が萌え出て、數知れぬ人の足に蹈まれた石は磨滅破壞して、登つて行くに困難どころか、危險にさへ見えたが、無事絶頂に着いて、一つの小堂の前に來ると、待つてゐた老僧が微笑を浮べて歡迎の禮をした。私共はこれに挨拶の禮を返へした。が、堂に入るに先だつて、轉じて、右方にある有名な鐘を見ることにした。

彎曲（そり）を打つた支那風の屋根を有する、高い開放しの小舍の下に、その大鐘は懸垂してゐる。私の判斷によると、高さは優に九尺、徑約五尺、口の厚約八寸とせねばならぬ。形は口の方ほど廣がつて行く西洋の鐘と異つて、これは全長を通じて同徑を有し、滑かな表面には佛經の文句が刻んである。鳴らすのには、屋根から鎖で吊つて、攻城槌の如く動かさるゝ、重く搖れる撞木を用ひる。撞木を引くために棕櫚繩の弦（わな）がついてゐて、十分搖れる

やう、その弦を引けば、撞木は鐘の側面に刻せる蓮華の如き型を打つ。それを幾百回も打つたことであらう。撞木の四角な扁平の端は、頗る密なる木理を示してゐるが、摺り減されて、緣はぼろ〳〵て、中高の圓盤になつてゐる。恰も活版工が多年使用した木槌の面のやうだ。

僧が鐘を打つやう私に合圖をした。私は先づ手で輕く鐘居を觸つて見た。すると、音樂的の囁きが響いた。それから私は強く撞木を搖がした。して、雷のやうに深く、大風琴の低音の如く豐富な、素ばらしく太い、しかも美くしい音が、山々に響き渡つた。それから急にもつと細く、もつと美くしい音が傳はつて行つた。更にまた他の音が起り、それからは、反響の浪が渦卷いて行つた。たゞ一たび打たれたこの驚くべき鐘は、少くとも十分間、呻吟嗚咽を續けた。

して、この鐘は六百五十年を經てゐる。

註　私がこの章を書いた頃、今から約三年前には、私はまだ京都や奈良にある巨大なる鐘を見てゐなかつた。

日本最大の鐘は、淨土宗の巨刹、京都智恩院の境内に懸つてゐる。參詣者がそれを鳴らすことを許してない。紀元千六百三十三年の鑄造で、重さ七十四噸、本式にそれを鳴らすのには、二十五人を要するのだ

といふ。その次に位するのは、京都大佛殿の鐘で、參詣者は少許の賽錢を納めて鳴らすことが出來る。紀元千六百十五年の鑄造で、重さ六十三噸。奈良東大寺の鐘は、第三番に位するけれども、恐くは最も興味多いものであらう。高さ一丈三尺六寸、徑九尺。だから、京都の鐘に劣るのは、外形の大きさよりも、寧ろ重さと厚さの點である。重量三十七噸。紀元七百三十三年の鑄造で、即ち千百六十年を經てゐる譯だ。參詣者は金一錢を納めて一回それを鳴らす。

近くの小堂で、僧が鐘の鑄造六百年祭を描いた一聯の畫を私共に見せて吳れた。（これは神聖の鐘で、神靈が宿つてゐると信ぜられてゐるから）それ以外にはこの堂は、たゞ殺風景なものであつた。家康とその臣下を畫いた掛物と、內外陣を隔つる戶の兩側に、古風な服裝せる武士の、實物大の像があつた。內陣の壇には、賦彩木造の小風景の上に、辨財天女の十五童子の小像が並んで、御幣と鏡——神道の象徵——があつた。この祠堂は佛寺の大移換の際に、神道の方へ移つたのである。

大抵有名な寺では、その緣起と不思議な傳說をしるした小册類を賣つてゐる。私はこゝでも寺の玄關で、この種のものが賣られてゐるのを見た。その一つは、鐘の畫で飾られたもので、私は晃の補助によつて、次のやうな傳說をそれで知つた。

四

文明十二年、この鐘が自ら鳴つた。この奇蹟を聞いて笑つたものは、災難にかかつたが、信じた人は、後、榮えてすべての願が叶つた。

その頃、玉繩村に小野、君といふ人が病死して、幽冥界に下り、閻魔大王の前へ行つた。亡靈の判官、閻魔大王は、『まだこゝへ來るのが早過ぎる。娑婆界で與へられた命數が、まだ盡きてゐない。すぐ歸れ』と云つた。が、小野君は『どうして歸れませう。暗い中を通つて、行く道がわかりません』と申開きをした。閻魔は答へて『南の方へ行つて、南閻浮提界で聞える圓覺寺の鐘の聲にたよれば、行く道がわかるだらう』と云つた。して、小野君は南へ行つた。すると、鐘が聞えて、暗い中を通つて道を發見し、娑婆界に蘇生した。

また當時、誰も見た覺えもなく、また名を聞いたこともない巨大な佛僧、諸國に現れ、遍歷して到る處で、圓覺寺の鐘の前で祈願することを說いた。この巨大な巡禮僧に、鐘が不思議の力により、僧の姿に變つたものであることが最後にわかつて、多くの人々が鐘の前で祈つて、その願を成就した。

五

私共はまた大きな支那風の山門へ戻つた。

『まだ見るものがあります』と私の案内者は叫んだ。して、前には樹木に隱れて見えなかつた小丘の方へ、別の路を通つて境內を越えて行つた。此丘は高百尺ほどの軟かな石の塊て、その側面は穿たれて洞室となつて、像が滿ちてゐる。洞室は塚穴の如く、像は墓碑のやうに見える。室內は二階になつて、上段に三室、下段に二室ある。上と下は自然の岩石の中を貫いた狹い階梯て通じてゐる。して、是等の室內には、雫の滴る洞壁に沿つて、佛寺の墓の形をなせる灰色の石板が並んで、その面に佛像の高い浮彫が刻んてある。皆悉く後光の圓盤を負つて、中には西洋の中世紀の塑像の如く無邪氣て飾らないのもある。見慣れたのも幾つかある。私は久保山の墓地て、無數の影のやうな手を持つた、此跪坐せる女の像を見た。また冠冕を被り、片膝を揚げて、左手に頰をもたせて、眠れる――久遠平安の可憐な、この姿をも見た。聖母の如き他の諸像は、蓮華を持ち、蛇のとぐろを卷いた

上に立つてゐる。悉くは見えない。一つの岩洞の天井は下へ墜込んで、廢墟に洩れる日光は、岩屑の中に半ば埋れて、近寄り難い彫像の群團を示すばかりだ。

が、この洞室は墓地ではない。是等の諸像は私の想像したやうな墓碑ではなく、慈悲の女神の像なのだ。洞室は禮拜堂で、像は圓覺寺の百觀音である。上段の室の壁龕には、一枚の花崗石に『南無大慈大悲觀世音、歐視諸願音』といふ梵文が、漢字で書いてあつた。

註　梵語にて、阿縛盧枳帝濕伐羅（アヷローキテーシユワラ）（觀自在）。日本の觀世音は支那の慈女神、觀音と起原が同一である。佛教ではこれを印度のアヷローキテーシユワラの化身として採つたのである。【アイテル氏著「支那佛教提要」參照】しかし、日本の觀音は、すべて支那的特性を失つて、藝術的に日本婦人に於ける一切の最も美はしいものの理想的表現となつた。

六

『天下禪林』の門と『巨福山』の門を經て、次の寺の建長寺の境內へ入ると、妙な間違で、また圓覺寺の境內へ入つたやうな氣がする。それは、私共の面前にある第三の門と、その向うの堂々たる寺院は、先きに見たものと同一の方式で、同一の建築家の造營だから

てある。この巨大莊嚴なる第三門を通つてから、私共は寺院の玄關前にある靑銅の泉水へ來た。金屬製の大きな美しい蓮華が、廣く淺い池を成して、中央の噴水によつて、漫々たる水を湛へてゐる。

この寺にも黑と白の四角な石板が敷きつめてあつて、靴のまゝ入られる。外側は圓覺寺と同樣に素朴莊嚴であるが、內部は色の褪めた華麗の壯觀を留めてゐる。光炎を背景として坐せる黑い釋迦の代りに、こゝには巨大の地藏樣がある。火の後光を負つて、車輪大の一本の金輪が、三點で焰の舌を吐き出してゐる。その座は、色の曇つた大なる金蓮華で、高い緣の上には、地藏の衣が裾を垂れてゐる。その後ろの高く連つた金色の段階には、地藏の小像が、きら〳〵群つてゐる。千地藏である。その上の天井からは、一種の天蓋形の薄黑く輝いたもの——緣飾の如く垂れたものの輪——が、長年月の塵網の間から微かに光つてゐる して、天井もその昔は驚異であつたに相違ない。全部鏡板に磨かれて、一枚一枚金地に飛鳥の彩色繪が描いてある。屋根を支へる八本の大きな柱も、昔は金塗りであつたが、今はその蟲に蝕まれた面と柱頭の處々に、痕を留めるだけである。それから戶の上の欄間には、灰色に褪めた古い浮彫刻で、笛と琵琶を奏する天人の翩翻たる狀が現れてゐる。

右方に、重い板戸で通廊と界せる一つの室があつた。管理の僧が、その板戸を開けて私共をその室へ入らせた。こゝに眞鍮の臺の上に、私がこれまで見た中で最も大きな、周圍一丈八尺もある太鼓がある。その傍に表面全部に經文を刻した大鐘がある。それを鳴らすことを禁じてあつたのは、遺憾であつた。その外には何も見るべきものはなく、たゞ卍——日本で萬字と呼ぶ佛敎の神聖なる象徴——を書いた暗い提燈のみであつた。

七

晃は私に、建長寺の大地藏に關して、『地藏經古趣意』といふ本に書いてある、次の傳說を語つた。

昔、鎌倉に曾我貞義といふ浪人の妻がゐて、蠶を飼ひ絹絲を集めて糊口の業とした。

註　浪人といふ語の充分なる意義を知るためには、讀者はミツトフオード氏の名著、「舊日本物語」を參照されたい。

彼女は每々建長寺へ參詣したが、或る寒い日に參詣した時、地藏の像が寒さに苦しむや

うに見えたので、地藏の頭を溫かくするため、田舎の人が寒い日に被ぶるやうな、頭巾を作つて上げようと決心した。して、家に歸つてから、頭巾を作つて、『私が富裕であつたら、御尊體全部を蔽ふものを献上致したいのですが、貧乏の身は詮方ありませぬ。こんなお粗末なものを恐入りますが』と云つて、それを地藏の頭に着せた。

さて、この女は治承五年[譯者註]十二月、齡五十歳のとき、急死したが、死體は三日間も溫かいので、親類が葬らずに置いた。すると、三日目の晩、彼女は蘇生した。

それから彼女は語つた。死んだ日に彼女が閻魔王廳に行くと、閻魔は彼女を見て怒つて『佛の敎へを輕じた惡女奴。蠶を湯に入れ、その生命を滅ぼして、一生涯を暮してきたのだ。鑊湯地獄へ行つて、罪の贖はれるまで焚かれるがよい』と云つた。直ちに彼女は鬼どもに捉へられ、引ずられて、溶けた金屬の滿てる大鍋に投込まれた。彼女が激しく叫喚すると、忽然、地藏樣が溶けた金屬の中の彼女の傍へ降りてきて、金屬は油が流れる如くになり焚えることが止み、地藏は兩手を延べ、彼女を抱いて扛上げた。して、彼女を伴れて閻魔の前へ行き、生前の善行によつて地藏と結緣であるからと云つて、彼女の赦免を求めた。それで彼女は赦されて娑婆へ歸つたのだ。

『では、佛敎に從へば、絹を着るのは不正となる譯だ。さうか？』と、私は晃に質問を

發した。

『實際不正てす。て、佛陀の掟に於ては、明白に僧は、絹を着てはならぬとしてあります』と晃は答へ、『しかし』と言葉を加へて、例の穩かな微笑を洩したので、私は諷刺の暗示を悟つた。『大概の僧侶は絹を着てゐます』

譯者註　治承の年號は四年にて終はる。暫く疑を存しておく。

八

晃はまた私に次の話をした――

鎌倉誌第七卷に書いてある話。昔鎌倉の延命寺に、裸地藏といふ有名な地藏像があつた。像は實際裸の彫刻てあるが、それに着物をきせて、兩足を碁盤の上にのせて、直立してゐた。參詣者が一定の料金を献げるとき、寺僧が像の衣を除ける。すると、像の面は地藏の顏てあるが、胴體は女身てあることが見えるのてあつた。

この有名な裸地藏の緣起はかうてあつた。或る時、平時賴公が大勢の客の面前て、妻と碁を打つてゐた。數局の後、二人の約束て、この次に負けたものは碁盤の上へ裸になつて

立つといふことに決まつた。して、次の勝負に敗けた妻は、裸になる恥を救はせ玉へと地藏に祈願した。地藏はそれを聽入れ、そこへ現れ碁盤の上に立つて、自らの衣を脱ぎ、急にその體を女身に變へたのであつた。

九

私共が進んで行くにつれて、道は高い崖の間を曲つて、狹くなり陰氣になつた。『おい待て！』と私の佛教信者なる案内人は、優しく車夫を呼んだ。して、私共の二臺の車は、巨樹の葉陰から洩れて、古い苔の蒸した阪に照る一筋の日光の中へ停まつた。『こゝに冥途の王の寺があります。閻魔堂と云ひます。寺は禪宗に屬し、禪王寺といひ、七百餘年を經てゐて、有名な像もあります』と私の友は云つた。

私共は堂の立つてゐる小さな境内へと登つた。石段の頂に、右手に當つて、古碑があつた。閻魔堂といふ意味の漢字が、花崗石に一寸深く刻んであつた。

この寺は外景内觀とも、私共が是まで訪ねた寺々に似てゐた。鎌倉の釋迦や地藏の寺と同じく敷石の床だから、入るのに靴を脱ぐに及ばない。一切のものが磨損し、いゝくすんで、

模糊たる灰色を呈し、黴びた臭が鼻を衝く。柱の彩色は夙に剝げて、生地が露はれてゐる。左右の高い壁を後ろにして、九個――一方に五個、他方に四個――の獰猛な像が並んで聳えてゐる。喇叭のやうな飾の着いた、奇怪な冠を被つて、灰白色に古び、私が久保山で見た閻魔像に非常によく肖てゐるので、『これは皆閻魔か?』と私は尋ねた。『いえ、十王といつて、閻魔の從者です』と案内者が答へた。『でも、たゞ九個ではないか?』と私が問ふた。『九個と閻魔と併せて十王となるのです。まだ閻魔を御覽になつてゐませんよ』

閻魔は何處に?室の奥の方に、階梯のついた高座の上に壇が見えた。が、像は無くて、普通佛壇にある、金塗りの眞鍮又は漆塗りの器物だけあつた。壇の後ろには、たゞ方六尺許りの幕が見えた。嘗ては暗紅色であつたのが、今は殆ど判然たる色もなく、床の間を蔽うてゐるらしく思はれた。番人がきて、私共を導いて高座へ上らせた。その疊を敷いた處へ上るに先つて、私は靴を脫ぎ、幕の前、壇の背後へと番人について行つた。彼は身振りで私に知らせて、長い竿で幕をもたげ覗かせた。その陰氣な幕で蔽はれてゐた、不思議さうな、深い眞暗の裡から、忽然一つの姿が私を睥睨した。一見私は覺えず飛び退いた――一切の期待に超えた怪物の顏。

註　一つの痛快な日本の諺がある。その諧謔の充分なる意義は、諺の文句に指した像の藝術的表現を見た

人でなくては、味到し難い——「借るときの地藏顔、濟すときの閻魔顔」

素敵に威嚇的な恐ろしい顏で、赤熱の鐵が灰色に冷めかかつたやうな鈍赤色を呈してゐた。最初の激感は疑もなく、幕を上げて急に暗黑から現れた、幾らか芝居じみた方法に多少は基いてゐるが、驚愕の消え去るにつれて、私はこの像の凄い彫刻家の意想の偉大なる力、その神祕なる根原を認め出した。この作品の不思議は、虎のやうなしかめ顏、怒つた口の猛烈さ、または頭全部の兇暴と怖しい色に存するのでなく、眼——惡夢の眼に宿つてゐるのだ。

一〇

この怪奇な古寺には、その傳說がある。

七百年前といふ事だ。大佛師の雲慶蘇生が死んだ。雲慶蘇生といふのは、冥途から蘇生した雲慶の意てある。その譯は、雲慶が閻魔の前へ行つた時、靈魂の裁判官閻魔は、『生前、汝はおれの像を作らなかつた。今おれを見たからには、地上へ歸つて、おれの像を作つて見よ』と云つた。そこで雲慶は忽然人間界に戻された。前に彼を知つてゐた人々は、

彼を見て驚いて、雲慶蘇生といふ名を附けたのである。雲慶蘇生はいつも閻魔の顔を念頭に浮べつつ、この像を作つたから、今猶ほ看者に恐怖を與へる。彼はまたこの寺にある、獰猛な十王の像をも作つた。

私は閻魔の畫を一枚購ひたかつたので、番人にその希望を通じた。畫を買ふことは出來るが、それよりも先づ鬼を見せるとのことであつた。私は番人に隨いて寺を出て、苔の生えた石段を下り、村の本道を越えて、一つの小舍に入つて床に腰をかけた。番人は障子の奥へ入つて、やがて鬼を引摺つてきた。裸て、血の如く赤く、醜惡を極め、高さ三尺許りのものである。棒を振り翳して、威嚇の體で立ち、圖々しい眼を持つて、頭は鬪犬の頭の如く、足は獅子のそれに似てゐる。番人が極めて眞面目にこの怪物をぐる〳〵廻はして、私にそのあらゆる恰好を見せた。開いた戸の外には、無邪氣な群集が寄つて、異人と鬼を眺めてゐた。

それから番人は、粗末な閻魔の木版繪に、經文の印刷してあるものを探して呉れた。私がその代を拂ふや否や、彼はそれに寺の印を捺すことに取りかかつた。印は驚くべき漆塗りの箱に納めて、柔皮て幾囘も卷いてあつた。それが解かれてから、私は印を調べてみた。

長方形で、朱色の磨いた石に、凹彫で意匠が刻んである。彼は印の面を赤い墨で濡して、それを凄い畫の描いてある紙の一角に捺した。して、私の奇異な買物の證據は、永遠確實となつた。

二

大佛の境内へ入つてから、すぐ大佛は見えない。こゝの寺は疾くに無くなつてゐる。芝生の中に通じた敷石道を進むと、大きな樹木が像を隠してゐる。が、少し曲がると、不意に全部が見えてびつくりする。幾ら澤山その巨像の寫眞を見たことのある人でも、實物を初めて見ては驚く。それから、像は少くとも百碼の遠くにあるけれども、あまり近過ぎはせぬかといふ氣になる。私ももつとよく見るやうにと、すぐ三四碼後へ退いた。すると、像が生きてゐると思つて、私が怖がつたのだと車夫は考へて、笑ひ乍ら手眞似をして私を追ひかけた。

しかし、假令その像が活きてゐても怖れる者はあるまい。あの容貌の柔和、夢みる如き平靜、全體の無限なる沈着は、美と魅力に滿ちてゐる。して、あらゆる期待に反して巨大

なる佛陀に近寄れば近寄るほど、魅力が偉大になる。その莊嚴美麗の顏を仰いで、半ば閉ぢた眼を覗きこむと、靑銅の眼瞼から恰も幼兒の如くやさしく、その眼が注がれてゐるやうで、この像こそ東洋の精神に潛める一切の優しく、且つ落着いたものを具象化してゐると感ぜられる。然かも日本人の考てこそ始めて、これが創作され得たのだと思はれる。その美、その品位、その完全な沈着は、これを想像に描いた民族の一段優れた文明を反映してゐる。そして毛髮の扱ひ方や、種々の象徴的記號が示す通り、印度の模型から思ひ付いたのであらうが、技巧は日本的なのである。

　像が壯麗を極めてゐるために、高さ僅に一丈五尺もある立派な靑銅の蓮華の莖も、暫くは看者の眼に入らない。これは像の前面、線香が燃えてゐる大三脚臺の兩側に立ててある。

　佛陀が安坐し玉ふ大蓮華の右側に孔口があつて、そこから胎內巡りが出來る。內部には觀音の小厨子、祐天上人の像、及び南無阿彌陀佛と漢字を刻した石碑がある。

　梯子て上ると、巨像の內部の肩まで行ける。そこに二個の小窓があつて、廣く境內を見渡される。此際案內の僧が、この像は六百三十年を經てゐると述べ、して、像を容れて雨露を防ぐべき寺院の新築費として、僅かの喜捨金を求める。

　それは昔は、この佛陀のために、寺が建ててあつたからである。地震に續いて海嘯が起

つて、寺の壁も屋根も一掃して了つたが、巨像はそのまゝ殘つて、依然蓮華を眺めて冥想をしてゐる。

一二

それから、私共は音に聞えた鎌倉の觀音の前へ達した。これは、人間の靈魂を救はんがため自から永遠の平安を讓渡たし、猶億劫年間人類と惱みを共にせんがため、涅槃の幸福を放棄した、憫みと慈悲の女神なのだ。

私は寺に通ずる石段の阪を、三つ上つて行つた。入口に坐せる若い娘が立ち上つて迎へて、奥へ入つて番僧を呼んできた。それは白衣を着けた老人であつた。彼は私に入るやう合圖をした。

この寺はこれまで見た寺に劣らず大きくあるし、また他の寺々の如く星霜六百年の損傷を受けて、古色蒼然としてゐる。祈願の献納品や、字を書いたものや、種々の面白い色に染めた澤山の提燈などが、屋根から吊り下つてゐる。

入口に殆ど對した處に、極めて人間らしい容貌で、等身大の珍しい坐像が非常に皺のよ

つた顏の中に埋もれた、小さな奇妙な眼て、私共を眺めてゐる。もと顏は肉色に、像の衣は淡青色に賦彩してあつたが、今ては年月と塵のため、全體一樣に灰色になつて、その色褪せた趣は、像の老朽とよく調和し、いかにも生ける托鉢僧を見るやうだ。これはお賓づるて、無數の參詣者の指先に撫でられて形の磨滅してゐる、有名な淺草のものと同じい。入口の左右に筋肉逞しく、怖ろしげな仁王がある。深紅の胴體には參詣者の投げつけた白い紙玉が、斑點をなしてゐる。壇上には、小さいけれども、頗る好ましげな觀音が、炎の明滅を模せる、長方形の金の光背を全身に負ひながら立つてゐる。

が、この像のため、この寺が有名なのではない。今一つ別の像があるのだ。それは或條件で拜することが出來る。老僧は立派な英語で、盛んに述べ立てられたる懇願文を私に提示した。寺と住職を支へて行くため、參詣者から幾分の寄附を仰ぐといふ趣意て、他の宗旨の人々にも『苟も人を親切にし、善良ならしむる信仰は、すべて尊敬に値する』ことを記憶するやう訴へてあつた。私は幾らかの喜捨を捧げて、大觀音の拜觀を求めた。

すると、老僧は提燈に點火し案內して、佛壇の左の低い入口から、寺の內部の高い暗い處へ入つた。私は用心し乍ら隨いて行く。提燈の火がちら〳〵する外、何も見えない。やがて、何だか光つたものの前に停つた。暫くすると、私の眼が暗黑に慣れて、物の形狀が

分明になつてきた。その光つたものは、次第々々に金の大きな足であることが分つて、足背の上に金の衣の裙が波を打つてゐるのが目についた。すると、片方の足も見えたから、これは立像に相違ないと思つた。私共の居る處は狹いが、餘程高い室であつて、上の方の神祕な暗黒から、金の足を照らしてゐる燈光の圏内へ繩がぶらさがつてゐるのが分つた。僧は更に二つの燈を點じて、一碼位離れて垂下した一對の繩に附着せる鈎に吊るし、それから徐々とたぐつて上げる。燈が搖れ乍ら上ぼるにつれて、金の衣はもつと澤山現れてくる。次には二つの大きな膝の外形、その次には彫刻の衣裳を纒つた、圓柱のやうな股の曲線が現れる。して、燈光が猶ます〳〵ゆれつゝ上つて、金の幻影が暗中にます〳〵高く聳えると共に、期待の心が緊張してくる。頭の上方で目に見えぬ滑車が蝙蝠の叫ぶ如く軋る外には、一つの音もしない。やがて金の帶の上の方に、胸に髣髴したものが現れた。次に祝福を示すために擧げられたる金の手が輝いて見えた。次には蓮華を持つた片方の金の手、それから最後が金の顔、久遠の若々しさと、無量の慈愛を帶びて微笑せる觀音の顔。

神聖な暗黒の裡から、かやうにして露はされた、この神々しい女性の理想――古代が産み、古代藝術が産んだ作品――は、たゞ強い印象を與へるといふだけに止まらない。私はこれが惹起した感情を驚嘆と稱しては物足りない。それは寧ろ畏敬の念である。

しかし、觀音の麗顔の邊で一寸停つた燈火が、また滑車の軋る音をたてて、更に上つて行くと、これは〳〵、象徴の異常を極めた三重冠が現れた。幾つもの頭や、顔を疊んだ尖塔である――それらの顔は、觀音の顔の小型で、少女の愛らしい顔である。

といふのは、この觀音は十一面觀音だから。

一三

この像に對して、世間の尊信は頗る篤い。その傳説はかうである。

元正天皇の御宇に、大和の國に得度上人といふ僧がゐた。前生では法輝菩薩であつたが、俗人の靈魂を救ふため、また娑婆へ生れたのであつた。その頃、得度上人が大和の國のある谷を夜間歩いて行くとき、不思議に光り輝くものを見た。近寄つてみると、その光りは大きな楠樹の倒れた幹から發してゐた。樹から芳香を放ち、光りは月の光のやうであつた。こんな奇瑞からして、上人はこの木は神聖なものと悟つて、その材木で觀音の像を彫刻させたらばと思ひ付いた。して、彼は讀經念佛して祈願を籠めた。すると忽ち彼の面前へ老人と老女が現れて、『貴僧の願は、この材木で觀音樣の像を彫つてもらひたいのだといふ

ことを知りました。だから、もつと祈りを續けなさい。私達が彫つて上げますから』と彼にいつた。

して、得度上人はその通り祈りを續けてゐると、男女の老人達は、大きな幹を易々と二つに等分し、その一個づゝに彫刻を始めた。彼等は三日間勞作して、三日目には二體の立派な觀音が出來上つた。上人は眼前にこの驚くべき像を見て、『どうか、御兩人の御名を知らせて下さい』と云つた。老人が春日明神だと答へ、女は天照皇大神だと答へた。して、彼等の答へてゐる内に、姿が變はり、昇天して、得度上人の目から消え失せた。

天皇がこれを聞召され、大和へ使者を遣はし、寄進の品を捧げ、また寺を建立させられた。名僧の行基菩薩も來て、觀音と寺の供養を催し、一體の像を、そこへ勸請し、『すべての生靈を救ふため、永遠こゝに留まり玉へ』と告げたが、他の一體を海中へ投じ、『すべての生靈を救ふため、何れなりとも最善の地へ行き玉へ』といつた。

その像が鎌倉へ漂流した。夜、そこへ着いて、恰も海上に日が照つたやうに光輝を放つた。鎌倉の漁夫どもは、大きな光に目を醒まされ、舟に乘つて沖へ出て、浮べる像を發見して、濱邊へ齎らした。そこて、天皇が詔して、像のために海光山、新長谷寺といふ寺を建てさせ玉ふたのであつた。

一四

觀音の寺を後にしてからは、最早路傍に人家はない。左右の翠丘は急峻になつて、頭上の樹陰は濃くなつた。が、それでも折々、蒼苔の蒸せる石段、彫刻を加へた山門、或は鳥居などが、私共の訪ねる邉なき社寺の存在を知らせてゐる。この邉の幾多崩壞せる祠堂は、廢都の昔の壯麗と宏大を無言に證明してゐる。時々私共は四角柱の斷片の如き彫刻された石――の味を帶びた日本の薫香が漂つてゐる。して、到る處花香に混じて心地よい、樹脂荒れ果てた墓地の古塚――が澤山散らばつた處や、夢みる阿彌陀又は微笑せる觀音の像などが淋しげに立てる邊を過ぎた。すべて古びて、色褪せ、磨損して、櫛風沐雨に見分け難くなつたのもある。私は霎時立停つて、哀れげな六個の群像に眺め入つた。死んだ小兒の靈魂を護る、美はしい六地藏も、碎けて鱗蘚を結び、苔を帶びたさま！五個の像は、多年の祈りを示す小石の堆積裡に肩まで埋もれ、亡兒の可愛さに奉納せる、さま〲の色の涎掛が、その頸に卷いてある。が、一個の像は滅茶々々に破碎されて、自から跳ね飛ばした小石の間に顚覆してゐる。通りがかりの荷車に毀されたのであらう。

一五

行くに隨つて道は前下りになつて、大谿谷の壁のやうな絶崖の間を降つて、曲がると不意に峽間を脱し海に出てる。海は晴空の如く青い――柔かな夢みるやうな青色。

道は鋭く右に轉じ、廣い鼠色の沙濱を見おろした、磯山傳ひに迂折して行く。して、海風は心地よい潮の香を吹き送つて、肺を極度まで充滿させる。遙か向うに森に蔽はれた島の、綺麗な高い綠色の塊が、陸地から四分の一哩ほどの所に水上に聳えたのが見える。それは海の女神、美の女神を祀つた神聖なる江ノ島である。私は既にその嶮しい傾斜面に、灰色に散らばつてゐる小さな町を見ることが出來た。確かに今日は徒歩で、そこへ渡つて行ける。潮が落ちてゐて、私共が近づきつゝある向うの村から、堤道の如く伸びた、長い廣い沙洲が露出してゐるから。

島の對岸の小村、片瀨で私共は、人力車を棄てて歩行せねばならぬ。村から濱へ出る砂丘は、砂が深くて車を曳くことが出來ない。澤山他の人力車もこの村の狹い通りて、先きに行つた客を待つてゐた。が、今日辨天の祠に參詣した西洋人は、私だけだとのことてあ

つた。

私共の二人の車夫が先きに立つて砂丘を越えて、やがて私共は濡れた固い砂地に下つた。

私共が島に近くにつれて、小さな町の建築の細部が、海の微靄を透して面白く分かつてきた —— 怪奇な彎曲した青い屋根、輕快な露臺、高く尖つた破風が、不思議な文字を一杯書いた、異様な旗の翩翻たる上に見える。私共は平沙を越えた。すると、海の都、女神龍神の都の、いつも開かれた門である。美くしい鳥居が、私共の面前にあつた。それは全部青銅て、上には青銅の七五三繩が附いてゐて、また『江島辨天宮』と書いた眞鍮の額が掛つてゐる。太い柱脚には、渦巻く浪にもがく、龜の浮彫がある。これは陸路からは、辨天宮に面して實際、町の門てある。が、片瀨の村につゞくものから云へば、第三番目の鳥居に當る。私共は海岸の方から來たので、村にある他の鳥居を見なかつたのだ。

さて、江ノ島へ來た。眼前に一筋の町が上ぼつてゐる。廣い石段の多い暗い町て、紺布に白い奇異な文字の交つたのが、海風にひら〳〵してゐる。料理屋や小店が並んでゐて、一軒毎に私は立ち停らずには居られなかつた。日本の店頭へ立つて何かを視ると、必ず買ひたくなる。それで私は買つて、また買つた。

何故となれば、江ノ島は實際青貝の都だからてある。何れの店にも文字を染め抜いた暖

簾の後ろに、法外に安い驚くべき貝細工を賣つてゐる。蓆を敷いた臺の上に平らかに載せた玻璃張りの箱や、壁に立て据ゑた棚の附いた陳列箱は、いづれの箱も眞珠母のやうな、非常に珍らしく、信じ難いほどに巧妙を凝らした品で、燦爛としてゐる。眞珠母製の魚や、鳥を絲に繋いだものは、虹の色に輝いてゐる。眞珠母で作つた子猫もある。小狐もある。子犬もある。それから娘の櫛、巻煙草の吸口、使用するには惜しいほど、綺麗な煙管がある。志銀貨（シリング）の大いさほどもない、貝製の龜は、輕く一寸觸はれば、頭と足と尾を一齊に動かし、足を交互に引込めたり出したりする。眞正の龜かと思つて、びつくりさせられる。鶴、鳥、甲蟲、胡蝶、蟹、蝦、悉く貝細工で巧みに作られ、手を觸れて見ねば、生物でないとは信じ難い。貝の蜂が貝の花の上に留まつてゐる――針金に停まつたのを花に挿してあるのが、もし一枚の羽先きで動かせば、ぶんと唸りさうにも見える。日本の娘が愛好するもので、名狀し難い貝細工の寶玉類、さま／＼の形狀に彫つた簪類、襟止、頸珠などがある。江ノ島の寫眞もある。

一六

この珍らしい町の終端に、また鳥居がある。木の鳥居で、そこへは一層の急阪がある。阪の下に奉納の石燈籠、小さな井と石の手水鉢がある。參詣者は、手水鉢で手を洗ひ、口を漱ぐ。大きな白い漢字を書いた青手拭が、傍に吊つてある。私は晃に文字の意味を尋ねた——

『奉獻と漢字ては、音讀しますが、日本語てはそれを獻じ奉ると讀むのです。この手拭を恭しく辨天に捧げ奉るといふ意味なので、皆これは寄進と申して、色々の種類があります。手拭を寄進する者もあれば、繪畫を寄進するのもある。瓶や、提燈や、唐金の燈籠や、石燈籠もある。普通、神樣に祈願をかける時には、そんな寄進の誓ひを立てます。よく鳥居の寄進を誓約しますが、その大いさは獻げる人の富の度合によります。非常な富豪は、あの、こゝの下にある、江ノ島の門のやうな、唐金の鳥居を獻上するのもあります』

『いつも日本人は、神樣への誓約を守りますか？』

兒は可愛い微笑を洩して、私に答へた――

『もし祈願が叶つたら、立派な金屬製の鳥居を建てることを誓つた人がありました。して、その人は思ひ通りに願が叶つたのです。すると、三本の極く小さな針で鳥居を建てたさうです』

一七

石段をのぼると、高臺に達し、町の屋根が見おろされる。苔が蒸して、缺けた唐獅子や石燈籠が鳥居の兩側にあつて、臺の背後は神聖な山が森に蔽はれてゐる。左の方に古色蒼然たる石の欄干が、滿面藻屑の浮いた淺い池を圍んでゐる。池の對岸の叢林から、漢字で蔽はれた、奇異な形の平石が、一端で立つて、突出てゐる。これは神聖な石で、大きな蝦蟇の形だと信ぜられてゐる。だから蝦蟇石といふ。臺の緣に沿つて、彼處此處に他の石碑がある。その一つは辨天宮へ百度參詣した連中の寄進に係るのだ。右の方にまた石段があつて、更に上の高臺に達する。臺の麓に坐つて鳥籠を編んでゐた老人が、進んで案內者となることを申出でた。

私共は案内者に隨いて次の高臺へ上ぼつた。そこには江ノ島小學校がある。また今一つ大きな不恰好の貴い石がある。福石といふ、昔は巡禮者が、この石を手で擦ると、富を得るものと信じてゐたので、石は無數の掌によつて磨滅されてゐる。

更にまた石段があり、綠苔の生じた唐獅子や、石燈籠があつて、それから、また高臺となつて、中央には小祠がある。これは辨天の第一の祠である。數株の短矮な棕櫚がその前に生えてゐる。祠內には何も興味あるものはない。たゞ神道の象徵だけだ。が、傍にまた一つの井があり、また奉納の手拭がある。それから、六百年前、支那から齎らされた石堂がある。恐らくは此巡禮の札所が神道の祠官に渡されない前、その中には有名な像があつたことであらう。今は何も入つてゐない。その背部を成せる一本石は、上の崖から落ちた岩のため破碎してゐる。碑文も一種の浮渣で殆ど消されて、晃が讀んだのは、『大日本國江島之靈石……』餘は解することが出來ない。晃の話によると、この附近の祠に一つの像がある。が、唯だ一年に一回、七月十五日に覽せられるとのことであつた。

私共は、この境內を去つて、左方へ上つて行つて、海を見おろす斷崖の端を進んだ。崖端に綺麗な茶店が數軒ある。いづれも海風に面して開け放してあるから、家の中を見通しに、疊を敷いた室や漆塗りの緣側を越えて、海が繪の額緣に收まつたやうに見える。して、

雪の如き帆の散點せる青白く晴れた水平線と、幻の島の如く、遙かに蒸氣の影法師の如き大島の、微かな青い峻峰の形が見える。それから、また鳥居と石段がある。石段は高臺に通じ、臺は巨大な常盤木の蔭で殆ど黒く、海の方は苔滑かな石の欄干を繞らしてある。右の方に石段、鳥居、高臺があり、更に苔蒸せる唐獅子と石燈籠があり、また江ノ島が佛敎から神道に移つた變遷を誌した石碑もある。向うの方、更に他の丘の中央に第二の辨天宮がある。

が、そこに辨天はゐない！辨天は神道家の手によつて隱されてしまつた。この第二の祠は第一の祠と同様に空虛だ。しかし、祠の左手の建物に奇異なる遺品が陳列されてゐた。封建時代の武具、卽ち板金鎧と鏈甲の一揃、惡魔の如き鐵の假面である瞼甲の附いた兜、金龍の飾冠の附いた兜、大入道が振り廻はしさうな兩手で使へる刀劍、直徑約一寸、長さ五尺以上もある巨大の箭など、ある箭には、長さ約九寸の三日月形に彎曲せる矢鏃が附いてゐて、彎曲の內側は小刀の如く鋭い、かやうな矢は人の頭をはね飛ばすだらう。で、私はそんな重げな矢が、たゞ手で以て弓から射放されたといふ晃の斷言を殆ど信じ難い。佛敎の偉僧日蓮の書——紺地に金文字——があり、また更に偉大なる佛僧、書家、魔力家なる弘法大師の作と稱せらるゝ金龍が、漆塗りの厨子に入つてゐる。

掩ひかかる樹の蔭を通つて、第三の祠へ達する。鳥居をくゞつてから、一面に浮彫の猿を刻んだ石碑の處へ來る。この碑の意味は、流石の案内者も説明が出來ない。それからまた鳥居がある。これは木製だ。が、金屬製のを夜間盗賊に盗まれたので、その代りだと私は告げられた。驚くべき盗賊！その鳥居は少くとも一噸の重さがあつたに相違ない。また石燈籠がある。それから山の絶頂に廣い境内があつて、その中央に第三番目で、且つ主要なる辨天の祠がある。祠前の空地には墻を繞らして、祠へは全然近寄れないやうにしてある。虚榮と業腹！

が、墻の前に、祠の石段に面して、小さな拜殿がある。そこには賽銭箱と鈴が備へてあるだけで何も無い。參詣者はこゝで賽銭を捧げて祈る。小さな壇の上に、支那式屋根を四本の素木の柱で支へて載せ、後方は胸ほどの高さに格子で仕切つてある。この拜殿から辨天宮を覗いて見ると、辨天は存在しないことがわかつた。

が、私は天井は鏡板で張りつめてあることを認めた。して、中央の鏡板には珍らしい繪を發見した——縮畫の龜が私を瞰視してゐる。私がそれを眺めてゐると、晃と案内者の笑ふのが聞えた。して、案内者は『辨天さま！』と叫んだ。

一匹の美しい綾織模樣の小蛇が、格子細工を傳つて、蜿蜒と昇つて行く。折々格子の目

から頭を突き出して私共を眺める。蛇は毫も人を怖れる風に見えない。また怖れる必要もない。この種類の蛇は辨天の使者で、且つ祕密を明かされてゐる者と思はれてゐるから。女神自身が蛇の形相をすることもある。恐らくは彼女は私共を見ようとして出て來たのであらう。

附近に、臺石の上に据ゑた奇異の石がある。龜の形で、龜の甲のやうな條紋を有つてゐる。これは神聖のものと考へられ、龜石と呼ばれる。しかし、私はこゝて石と蛇の外には、何をも發見し得ないだらうと、大いに懸念した。

一八

さて、これから私共は龍の窟を訪ねようとする。晃の說明によれば、この名は辨天の龍神が、その中に住んてゐたからてはなく、洞窟の形が龍に似るからてある。道は島の向う側の方へ下つて、急に青白い堅岩へ開鑿せる石段となる。非常に嶮岨て磨滅してゐて、滑り易く危險て、海は脚下に迫つてゐる。低い青白い岩礁、礁間に碎くる激浪、その中央に立つ石燈籠——すべてが恐ろしい絕壁の崖端から、一幅の鳥瞰圖となつて見える。私は一

つの岩には、深い圓い穴をも見た。以前には、この下に茶店があつて、それを支へる柱は、それらの穴へ挿してあつたのだ。

私は用心をしながら降つて行く。草鞋穿きの日本人は滅多に滑らないが、私は案内者の手を藉つて漸つと進む。殆ど一歩毎に私は足を滑らした。屹度、是等の石段がかやうに磨滅してゐるのは、たゞ石と蛇を見るために來た參詣者の草鞋のためばかりではあるまい。

たうとう私共は絶壁に沿うて岩や深潭の上に渡せる板の棧道へ達した。して、岩の突角を廻つてから神聖なる窟へ入つた。進むに隨つて薄暗くなり、浪が暗中を後から追かけて、耳を聾せんばかりに轟き、非常な反響のため、猶音が大きくなる。振返つてみると、洞口は暗黒裡に大きな鋭角の裂目の如く、蒼空の一片を洩らしてゐる。

私共は祀れる神のない一つの祠に達して、御賽錢を上げた。それからランプに火を點け各自それを取つて、一系の孔道を探檢する。非常に暗くて三個の燈火でも初めは何も見えない。しかしやがて、私が寺の墓地で見たやうな、平石の上に彫つた浮彫の石像が分つた。是等の像は一定の間隔を置いて、岩壁に沿うて安置されてゐる。案內者は一つ〳〵の像面に燈光を近づけ、大黒樣、不動樣、觀音樣とその名を呼んだ。像はなく、その代はりに空虛な祠ばかりの事もあつて、賽錢箱が、その前に備へてある。祭神が御留守になつた是等

の祠には、太神宮、八幡、稻荷樣など神道の神々の名がついてゐる。石像はすべて黑い。または黄色な燈光のため黑く見えるのだ。して、霜がふりかゝつたやうにきら／＼してゐる。私は昔の神々を葬つた地下の墓穴に居る樣な氣がした。行けども／＼盡きないやうに思はれた覆道も、矢張り際限があつて、一つの祠で了はつてゐた。天井の岩が低く垂れて、祠に達するには、手と膝で跪かねばならなかつた。しかもその祠には何も入つてゐなかつた。これが龍の尾てある。

私共はすぐには明るい處へ戻らないで、龍の翼なる暗い橫穴へ入つた。橫領されて了つた黑い佛像、空虛の祠、滿面硝石を結んだ石の顏、俯して漸つと近寄れる賽錢箱、こゝにもまたそんなものがあつた。して、木彫りのも石彫りのも、辨天の像は無かつた。

私は明るい處へ戻つてきて嬉しかつた。こゝて案內者は衣を脫ぎすて裸になつて、不意に礁と礁との間の、黑い深い渦卷く潮流の中へ眞逆さまに跳込んだ。五分間の後、姿を現し攀ぢ上ぼつてきて、生きた蠢いてゐる鰒と大きな海老を私の足許へ列べた。それから彼はまた着物をつけ、私共はまた山へ上つた。

一九

『たゞこれだけ――鳥居、貝殼、綾織模樣の小蛇、石――を見物に行つたのか？』と讀者はいふかも知れない。

その通りだ。しかし實際私は魅惑を感じさせられたのだ。この場所には、何とも云へない、一種の忘れ難い、竦とするやうな氣分の伴ふ妙趣がある。

この妙趣は珍異な光景のみから生ずるのではない。さまぐ微妙な感覺や思想が織込まれ混じ合つて起るのだ。森や海の心地よい鋭い香、悠々自由に吹く風の、血色を晴れやかにし、元氣を快活にするやうな肌觸り、古びた神祕的な苔蒸せる石像の默々たる哀訴、千歳聖土と稱せらるゝ地を踏むと思へば、油然として湧き起る一種敬虔の念、世々の巡禮の足に踏まれて、形のないまでに磨滅せる岩の階段を見ては、人間的義務として禁じ難さ、信仰に對する同情の感など、一々數へ切れない。

その外、消し難い記憶がある。靄の不思議な幕を隔てて、海を繞らせる眞珠貝の都を初めての眺め。天鵝絨の如く滑かて、跫音の立たぬ、褐色の砂地を越えて、可愛らしい島へ

近づいて行く邊の風吹き渡る入口。青銅の大鳥居の凄い莊嚴さ。輕快な露臺が鋭い影を投げて、風變りて、高い勾配のある、奇怪な檐を有てる町。海風に搖らるゝ、染めた布の暖簾や、謎のやうな文字を書いた旗。奇異な店肆の眞珠光り。

それから、すばらしい日光の印象――神々の國の日光――西洋の夏で見るよりも更に高き太陽。また、海と天日の間に聳ゆる、あの綠色で、神聖な、靜けき島の峯からの壯觀。また、神聖そのものの如く靈的で、光そのまゝに淸く白い雲を有てる空の記憶。また、その雲は實際雲でなくて夢か、或は一種の靑い涅槃に永遠溶け込まんとする菩薩の靈のやうに見えた。

それから、また辨天――美の神、愛の神、雄辯の女神――の奇しき物語。彼女がまた海の女神と稱せらるゝのも當然である。その故は、海こそは語り手のうちで最も古く、最も優れたもの――久遠の詩人、韻律世界を振盪し、宏辭何人も倣ひ難き神祕的讃歌の唱謠者ではないか？

二〇

歸りには別の途を取つた。

暫くの間、道は樹木生ぜる小山の間の、長い狹いうねくした谷の中を曲つて行く。谷は見渡す限り稻田で占めて、空氣は濕つぽい涼しさを帶びてゐる。して、水田の間を通じて築いた凹凸のある道路の上を、人力車ががたつき乍ら走り行くとき、恰も無數の四竹ががちやくする如く、蛙の鳴く聲ばかり聞えた。

右手の森の麓に沿うて進むとき、私の伴侶は車夫に合圖をして停まらせ、彼も車から下りて、綠丘の上に高く棲まつた小寺の青い庇を指した。『日に照され乍ら、そこへ登つて行く骨折り甲斐があるでせうか?』と私が問うた。『さうですとも、あれは鬼子母神――鬼の母――の寺です』

廣い石段の阪を上り、頂上て唐獅子を見、それから寺の立つてゐる小さな境内に入つた。老婦人が、その着物には子供がすがりついたまゝ、隣りの建物から出てきて、私共のために障子を開けてくれた。私共は靴を脫いで寺へ入つた。外觀は古びて陰氣であるが、內

部は全く小綺麗であつた。障子を開放した處から、六月の太陽は光りを注ぎ込んで、神像、提燈、繪畫、金文字、瓔珞など、優美な形の眞鍮製のものや、種々の色彩の品々が、藝術的に入り亂れてゐるのを輝らした。佛壇が三つあつた。

中央の壇の上方に、阿彌陀如來が師尊の態度で、神秘的金蓮の上に坐してゐる。右方の壇には、五つの金色の小段階を有する厨子が光つてゐる。段階毎に、或は坐し或は直立し、女神の如き、又は大名の如き服裝で、男女の小像が列んでゐる。これは三十番神である。下方、壇の正面には勇者が怪物を殺す繪がある。左方の壇上には、鬼子母神の厨子がある。彼女の物語は恐ろしい傳說である。前生に犯せる或る罪のため、彼女は自らの子供を喰殺す鬼と生まれた。が、佛陀の敎に救はれて、聖者となり、專ら嬰兒を愛護するものとなつた。で、日本の母親達は、その兒童のため彼女に祈願を捧げ、また妻達は美麗なる男兒を授かるやうにと祈る。

註。鬼子母神は梵語、ハリーテイー。鬼子母神の一形式を日本にて訶利提母と呼ぶ。

鬼子母神の顏は眉目好き女の顏である。が、その限は凄い。右手に蓮華を持ち、左手には裸の赤兒を衣の折目に包んだのを、半ば蔽へる胸に當てて支へてゐる。厨子の脚部には、

錫杖に倚れる地藏樣が立つてゐる。が、佛壇及び像が寺內の驚くべき特色を成すのではない。全然珍らしく感ぜらるゝのは、寄進品である。厨子の前面に高く、竹竿と竹竿との間に緊かり張つた絲から幾十、否幾百の美麗なる小さな着物――さま〲の色の、日本の赤ん坊の着物が吊るしてある。大抵地質は貧弱だ。貧亡で質朴な女、田舍の貧しい母が、その子供のための祈願を聽入れられた感謝の捧げものなのだから。

して、一枚毎にその欣喜と、苦痛の物語を飾り氣なく物語つてゐる。是等の小さな着物――賤しい母達の柔順忍耐な指端で、形を作られ縫はれた是等の小さな着物は、突然世界的母性愛の啓示の如くに、强い感動を與へた。して、斯やうに信仰と感謝を示した質朴な人々の優しさは、夏の嵐が人の肌を撫てる如く物柔かに、私の身邊に浸み渡つてゐるやうであつた。

戶外の世界が不意に美しくなつたやうに思はれた。日の光りは更に麗はしく、永久の蒼空にさへ新しい魅力が加はつたやうであつた。

二

それから、谷を越えて、本街道に出てた。神社の石段が大道まで下つてきた處に蛇立してゐる鳥居や、漢字を書いた看板や、または名も知れぬ路傍の社祠などの異國的な事物が、折々幻想を破らなかつたならば、英國の田舍道――ケント州か、サレー州の――に居ると思ふ位に、一路坦々として、且つ巨大の老樹が立派に影を差してゐた。

忽然私は路傍に見なれぬ浮彫を施せる像を見付けた。小さな竹の小屋に、彫物をした一列の扁石が保護してある。墓碑かと思つて車を下りて視ると、非常に古くなつて彫物の輪郭は滅び、足は苔で蔽はれ、容貌は半ば消えてゐるが、墓ではなくて、或る神の石像が六體あるのだと分つた。して、私の通辯人は、これは庚申、卽ち道路の神である事を知つた。非常に缺け、また鱗屑に蔽はれて、上部は何とも分らぬやうになり、この神の特徵は磨損して了つてゐる。が、數個の石面には、像の足下に、まだその使者なる三匹の猿の像が讀まれた。して、或る信心深い人が、一つの像の前には些やかな寄進の品――一枚の木片の上に黑い雄鷄と白い雌鷄を畫いたもの――を置いてゐた。餘程以前に捧げたのに相違ない。

木片は殆ど黒くなつて、繪は風雨と鳥糞によつて毀損されてゐる。地藏の像に於ける如く、これらの像の足許には、石も積んでない。この神は廢物の如く久しい間閑却されて、石像は垢の皮だらけだ。この古い神には參詣者が無くなつたのだ。

が、通辯人は云つた。『庚申の神社がこの近くの藤澤村にあります』是非私はそれを訪ねなければならぬ。

二

庚申の神社は、村の中央に位し、本道に面した境内にある。古い木造の祠は、塗つてなく、荒廢してゐて、世に捨てられ、風雨に打たれたものにあり勝な灰色を帶びてゐる。番人を捜してから漸つと、戸を開けることが出來た。こゝには障子でなくて戸がある。古い戸を蝶番ひに依つて回はすとき、眠たげな音が呻りを發した。して、靴を脫ぐに及ばなかつた。床は疊なく、塵に蔽はれて、入つてきた足の慣れぬ重さに軋つて響いた。內部はぼろぼろになつて、腐朽磨滅してゐる。神棚には像はなく、たゞ神道の象徵だけで、みじめな提燈は昔の輝いた色も塵に褪せ、文字も判明しない。金屬製の鏡の圓い枠はあつても、

鏡は無い。何處へ失せて行つたのだらう？番人は『今この社には神官はゐません。鏡は夜間盜まれてはと思つて、かくして置きました』と語つた。私は庚申の像のことを尋ねた。それは六十一年目毎に開帳するので、見る譯にゆかないが、他にまだ庚申の諸像が境内にあるとのことであつた。

私はそれを見るために行つた。街道のと非常によく似たのが、列んでゐた。が、もつと善く保存されてゐた。一個これまで見たのと異つた庚申の像があつた。僧正の冠の如く高い印度風結髮から判斷すると、明かに印度式製作である。三つの目を有し、一つの目は額の中央にあつて、横でなく、縱に開けてゐる。六本の手を有し、一本は猿を支へ、一本は蛇を握り、他の手を以て象徴的のもの――車輪、刀劍、數珠、笏板を捧げてゐる。して、蛇が手首や足首に捲きついて、脚下に天邪鬼、時には『うたてさ』と呼ばるゝ鬼の奇怪なる頭を敷いてゐる。臺座の面には三匹の猿が彫られ、また三重冠の前面にも一匹の猿の顏が現れてゐる。

私はまた庚申の名だけを刻める、幾つかの寄進の石碑を見た。附近の木造の小祠には、地の神、堅牢地神の像があつた。灰色になつてゐて、原始的漠然たる製作で、片手に槍を持ち、片手に何とも識別し難いものを容れた器を持つてゐる。

二三

恐らくは斯道に通ぜざる人々の目には、是等の多頭多手の神佛は、初めは――いつも基督敎的頑迷の目に映ずる通り――たゞ奇怪とのみ見えるだらう。が、一切の宗敎の中に神性を感ずる人に、彼等の意味がわかつてくるときには、彼等は東洋及び東洋思想を毫も解せざる人々が思ひもよらぬほどに强く、一段高尙なる審美主義、精神的美感に訴へ來ることが見出されるだらう。私に取つて千手觀音の像は、彼女の名を有する、如何なる他の人間的な愛らしさを理想化せる像――『無量』、『莊嚴』、『平安』或ひは一片の蓮の花瓣にて作れる紅い舟に乘つて、月の照らす水上を駛せ行く『白い水月』でさへ――にも劣ることなく立派なものと思はれる。して、三重の頭ある釋迦に於ては、私はかの幾つもの太陽が共同して照らす如くに、三世の世界を照らす眞理の偉力を認めて尊敬する。

が、すべての神佛の名と性質を覺えようとするのは無駄である。彼等は自分で增加して來て、恰も硏究者を愚弄するやうに見える。大慈大悲觀音は百觀音として現れ、六地藏は千地藏となる。して、彼等は穿鑿に先んじて增加するから、形が變つてくる。この東洋的

信仰の幻影は、流水よりも多様、複雜、捕捉し難い。その中へ、宛然無底の海中への如く、印度、支那、及び遠東から、神話が續々と落ち込んで吸收されて了つた。して、その深淵を覗き込む西洋人は、アンディーンの物語に於ける如く、波のうねり毎に、或は凄く、或は美しく、或は怖ろしさうな顏の出沒隱見する水流を眺めたやうな氣になる――不可解的に入り替り、入り混じり乍ら、しかも永遠に宇宙萬物を作つては、また作りかへる無限未知力、變幻自在力を表す萬象の海――最も古い無邊の海――の岸に立つたやうに覺える。

譯者註。アンディーンは水の妖精。

二四

庚申の繪を買ふことが出來ないか知らんと、私は思つた。大抵の日本の社寺では、祭神や本尊の小さな畫――安價な、薄い紙に印刷したものが參詣者に賣られる。が、こゝの番人は絕望の身振りを以て、庚申の畫を賣つてゐないことを私に告げた。たゞ庚申を畫いた一幅の古い掛物があるから、見たいならば、歸つて持つてくるとのことであつた。私はそれを依賴した。して、彼は街へ走つて行つた。

彼の歸つてくるのを待ち乍ら、私は猶も續いて憂鬱と欣喜の混じた感を以て、奇異な古い像を調べて見た。古文書學者と考古學者の苦心に賴つてのみ古代の信仰を研究し愛好し、且つ一種自身の經驗からは、天文學的に遠隔なものと考へてゐた人が、突然その信仰が自身の人間的環境の一部となつてゐることを發見し――その神話は老いつゝあるにせよ、自身の周圍に生きてゐることを感ずるのは、殆ど浪漫的作家の夢を實現したことであり、二千年を越えて、今よりも更に幸福であつた世界の生活へ歸つて行く處を味ふことであつた。何となれば、是等の奇異な道路の神や、地の神は磨滅し、苔蒸し、拜む人も稀ではあるが、實際まだ生きてゐるからである。少くともこの刹那、私は眞に舊世界――恐らくは丁度、原始信仰が少々古風じみてきて、新哲學の侵蝕的勢力に徐々と崩される頃の時代に居つた譯なのだ。して、私自身は今猶ほ是等の單純なる古い神々、民族の幼稚時代の神々を愛する異敎徒なのであつた。

是等の飾り氣なき、醜い形の神々に對しては、人間愛の必要がある。美しい神々はそれを佛敎藝術に理想化した女性的優美のため、永遠に生きるだらう。觀音と辨天は永久だ。人間の助を要しない。彼等は堂塔伽藍が、この庚申堂の如くに、人聲も聞えず、僧侶も無くなつた時にも依然として恭敬を博するだらう。が、幾多の惱める心に平安を與へ、幾多

の淳樸なる人々を欣ばしめ、幾多の無邪氣なる祈願を聞入れた是等の親切で、奇怪な、飾り氣なき、朽ちつゝある神々――所謂進歩の法則や、駁し難き進化の哲學がどうであらうとも、私は是等の人生に對して惠み深き神々の壽命を何んなに延ばしたく思ふこと！

番人は掛物を持つて戻つてきた。小さな、塵だらけの、古びて黄ばんだ掛物で、千年も經つたものらしい。が、それを繙いて私は失望した。紙面にはたゞ庚申の普通の畫――輪郭だけのものがあつた。して、それを觀てゐる内に、私は始めて周圍に群集が來てゐることに氣が付いた――野良仕事から來た、親切さうな、日に燒けた顏の百姓共、赤ん坊を脊負つたお母さん達、小學校の子供、車夫などが、皆外人がどうしてこんなに、彼等の拜む神々に興味を感じてゐるのかと、不審がつてゐるのだつた。そして、周圍からの壓度は極めて柔かで、恰も生温るい水が身に當るやうなものであつたが、私は幾分當惑した。私は古い軸を番人に返へし、献金してから、庚申さまと、その善良なる番人に別れを告げた。

すべての親切さうな尻上がりの眼が、私の去るのを見送つた。して、この鏡のない神壇、色褪せた提燈、廢頽せる境内の朽ち行く像を有する、空虚な、塵だらけの、崩壞しかけた社祠と、それから、黄ばんだ軸を手に持ち乍ら、私の後影を見守りつゝある親切な番人を、

私が斯くも遠かに見捨てて去つて行くときに、一種悔恨の情に襲はれた。機關車の汽笛が丁度列車に間に合ふだけ、時間のあることを警告した。それは西洋文明が鐵道網て、すべてこの原始的な平和を征服してゐるからてある。哀れ庚申の神よ、これは汝の道路てはなくなつた！往昔の神々は、西洋文明が石炭の殘灰を撒き散らす路傍て、死に瀕しつゝあるのだ。

第五章　盆市にて

一

丁度午後五時過ぎだ。夕嵐が立つて、私の書齋の開いた戸から吹込んで、卓上の書類を亂し始めた。それから、日本の太陽の白熱光も薄い琥珀色になりかけて、日中の暑さが終はつたことを告げた。碧空に一片の雲もない——この世界中最も清淨靈妙な空には、極めて乾燥の天候に於ても、絹の如き浮滓の幽靈とも見ゆる、美しい白い纖維のやうなものが、いつも浮游してゐるのであるが、今日はそれさへ見えない。

戸の處に不意に影が差した。佛教の青年學生の晃が敷居に立つて、室に入らんとして白い足から草履を脫ぎ、地藏の如く微笑してゐた。

『やあ、今晚は、晃君』

『今夜盆市が開かれますが、御覽になりますか？』と、晃は蓮座の佛陀の如く床に坐つ

て云つた。

『晃君、私はこの國のものは何でも見たいのだ。が、盆市は何んなやうなものです？』晃は答へた。『盆市は死んだ人々のお祭に要る一切の品物を賣る市場です。そのお祭は明晩から始まります。寺々の佛壇、善良な佛教信者の家々の厨子が、皆飾られるのです』

『それでは是非盆市を見たい。また家庭の佛壇をも見たいものだ』

『承知致しました。私の室へお出て下さいませんか？』と晃が聞いた。『それは遠くはありません。石川町を越えて、永久町に近い、老人町です。そこには佛間があります。して、途中で盆供養のことをお話申上げませう』

かやうにして、私は始めてこれから次に書かうとする事どもを教へられた。

二

死んだ人々のお祭——盆祭又は盆供養——西洋人は燈籠の祭とも呼んでゐる——は、七月十三日から十五日に亙つて行はれる。が、毎年二回、それが行はれる地方も澤山ある。といふのは、まだ太陰暦を守る人々は、盆祭は舊暦七月十三、十四、十五日に當るべきだ

と考へてゐる。その日取りは太陽暦では、もつと遅くなるのだ。

十三日の朝早く、祭のため特に編んだ、最も淸らかな稻の莚を佛壇の上や、佛間の中へ敷く。佛間といふのは、信仰を有つ家庭では朝夕そこへ祈を捧げる處だ。厨子と壇とは、また色紙や花や或る種類の神聖な植物の枝で綺麗に裝飾される。蓮華が獲られる場合には、いつも眞の蓮華を飾り、さもなくば、紙製の蓮華や、樒やみそ萩の枝を用ひる。それから、小さな漆塗りの膳――普通日本の食物を載せるもの――が壇前に据ゑられ、食物の獻げものがその上に陳べられる。が、家庭の比較的小さな厨子では、供物は單に新しい蓮の葉に包んで、稻の莚の上に置く方が多い。

是等の供物は、西洋索麪に類する素麪、米を煮た御飯、お團子、茄子、季節の果物――多くは瓜、西瓜、梅や桃などだ。菓子や美味の加はることも毎々だ。時には料理をしない御精進供のこともあるが、煮た食物の御料供のことが普通だ。しかし勿論、魚類獸肉又は酒を含まない。淸水が幽靈の客に捧げられ、また絶えずみそ萩の枝に浸して壇上又は厨子の中に灑がれる。茶も毎時注がれ、一切のものを生きた客に對する如く小皿や、茶碗や鉢に行儀よく盛つて、箸を供へてある。かやうにして三日間、死んだ人々は饗應される。

日沒に當つて、亡靈の訪れ來るのを導くために、各戸の前の地中に差し込んだ松の炬火

に火を點ずる。また盆祭の初めの夜、村や町に近い海邊、湖畔、または河岸に、迎ひ火を點ずることがある。火の數は百八個に限る。この數は佛敎の哲理上、幾分神祕的意義を有する。それから、毎夜戸口には綺麗な提燈が吊られる――盆祭の提燈――特異の色と形を有し、風景花卉などが美しく畫かれて、いつも特別な紙製の吹流しの總を附けて飾つてある。

また、その夜は、死んだ知人の墓へ行つて、供物を捧げ、冥福を祈り、香を焚き、水を献げる。花は墓毎に傍らに備へてある竹筒に活けて置く。して、墓前に提燈を掲げて火を點ずる。しかし是等の提燈には畫がない。

十五日の夕だけ、日沒の頃、施餓鬼といふ式が寺で行はれる。その時、餓鬼道といふ圈内に居る亡靈に食物が供せられる。また死後追善を營んで異れる遺族知人もない亡靈にも、僧侶が食物を供する。神佛へ供へるのと同じく、その供物は極めて分量が少い。

三

佛說盂蘭盆經に載つてゐる施餓鬼の由來は斯うだと晃が語つた。

佛陀の大弟子、大孟健蓮は功績によつて六神通力を得た。その力に因つて餓鬼道にある母の魂を見ることが出來た。そこは前生に犯した罪を贖ふために、亡靈が飢餓に苦しまねばならぬ世界である。孟健蓮は母が甚(いた)く惱んでゐるのを見た。彼は母の苦痛のため大いに悲しんで、最も美味の食物を椀に盛つて、母に送つた。母がそれを食べようとするのが見えた。が、食物を唇まで持ち上げようとする度毎に、それが火と變はり、餘燼となつて、食べることは出來なかつた。そこで、孟健蓮は母の苦しみを救ふ法を佛陀に尋ねた。佛が『七月十五日に、諸國の大僧侶達の亡靈に食物を供へよ』と云つた。孟健蓮がその通りにすると、母は餓鬼の狀態から解放され、欣舞するさまが見えた。これがまた日本中、盆祭の第三日の夜に行はれる盆踊の起源である。

註。同書にまた、孟健蓮の母は、何うして餓鬼道に苦しむやうになつたかと、阿難陀が佛に訊ねた時、佛がそれは彼女が前生にて、食慾のため、或る旅僧に食を施すことを拒んだからであると答へたことが、記してある。

第三日の夜、卽ち最後の夜に、施餓鬼よりも一層哀れて、盆踊よりも更に珍らしい、奇異に美はしい式——お別れの式がある。

生きてゐる人達が、死んだ人々を欣ばせる爲めに盡くし得る、有らん限りのことが、旣に盡くされたのだ。幽冥界の主宰者が、亡靈のこの世を訪れる爲めに許した時間も、殆ど盡きてきたので、遺族友人はそれを見送らねばならない。

亡靈に對して一切の準備が整つてゐる。どこの家にも、麥稈を細かく編んで作つた小舟に、精選した食物、小さな燈籠、信仰と愛の文句を書いたものなどが積んである。舟は二尺より長いことは殆どない。しかし死者には、あまり廣くなくてもよろしい。それから、纎弱な小舟は運河、湖水、海、或ひは河に流される――それ〳〵船首には小燈が輝き、船尾には香が炷かれて、空の晴れた夜には、遠方へまで航路をつゞけて行く。長汀曲浦を下つて、まぼろしの小艦隊は、ちら〳〵光つて海へ行く。して、海は滿目、死人の光りて水平線の際涯まで閃き渡り、海風は香煙で芳ばしい。

が、殘念！今頃は大きな港では精靈舟を流すことを禁ぜられた。

四

老人町は町幅が非常に狹い。手を伸ばすと、兩側の小さな店肆の前に垂れてゐる看板模

様を染拔いた暖簾に、直ぐ觸れるばかりだ。して、是等の箱形の家は、實際玩具の家のやうに見える。晃の住んでゐる家には、店もなく、また小さな二階もなくて、他の家よりも更に小さい。それは全く閉まつてゐた。晃は入口になつてゐる處の木造の雨戸を繰つた。それから、そのつぎに閉まつてゐる障子を開けた。かやうにして開け放された小さな家屋は、輕げな素木の木細工や、著色の紙屛などで、大きな鳥籠のやうに見えた。が、地上から高くしてある床に敷いた葦の疊は、新鮮て、心地よい香を放つて、淸らかてあつた。して、そこへ上がるため靴を脫ぐ時に、私は室內すべて小綺麗なことを見た。

『主婦(おかみ)さんは外出したのてす』と、晃は云つて、室の眞中へ火鉢を据ゑ、その傍に私が坐るため小さな敷物を擴げた。

『これは何てす？』と、私は壁に紐てぶら下がつてゐる薄い板を指して聞いた。それは枝の中央から切つて、兩緣に沿つて樹皮が殘され、その表面には、二列の不思議な記號が美しく描いてある。

『それは曆てす』と、晃が答へた。『右側は三十一日ある月の名、左側は、小さな月の名てす。さあ、こゝに佛壇が御座います』

日本の客間の構造上、是非無くてならぬ凹間に、飛鳥を繪いた簞笥が置いてあつて、そ

の上に佛壇が立つてゐた。それは漆と金泥塗りの小厨子で、寺の門のやうな恰好の小さな戸が附いてゐる。餘程奇異な、非常に破損した厨子で、片方の戸は蝶番ひが失せ、漆には罅隙が入り、金色は褪めてゐても、雅致あるものであつた。晃は一種の憐み深さうな微笑を呈し乍ら、それを開けた。して、私は佛像を見ようと、內を覗いて見た。佛像は一つも無い。たゞ木牌に紙片を張り着けて、假名の文字――死んだ女兒の名――が書いたのと、萎れかかつた花を挿せる花瓶、觀音像の小さな版畫、線香灰の入つた鉢だけがあつた。

『明日、主婦さんは、これを飾つて、小さな佛さんに、食物を供へるでせう』と、晃は云つた。

室の向側に、佛壇に面して、天井から垂れた珍らしく、可愛らしい、をかしげな、白色と紅色を帶びた假面があつた。丸ぽちやの笑ひ顏をして、額の上には二個の神祕的な點が印されてゐる。これはお多福(註)の顏だ。開けた障子から入込む柔かな氣流につれて、ぐるぐる回はる。すると、笑のために半ば閉ぢた可笑しげな黑眼が、私の方を眺める每に、私も微笑を禁じ得なかつた。して、更に高く吊つてあるのは、神道の小さな御幣、神樂の時に被るやうな小さな冠、神々の手に持つ如意寶珠を厚紙で眞似たもの、小さな人形、少しの

風にても回轉する小さな風車、その他、緣日に社寺の境內で賣つてゐるやうな、主もに象徵的な、名狀し難い玩具など、すべて死んだ幼兒の遊び道具であつた。

註。幸運の神。

『今晚は！』と、頗るやさしい聲が私の後から叫んだ。主婦は彼女の佛間に外人が興味を持つのを嬉しがつてゐるかの如く微笑を洩して、そこに立つてゐた。極めて貧しい階級の中年頃の女で、美しくはないが、極めて親切さうな顏をしてゐた。私共は彼女の挨拶に應答をした。して、私が火鉢の前の小さな敷物の上に坐る際、晃が彼に何か囁いたので、すぐに湯を沸かすため、小さな藥罐が焜爐の上に掛けられた。私共は茶を薦められるのであつた。

晃が私に面して火鉢の向側に坐つたとき、私は彼に質ねた。

『位牌に書いてあつたのは何といふ名でした？』

晃は答へた。『あれは眞の名ではありません。本名は裏に書いてあります。死んでから僧侶が別の名を與へます。死んだ男兒は良智童兒、女兒は妙容童女となつてゐます』

私共が話をしてゐると、主婦は佛壇に近寄り、戶を開き、中のものを整頓し、燈明を點

じてから、合掌稽首して祈念を始めた。私共が側に居るのも、喋つて居るのも一向無頓着の様子は、世間の思惑が何うであらうと介意せずに、正しいことと、美はしいことを行ひ馴れた人の如くであつた。彼女の祈りの天晴れ飾り氣の無い誠實さは、世の中の貧しい人々――お互に對しても、天に對しても、決して隱すべき秘密のない淡白な人々、ラスキンが賞賛して『これらの人々こそ世の中で最も神聖だ』と云つた人々のみ有する種類のものであつた。私は彼女の心が如何なる言葉を囁いてゐるかを知らなかつた。たゞ時々靜かに居て息を吸ひ込む、柔かなシュー〳〵響く音を聞くのみであつた。それはこの親切なる國民に取つては、人を悅ばせようとする最も謙遜なる願望を示すのである。

この優しい、些やかな儀式を見守り乍ら、私は私自身の生命の神祕内に、朧ろげ乍ら動いてくる或るものを感じた――漠然と、云ひやうなくも親しみの感ぜられる、先祖傳來の記憶の如く、二千年間忘れられてゐた感覺の復活の如くであつた。それは不思議にも私の微かな古代世界の知識と混じ合つてゐるやうに思はれた。古代世界でも家庭の神として、生前に愛した死人を祭つたのであつた。して、こゝにはラーリーズ[譯者注]が影をさしてゐる如く、この世のものならぬ奇異な優しさがあつた。

譯者註。羅馬の家庭の神。

短い祈念を了へてから、彼女はまた焜爐の方へ向つた。彼女は晃と語つたり、笑つたりして、茶を入れ、小さな湯呑に注いて、私共に薦めた。跪いた優美な姿勢は、六百年來日本婦人が茶を進めるときの傳統的態度であつた。實際、日本の婦人の生活の少からざる部分は、このやうに小さな湯呑で茶を饗するために費されるのだ。幽靈としてさへ、婦人は通俗の版畫の中に茶を薦める有樣に畫いてある。日本の幽靈の畫の中で、私が最も哀れを催ふしたのは、女を殺してから、悔恨に惱まされた人に、その女の幽靈が恭しく跪いて小さな茶椀を薦めてゐる圖であつた！

晃が起ち上つて、『それでは、盆市へ行きませう。主婦さんも、やがて盆市へ買物に出かけねばなりません。それにもう日も暮れかけました。左樣なら！』

私共が小さな家を出かける時は、實際殆ど暗かつた。町筋の上空に連つた星は、細長い天の一片を塗つてゐた。折々生温い微風が吹いて、長く續いた軒頭の暖簾を搖り動かし、散歩によい美しい夜であつた。市場は町外づれの狹い通りにあつた。藏德院の丘の麓て、

僅か十町ばかりを隔てた元町にあつた。

五

奇異な狹い通りは、一筋の長い燈光の火焔であつた――看板提燈や、松明や、洋燈の燈光が、兩側の店先き前に並んだ、小さな臺や小屋掛けの珍らしい列を照らしてゐた。その眞中を群集が動いて行く。下駄の音が商人の叫びや、通行人の潮の如きざわつく聲をも消して、夜の空に響き渡る。しかし、その動作の何といふ穩かさ！押し合ひもなく、亂暴もない。誰人も、どんなにか弱い者も、小さな者も、一切のものを見得る機會がある。して、また見るべきものが澤山あるのだ。

『蓮の花！――蓮の花！』こゝには墓や佛壇に捧げる蓮の花、佛さまの食物を包む蓮の葉を賣る者が居る。葉は疊んだ束を小さな臺の上に積み、花は蕾も花も交ぜて、大きな束に竪に挿したのを、輕い竹の架に凭せてある。

『麻殼！麻殼！』皮を剝いだ長い枝條の白い束。これは麻の木條だ。細い方の端を引裂いて、佛さまの箸に使ひ、その餘は迎ひ火に焚く。箸は松で作るのが當り前であるが、こ

の地方の貧乏人に取つては、あまりに稀少、且つ高價なので、麻殼を代用する。

『かわらけ！かわらけ！』佛さまの土器、釉藥を施さない土器の赤く淺い小さな盤である。原始的の燒物て、今日てはたゞ死人のためにのみ存在してゐる――佛敎よりも更に傳統は古い。

『やあ、盆燈籠は要りませんか？』佛さまの歸つて來る足を照らす燈籠。皆綺麗だ。大寺院の燈籠のやうに六角形のもあり、星の形のもあれば、また大きな光つた卵のやうなのもある。蓮華の立派な繪で飾つたり、また精巧な色の紙の總を垂れたり、或は幅廣い紙の紐に、面白く蓮華の形を切拔いたのを附けてある。それから、月の如く圓い、眞白の燈籠もある。これは墓に用ひる。

『お飾り！お飾り！』盆祭の裝飾品一切を賣る者。『菰ても！何ても！』こゝに佛壇用の新しい、白い、藁の敷物がある。それから、死人が乘るための小さな藁馬、死人のため用役をつとめる小さな藁牛もある。すべて『お安い！』また佛壇に供へる椀と、施餓鬼に水を灌ぐみそはぎの枝もある。

『お飾りものは要りませんか？』米粒を連ねた絲の紅白の總、數珠玉のやうなもの。それから、種々珍らしい紙て作つた、佛間の裝飾品。一束二錢の安物から、一圓の高價品ま

て各種の線香――長い輕いチョコレート色の脆い枝條て、鉛筆の心のやうに細い。一束毎に、金色やその他の色紙の紐て卷いてある。一本を引拔いて、一端に火を點じ、他端を垂直に柔かな灰を盛つた容器に立てる。その薫香が空氣に漲り、全く燃え盡きるまて燻ぶつて行く。

『螢に蟋蟀！お子供衆のお慰み！お安くまけます！』何！これは一體何だ！番小屋の形をした、全部木摺て作れる假小舍を、赤と白の碁盤縞の紙て蔽つてある。この窮屈な建物の中から、湯氣の漏れる音のやうな鋭い叫びが發する。『それはたゞ虫類てす。盆祭には關係ありません』と、晃は云つた。左樣、虫類だ！籠に入れてある！鋭い叫び聲は一匹づつ小さな竹籠に入れた、綠色の大きな蟋蟀が幾十も鳴くからだ。晃は續けて、『これは茄子と瓜の皮を食べさせて、飼つてゐます。子供の弄ぶために賣るのてす』といつた。また螢の充ちた美麗なる小籠もあつた。その籠には褐色の蚊帳綱を張つて、簡單てはあるが、派手な色て綺麗な意匠が、筆勢よく畫いてあつた。蟋蟀一匹と、籠を合せて二錢。螢十五匹と籠共に五錢。

こゝには町の一隅に、靑い着物をきた少年が低い木卓の後ろに坐つて、マッチ箱ほどの大いさて、赤い紙の蝶番ひを附けた木箱を賣つてゐる。卓上に此小箱の堆積と並んて、淺

い皿に淸水が滿されて、非常に薄い扁平狀のもの――花鳥樹木小舟男女などの形――が浮んでゐる。箱の直段はたゞ二錢である。開いてみると、內には一端は石竹色で、圓いマッチの軸木のやうな、小さな青白い木條の束が、薄葉に卷いたのがある。一本を水に投ずると、忽然開けて蓮華の形に擴がる。今一本のは魚に變はる。第三は小舟になる。第四は鳥に、第五は葉と花に蔽はれた茶樹になつた……是等のものは頗る纖細なので、一度水に浸してから手を觸れると、壞はれてしまふ。海草で作つてあるのだ。

『造花！造花は要りませんか？』造花を賣つてゐる。紙製の驚嘆すべき菊花や蓮の花など、蕾も葉も花も餘りに巧妙に出來上がつてゐるので、眼で見ただけでは、美しい手管を看破し得ない。これに對する生きた眞物よりも、造花の方が更に高價であるのは、尤もな次第だ。

六

商人の群集と喧囂と無數の燈火の上に高く立ち、輝ける町の終端にある眞言宗の大寺院が、其丘の上から星空の中へ夢の如く凄く聳えてゐる。その彎曲した屋根に沿うて吊るさ

れた提燈のために異樣に光つてゐるのだ。して、人込みの流れが私をその方へ運んで行つた。參詣者の群集の頭や肩と思はれる、徐々と動いて行く黑い塊團の上へ、寺の廣い入口から、一幅の黃色な光が射してゐる。まだ唐獅子に護られた石段に達しない內に、私は寺の銅鑼が絕間なく響くのを聞いた。それは一度每に賽錢と祈念の信號である。貨幣の雨が大きな賽錢櫃に注ぎ込むに相違ない。今夜は靈魂の醫者、藥師如來の緣日なのだ。たうとう石段まで運ばれてきた私は、群集の押合ふにも係らず、暫らく立停まることが出來た。それは私が見た內で最も美しい燈籠を賣つてゐる臺の前であつた。紙で作つた大きな蓮華の形の燈籠で、微細の點に至るまで、全くよく出來て、大きな生きた花を新しく引拔いてきたやうであつた。花瓣は底の方が紅く、先端に至るに從つて白い。蕚は瑕瑾なき自然の擬似て、下方に綺麗な紙片の總が垂れてゐる。總は花と同じ花で、蕚の直下は綠、中部は白、末端は紅てある。花の中心に粘土燒の豆洋燈が置かれて、火を點ずると、花が滿面明かるく、透き通つてくる。——紅白の火の蓮華だ。これを掛けるために金色に塗つた、細い木製の輪が附屬してゐる。しかも代價は四錢！驚くばかり物價の低廉なこの國とは云へ、こんな品を四錢で製造して、どうして暮らして行けるだらうか？

光は明晩點火される百八の迎ひ火のことを、少しく私に話さうとした。それは百八煩惱と譬喩的の關係がある。しかし、藥師如來の堂へ上つてくる、參詣者の下駄と駒下駄の響のために、晃の言葉は聞取れない。貧民の輕い草履や草鞋は音を發しない。大きながちやがちやいふ響は實際、女や娘の優しい足のためだ。彼等は騷がしく響く下駄の上に身を託して、用意深く平衡を取つて歩く。して、その小さな足には大抵、白蓮の如く白く、淸らかな足袋を穿いてゐる。多くの青い着物をきた小さな母達が、綺麗な穩かな赤ん坊を脊負つて、辛抱强く微笑を湛へながら、佛陀の山へと上つてくる。

して、私は彩色せる提燈の光によつて、溫和な騷がしい人々と一緒になつて、大きな石段を上り、更に他の蓮華を並べたり、造花を高く生墻の如く積んだ間を通つて逍遙し乍ら、私の心は不意に、あの貧しい主婦の室の、小さな破れた佛壇に戻つて行つて、その前に吊るした賤しい玩具と、笑ひつゝ廻轉するお多福の面を思つた。私はお多福の眼の如く斜めに切れて、光澤ある影に蔽はれた、幸福らしく、可笑しげな小さな眼が、常にその玩具を眺めてゐたことを目のあたり見るやうに思つた。この世に生まれ出ててから、まだ新鮮な兒童の感覺は、私が漠然としか想像し得ない、一種祖先からの遺傳的な妙味快趣を、

その玩具に見出したことであらう。丁度今夜のやうな生溫かな明かるい夜、丁度このやうな平和な群集の中を、必ず幾度も運ばれたであらうやうに、あのかよわい小兒が細い手て母の頸に柔かくすがり乍ら、運ばれてゐるのが目に見える如くであつた。

何處にか、この群集の中に彼女――あの母はゐるのだ。彼女は今夜再び小さな手の微かな接觸を感ずるだらう。しかし、以前のやうに背後を振り向いて見たり、笑つたりしないだらう。

第六章　盆踊

一

山を越えて、古代の神國、出雲へ行く。太平洋から日本海へ、強い車夫に車を曳かせて、四日間の旅。何故といふに、私共は最も人の通らぬ、最も遠い道[譯者註]を取つたから。

譯者註。山陽道から中國山脈を越えて山陰道へ行く從來の道筋は、行先に從つて姬路、岡山、尾道・廣島をそれぞれ起點とする。ヘルン先生は岡山より津山へ入り、それから鳥取街道へ出でて、更に轉じて松江へ向はれたのである。

この長い道筋の大部分は、谷閒を通じてゐる。道が上つて行くと、谷は更に高い谷に續いて、兩側の山と山に挾まれた稻の田は、堤坡を築いた高臺を連ねて傾斜が昇つて、大きな綠色の階段の如く見える。谷の上には、松や杉の薄暗い森があつて、森に蔽はれた絕巓

の上には、藍色の遠山がぬつと聳えて、灰色な水蒸氣の瘠せた影法師が、またその上に浮いてゐる。空氣は生濕るくて風が無い。遠方は細かい霞が、紗を張つてゐる。して、この極めて優美な青空、私が從來見た如何なる空よりも高いやうに私の目に映ずる。この日本の空には、毎日たゞ僅かの纖絲の如き、幽靈の如き、透明な、白いぶら〳〵迷つてゐるものがあるのみだ。雲の精ともいふべきものが、風に乘つてゐるのだ。

道が昇つて行くにつれ、折々稻の田の無くなることがある。大麥、藍、燕麥、綿などの畠が暫くの間、道路に沿つて續く。それから、道はまた森の影へ突入する。何よりも時々路傍にある杉の森は驚異だ。熱帶以外では、私は未だ濃密と垂直の、これと比較すべき森を見たことがない。幹は一本々々柱の如く眞直で露骨だ。前面全體は、高く聳えた青白い柱の無限な集合が、うす暗い簇葉の雲の中へ沒してゐる觀を呈する。頭上を仰ぎ見れば、暗中に消え失せる枝の外には、何も識別されぬほど、葉が繁つてゐる。して、青白い樹幹の柵に折々開いた隙間から向うを見ると、奥は夜の黑さで、ドーレー[譯者註]の樅の森の畫のやうだ。

もはや大きな町は無い。たゞ山隈に巣籠つた草葺き家の村ばかりだ。村毎に、佛敎の寺

譯者註　ドーレーは十九世紀後半期の佛國畫家。

が灰青色の瓦を疊んだ、彎曲せる屋根を、茅屋の群がる上から現し、また、神道の社祠の前には、石又は木で造つた一大文字のやうな鳥居が立つてゐる。しかし、佛教の方がまだ優勢だ。山の頂上には寺があつて、佛陀や菩薩の像が、里程標の如く精確に路傍に立つてゐる。往々、村の寺が非常に大きいので、周圍の農民の小舍が納屋のやうだ。かゝる賤しい村で、何うして、かほど費用のかかる祈願の堂宇が支へて行けるだらうかと、旅人は不思議に思はざるを得ない。また到る處に優しい信仰の象徴が見える。その經文や記號が岩の面に刻んである。その聖像は路傍の蔭から微笑んでゐる。加之、時には山水の恰好までも、信仰の靈によつて形成されたやうで、丘陵が祈りの如く柔かに昇つてゐる處もある。或る山の絕頂は釋迦の頭の如く圓屋根形をなして、そこに生ぜる黑い盛り上つた葉狀體は、釋迦の捲毛の叢とも見えた。

が、日を經て、私共が次第に西の方の奥へ入るに從つて、段々と寺が減じて來た。私共が通り過ぎて行く邊の寺は、小さくて、貧乏らしく、路傍の佛像は稀になつた。しかし、神道の象徵が次第に多くなり、宮の構造も大きく高くなつた。それから、鳥居が到る處に見えて、一層高く聳えた。村の入口や、奇怪な石造の獅子と狐によつて守護された境内の入口や、神聖な森の薄明かりの奥に鎮座する、寂びた社祠へ、老松古杉の繁つた間を通じ

行く苔蒸す石段の前などに、いつも鳥居が立つてゐた。

ある一小村で、大きな神社の鳥居をくゞつた處に、特異な小祠があつたので、好奇心に驅られて、それを探討させざるを得なかつた。鎖された戸の前には、澤山の短い瘤の多い杖、卽ち小型の棍棒が立てかけてあつた。晃が大膽にもそれを取除け、戸を開けて、私に內部を見せた。たゞ面――天狗の面があるのみであつた。巨大な鼻を有し、何とも云へなく怪奇て、私はそれを眺めたことを悔いた。

棒は献納の品である。それを宮へ寄進すると、天狗が敵を擊退して吳れると信ぜられてゐる。すべて日本の繪畫彫刻では、惡鬼の形に現してあるけれども、天狗樣は低級の神なので、擊劍並びに一切武道の守護神である。

それから、また他の變化も次第に明白になつた。晃は最早土地の人の言葉を理解し得ないと不平をこぼした。私共は方言の地域を通過してゐるのだ。家屋の作り方もまた日本の東北部の田舍と異つてゐる。高い藁葺屋根には、屋背の棟木に平行して、一尺ほど高めた竹の柱に、藁束を附けて、珍異な飾が施してある。百姓の皮膚の色も東北部に於けるよりは黑い。また東京附近の女に見るやうな美しい薔薇色の顏は見られなくなつた。百姓の帽子も變つてゐる。奇妙にも庵笠と呼ばれて、路傍の小さな庵寺の藁屋根の如く尖つてゐる。

天氣が暖か過ぎるので、着物が重苦しくなつた。小さな村を通るときに、私は健康さうな、さつぱりした裸體を澤山見受けた。綺麗な裸の子供や、腰に一枚の柔かな狹い白布を纒つたまゝて、疊敷の床の上に寢てゐる褐色の大人や少年を見た。微風を入れるため、家の障子は悉皆外づしてある。男子の體格は輕やかに軟靱らしく、筋肉には角が立たないで、輪郭はいつも滑かだ。大抵何れの家の前にも、小さな藁莚の上に藍を擴げて、日光に乾してあつた。

田舍の人達は驚異の目を張つて、外人を注視した。私共が立佇つたいろ〳〵の所で、老人が近寄つてきて、私の衣服に手を觸れては、恭しく敬禮したり、人懷かしい微笑を浮べたりして、彼等の極めて天眞爛漫たる好奇心に對する詫びを表した。また私の通辯人に向つて、さま〴〵の奇異な質問を發した。これほど溫和て、親切な顏を私は未だ見たことがなかつた。して、その顏は裏面の精神を反映してゐた。一聲も怒りの言葉を聞かなかつたし、また一つの不親切な擧動をも目擊しなかつた。

旅行して進むほどに、毎日々々土地の景色が美しくなつた——火山國にのみ見出される、あの變幻奇怪な風景美なのだ。暗い松や杉の森、この遠く微かな夢の如き空、柔かな白い

光線を除けば、この途中、私は再び西印度にゐて、ドミニカ島や、マルチニーク島の峯巒を、迂餘曲折して登つて行くやうに想像した場合があつた。また實際、私は地平線のかなたに棕櫚樹や木綿の形を探し求めたこともあつた。が、森の下の谷や傾斜面の一層輝ける綠色は、若い篠のそれではなく、稻の田のそれであつた。農家の庭園位な、小さな稻の田が、何千といふほど狹い迂曲した堤坡で、互に界をして連つてゐた。

二

山脈の眞中で、稻の田を見下ろした絕壁の緣に沿つて車が駛せ行くとき、私は道路の上へ張出てた崖の凹所に小祠を發見した。祠の兩側と傾斜せる屋根は、扁平な天然石をそのまゝ用ひたのであつた。祠內には粗末に彫つた馬頭觀音の像があつて、その前に野草の花束、素燒の線香立、ばら／＼に撒いた米粒などが捧げてあつた。奇異な名が示すいとは異つて、この觀音の像は、馬の頭を有しないで、馬の頭が觀音の冠毳に彫つてある　して、この象徵の意は、祠側に立てられた大きな卒塔婆に、『馬頭觀世音菩薩、牛馬菩提繁榮』と書いてある文字で充分說明された。馬頭觀音は百姓の牛や馬を保護する。それで百姓は

その唖者たる奴隷が、單に病氣に罹らないやう觀音に祈るばかりで無く、更にまた死後牛馬の魂が一層幸福な境遇に入るやう祈るのだ。卒塔婆の側に四尺四方ほどの木造の枠が立つてゐて、それには澤山の小さな松板の札が相並んで、一枚の滑かな面をなしてゐた。何百も列んだ、是等の木札の上に、像と祠堂のために醵金した人々の名が書かれて、その人數は一萬人と發表してあつた。しかし全部の費用は拾圓を越さないだらうから、銘々の寄附者が一厘より多くは出さなかつたらうと私は推量する。何故といふに、百姓[註]は非常に貧乏だから。

註。百姓といふ言葉を作つてゐる二個の漢字の「百」と「姓」から推して、それは『彼等の名は大軍團である』（無數といふも可なり）といふ英語の成句に殆ど等しいだらうと論じたくなる。そして、ある日本人の友は、この推論は左ほど誤つてゐないと斷言した。昔、百姓は姓を有たなかつた。銘銘自分の個人的名稱に、その所有者又は支配者たる領主の名を添へて名乘つたのであつた。だから或る一つの領内に於ける百人の貧農は、すべて彼等の領主の名を帶びてゐた。

譯者註。大軍團とは昔、羅馬に三千乃至六千人といふ多數を以て一團を編成せる軍隊があつたので、一集團で數の多いものを表すため、右のやうな成句がある。

かゝる人里遠く淋しい山中で、その小祠を見出したことは、嬉しく安全の思を起させた。

牛馬の亡魂のために祈るほど優しい心を有つた人民からは、たしかに親切の外、何をも期待し得られないだらう。

註。この動物の魂のため祈る習慣は、必ずしも一般ではない。しかし、私は西部日本の諸國でかやうな祈願の述べられた家畜の葬式を幾つも見た。いづれの場合にも、土を埋めてから、線香を墓の上に立て、火を點じ、祈りが囁き聲で繰返された。東京の友人は、私に次の珍らしい報告を送つてくれた。『東京の回向院では、動物の位牌の預けられたのに對しては、其菩提のため、毎朝祈りが捧げられる。料金三十錢を納めると、すべて小さな愛養の動物を寺院境内へ葬つて貰ひ、また簡短の式を營んで貰ふことが出來る』屹度、同様の寺が他にもあるだらう。人間に取つて啞の友人であり、啞の奴僕であるものに對して、苟も愛情を感じ得る人々は、是等の優美なる習慣を嘲笑することは出來ない。

私共が急に傾斜を下るとき、車夫があまり突然に、一方へ逸れたので私は喫驚した。何故と云へば、道が數百尺の深谷を見おろす處であつたからだ。車夫の行爲は、單に道を横切つて進んでゐた無害の蛇を傷めないためであつた。蛇もあまり人を怖れないで、道の縁に達してから、頭を轉じて私共を見送つてゐた。

三

さて、すべての稻田に奇異な形のものが見え出した。私は到る處に、白羽の矢の如きものが熟しかけた稻の穗の上に突出てゝゐるのを見た。祈禱の矢！私は一本を引拔いて調べて見た。莖は薄い竹で、その長さの三分の一ほど下まで割つてある。その裂け目の間へ、一枚の文字を書いた、强い白紙――御符――を挿んで、それから、裂けた部分を合はせ、上の方で結んである。少し遠くから眺めると、全體恰も長く、輕い、しつかり羽を附けた矢の觀を呈する。初めに調べたのには、『湯淺神社講全村中安全』と書いてあつた。次には『美保神社諸願成就御祈禱修行』とあつた。私が進んで行く處、どこにも綠の田の上にちら〳〵する白い祈禱の矢が見えて、段々數が增してきた。眼の達する限り、それが散布してゐるので、靑々たる一面の野に、白い花が點々たるやうであつた。

また時としては、小さな田の周圍に、竹竿を連ねた一種の魔法的な柵があつた。竿と竿は長い繩を支へて、繩からは一定の間隔を置いて、總の如き長い藁と、御幣が垂れてゐる。これは神道の神聖な象徵の注連繩である。これを繞らした尊い地域内へは、いかなる害蟲

も入らない。いかに焦がすやうな日も若芽を凋らせない。して、白い矢が光つてゐる處では、蝗が繁殖しないし、餓ゑた鳥も害をしない。

が、今や佛像は、探しても見當らなくなつた。大きな寺、釋迦、阿彌陀、大日如來は最早無い！菩薩さへ後方に殘されてしまつた。觀音とその神聖な緣戚も見えなくなつた。道路の神なる庚申はまだ私共の傍にゐた。しかし、それは名が變つて神道の神となつてゐる。こゝでは猿田彦尊なのだ。して、それは尊の使者なる、三匹の神祕な猿の像てのみ表現されてゐる——

見猿は、兩手で眼を蔽つて、惡を見ざる。

きか猿は、兩手で耳を蔽つて、惡を聽かざる。

言は猿は、兩手で口を蔽つて、惡を云はざる。

しかし、否！唯一つの菩薩が、この魔力的神道の雰圍氣の裡にも生きのこつてゐる。依然路傍に、餘程の間隔を置いて、死兒の可愛らしい伴侶なる地藏樣の像があつた。が、地藏もまた少々變化してゐる。六地藏[註]の彫像に於て、地藏は立つた姿でなく、蓮華に坐して現されてゐる。して、私は東方の國々に於ける如く、その前に積み上げられた小石を見なかつた。

註。何故に五又は三或は他の數でなくて、六地藏であるかと、讀者は質問を發するだらう。私自身も幾たびも聽いてみた。恐らくは次の傳說が最も滿足すべき說明を與へるだらう――

大乘法師恐行念佛傳といふ書によれば、地藏菩薩は既に一萬劫を重ねた女であつて、六趣四生の一切有情を敎化しようとの念願を起した。彼女は不可思議力によつて、其身を分かつて、同時に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣界に現れて、そこに住めるものどもを救濟した。(これを成就するためには、地藏は初めに先づ人間となつたに相違ないと、或る友人は主張した)

地藏の多くの名、假へば「不休息地藏」「讚龍地藏」「金剛悲地藏」「放火王地藏」などの中に、「無畏地藏」といふ意義深き稱號がある。

四

たうとう大きな隆起の崖から、道が急に下つて、高く尖つた藁葺の屋根や、綠苔の生えた軒の連る通景の中へ出てきた――廣重の浮世繪の中にあるやうな村、廣重の風景に誠によくも似た色彩を有する村。これは伯耆の國、上市(かみいち)だ。

私共は靜かな、薄黑い小さな宿の前で停つた。非常に年老いた亭主が出てて迎へた。すると、無言て溫和な村民が、大概は子供と婦人であるが、外人を見たり、不思議がつたり、

または內氣な微笑を帶びた好奇心で、着物に觸つたりするため、車の周圍に集まつた。私は宿屋の老主人の顏を一目見ただけで、彼の案內に應ずることに決めた。私は明日までここに留まらねばならぬ。車夫があまりに疲れてゐるから、今夜はこれより先きへ行けない。

小さな宿は、外見は風雨に古びてゐたが、室內は心地よかつた。その磨いた階段や緣側は淸らかで、鏡面の如くに女中の素足を映した。その明るい室は、始めて疊を敷いた時の如くに、新鮮で、よい香がしてゐた。私の室の床柱は、黑い良材に花と葉が彫られて、驚歎すべきものであつた。床に懸つてゐる掛物の畫は、幸福の神なる布袋が、舟に乘り夢のやうな流れを下つて、朦朧神祕な暮色蒼然裡へ去つて行く、一個の田園詩であつた。この小部落はあらゆる藝術的中心から遠く隔つてゐるけれども、この家には日本人の形象に關する美感を示さないものは、一つも見られない。金色花模樣の古い漆器、驚くべき菓子器、透通つた陶器の酒杯に、跳つた小海老を一匹、金色で現したもの、靑銅製茶托の、蓮の葉が捲れた形をしたもの、また龍や雲の模樣ある鐵瓶、唐獅子の頭の形をした、取手の附いた眞鍮の火鉢などが、眼を欣ばし、空想を驚かせた。實際、今日、日本の到る處で、陶器でも、金屬製品でも、全然妙味のない、平凡で、醜いものに接した場合には、その嫌なものは外國の影響の下に作られたのだと大抵決定してもよろしい。しかし、私は今こゝでは

舊日本の中にゐるのだ。多分いかなる歐洲人の眼も、未だこれ等のものを眺めたことはかいだらう。

心臟形の窓が庭に向つて覗いてゐる。小さな立派な庭園で、小さな池と小型の橋と矮樹があつて、茶椀に畫いてある風景に似てゐる。また岡より二三の恰好のよい石と、寺の境內にあるやうな優美な燈籠もある。して、是等の景物を越えて、暑い薄暮の中に、愛する亡靈の訪問を迎へるため、各戶の前に吊られた、盆燈籠の彩色を帶びた燈光が見えた。何故となれば、この古風な土地で、今猶用ひてゐる舊暦によると、今夜が盆祭の初めてあつた。

私が泊まつたすべての他の田舍の小村に於ける如く、こゝの人民が私に對する親切と慇懃は、想像し難く、名狀し難いほどで、他の國には存在しない。日本に於ても內地にのみ見らるゝものであつた。彼等の質朴な丁寧さは技巧ではない。彼等の親切さは絕對に無意識の親切である。二つとも本心から來るのだ。して、私がこれらの人々と交はつて、二時間もたたない內に、彼等の私に對する待遇と、かゝる親切に酬いることは到底不可能だといふ考がそれに加つて、途方も無い願が私の心中に起つた。是等の愉快な人々が、ある豫想外の邪曲、驚くべき惡事、獰猛に不親切なことを私に加へて吳れたい。さうすればこの

人々と袂を別つのを惜しく思ふことはなくなるだらう。私は去つて行くや否や、殘念に感じ出すにきまつてゐるから。

老主人が私を湯殿へ案內して、私を子供扱ひに主人自から强ひて、私を洗つてくれた間に、主婦は米、卵、野菜、菓子などの旨い小さな、御馳走を私のために調理した。私が二人前ほど食べた後でも、彼女は私に滿足を與へなかつたかといふことをひどく氣にして、もつと澤山料理を作りかねたことを大いに詫びた。

彼女は『今日は十三日て、盆祭の初めの日て御座いますから、魚がありません。十三日、十四日、十五日には誰も精進致します。十六日の朝は、漁師が漁に出かけますので、兩親とも生きてゐる人は、魚を食べてもよろしいのです。しかし、片親のない人は、十六日ても食べられません』と云つた。

善良な主婦が、かやうな說明をしてゐる際、私は戶外から奇異な遠い音が聞えてくるのに氣が付いた。私は熱帶地方の舞踏の記憶によつて、それは拍子を取つて手を打つ音だと悟つた。が、この拍く音は頗る柔かで、また間が長かつた。して、もつと間を置いて、寺の大きな太鼓を叩く音の重げな、包んだやうな洞音が響いた。

『是非見物に行きませう』と、晃が呼んだ。『これは盆踊てす。こんな盆踊は都會ては

見られませんよ。これは昔の踊、そのまゝです。こゝは習慣が變つてゐませんが、都會では一切變化してゐますから』

そこで私はたゞ周圍の人々と同樣に、すべて日本の宿屋で男の客に貸してくれる、輕い、寛袖の夏服——浴衣——だけを着けて、急いで外へ出た。が、かやうに輕い衣をきても、非常に暑いので、私は少々汗を流してゐた。して、夜は美しかつた——靜かで、晴れて、歐洲の夜よりも廣やかで、大きな白い月は、彎曲した軒や、突出した破風や、ゆつたりした服を着けた日本人の面白い形などの影を投じてゐた。宿の主人の孫に當る少年が、紅色の提燈を携へて道案内をした。下駄の朗かなころ〳〵といふ響が町内に一杯であつた。踊を見るため、私共の行く方へ澤山の人々が行くのであつた。

霎時私共は本通りについて進んだ。それから、二軒の家の間の狹い通路を越えると、滿面月光の漲つた廣場に出た。これが踊場であつた。しかし、踊は一時停んでゐた。あたりを見廻はすと、私共の居る處は、古い佛寺の境內であつた。寺の建物はそのまゝ殘つて、星の光に低い、長い、瘠せた影を見せてゐるが、內部は空虛で暗黑、俗用に供せられて、校舍になつてゐるとのことであつた。僧侶は去り、大きな鐘も失せ、佛陀や菩薩は無くなつて、たゞ月の下で、閉ぢた目許に微笑を含める、手の損はれた石地藏だけに寺の名殘を

留めてゐた。
境内の中央には、竹の枠に大きな太鼓が載せられ、その周邊に、學校から持出した長椅子を並べて、村の人々が憩んでゐた。ある莊嚴なことを豫期するかのやうに、低く語り合ふ聲の囂音や、折々は小兒の泣聲、娘達の柔かな笑聲が聞えた。して、境内から遙か奥の方、薄黒い常盤木の低い墻の彼方に、私は柔かな白い燈火と無數の丈高い灰色の形のものが長い影を投じてゐるのを見た。して、私は燈火は唯だ墓所にのみ吊される白い燈籠て、灰色の形は墓であることがわかつた。
不意に一人の娘が立上つて、大きな太鼓を一回叩いた。これが盆踊の合圖てあつた。

五

寺の蔭から踊手の列が月光の中へ繰り出して、また突然止まつた。すべて若い女や娘て、銘々最上の服を着飾つて、一番丈の高いのが先頭に立ち、それから身長の順に續いて、十歳乃至十二歳の小娘が、行列の殿を承つてゐる。彼等は鳥の如く輕さうに身體の平衡を支へて、何となく或る古代の花瓶の周圍に繪かれた形狀の夢を想起させる。膝の邊に緊然纏

り附いてゐる、あの美しい日本の着物は、もし奇怪な大きく垂れ下つた袖と、着物を緊める珍らしい、幅の廣い帶がなかつたならば、ギリシャ或はエトルリヤの藝術家の畫に基いて意匠を凝らしたものと思はれるだらう。それから、太鼓が今一回鳴つてから、演藝が始まつた。言葉では寫し難く、想像も及ばない、夢幻的なもの――舞踊であり、驚異であつた。

皆一齊に草履を地面から揚げないで、右足を一歩前へ滑らせる。して、不思議な浮いたやうな動作と微笑を帶びた、神祕的な敬禮をし乍ら、兩手を右へ伸ばす。次に右足を後へ引く。兩手を振ることと、神祕な辭儀とを繰り返へす。次に皆左足を前へ進め、半分左へ向き乍ら、先きの動作を繰返へす。それから、一回輕く手を同時に揃へて拍つて、すべて二歩前へ滑つて出る。して、最初の動作が右と左へ交互に繰返されて、すべての草履を穿いた足は一齊に滑り、すべてのしなやかな手は揃つて動き、すべての柔軟な身體は同時に前へ屈んで、同時に一方へ傾く。して、極めて徐々と、奇異にも行列が大きな圓に變つて、月の照つた境內と、聲を忍んだ見物人の群をぐる〳〵廻はつて行く。

註。本篇を書いてから後、私は日本の諸方で盆踊を見たが、これと全然同一種類の踊を見たことがない。實際、私は出雲、隱岐、鳥取、伯耆、備後、その他の處に於ける私の經驗からして、盆踊は場所が異れば

必ず踊り方を異にするものと判斷したい。只單に動作身振が地方に隨つて變ずるだけでなく、歌はれる歌の調子までも相違してくる——このことは文句が同一でもさうだ。或る處では調子が遲くて、莊嚴であるし、ある處では急速で、陽氣で、また奇異な、急にひねるやうな、名狀し難い調子を特徵とする。が、何處でも動作と曲調は珍らしく、心地よくて、數時間でも見物人を魅する力がある。たしかに是等の原始的舞踏は藝者の所作よりも遙かに興味が多い。佛敎はこれを利用し、またこれに影響を及ぼしたであらうが、これは疑もなく佛敎よりは非常に古い。

して、いつも白い手は、交互に行列の輪の內側と外側に於て、掌を或は上に向け、或は下に向け、恰も魔法を仕組むかの如く、一齊に蜿蜒たる波動を打たせて搖れる。して、すべての小鬼のやうな袖は、翼の作る陰影の如く薄暗く、同時に翺翔する。して、すべての足は非常に複雜な拍子の動作を以て、揃つて平衡を取る。注視してゐると、催眠術を被つたやうな——水が流れたり、閃いたりするのを注視しようと努力する際のやうな感を覺える。

　また、この催眠的魅力は死んだやうな靜肅のために强められる。誰も物を言はない。見物人さへ默々としてゐる。柔かく手を拍く音の長い合間には、樹間に喧しい蟋蟀の聲と、輕く砂塵を攪きあげる草履のしゆう〳〵いふ音だけ聽える。これは何に譬へられるだらう

かと、私は自問を發した。一つもこれに譬へられるものは無い。が、夢に飛んでゐると思ひ、歩き乍ら夢みてゐる夢遊病者の空想を幾分暗示する。

して、私は邈乎たる古代、未だこの東洋生活の記錄なき初期、不可思議な、薄暗い神代に屬するもの——數へ難き年月の間、その意味の忘れられたる象徵的動作を眺めてゐるのだといふ考が、私に起つてきた。しかし、光景はます〳〵現實を離れたものに見えて行つて、無言の微笑と沈默の稽首は、恰も無形の見物人へ對して敬禮を捧げる趣があつた。そして、私がもし一つの囁きを發すれば、一切悉皆消滅し了つて、その跡には、たゞ灰色な頽廢せる境内と、淋しげな寺、それから、今私がこれ等の踊手の顏に見るのと同じ神祕的な微笑を、いつも湛へつゝある地藏の壞はれた像だけ殘りはしないだらうかと疑つた。

行列の輪の眞中て、旋轉する月の下に立つた私は、魔法の圓内に入つてゐる人の感があつた。實際それは恍惚魅惑であつた。私は不思議な手振りや、拍子を取つて、滑るやうな足の運びや、就中驚くべき袖の輕搖飛舞によつて魂を奪はれたのであつた。熱帶地方の大きな蝙蝠が飛ぶ如く、幽靈の如く音はなく、天鵝絨の如く滑かであつた。否、私が夢みたことのある何物も、これに譬へ得られるものは無い。私の背後にある古い墓場、その燈籠の人を招くやうな凄い光り、この時刻と場所の恐ろしげな信仰などを意識して、私は幽靈

に襲はれてゐるといふ、何とも名狀し難い、ちく／＼痛むやうな感じの徐々に迫まるを覺えた。しかし、否！是等の優美な、無言て、搖れて、輕く動いてゐる姿は、今夜白い火を點じて迎へられた冥途から來た人々てはないのだ。忽然、鳥の呼び聲のやうな、美はしく朗かな顫動に滿ちた一曲の歌が、ある娘らしい口から迸つた。すると、五十人の柔かな聲が、それに和した。

揃うた、揃ひました、踊り子が揃うた、揃ひ着て來た、晴れ浴衣。

再びまた蟋蟀の喧しい聲、足のしゆう／＼いふ音、穩かな、手を拍つ響に戻つた。して、搖れ動く舞踏は沈默の中に、催眠的緩除を以て、進んで行く――奇異な優美さは、その無邪氣のために、周圍の山々の如く古いもののやうに思はれた。

彼方に、白い燈籠のある灰色の墓石の下に、長い世紀間に亙つて眠れる人々、その親達、そのまた親達、それより久しき以前の、今ては墓も忘れられた時代の人々も、必ずこのやうな光景を眺めたことだらう。否、それどころか、是等の若い足て攪きまぜらるゝ砂塵は、人間の生命てあつたのだ。して、今夜の月と同じ月の下て、足と足を織り交はし、手を振り合つて、このやうに微笑し、このやうに歌つたのだ。

突然深い男聲の歌が靜けさを破つた。二人の大男が踊りの輪に加つてきて、音頭を取つた。兩人とも殆ど裸體で、若い、立派な體格の山間の百姓だ。頭も肩も群を拔いて聳えてゐる。着物を圍めて腰の邊に帶の如くに廻はし、赤銅色の兩手と胴を露はしたまゝで、その外には大きな藁帽を被り、また祭のため特に白足袋を穿いてゐるのみだ。これまで私は未だこの邊の人民の中で、かやうな男、かやうな筋肉を見たことがない。それでも彼等の微笑せる髯のない顏は、日本の子供のそれのやうに可愛らしく、親切さうだ。兩人は兄弟らしく、體格も、動作も、聲の音色も非常によく似てゐた。

野でも、山でも、子は生み置けよ、
千兩藏(くら)より子は寶。

と兩人は聲を揃へて歌つた。

すると、子供の亡靈を愛する地藏樣が、ひつそりした場所の向うから微笑してゐた。眞に大自然の靈に近い靈を持つた人々だ。彼等の思想は、妻達が祈願を掛ける鬼子母神の崇拜の如くに、無邪氣で可憐なものだ。それから、沈默の後に、女達の美しく細い聲が答へた。

思ふ男に、添はさぬ親は、
親で御座らぬ、子の敵。

かやうに、歌が歌につゞいた。踊りの列の圓形は、段々大きくなつた。して、知らぬ間に時刻は過ぎ去つて、月輪は徐々と夜の青い坂を轉下して行つた。

低くて深味のある洞音が、不意に境内に轟き渡つた。ある寺の深い鐘の音が、十二時を報ずるのであつた。卽座に魔術は了つた。物の音に、不思議な夢が、破れたやうであつた。歌は止んだ。踊りの輪は忽ち解けて、わつと起る樂しい笑聲となり、賑かな話聲となり、やさしい母音で花の名――娘達の名――が連呼され、『左樣なら！』の別れの叫びが交はされてから、踊り子も見物人も一樣に、家路に向つて、下駄のころ〳〵を響かせた。

して、群集と共に動いて行つてゐる私は、突然睡眠から醒まされた人が感ずる困惑のやうな、面白からぬ氣分であつた。今私の側を、騷々しい小さな下駄を履いて、ちよこ〳〵進んで、外國人の私の顏を一瞥しようと步を早めて行く、これらの銀のやうな笑聲を發する人達は、僅か少刻前には、古代美の空影、妖術の迷想、愉快なる幻像であつた。それがかやうに全くの田舍娘に形態化したのに對して、私は漠然たる憤懣を感じたのであつた。

六

寢床に就いてから、私はその簡單な農民の合唱によつて喚起された、奇異な感情の理由を自ら問ふて見た。奇怪な合間や、短音を有するかの歌曲を思ひ起すことは全然不可能であつた。鳥の囀りを記憶に留めようとするやうなものだ。それでも、その形容し難い妙味は、まだ彷彿として殘つてゐた。

歐洲の旋律は、私共が發表することの出來る感情を、私共の心に呼び起す。それは私共の背後のあらゆる年代から傳つて來て、國語の如くに親しみのある感情だ。が、西洋の旋律の如何なるものにも、徹頭徹尾類似してない原始的な歌に因つて喚起さるゝ情緒を、どうして說明しようか？西洋の音樂語の文字である譜音で、書くことさへ不可能なのだ。して、その情緒——それは何だ？私には分らぬ。が、私の身よりは無限に古い〳〵ものだと、私には感ぜられる——只單に或る特定の一時處に屬するものではなく、大宇宙の太陽の下、到る處のあらゆる生物の苦樂に共鳴するものだと思ふ。それから、また私は、かの歌が、敎へず、求めずしておのづから大自然の最も古い歌と調和してゐること、荒野の

音樂――かの偉大なる地上の美しき叫びに混じて、その一部を成す、夏季の生物のすべての顫聲と、無意識に縁戚たることに、最奥の祕密は存するでは無いかと思ふ。

第七章　神國の首都――松江

一

松江で朝の夢を破る最初の物音は、丁度耳底で緩やかな大きな脈が搏つやうに響いてくる。それは太い柔かな鈍い衝撃の音だ――その規則正しさと、その掩ひかくしたやうな深い音と、その聞えるといふよりは寧ろ感ぜられるやうに、枕元から搖れてくる點からは、心臟の鼓動に似てゐる。それは單に米搗の太い杵の音なのだ。杵は一種の巨大なる木槌で、長さ約十五尺の柄が樞軸の上に水平に載せてある。米搗の男は柄の一端を强く踏んで、杵を擡げる。それから、足を放せば、杵はその重量によつて米の臼の中へ落ちる。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の生活に伴ふあらゆる音響の中で、私には最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏だ。

それから禪刹洞光寺の大きな鐘が、洞然と響渡つて、市の上空を撼がせる。續いて私の

宿に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋しげな音が晨の勤行を告げる。最後には、早く出掛けた行商人の物賣の聲。『大根やい！蕪菁や、蕪菁！』『薪や、薪や！』——炭火を燃やすための、小さな細い薪木の片を賣る女の悲しげな聲。

譯者註。松江に來られた最初、先生は末次本町字榛取町の富田屋といふ旅館に宿つて居られた。富田屋から一町ばかり東北に横藥師の地藏堂といふのがある。本章の松江の記事は、富田屋滯在時代から始つて、やがて先生が家を構へられた頃までの見聞記である。世界を放浪し來つて、こゝで始めて家庭生活の人となつて持たれた家は、末次本町、織原氏の離座敷で、宍道湖を見渡して景色のよい處であつた。その家は以前には縣令の宅となつてゐたこともあつた。後には中學校の寄宿舍にも用ひられた。最後に皆美館に合併されたが、燒失の後、その跡には現在該旅館の一部、東端の諸室が建つてゐる。

二

明方のこんな物音に醒されて、私は二階の障子を開け、河畔の庭から、伸びた春の若葉の軟かな綠の雲越しに、朝景色を眺めやる。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わなゝくやうに、萬象を映寫して、微かに光つてゐる。この川は宍道湖に向つて

口を開け、湖は右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。私のすぐ對岸には、靑く白塗してある日本の家屋は、戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうだ。夜は明けたが、日はまだ出ないから。

幽靈のやうに捕捉し難く、戀愛のやうに深い早朝の色が、睡眠の如くふんわりした水煙に浸つてゐたのが、拔け出てて、明かに蒸氣となつて騰つて行く奇觀絕景！遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長く渡つてゐる――星雲狀の長帶だ。それは讀者が、日本の昔の繪本に見る通りであつた。實際の現象を眺めたことがないと、繪本の景色も、畫工が奇を衒つたとのみ思はれたらう。山といふ山の裾を、この霞が蔽うてゐる。して、高い峯のいろ〳〵の高さの處で、際涯知れぬ長さの紗のやうに橫に延びてゐる（この妙な有樣を日本人は『棚引く』と名ける）だから、湖水は實際よりも遙かに大きく見え、而して眞の湖でなく、昧爽の空と同じ色で、且つ空と入り交つた、美しい幻の海となつて見える。山山の嶺は、霧に浮んだ島嶼となり、夢のやうな一帶の丘陵は、果てしのない堤道かと怪まれる――巧妙優美な混沌界だ。霧が立ち上がるにつれて、絕間なくその趣はゆる〳〵變幻を極める。旭日の黃色な縁が見えてくると、今までのよりは更に強く細やかな光線――分光鏡の紫と靑貝色――が水面を射す。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある、ペン

キを塗らぬ高い建物の正面は、その木地の色が、美しい靄の色のために、蒸氣の立つ黄金色へと變はる。

朝日の方へ向くと、澤山橋杭が並ぶ木造の橋のかなた、長い大橋川の方に、高い後甲板のある一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。私はこんな奇異な恰好で、美しい船を見た例がない——正にこれ蓬萊の夢だ。霞のために何とも云へなく醇化されてゐる。船の精だ。が、この幽靈は雲と同様に光線を受けてゐるので、一見半透明な、黄金の霧で出來た一個の實體となつて、薄青い光の中に懸つてゐる。

三

さて、今度は庭先の川端から、手を拍つ音が起つてくる——一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮ぎられて見えない。しかし、對岸の埠頭の石段を下りる男や女が見える。銘々帶に小さな青い手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。白色の長い高い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる、遠くにある、輕

い優美な、而して新月の如く彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色した東雲の空を拜んでゐるのだ。最早拍手の數が増加して、殆ど鋭い音の連發となつた。それは人々が今皆、朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからだ。『いとも貴き、日の造主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗はしくなし玉ふことを謝し奉る』言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人々の衷心だ。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築大社へ向つてもさうする。顔を東西南北へつぎ〳〵に向けて、群神の名を低聲微唱する者さへ隨分ある。天照大神を拜した後で、一畑山の高峯を眺めて、盲人の眼を開き玉ふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、佛教の儀式に隨つて、掌を合はせ乍ら、輕く擦るのもある。しかし日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も古風な神道の祈の文句を唱へる。『拂ひ玉へ、浄め玉へと神忌たみ』

佛教渡來前に勢力を有した最古の神々、して、今も猶、その神々の本來の國なる此處——豐葦原の國の出雲——では稜威依然たる神々。混沌界と原始の海と世界開闢期の諸神——長い奇異な名を帶びた群神、最初の泥土の主なる宇比地邇神、最初の砂土の女神なる須比智邇神など。それから後の諸神——力と美の神、世界創造の神、山や島の造主、卽ち天

津日嗣と稱せらるゝ歴代天皇の先祖。日本國中三千の神、高天原にまします八百萬の神々、これ等の神々へ祈を捧げる。

四

『ほー、け、けう！』

私の鶯がいよ〱眼を醒まして、朝の祈を唱へた。讀者は鶯を知らないだらうか？それは神聖な小鳥で、佛教の信仰を告白する。一切の鶯は遥乎たる古代から佛教を名乘つてゐて、皆悉く世人に經文の貴さを說法する。

『ほー、け、けう！』

日本語では法華經、梵語でサダルマ・プンダリカ。日蓮宗の聖典法華經である。私の小さな、翼を持つた佛教信者の信仰の告白は頗る簡單だ。たゞ神聖な名を再三連禱（リタニー）の如くに繰返へしては、合間に、滑かな囀り聲を轉ばせる。

『ほー、け、けう！』

たゞこれだけの句だ。が、その歌ひやうの美しさ！いかにも悠然、惚れ〲と有頂天に

なつて、その美妙至極な一音一音を玩味しつゝ歌ふ。

經に書いてある。『この經を持ち、讀み、教へ、又は寫す者は、必ず眼の八百善徳を得て、三界を見渡して、下は阿鼻喚地獄に到り、上は宇宙の際涯までに及ぶ。耳の千二百善徳を得て、三界一切――神、鬼、惡魔、人間以外の者までも――の諸音を聽く』

『ほー、け、けう！』

簡單の一語である。が、經にかう書いてある。『この經より唯一語なりとも欣んで受くる人は、その功徳は四十萬阿僧企耶（アサンケーヤ）（譯者注一）世界の一切の者に、すべて幸福に必要なるものを供するよりも無限に大なるべし』

『ほー、け、けう！』

いつも彼はそれを歌つた後と、彼の歡喜の囀り聲――鳥の讚歌――を放つ前に、敬虔なる少刻の休みをする。初めに囀りの聲、次に約五秒の休憩、それから神聖なる名の緩い、美しい、莊嚴な唱聲を、冥想的驚異の裡にゐるやうな音調で發する。次にまた歇んで、更にまた盛に豐富熱烈なる囀聲を發する。讀者がもし彼を見たならば、何うしてかゝる細い咽喉から、かくも強く鋭いソプラノが迸り出てるだらうと驚くだらう。何故となれば、彼は歌ひ鳥の中では最も小さなものの一つだから。しかも、彼の歌は遙かに廣い河を越えて

も聞えるので、通學の子供が一町も離れた橋の上で、毎日それを聽くため立佇まる。それから、彼の形姿は貧弱なものだ。淡然たる色を帶びた小さな體は、檜の木で造つた大きな箱の鳥籠の中で、殆ど見え難いほどだ。籠の針金格子の小窓の上には、紙を蔽うてある。暗いのが好きだから。

彼は纖弱で、また殆ど暴虐的までに氣むづかしい性質である。食事は一切細かに碎いて、秤で重さを量つて、毎日精確に同時刻に給與せねばならない。たゞ生かして置くだけにも、有らん限りの注意を要する。けれども、彼は貴重なものだ。遠い處を探がし、隅々を求めて漸つと得らるゝ稀有な高價のものだ。實際、私の力では買ふことは出來なかつたらう。日本の最良なる淑女の一人なる、出雲の知事の令孃[譯者註二]が、外人教師が一寸した病氣の間、淋しく感ずるだらうと思つて、この珍奇な小鳥を見舞品として贈つてくれたのだ。

譯者註一。阿僧企耶又は阿僧祇（劫）は無數を意味す。

譯者註二。縣知事籠手田安定氏令孃を指す。

五

手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始まり出だす。から〳〵と下駄の音が、漸次高く響いてくる。大橋の上で下駄の鳴る音は、何うしても忘れられない――遠くて、陽氣で、音樂的で、盛んな舞踏の音のやうだ。實際また舞踏だ。みんなが爪先で歩んで行く。朝日の射した橋上を通る數へきれぬ人の足が、ちら〳〵するのは驚くべき光景だ。その足は皆細くて、恰好が均勢を得て、希臘の古甕に描いた人物の足のやうに輕やかて、して、足を運ぶとき、指を先きに下ろす。實際下駄では外に仕様がない――それは踵は下駄にも着かねば、地にも着かないし、足は楔形の木の臺を前に傾けては進むのだから。單に一足の下駄の上に立つだけでも、慣れぬ者に取つては困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄を履いて、拇指と他の四本の指の間に挾んだる前緒だけて足に固定させて、全速力を出して駈けて行く。しかも躓きもしないし、下駄もまた外づれない。更に珍らしいのは、大人が木履で歩行く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は木製長椅子の漆塗りの標本かと思はれるほどだ。それでも、そのものを履いた人は、全

く何も足に着けてゐないかのやうに、樂々と濶步する。

やがて學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の驅るとき、綺麗な素白の着物の濶い袖が波動すると、大きな蝶が羽搏をするやうに見える。親船は白色や黄色の大きな翼を擴げるし、埠頭の側で、夜中睡つてゐた小蒸氣船は煙筒から煙を吐き始める。

對岸の埠頭に繋げる湖水通ひの小蒸氣船が、今しもその汽笛を開いて、最も異樣な、耳を劈くやうに猛烈な叫聲を發した。その聲を聞くと、誰も笑ふ。他の小蒸氣船は、皆たゞ悲しげな吼音を發するのみてある。この船に限つて――反對派の會社の新造船で、近頃進水したもの――最も激しい敵意と挑戰を表した音を立てる。善良なる松江の人々は、始めてその音を聞いたとき、狼丸といふ適當な新名を附して、それを言ひ觸らした。

六

極めて珍異な小さな物が、今徐々と河に浮んで下つてくる。私は讀者が恐らくは想像がつきまいと思ふ。

佛と仁慈の神が貧民階級の日本人に拜せられる唯一の神ではない。惡の神、少くともそ

の幾つかに向つて、或る場合には程よく和解を求める。して、その神が救ひ難き災害を加へないで、唯一時的の不幸を施すに止め給ふときには、御禮の献納品をする。（要するに、これは西印度諸島で、大暴風のため二萬二千人の生命が滅ぼされた後、颶風季の終りになつて感謝祭を營むのと同じい道理だ）だから、疫病の神、風邪の神、疱瘡の神、その他種種の惡神に祈禱を捧げることがある。

さて、ある人が疱瘡から回復の見込充分になつた場合、疱瘡の神に御馳走を捧げる。また狐に憑かれた場合、狐が立退くと誓つたならば、お狐樣に御馳走を捧げる。三度藁、卽ち米俵の一端を塞ぐため用ひる藁の小さな席の上に、土器を載せる。土器には稻荷樣と疱瘡の神が、非常に好いてゐると云はれる赤豆飯を盛る。御幣をつけた小さな竹條を、藁席か、赤豆飯の中に挿しておく。して、御幣の色は赤でなくてはならぬ。（他の神々の御幣はいつも白いことを注意せねばならぬ）それから、この献品を樹木に懸けたり、または回復した人の家から、可なり隔てた川へ流す。これを神流しといふ。

註。『災をなす神に對しては、その怒を和らげることを求めて、神怒に觸れた者が、罰を受けぬやうにすべきである』これは神道の大家平田篤胤の語である。『純粹なる神道の復興』と題するサトウ氏の論文に見えた。

七

鐵柱の長い、白い橋は如何にも近代式である。實際この春盛大な開通式を擧げたばかりだ。極く古い習慣によれば、新橋の落成した場合、界隈での一番果報者が渡初めをする。それで松江の役所で搜し出したのは、二名の高齢者であつた。二人とも妻を持つてから半世紀以上にもなるし、十二人も子を有つて、それが一人も缺けてゐなかつた。この老人達が妻女共を伴れ、後からは成人した子や孫や曾孫が附隨つて、渡初めをした。歡呼の聲がどよめき、煙火が揚げられ、祝砲が鳴つたのであつた。

しかし古い橋は、水の上に礡形に架かつて、數多き橋柱に支へられ、無害な種類の長肢の百足虫のやうで、今度の新しい橋梁よりも遙かに美觀であつた。三百年間も儼然と河に跨り、且つ獨特の傳說を有つてゐた。

慶長時代に出雲の大名となつた堀尾吉晴が、始めてこの河口へ橋を架けようとした時、大工が幾ら骨折つても駄目であつた。柱を支へる堅固な河底が無いやうであつた。澤山巨石を投げ込んで見たが、何の甲斐も無かつた。晝間の作業は夜の間に流されたり、丸呑み

にのみこまれたからである。しかし畢竟、橋は架つた。が、直ぐに柱が沈み出した。それから洪水のために半數も柱が流された。修復をすれば、また壞はれる。そこて人身御供をして、水神の怒を宥めることとなつた。水流の最も意地悪い、中央の柱の根元へ、一人の男を生きながらに埋めた。それから橋は三百年間びくとも動かなかつた。

犧牲になつた男は、雜賀町に住んでゐた源助といふ者であつた。それはまちのない袴を着けて橋を渡る者があれば、それを埋めることに決めてあつた。すると、まちのない袴を穿いてゐた源助が、渡らうとしたので、犧牲になつた。その譯で、最中央の橋柱は源助柱と名が附いてゐた。月の出ない宵には——いつも二時から三時までの深更に——その柱の邊を鬼火が飛んださうである。して、諸外國に於けると同じく、幽靈の火は日本に於ても大概青いものと聞いてゐるが、この火の色は赤てあつたさうだ。

註。まちは袴の腰に縫ひつけた厚紙、又はその他の材料の堅い片で、袴の折目を正しくするためのものである。

八

或人の說によると、源助は人の名でなく、年號の名を訛つたのだといふ。が、この傳說は非常に深く信ぜられてゐて、この新橋の建築中、幾千の田舍者が市へ出るのを怖れてゐた。といふのは、新しい犧牲が必要で、田舍者からそれを選ぶといふこと、また依然昔風を守つて髷に結つてゐるものから選ぶといふことの噂が起つたからである。それが爲めに數百の老人が髷を切り捨てた。すると、また初日に新しい橋を通行するものの內で、千人目のものを捉へて、源助のやうに處する旨、警察に祕密の命令が下つてゐるといふ噂が傳はつた。て、いつも百姓で賑ふ稻荷祭にも、今年はあまり人出が無かつた。して、この地方の商賣に取つては、數千圓の損失だといふことであつた。

九

河霧が消えると、湖上半哩足らずの沖に浮べる美しい小島が、際立つて現れた――低い、

幅の狹い、一帶の地面で、數株の大きな松の蔭に祠がある。松は西洋のと異つて、巨大な、節だらけの、むしやくしやした、捩ぢくれた恰好をして、年古りた樫の木のやうに、枝を張つて聳えてゐる。望遠鏡で見ると、よく鳥居がわかる。鳥居の前に石で刻んだ二個の唐獅子がある。一個の頭は取れてゐるが、いつかの大嵐の際、顚倒して大波に撲られたのに相違ない。この島は辯舌と美貌の女神、辨財天の靈地であるから、辨天島と名が附いてゐるが、普通は傳說に因んで嫁ヶ島と呼んでゐる。この島は、溺死した女の骸を載せて、湖水の底から一夜の中に、音も立てずに夢の如く湧上つたのだ。その女は非常に美しい、信心深い女で、しかも頗る薄命な身の上であつた。土地の人々は、何か神慮のあることと思つて、この島を辨財天に寄進し奉つて、祠宇を造營し、鳥居を建て、島の周圍には、大きな妙な形をした石で、壁を築いて固めた。して、こゝへその溺死した佳人を葬つたのである。

客は今や見渡す限り靑々と、春風は肌を撫でてくれる。私は奇異な古い都會の中へ、逍遙に出てて行く。

一〇

大概の家の引戸の上や、玄關のすぐ上に、漢字を書いた長方形の白紙が貼りつけてあるのが、私の目につく。それから、どこの入口にも吊つてあるのは、神道の尊い象徴で、細い藁繩に數條の莖の長い總がぶら下つてゐる。白紙の方が立ろに私の興味を惹く。それはお札であつて、私はその熱誠なる蒐集者なのだ。大抵松江の市内や、郊外の神社佛閣から頒布したものである。佛教のお札は、その文句によつて、その家の宗旨が讀まれる――それは、こゝの社會に於ては、誰人も最も優勢、且つ淵源古き神道を信ずると同時に、また佛教の或る宗派にも屬してゐるからだ。日本の表意文字を全然知らぬ人でも、一見して日蓮宗の法式は識別が出來る――一行の文字に、鋭い鋒先きが密立し、小銘旗が鋸齒の如く附いてゐて、軍勢の如き形を呈してゐる。書かれた文字は、有名な南無妙法蓮華經といふ經句で、その昔、西班牙から入つた耶蘇教を退治した人で、ゼズイット教徒からは、名譽なことにも、呪詛を受けた、かの加藤清正が、その軍旗に記してゐたのは、この經句である。この宗派の巡禮者は、この種のお札が貼つてある家へ訪ねて、布施を受ける權利があ

る。

しかしお札の大多數は神道だ。殆ど何處の戸の上にも、一枚特に目立つのがある。文字の行の下に二匹の小狐が描いてあるからだ。一匹は黑、今一匹は白、相對坐してゐて、普通に見受けらるゝ象徴的な鍵ではなく、これは藁束を口に啣へてゐる。このお札は、城内に鎭座せる御城山の稻荷神社の火災除けの呪符なのだ。實際これらのお札が、從來松江に於ては、唯一の防火設備だ——少くとも木造家屋に關しては。而して火花程の火にも大風が伴へば、一日で更に大きな都會さへ拭ひ去るのは何でもないが、松江には大火事の例がなく、また小火事さへ稀である。

この呪魘の御利益は松江の市街だけに限る。して、この稻荷に就ては、こんな傳說がある——

家康公の曾孫直政公、この國を領せんとて、始めて松江へ御入城の折、一美少年御前に出でて言上しけるは、われは殿の御身を護らんため、越前に在ます殿の御父君の許より罷出たる者なるが、住所を得ずして普門院に滯留す。若しわがために御城内に住所を設け玉はば、御城内の諸建築と市中の家屋、並にまた江戸表の御屋敷を護り火難を防ぎ奉らむ。われは稻荷新右衞門にて候へばと。斯く言ひて少年は消え失せぬ。公則ち祠を立ててこ

れを祀り玉ひ、今猶境内に存す。石造の狐一千匹、社祠を繞れり。

二

私は今狹い小さな町へ歩を轉ずる。矮小な二階建の家々が、土地から生えたもののやうな觀を呈するほど、古い町ではあるが、名は新材木町と呼ぶ。百五十年前にこそ、材木が新らしかつたらうが、今では灰のやうにくすんだ色を帶びた造作といひ、また日本の屋根にしげる天鵞絨のやうな草や苔の、黃や赤がかつた柔かな綠色で、筋が立つたり、斑紋が出來たり、緣がとれたりして、毛皮の褐色をしてゐる古い草葺といひ、是等の建物の色合は、畫家を恍惚たらしむるだらうと思はれる。

が、町の頽廢した家屋の部分々々よりも、更に驚くべき光景が、遠景の額枠の中に收まつて見える。屋根よりも高く聳え、町の兩側に並列した竹の高い柱から柱へ渡して、非常に黑い網が擴げられてゐるのが、沖天に向つて巨大な蜘蛛網を張つたやうである。日本の神話や、昔の繪草紙にある蜘蛛の妖怪を忽然思出させる。しかしこれは絹絲で作つた漁網であつて、こゝは漁師町である。私は更に大橋の方へ向ふ。

譯者註。これは春期、白魚を漁するための網。

一二

素晴らしい妖精！

大橋から東に向つて、眼界の線を鋭く齒のやうに刻める、綠や青の美しい山々を見渡すと、かなたにぬつと偉大な怪物が沖天に聳えてゐる。下の方は遠霞に沒して、宛然空の方から形が出來始まつた如くに見える――下は薄鼠色、上は虛空の白さ、夢のやうに淡い不盡の雪を戴いた圓錐形の幻影――是は大山の雄峯。

冬になると、一夜の中に麓から頂上まで眞白くなる。すると、倒まに懸る半開の白扇に詩人が譬へた富士の靈山に彷彿するので、出雲富士の名がある。しかしこの山は出雲でなく、伯耆の國にある。尤も伯耆に於ては、出雲から眺望するほど、恰好よく見えない。これがこの優美な土地に於ける唯一の雄大な光景だ。但し晴れた日和にのみ見える。この山には不思議な傳說が澤山ある。して、神祕な頂上には、天狗が住んでゐると信ぜられてゐる。

一三

大橋を渡り盡すと、小蒸氣船の着く埠頭の近所に、極小さな地藏堂がある。こゝに唐金の曳綱が澤山藏してある。溺死者の死骸が揚らないとき、これを借りて川を曳く。死骸が見附かると、新しい綱を寄進せねばならぬ。

こゝから南へ半哩の間、學問と手習の神なる天滿宮へまで、天神町が延びてゐる。これは富商の町で、兩側の家々に紺暖簾が垂れて、白く染め拔いた屋號や看板の妙な文字が、湖水から吹く風毎に波動してゐる。廣い通をずつと向うへ、電柱の長い列が、白い遠景の中に小さくなつて行く。

天神の社を越えてから、市はまた新土手川によつて區分されてゐる。この川に天神橋が架つてゐる。橋から向うの方に、また市街區域が丘陵の下まで伸び、且つ湖岸に沿つて曲つてゐる。しかし大橋川と新土手川に挾まれた部分が、市の最も富んだ、且つ繁華な區域であつて、澤山寺院の集つた所もある。この島になつてゐる區に、また劇場もあれば、角力場もあるし、遊樂の場所も大抵こゝにある。

天神町と並行に寺町が走つてゐる。この町の東側には寺院がずらりと並んでゐる――瓦を戴ける御所風の土塀で固めた表側に、一定の間隔を置いては、堂々人を驚かすやうな山門がある。この長く續いた塀の上へ高く聳えてゐるのは、立派な反を打つた、重々しい輪郭をしてゐる灰青色の屋根である。こゝでは凡ての宗派が仲よくして隣合つてゐる――日蓮宗、眞言宗、禪宗、天台宗、それから眞宗までも。眞宗は神さまを拜ませないので、出雲ではあまり行はれない。寺の境内の後には墓地があつて、その東にまた他の寺々があり、その先きにもまたある――佛教建築の集團が、小園細屋と交つて、廢巷斷路の迷宮をなしてゐる。

今日も寺院を訪ねたり、金の後光を負うて金蓮華の蕚中に安坐せる古い佛像を眺めたり、珍らしい御守を買つたり、墓地の彫像を調べたりして、例の通り數時間を有益に費した。墓地では來てみる價値のある、夢をみてゐるやうな觀音や、微笑を含んだ地藏を殆どいつも發見する。

寺の廣い境内は、大昔から子供の遊び場であるから、民衆の生活を視ようと思ふ人には、興味深い場所である。代々世々幸福な幼兒が、そこで面白く遊んだものである。天氣のよい日には、每朝乳母がやつてくる。弟妹をおんぶした娘がくる。澤山の子供が加はる。而

して奇異な面白い遊戯をする。――鬼ごつこ、蔭鬼、目くさんごつこなど。また、夏の長い夕方には、こゝは角力場となつて、角力の好きなものは勝手に入つて來るので、土俵場を築いた處もある。元氣な若い勞働者や、筋肉逞しい職人などが、一日の仕事がすんでから、力を試めしにこゝへ來る。現今有名な角力取で、こゝて初土俵の名を揚げたものが一人ならずある。若者が自分の土地て、他の者に皆勝ちうる力量を示すと、今度は他地方の優勝者から挑戰を受ける。それに勝つた擧句には、技倆ある專門の人氣角力になれるのである。

踊の催や、演說會もまた寺の境內でする。緣日にはまた極く珍しい玩具が賣られる――多くは宗教的の意味を持つてゐる。こゝには大きな老木もあり、人馴れた魚の滿ちた池もある。人影が水に落ちると、魚は餌を貰はうとして頭を擡げる。貴い蓮がその池に植わつてゐる。

『泥中に生ずれども、淸らかなる花はその汚れに染まず。かくて誘惑の中にありても、心常に淸き人は蓮に譬へらる。されば蓮は佛具に刻まれ、或は畫かる。また釋迦如來の形を現すには必らず之を用ふ。極樂に行く者は金の蓮の蕚に安坐せん』(ある生徒の英作文より)

喇叭の音が奇異な町を通つて響く。すると、最後の寺の角を曲つて、一隊の若い立派な銃兵が行進してくる。佛國の輕裝步兵に稍似た制服を着て、四人宛よく揃つて並んで、ゲートルをつけた脚が、すべて單獨の身體に附いてゐるやうである。列がぐるりとこちらへ廻るときに、一本一本の銃劍が皆同一の角度をなして日光に映ずる。これは師範學校の生徒が每日の兵式操練をするのである。師範の先生は細胞組織の分離、スペクトラム分析、色覺の發達、グリスリン浸劑にバクテリヤを培養することなどに就て講義をする。しかし、生徒はそんな近代的知識があるからとて、決して謙遜な武士風の態度を失はないし、又封建時代の思想に陶冶された彼等の親しい老父母に對する恭敬を減じはしない。

一四

一隊の巡禮者がやつてくる。黃色な藁の蓑をきて、松蕈の狀をした大きな黃色な藁の笠を被つて、下方へ曲つた笠の緣が半ば顏を隱してる。皆金剛杖を突いてゐる。下肢を自由にするため、着物を十分捲くり上げて居る。下肢は一種名狀し難い恰好の白木綿の脚絆で包んである。數世紀前にも、この種の服裝をこの種の旅人が着てゐたのである。而して、

今この全家相携へて漂浪し、子供は父の手に縋りながら、彼等が列をなして過ぎるのを諸君が見る通りに、百年も經た日本の繪本の色褪せた紙面に、彼等が奇異な列をなして通るのを諸君は見るてせう。

折々彼等は店頭に立止つて、珍しい物どもを眺める。眺めるのは面白いが、買ふ金錢はない。

私は驚異すべき事實や、面白いとか、並外づれたとかの光景に接し慣れたので、もし別段變つたことの起らぬ日には、何となく不滿足を感ずるほどである。――しかし、そんな空虛の日は稀である。それは私の場合ては、天氣があまり惡くて、外出の出來ない日に限る。その譯はいつも極く僅の金錢で、珍品異物を眺める快樂が得られるからである。この快樂は昔から長い間の日本に於て、一般人民の主要な快樂の一となつてをつた。それは國民が代々珍奇な物を作り、又求めることに一生を過ごしたからである。實際面白く娯んでくらすといふのが、赤ん坊時代に驚嘆の眼を開くから始まつて、日本人の一生涯の主眼であると思はれる。人々の顏に靜と甚へ忍んで期待するやうな、一種の何ともいへない樣子がある。――何か面白いものが出てくるのを待つてゐるやうな風情。もし出て來ねば旅行して求める。彼等は驚くべき健脚で倦むことを知らざる巡禮者である。そして神々を尋ば

せると同様に、立派な珍らしい物を見て、自ら樂むために巡禮に出るのだと私は思ふ。それは神社佛閣は皆一個の博物館である。して、國中の山といふ山、谷といふ谷には社寺や奇觀があるからである。

自作の米さへ食べられぬ極貧の農夫でも、一ヶ月ほどの巡禮が出來る。稻にまだ左程世話の要らない季節中、數千の貧乏百姓が巡禮に出掛ける。これは、昔から誰でも少しづゝ巡禮者を助けるのが、習慣となつてゐるから、出來得るのだ。で、彼等は巡禮者ばかりを泊めて、單に彼等の食物を煮る薪の代だけを求める、木賃宿といふ特別の宿に就て、雨露を凌ぎ安眠を得ることが出來る。

が、澤山の貧民共は、一ヶ月以上、更に長い時日のかかる巡禮、例へば三十三ヶ所の觀音へ、又は八十八ヶ所の弘法大師へ巡禮に廻はる。それらは多くの月日を要するのであるが、それでも、日蓮宗の大袈裟な千ヶ寺巡禮に比べると、何でも無い。それには二三十年かかることもある。若い頃から始めて、青春が疾くの昔に過ぎてから、やつと終はることもある。しかし松江に男や女の中に幾名も、この素晴らしい巡禮を成就して、日本全國を見物し、しかも單に乞食をしたばかりでなく、一種の行商を營みつゝ、旅費を拂つて行つたものがある。

この巡禮を行はんとするものは、御厨子の形の小さな箱を肩に負つて、その中へ襯衣の衣類と食料を貯へておく。彼はまた小さな兵鈴の銅鐸を持ち、町や村を通る折、絶えず南無妙法蓮華經と誦へながら、それを鳴らして行く。彼はまた一卷白紙の書册を携帶し、それに彼が訪問する寺々の僧が、朱色の寺印を捺す。巡禮が終はつてから、この千ヶ寺の印譜は、當人の家に取つて、代々の什物となる。

一五

私もまた種々巡禮をせねばならぬ。それはこの市の周圍に、湖水の向ひに、或は山を越えて、非常に古い神聖な場所があるから。

杵築大社、――『底津石根に宮柱ふとしり、高天の原に氷木たかしりて』古代の神によつて建てられた、聖所中の至聖所――その祭司は太陽の女神から系統を引いたと云はれる場處。それから一畑の寺、盲者に明を與へ玉ふ藥師如來の有名な堂――その高い山の上へは　六百四十の石段を踏んで、達せられる一畑藥師。それから、清水寺、千年來、壇前の神聖なる火が絶えず燃えてゐる、十一面觀音の寺。それから神聖な蛇が三寶の上に永久に

とぐろを巻いて横はれる佐陀神社。それから、世界の造り主、神々と人間の父母なる伊弉諾、伊弉册の宮のある大庭村。それから戀人達が結婚を祈りに行く八重垣神社。それから加賀浦、加賀の潛戸さま――すべてこれ等を私は見物に行かうと思ふ。

が、就中加賀浦へ！是非とも私は加賀浦へ行かねばならぬ。

そこへは滅多に舟で詣る者がない。また船頭ももし『髮毛三本を動かす』ほどの風があつたなら、行つてはならぬ。だから加賀へ遊ばうと思ふものは、極めて靜穩の季節――日本海岸では頗る稀れな――を待つか、或は陸て行かねばならぬ。しかも陸路は困難だ。が、私は加賀を見ねばならぬ。何故といふに、加賀浦には、海岸の巨窟に有名な石地藏の像があるからだ。毎夜子供の亡靈が高い洞窟へ攀ぢ上つてきて、像の前へ小石を積み重ね、それて毎朝柔かな砂濱に小さな跣の新しい痕――幼兒の亡魂の痕を見受けるとのことだ。また洞內に婦人の胸から出るやうに、乳の流れる一つの岩があつて、その白い流れは絕えることなく、まぼろしの子供達が、それを吸ふのだといはれてゐる。參詣者は子供の履く小さな草履を持參して、洞の前へ献げておく。それは小さな亡靈が峻しい岩角によつて足を傷けないためだ。また參詣者は疊んである小石が倒れないやうに、地を踏むのに注意する。もしそれが倒れると子供等が泣くから。

一六

市街區域はテーブルの如く平坦であるが、常綠の森に蔽はれた寺や社が建つてゐる低い半月形の可愛らしい丘陵で、市の兩端は圍まれてゐる。一萬の戶數で、三十三の主要なる町と、多くの更に小さな町を形成して、三萬五千の人口がある。して、殆ど何れの町の片端からでも、丘陵や湖や東方にある稻田を隔てて、遠さにつれて綠や靑や、鼠色の山嶺がいつも見える。市のどの方面へも騎行、步行、舟行勝手次第だ。市は二つの川で區分された計りでなく、よく引いた弓の如くに曲つた奇異な小橋を架した澤山の運河が交叉してゐるからだ。建築の點から云へば（師範學校、中學校、縣廳、新しい郵便局の如き歐風建築があるに關らず）松江は日本の他の奇異な諸都會と大概同樣である。寺院も、家屋も、店肆も、私人の住宅も他の西海岸諸市に於けると同じい。が、今猶生存せる幾千の人々が覺えてゐる頃までも、松江は封建の城下であつたため、昔劃然としてゐた階級の差別が、區域に從つて異る建築で以て、まだ珍らしくも判然と示されてゐる。市は建築の點から三區に劃することが出來る。町家は市の中心をなして皆二階造りである。寺院の區域は殆ど市

の全東南部を含んでゐる。して、士族（昔は侍）の區域には、ゆつたりした庭園を繞らした平屋建の邸宅が澤山ある。封建時代には是等雅趣ある屋敷から、一令の下に大小を差した五千人の武士が、武具を着けた家來を從へて召集さるゝことが出來た。畢竟城下だけに、少くとも一萬三千の軍勢が出來るのであつた。市の戸數の三分の一以上は、その當時武士の屋敷であつた。それは松江は出雲の軍事的中心であつたからだ。市の兩端の湖に沿うて三日月形に彎曲せる處に、主要な武士の住居區域が二つあつた。しかし最も重要の寺院が寺町以外に建つてゐる如く、武士階級の人々の最も立派な屋敷も、他の場所にあるのが多くあつた。が、最も密集してゐるのは、城の邊であつた。城は御城山の上に今日猶依然として數百年前創築の頃の如く、儼然としてゐて、全然鐵じみた灰色の、巍然たる凶相が、大きい不規則な石で築いた石垣の土臺から、沖天へと聳えてゐる。全體の恰好は異様にも陰慘で、細部に亙つては複雜の怪奇を極めてゐる。大きな佛塔の二階三階四階が、その重さで壓潰され、互に疊込んだやうてある。封建時代の兜の如く、頂には大きな唐金の鯱が屋根の兩端からその彎曲した體を空へ揚げてゐる。して、角を具へた破風や、鬼瓦を敷いた檐や、判じ物のやうな恰好をした、反を打つた瓦屋根などが、各階毎に簇生してゐるので、華麗な怪物を集めて造つた建物の龍そつくりだ——加之、上方下方各側のあらゆる稜

角に眼睛を點じた龍なのだ。佛頂面をした黒い最上の屋根の下から東と南を眺めると、空翔ける鷹となつた如くに、一眸全市がみおろされる。して、北の隅から三百尺の直下に、城内の通路の行人が、蠅ほどの大いさに見える。

一七

この陰氣な城には、因緣話がある。

丁度『スカドラの礎』と題する塞比亞の哀れな俗謠に、怖ろしい形見を留めてゐると同樣な、一種の原始的蠻習のために、築城の際、何とかいふ神に犧牲として、ある松江の少女が城壁の下へ生埋にされたといふことだ。少女の名は傳はらなかつた。美しくて、踊りが好きであつたことの外は、何も記憶されてゐない。

さて、城が出來上つてから、松江の娘は城の附近の街頭では盆踊をすること、一切相成らぬといふ法度が出ねばならなかつた。それは、いつも娘の踊るものがあると、御城山が動いて、大きな城が礎から頂まで搖れるからてあつた。

一八

今でも猶折々街頭で、松江の七不思議を歌つた可笑しい歌を耳にすることがある。昔は誰もこの歌を諳誦したさうだ。以前、松江は七區に分れてゐて、各區に特異のものや、人物が居たのだ。今は五つの宗教的區劃が出來て、各區に神道の社がある。その區内に住むものを氏子と稱し、社を氏神といふ。（各村各町、少くとも一個の氏神を有する）

松江の澤山の寺には、何か驚くべき傳說が纏つてゐないのはあるまい。各區には幾多の緣起譚がある。三十三の町々にも、それ〳〵妖怪譚があると思ふ。その例を二つ擧げる。これは日本の民間傳說の一種を優に代表するものだ。

市の東北にある普門院の附近に、小豆磨ぎ橋といふのがある。昔、夜每に女の幽靈が橋の下へ出て、小豆を洗つたさうだ。日本の綺麗な草花に、虹の紫色を呈した杜若といふのがあつて、その花に關して杜若の歌といふ歌がある。この歌は決して小豆磨ぎ橋の邊で謠うてはならぬ。どういふわけか分つてゐないが、そこへ現れる幽靈は、それを聞くと大變に怒るので、もし其處でそれを謠ふ人があれば、怖ろしい災難に罹るのである。或る時何

事にも恐れぬ侍があつて、夜その橋へ行つて聲高らかにその歌をうたつたが、幽靈が現れないから笑つて家に歸つてみると、門前て見覺のない丈の高い綺麗な女に逢つた。女が會釋をして文箱を差出した。侍も武士らしい禮をした。『妾は唯下婢てあります。これは妾の女主人からの進物てあります』といつて、女は消え失せた。箱を開けると血の附いた幼兒の顏が出た。家へ入ると、客座敷に頭のちぎれた自分の幼兒の死體があつた。

中原町にある大雄寺の墓地に就て、こんな話がある。――

中原町に飴屋があつて、水飴を賣つてゐた。これは麥芽から製した琥珀色の糖液て、乳のない子供に飲ませるものてある。毎夜更けてから、顏色靑白い女が、全身白い衣をつけて、一厘だけの水飴を買ひに來た。あまり痩せて顏色が惡いのを不思議がつて、毎度親切に訊いてみたが、女は何も答へなかつた。遂に或夜好奇心に驅られて、跡を追けて見ると、女は墓地へ行つたので、こはくなつて引き返した。

翌夜女はまた來たが、水飴を買はないで、唯隨いてこいと手招きをしたので、飴賣は數人つれ合つて行つた。女はある墓へ行つて消えた。地下には幼兒の泣き聲がした。墓を發いてみると、毎晩飴屋へ來た女の死骸があつて、それから生れた赤ん坊がゐて、提燈の光りをみて笑つてゐる。その側には水飴の小さな椀が置いてあつた。これは母のまだ眞實に

死んでゐないのが早まつて葬られ、墓中で子が生れたので、母の幽靈がかやうに子を養つてやつたのである――母の愛は死よりも強いから。

一九

天神橋を越え、人口稠密な區の小さな町や狹い町を通り、荒れ果てた家中屋敷どもを過ぎて、湖に面した小さな蕎麥屋から日沒の景を眺めようと思つて、私は市の最西南端へ足を運ぶ。この蕎麥屋から夕日を眺めるのは、松江の行樂の一つであるから。

日本には熱帶地方で見るやうな日沒の光景はない。光景が夢の如く柔らかだ。色の矯激がない。東洋の自然界には色彩的の猛烈がない。海も空も滿目、色彩と云はんよりは色味を帶びてゐて、それも濛氣がかかつてゐる。かの驚くべき織物類の染色に顯るゝ通りの、色彩や色味の點に於ける日本人の優美なる好尚は、日本の自然界に於ては、何物もぴかぴかしないで、中庸を得てゐて、一切の調子が地味で纎細な美であるのに大いに因ることと私は思ふ。

見渡せば、綺麗な大きな湖水が、柔かな明るさを帶びて眠つてゐる。青い火山性丘陵の

鎖が鋸歯狀に連つて圍んでゐる。右手に當つて湖東に、市の最も古い區が青灰色の丸屋根を擡げて、軒々水崖を壓し、建物の足元が水にひた〳〵になつてゐる。望遠鏡を取つて看ると、私の家の窓や、更に遠くに續いてゐる屋根や、就中綠色の城山に奇怪に尖つた陰鬱な天守閣が見える。太陽が沒し始めるにつれて、水に空に色合の不思議な變化が現れる。
藍黑色は鋸歯狀連山の背と上空とを、廣々と光澤の消えた深紫の色が隈どる――霞がかつた紫が、上の方へ弱い朱色と鈍い金色になつて、次第に煙の如く薄らぐ。それがまた幽かな綠色の層を經てから、終には青色に沒する。湖の沖の方の水が、深い所は柔かな、何とも云へないすみれ色を帶びる。すると、松に蔽はれた小島の影法師が、そのうるはしい色した水面に、浮いたやうに見える。しかし、磯近い淺瀨は、水の深い方と一道の潮流で、線を引いた如くくつきりと區別されて、その線から手前の水面は、青銅のやうに微光を放つて、全く濃赤の黃金がかつた古い青銅である。
　薄い方のいろ〳〵の色は、五分間毎に變つて行く――纎麗な甲斐絹の明暗のやうに出沒變幻を極める。

二〇

屢〻夜の街頭で、特に祭禮の夜、ある小さな小屋掛けの前を、全然無言で鑑賞し乍ら通つて行く群集の光景に、私共の注意は引かれるだらう。その小屋掛けを覗いて見る機會を得るや否や、私共はそこには唯だ數個の花瓶に花の小莖、或は花樹から新たに剪つた、輕い優美な枝を挿したのがあるばかりのことを發見する。それは單に小さな花の展覽會だ。或は一層正確に云へば、活花に於ける巧妙なる技倆の自由なる展覽だ。何となれば日本人は私共野蠻人がする如く、花だけを亂暴に切り取つて、それを集めて無意味な團塊にするのでない。彼等は自然を熱愛するから、そんなことをしない。彼等は花の自然の美は、いかに多くその背景と裝置如何に因り、その葉や幹に對する關係如何に因るものであるかを知つて居る。して、彼等は自然が作つたまゝの一本の優美な枝や莖を選擇する。門外漢なる外國人諸君は、最初は毫もかゝる展覽を理解しないだらう。かゝる點に關しては、諸君の周圍に立つて見てゐる日本の最も平凡な人夫に比してさへ、諸君はまだ野蠻人だ。が、諸君が未だこの簡單な小展覽會に對する一般的興味を不思議と思つて見てゐる內に、その

美が諸君の上にも生じてくるだらう。一種の天啓となつてくるだらう。して、諸君の西洋的自己優越感にも關らず、諸君が從來西洋て見た一切の花瓣展覽會は、是等の簡素なる數莖の自然美と比すれば、たゞ怪醜畸形に過ぎなかつたといふことを悟つて、屈辱を感ずるだらう。諸君はまたいかに花の效果を增してゐるかに氣が付くだらう。何故と云へば、屛風は植物の影の美しさを見せるといふ特別の目的を以て排列してあるからだ。して、その上に投ぜられた莖や花の影法師は、いかなる西洋の粧飾藝術家の想像よりも遙かに美しい。

二

八雲立つと太古に稱した此國て、季節が今はまだ霧の頃だので、薄暮の移るにつれて、湖や陸の上に幽靈のやうな微かな濛氣が立騰つて、場面を包み遠近を消了する。私は歸途に、天神橋の欄干に凭れかかつて、今日の眺めの見收めに、東の方を眺めると、山々は最早見えなくなつてゐる。前面にはたゞ陰影のやうな流が、無邊の茫漠裡へ消え去るのみてある——海の幻てある。すると忽然氣が付いたのは、橋上て私の側に立つて低いやさしい

聲て何か囁いてゐる女の手の指から、小さな白いものが、下の流へ徐々と散らばつてゆくのだ。女は亡くなつた兒のために祈つてゐるのである。川へおとしてゐる小さな紙は、一枚毎に地藏の小さな繪が畫いてあつて、細い文字もあるらしい。これは子供が死ぬると、母は地藏の版木を求めて、百枚の小紙片にその像を印刷する。時には何某菩提のためといふ文字をもかく——俗名でなく、戒名をかく。これは僧侶が死者に與へたので、佛壇に安置してある位牌にも記してある。而して一定の日に（大抵葬後四十九日目に）母は何處かの川へ行つて、一枚宛その紙をおとす。それが指からすべり行く都度、尊い呪文の南無地藏大菩薩を唱へる。

薄暮私の側で祈つてゐるこの信念深い小さな婦人は、極めて貧しいに相違ない。さもなくば、舟を雇うて湖上遙かの沖へ小さな紙を撒くだらう。（現今は夜分になつてからだけこんなことが出來る。巡査が——どんなわけか知らん——このうるはしい儀式を制するやうに訓令を受けてゐるからである。丁度開港場で精靈舟を流すことが禁じてあるやうに）

だが、紙片を流水に投ずるのは何の譯だらう。天台宗の一老僧の謂ふ所によると、もとこれは唯溺死者の冥福を祈るためであつたが、今では優しい母達が、一切の川は流れて冥途に落ちて、地藏さまの居ます賽ノ河原を通るのだと信じてゐるのである。

二二

家へ歸つてから、私は今一度小さな障子を開けて、外の夜景を眺める。螢が長く光るやうに、橋の上を提燈がちら〳〵する。黑ずんだ流れの上に澤山の燈影が慄へてゐる。對岸の家の廣い障子が、外からは見えぬランプの薄黃色の光を浴びて、その明るい面に優美な婦人の影法師の動くのが見える。私は日本てガラスが一般に採用されるやうなことのないのを熱望に堪へない——面白い映像がなくなるから。

暫く市街の聲に耳を澄ませる。暗黑を渡つて洞光寺の大きな鐘が、その柔味のある佛敎的な雷聲を轟かすのや、一杯機嫌で散步に出た人々の歌や、夜の行商人の長い朗かな呼聲が聞える。

『溫飩やい、蕎麥やい』是は熱い蕎麥を賣る者が最後に巡るのである。

『占判斷、待人緣談、失せ物、人相、家相、吉凶の占』これは賣卜者の聲。

『飴湯』子供が好いてゐて、琥珀色をした、旨い糖液の水飴を賣る者の音樂的な聲。

『甘粥』米て作つた甘酒をうる者の金切聲。

『河内國瓢丹山戀の辻占』小さなぼんやりした繪がついて、美しい色をした戀占の紙片を賣りあるくのである。この紙片を火か、ランプの近くて持つてゐると、目に見えないインキて書いてある文字が現れてくる。その文字はいつも戀人に關したことて、時には當人が知りたくないことも知らせる。幸運者によい文句が當ると、尙一層幸運の自信を增し、不運な人は斷然絕望し、嫉妬を抱いてゐる者には、猶その念が募つてくるのである。

全市から夜の空へ、沼の大きな蛙が發するぶつ〳〵の音や、遠雷のやうな音が立上ぼる——舞妓の小さな太鼓の響である。橋の上に澤山の下駄の音が瀑布のやうに絕えず響く。新しい光が東の空に上ぼる。白い水煙を隔てて非常に大きく、物すごく、青ざめた月が、峯々の背後から輪轉して上ぼる。すると、また多くの拍手が聞える。橋から通行人が『お月さま』を拜むのである。

何處かの苔むした廢寺の境內で、影ごつこや、鬼子つこの遊戲をしてゐる子供等の夢をみようと思つて、私は寢に就く。

註。古事記の神話によると、『月の神』は男神である。然し學者だけが讀みうる古代日本文で書かれた古事記のことを、一般人民は毫も知らない。だから彼等は丁度古代希臘の牧歌作者と同樣、月に向つて『お月さま』と呼ぶ。

第八章　杵築——日本最古の社殿

神國といふのは日本の尊稱である。しかも神國の中で、最も神聖な土地は出雲の國である。こゝへ高天ヶ原の青い空から、諸神と人間の祖先で、國土を造り玉うた、伊弉諾、伊弉冊の兩神が始めて來て、暫く住んだ。何處か、この國の境上の或る場所へ伊弉冊命が葬られ、して、この國から夜見の國へと、伊弉諾命は彼女の跡を追つて行つたが、伴ひ歸ることを得なかつた。して、この不思議な冥界へ彼が降つたこと、それから彼が冥界で遭遇した事柄は、古事記に載つてゐるてはないか？して、あらゆる冥府に關する原始的の傳説の中で、この話は最も怪異なものの一つである——アッシリヤのイシュター冥府降りの傳説に比してさへ、遙かに凄いものである。

出雲が特に神々の國であり、また今日猶その子孫によつて崇敬される伊弉諾、伊弉冊の民族の搖籃地であつたと同樣に、出雲の中でも、杵築は特に神々の都會であつて、且つその古い社殿は古代の信仰、神道といふ偉大な宗敎の本家本元である。

註　古事記は日本の古語で書かれた現存の最も古い書だ。チエムバリン教授によつて、註釋を澤山加へて立派に譯してある。

さて、杵築を訪ねることは、私が杵築に關する傳說を知つてから以來、私の最も熱心なる願望であつた。して、歐洲人で杵築を訪ねたものは甚だ乏しいことと、またその大社殿へ昇殿を許されたのは一人もないといふことを發見して、その願望は一層强くなつた。實際、大社の境內へ近寄ることさへ許されなかつたものもある。が、私は私の親友で、また杵築の宮司を親しく知つてゐる西田千太郞氏からの紹介狀を有つてゐるから、幾らか、もつと幸運だらうと信ずる。假令私が昇殿――日本人の中でも少數にのみ與へらるゝ特權――を許されないにしても、少くとも宮司、卽ち太陽の女神から系統を引いた家柄の千家尊紀氏に面會の光榮を有つこととなるだらう。

註　千家氏の系圖は、私が杵築で贈られた珍らしい小册に錄してある。千家尊紀氏は杵築の第八十一代目の國造に當る。その家系は國造六十五代と地神十六代を遡つて、天照大神及びその弟素戔鳴尊に達する。

一

私は九月の或る好い天氣の午後早く、松江を立つて、小蒸氣船に乘つて杵築に向つた。この船は機關から庇に至るまて、すべて一寸法師的て、船室に於ては跪坐せねばならぬ。また庇の下ては直立し難かつた。が、この小型の船は玩具の見本の如く、さつぱりして小綺麗て、案外速力は早く、しつかりした進み方をした。立派な裸のまゝの少年が忙しさうに客に茶菓を供したり、喫煙しようと思ふものの前に小さな木炭の爐を備へたりする。すべてそんなことに對して一仙の四分の三ほどを拂ふことになつてゐる。

庇の下から脫して、船室の屋根へ上つてみると、何とも云へぬ立派な景色だ。日本の空氣の中で、すべて遠方を隈どつてゐる、あの不思議に纎細な靑色を帶びた、美しい恰好の峯や岬が、陶器のやうに白い限界へ向つて、湖の端から浮上つて遙かに重疊してゐる方へと、汽船は澄明な湖面を進んで行く。山々は細部を少しも見せない。たゞ影法師だ――全く澄んだ色の團塊だ。左にも右にも、宍道湖を繞つて、森に蔽はれた、美しい綠の小山が波動を打つてゐる。前面、西北に當つて八雲山が最も高い。背後の東南には松江の市街は

消えて見えないが、その向うには、大きく、幽靈の如く青く、白く、斷えざる雪の領域へ、その死火山口の尖端を上げた大山が、傲然と聳えてゐる。夢の如くぼんやりした色が、すべての景物の上空を張つてゐる。

空氣の中にさへ、滿面の霞める土地の上、青い水の上に互つて、一種の神々しい魔力を帶びたやうな、神道の感じがあるやうに思はれた。古事記の物語に滿ちた私の空想に取つては、蒸氣機關の律動的な響さへ、

『事代主の神、大國主の神』

といふ、神々の名の混つた神道式典の拍子と聞えた。

二

右方の丘陵は、船の進むに從つて段々高くなつて、いつも次第に私共の方に近寄つてきて、その豐富な森の一切細部を見せ始めた。見れば、森に蔽はれた大きな峯の頂上、晴れた空の下に、一大佛寺の稜角多き屋根が歷然現れた。それは一畑山にある一畑寺で、靈魂の醫者、藥師如來の伽藍だ。が、一畑に於て、如來は比較的特別に肉體の醫者として、盲

者に明を與へる佛陀として示現してゐる。誰でも眼病のものは、その大寺院に向つて熱禱すれば、快癒を得るものと信ぜられてゐる。で、そこへ幾多の遠國から數千の患者が、長い退屈な山路を辿り、絶頂の見晴らしのよい境内へ通ずる六百四十の石段を蹈んで、參詣する。そこで巡禮者は神聖な泉の水で眼を洗ひ、御堂の前へ跪いて、一畑の神聖な信條、『おんころ〳〵せんだい、まとーき、そわか』といふ句を低唱する。多くの佛敎の願文と同じく、この意味は永く忘れられてしまつてゐる。梵語から漢語へ、更に日本語へと轉譯したので、その意味はたゞ博學の僧侶が知るのみであるが、全國の人に諳誦され、非常に熱心を籠めて唱へられる。

私は船室の屋根から降つて、庇の下で甲板に坐して、晃と共に喫煙した。して、私は問ふた――

『佛陀の數は幾つあるのだらう。悟者の數はわかつてゐる？』

『佛陀は無數です』と、晃は答へた。『しかし實際は唯だ一つの佛陀あるのみです。數の多いのは、形相だけです。私共は各自に未來の佛陀を藏してゐます。私共は悟る處多かつたり、少かつたりするといふことを除いては、一切平等ですが、俗人はこれを知らずに象徵や形式に救ひを求めてゐるのです』

『それから神――神道の神々は？』

『神道に就ては私はあまり存じませぬ。が、高天ヶ原に八百萬の神ましますと、古い書物に書いてあります。その中、三千百三十二神は、日本の諸國二千八百六十一社に祀られてゐます。して、日本の十月は神無月と申します。その月には、日本國中の神々が、社殿を去つて、出雲の國、杵築大社に集り玉ふからです。で、同じ道理で、その月が出雲に於てだけは、神在月と呼ばれます。が、教育を受けた人々は、漢語を使つて、『神有祭』（譯者註）といふこともあります。それから、蛇が海から陸へ上つて來て、神々の食卓なる三寶の上へとぐろを卷くと信ぜられてゐます。蛇は到着を知らせるのです。で、龍王は神々と人間の先祖なる伊弉諾、伊弉冊の社殿へ使者を遣はすのです』

譯者註。通辯人のこの説明については、疑を附しおく

『記憶力には限りがあるから、數百萬の神々のことは、私はいつまでもわからず了ひになるより、外に仕方がない。が、最も滅多に名の呼ばれない神々、珍らしい土地や、不思議な事柄の神々のことを少し話して下さい』

晃が答へた。『私からは、彼等についてあまりお學びになることは出來ません。他のもつと一層學問ある人達にお質ねにならばいけませぬ。が、あまりお知り合ひにならぬ方

が望ましい神々もあります。貧乏の神、飢餓の神、吝嗇の神、妨害や邪魔の神などです。是等は鬱陶しい日の雲のやうに、暗い色をして、餓鬼のやうな顔をしてゐます。』

註。餓鬼は梵語の薜茘哆(プレータ)。地獄に於ける呵責界の飢ゑた亡靈で、その懊惱は飢餓である。ある餓鬼の口は『針の穴よりも細い』

『妨害や邪魔の神とは、私は一面識どころの知り合ひではない。どうか他の神のことを話して下さい。』

『私は貧乏神の外は、どの神のこともあまり知りません』と、晃は答へた。『世の中には、いつも相伴ふ二神があると申します。福の神と貧乏神です。一方は白他方て黒はす。』私は口を挿んで言つた。『その譯は、後者はたゞ前者の影に過ぎないから。福の神は影を投ずるもので、貧乏神は影です。私もこの世を遍歷して、どこでも一方のものが行く處に、絶えず他方のものがつき纒つて來ることを觀察したのです。』

晃はこの解釋に同意をしないで、また續けて言つた。『貧乏神が一たびつき纒ひ出すと、彼から脫することは非常に困難です。京都から遠くない、近江の國の海津村に住んでゐた僧が、多年貧乏神に惱されてゐました。每度彼を追拂はうとしても駄目でした。て、彼を

欺かうとして、自分は京都に行くのだと、大聲で人々に宣言して、京都には行かずに、越前の國、敦賀へ行きました。敦賀の宿へ着いた時に、餓鬼のやうに、瘠せて青ざめた少年が出て、彼に逢つて云ひました。「私はあなたをお待ち申してゐました」――して、その少年は貧乏神でありました。

『またある僧は六十年間、貧乏神から脱しようとして、駄目でしたから、たうとう遠國へ行かうと決心しました。決心をしたその晩、奇妙な夢を見ました。非常に瘠せ衰へて、裸で、垢じみた少年が、巡禮や車夫の履くやうな草鞋を造つてゐます。しかも、その少年があまり澤山造りますので、僧が怪しんで「何故そんなに多くの草鞋を造るか？」と尋ねると、少年は答へました。「私はあなたと御一緒に旅をしようと思つてゐますから。私は貧乏神ですよ」』

『では、貧乏神を追拂ふ方法はないのか？』

『地藏經古粹といふ本に書いてあります』と、晃が答へた。『尾張の國に住んでゐた圓城坊といふ老僧は呪ひ(まじな)の手段で貧乏神を退けることが出來たさうです。大晦日に老僧はその弟子や眞言宗の他の僧と共に、桃の枝を持つて、呪文を誦し、枝を以て寺から人を追拂ふ所作の眞似をして、それから一切の門戸を閉鎖し、また他の呪文を誦しました。その夜

圓城坊は或る壞はれた寺で、骸骨の僧が獨り泣いてゐる夢を見ました。して、その骸骨の僧は彼に謂ひました。「かくも多年あなたと共にゐたものを、どうして追拂ふのです？」しかし、それから後、死する日までも圓城坊は常に繁昌榮華の暮しをしました」

三

一時間半の間、左右の山脈は交互に船に近寄つたり、遠退いたりする。綺麗な青い山々が船の方へ走つてくる。綠色に變はる。やがて徐々と船の後方へ流れ去つて、またすべて青くなる。だが眞正面の遠山は不動不變、始終幽靈のやうだ。突然船は眞直に陸地へ方向を轉じた。陸地は非常に低いので、全く不意に見えてきたのであつた。して、田地の間の狹い川をぷつ／＼と煙を吐き乍ら、運河の堤畔にある風變りな、舊式の小綺麗な莊原村へ上ぼつて行つた。こゝて杵築まで車を雇はねばならぬ。

就寢前に杵築へ着かうと思へば、莊原をあまり見る時間がないので、たゞ一筋の長い廣い町を通りがけに見ただけて（綺麗な町だから、一日こゝて暮し度く思ふ程だ）、車は小さな町から、開豁な田舍の一望田地の廣い平地を突進した。道路は唯廣い堤防て、二臺の

車がその上で辛つと互に代はり合つて越せるだけの幅だ。道の兩側には壯大な平野が、白い水平線を遮つた山脈で限られてゐる。私共が久木村から上直江の田舍道へ出ると、雄大な靜かさ、夢の如き平和といふ大きな感じや、輝いた柔かな蒸汽のやうな光りが一切の物を被ふてゐる。左方の鋸齒狀の山脈は「しゆさい」[譯者註一]山で、際立つた綠色を呈し、其上には大黑山の巨峯が蔽ひかぶさつてゐる。大黑山は神の名から來たのだ。もつと遠く、右に當つて、菫の紫色を帶びた北山（きたやま）の、大きな峻嶺が、日沒の方へ盛んな列をなして、綿々連亙し、西へ伸びるに從つて、微かになり、最後にいかにも幽靈のやうに、ぱつたり遠い空へ消え失せてしまう。

この眺めは綺麗ではあるが、數時間立つても、景色に變化がない。始終道路は紙の羽をつけた祈願の矢が白く點綴せる、數哩に亘つた田圃の間を曲つて行く。始終際涯なきぶつぶつの音の如く、蛙の鳴聲がする。始終左の綠色の山、右の紫色の山は、色彩を帶びた妖怪の丈高い行列となつて、西方へ去るに從つて色褪せて、恰も空氣であつたかの如く、たうとう無に歸してしまう。風物の單調が破られるのは、たゞをり〱綺麗な日本の村の中を通つたり、路傍に地藏や、道の曲がり角に珍らしい像が現れたり、または鮍の川の堤上にあつた、『出雲松菊助』と刻せる花崗石の大きな扁額のやうな、力士の墓があるためで

あつた。
しかし神門郡に達して、幅は廣くても、淺い川を越えると、新しい點が景色に現れた。左方の山嶺の上に、その輪廓から推せば、嘗て大きな火山であつたものと認めらるゝ、丁度鞍狀をなせる、靑い大影法師が、ぬつと屹立してゐる。これは種々の名を帶びてゐるが、昔は佐比賣山と呼ばれたのであつた。して、この山には神道の傳說がある。
創世の時代に、出雲の神が、國を見渡して、『出雲の國は狹布の稚國なるかも。初國小さく作らせり。故、作り縫はむ』といつたといふことである。それから、彼はあたりを見廻して、朝鮮の方を眺めると、適當な土地を發見した。彼は大きな綱を以て、そこから四つの島を引きよせて、それを出雲に附け加へた。第一の島は八百丹と呼ばれて、現今杵築のある土地を成した。第二の島は狹田の國と呼ばれて、現今すべての神々が毎年最初杵築に集まつてから、第二回目の會合をする社殿のある土地である。第三の島は闇見の國と呼ばれて、現今島根郡を成してゐる。第四の島は稻の田の護符を信徒に授ける社殿の建つてゐる土地となつた。
さて、海を越えて是等の島をそれ〳〵の場所へ引きよせるのに、その神は綱の弥を大山と佐比賣山にかけた。て、兩方とも今日まで、その驚くべき綱の痕を印してゐる。またそ

の綱は、一部は夜見ヶ濱といふ古代の長い島となり、また一部は薗の長濱となつた。

註。夜見ヶ濱は今では、しつかり本土と合した。地文學者や地質學者に取つて珍らしい興味ある、澤山の異常なる變化が、出雲海岸並に湖水附近に實際起つた。今でも毎年、ある變化が發生する。私も數回珍らしいのを見た。

堀河を過ぎてからは、道が狹くなり、また段々凸凹が多くなつた。が、北山の山脈へ次第に近寄つた。日沒頃には、林相の詳細が認めらるゝほど、その山に迫まつた。道が登り始めた。私共は暮れ行く中を徐々と登つて行つた。たうとう前面にきら〳〵輝く燈火の群が見えた。私共は神都杵築に達した。

譯者註一。この山の名に就いては、疑を附しおく。
譯者註二。現今の三瓶山。
譯註者三。佐陀神社は松江の西北二里、佐陀村にある。
譯者註四。島根郡は郡の併合の結果、現今は八束郡の東北全部。
譯者註五。美保神社。出雲國の最東北端。

四

長い橋を越え、高い鳥居の下を通つて、勾配の上つて行く町へ行つた。江ノ島のやうに、杵築も町の門として、鳥居がある。しかし唐金のではない。それから、洋燈を點じた開放せる店肆。高く彎曲せる軒の下に續ける、兩側の明るい障子。唐獅子で護られた佛寺の門。寺の境內の灌木が踰え出でてゐる、長い低い瓦屋根の塀。社頭に他の高い鳥居の建てる神道の宮など、それらはちらつと見えたが、大社は、面影さへ見えなかつた。それは町の背後に當つて、森の茂つた山麓にあるのだ。しかも私共はあまりに疲れ、且つ空腹なので、今、參詣することを得ない。それで、私共は廣い心地よげな杵築一等の宿屋の前で車を止めた。して、休憩して食事をし、精巧な陶器の小杯で酒を汲んだ。この杯は或る美しい藝妓が宿屋へ贈つたのだ。それから後で、宮司を訪ねるのには、餘り遲くなつたので、私は使の者に紹介狀を持たせて、明日午前伺候を許されたい旨を、晃の筆で認めた懇願と共に、宮司の邸へ遣した。

それから、親切らしい宿屋の主人が、點火せる提燈を携へてきて、私共を誘つて大社へ案內した。

大概の家は、夜に入つて既に木造の引戸を閉めたので、街頭は暗く、主人の提燈は是非必要であつた。月も無く、空に星もなかつたから、私共は本通りを六丁目ほどの處へ行つてから曲がると、大社の並木道の門、大きな青銅の鳥居の前へ出てた。

五

夜は色を消し、距離を抹殺する。だから廣い場所の光景や、大きな物象の趣を、暗示の力によつて擴大するのが常だ。ぼんやりした燈光で見ると、大社の門路は雄大なる驚異だ。明日は、幻滅の感を與へる白晝の光で見ねばならぬと、思ふだけでも惜しいほどだ。並木路は巨樹が列を成して、大きな鳥居の連立せる下に、遠く續いてゐる。鳥居から垂れ下つた太い注連繩は天手力雄尊の象徵で、尊が握るのに適はしい太さだ。が、並木通りの朦朧たる莊嚴は、鳥居とその花彩狀象徵によつてよりも、巨大なる樹木のために一層加つてゐる。多くは千年の齡を重ねて、錯節せる老木の繁つた梢頭は、暗い空に沒してゐる。幾つ

かの巨幹には、藁繩が卷いてある。これ等は神聖なのだ。大きな根は、四方に蜿蜒として、燈火に映じては、龍が躁がいて、匍匐するやうに見えた。

並木路は一哩の四分の一位はある。道筋は二つの橋を渡り、二つの貴い森の間を通つてゐる。兩側の廣い地面は皆大社のものである。以前はいかなる西洋人も中の鳥居から先きへ行くことは許されなかつた。並木道の窮まる處に高い塀があつて、佛寺の山門のやうな、しかし頗るどつしりした門が通じてゐる。これは外苑への入口だ。まだ重い戶は開かれてゐて、影のやうな人の姿が、數多出入してゐた。

境內は眞暗な中を、薄黃色の光りが無數の大きな螢のやうに、彼方此方に飛んでゐた。これは參拜者の提燈だ。私はたゞ巨材で造つた大きな建物が、左右に聳然たるを認めるのみであつた。案內者は大きな苑內を渡つて、第二の苑へ通り、して、まだ戶の開いてゐた、堂々たる建物の前で立佇つた。戶の上には、燈光で見ると、ある美材に名人の手で刻んだ、龍と水の驚くべき彫刻帶があつた。內部には、左方の傍祠に神道の象徵のものが見えた。して、私共の直ぐ前面に、私が豫想したよりも遙かに廣い、疊を敷いた床が、燈光によつて現された。これによつて、私は社殿だらうと思はれる建物の大いさを推測した。が、主人はこれは社殿でなく、たゞ拜殿であつて、この前で人々は祈禱を捧げるのだと云つた。

晝間は開けられた戸口から、社殿は見えるのであるが、今夜は見えない。また内へ入ることを許さるものも誠に少いとのことであつた。『大概の人は社殿の苑内へさへも入りません。社殿の前を遠く離れた處から祈ります。あれを御聽きなさい！』と、晃が通辯した。私の周圍の陰の中で、水を潑ねたり洒いだりするやうな音が聞える。これは神道の式によつて澤山の人々が手を拍つ音なのだ。

『しかしこれは何でもありません。今は極く僅かなものです。明日までお待ちなさい。祭禮日ですから』と、宿の主人が云つた。

私共が鳥居と巨樹の下を、大きな並木路に沿つて、歸つて行く道すがら、晃は主人が神蛇について語るのを私に通辯した。

彼は云つた。『その小蛇を人々は龍蛇樣と呼びます。神々の來給ふことを知らせるため、龍王から送られるからです。龍蛇樣の來る前に、海は暗くなり、波が立ち上つて荒れます。龍蛇と呼ぶのは、龍宮城の使者だからです。が、また白蛇とも呼びます』

『小蛇は獨りで社殿へ來るのか？』

『いえ、漁師が捕へるのです。して、唯一匹だけ遣されるのですから、一年に一匹捕れるだけです。誰でも、それを捕へて、杵築大社か、佐蛇神社かへ持參すると、報酬として

米一俵を受けます。捕へるには時間と骨折が要りますが、捕へたものはきつと後日富裕になります』

『杵築には數多の神を祀つてあるのだらう?』と、私が尋ねた。

『さうです。が、杵築の主神は大國主神で、普通に大黒と申します。こゝにはその御子も祀られて、惠比壽と申します。いつも二神は、繪に一處に畫いてあります。大黒は米俵の上に坐つて、片手で胸に赤い太陽を押し當て、片手には一と打ちて富を打出だす魔力の槌を握つてゐます。惠比壽は釣竿を持つて、大鯛を脇にかゝへてゐるのです。二神ともいつも笑顔で現してあり、それから、大きな耳を持つてゐます。それは福壽の徴です』

註一。白蛇はまた戀愛と美と雄辯と海の女神、辨財天の使者だ。白蛇は老翁の顏を有し、眉毛は白く、頭に冠を戴くと云はれる。この女神も蛇も古代印度の神話中に、これと符節を合するものがある。また佛教が始めに、これらを日本へ取入れたのだ。坊間に於ては、特に出雲では、佛教の佛が、屢ゝ神と同一視され、または寧ろ混同されてゐるのがある。

本章を書いた後で、私は捕獲後一時間を經ない龍蛇を見る機會を得た。長さ二呎乃至三呎、圓さの最も太い處で直徑約一吋。體の上部は深暗褐色で、腹は黄白を帶び、尾の方には美麗なる黄斑があつた。體は圓筒形でなく、妙に四角形で、恰も精細に編んで作れる、四つの稜角ある鞭のやうであつた。尾は扁平で

三角形、或る種の魚類に似てゐた。松江師範學校の博物學の教師、渡部氏はこれをペラミス・バイコラーといふ種に屬する海蛇だと認定した。が、その蛇は滅多に見られない。だから、この淺薄なる記述も、ある讀者に取つては興味ないことはあるまいと思ふ。

註二。杵築か、佐陀で、時としては蛇を買ふことが出來る。松江の家庭の神棚の上に、小蛇が見られることがある。私は一匹の古くなつて、脆く、黑くなつてゐたが、私の知らない或る方法で、立派に保存されてゐたのを見た。それは金網の小籠の中へ姿勢よく坐つて、白木の小祠に丁度嵌まるやうになつてゐた。生きてゐた時、長さ二尺四寸位であつたに相違ない。その所有主の貧しい家族は、毎日その前へ小さな燈明を點じ、神道の文句を誦してゐた。

註三。大國主神は、通俗の信仰に於ては富の神、大黑と混ぜられてゐる。その子、事代主神も同樣に、正直なる勞働の保護者、惠比壽と混同されてゐる。或る日本の學者は、神道の拍子の習慣は、事代主神が用ひた合圖であつたと說いてゐる。

兩神は日本の美術では、いろ／＼の形に現されてゐる。杵築で賣られる、兩神の相並んだ形は、珍奇且つ美麗である。

六

一日の旅行でやゝ疲れたので、早く床に就いて、夜明け頃に眼が醒めるまで、植物の如

く夢も見ずに睡つた。すると、宿の綺麗な娘が室を開けて、山の新鮮な空氣と朝日の光りを入れる。廊下の後の戶袋の中へ木造の雨戶を皆轉ばして收める。褐色の蚊帳を卸す。私の朝の喫煙のために、新たに起こした炭火を入れた火鉢を持つて來る。それから朝食を運んでくるため小走りに去つた。

まだ早朝であるのに、娘が室へ戾つてきた時、宮司から旣に使者がきてゐると告げた。宮司は太陽の女神の尊い後裔、千家尊紀其人である。使者は私が進めた一椀の茶を受け、して、御主人が社殿で私共を待つて居られると告げた。

これは愉快な通知であるが、私共は早速行くことが出來なかつた。晃の服裝に缺點があると、使者が注意した。神前へ出るのには、新しい白足袋と袴を着けねばならないのだ。幸ひ晃は宿の主人から袴を一着借りることを得た。して、出來うる限り淸潔端正に身を整へてから、私共は使者に案內せられて社殿へ向つた。

七

昨夕私が歎賞した華麗な靑銅の鳥居の下をまた通る時、大社へ達する門路が晝間見ても、

その壯觀を左ほど減じないのには、愉快なる驚きを感じた。樹木の莊嚴は、依然として驚くべきものであつた。並木路の通景は壯大で、左右の廣い森や神域は、想像してゐたよりも一層强い印象を與へた。幾多の參詣者が往來してゐる。が、國中から人出があつても、かゝる並木道は押し合ふことなく通れるだらう。第一の苑の門前で、盛裝の齋服を着た神官が、私共を迎へた。愉快な親切らしい顏をした老人であつた。使者は私共をこの人に渡して置いて、門から去つて了ひ、佐々といふ、その老神官(譯者註)が私共を導いて行つた。

譯者註。杵築の國學者佐々鶴城といつた人。

社の境内では最早激浪の寄せるやうな重い音が聞える。進むに從つて音は鋭く、分明になつた――一齊に鳴る拍子の響だ。それから大きな門を過ぎると、昨夜私が見た、あの大拜殿の前には、幾千の參拜者が見えた。誰もその中へは入らない。すべて群龍の彫まれた門の前に立つて、敷居の前に据ゑられた賽錢函の中へ、献金を投げる。それは大概小錢だ。極貧のものは、唯だ一握の米を投げ込む。それから拍手稽首、恭しく拜殿を越えて向うの、更に高い建物、最も神聖な社殿を凝視する。參拜者は銘々そこに霎時停まつて、四度拍手をするのみであるが、來たり往つたりするものが、非常に多いので、拍手の音は瀑布のや

うだ。

註。宮家は隨分多額の寄附をする。寄附者の人名と金額を記した、拜殿の外にある木札には、最近千圓の寄附者が數人もあつたことを示してゐた。五百圓の寄附額は左程珍らしくない。高等の官吏の寄附は、五十圓を下るのは稀れだ。

多くの參拜者の側を過ぎて、拜殿の向側へ出ると、至聖所へ通ずる鐵柵を施した廣い石段の下へ來た。私より以前に歐洲人は一人も、この石段に近寄ることは許されなかつたのだ。下段に正式の儀式服を着けた神官が數名私共を迎へてゐた。青紫と紫色の絹に、金龍の模樣を織つた衣を着けた、丈の高い人々であつた。彼等の高い奇異な烏帽子、ゆつたりした美しい裝束、また彼等が古代希臘に於ける敎僧の如くに、嚴肅不動な姿勢は、一見彼等を唯だ不思議な影像と見えしめた。兎に角、私は子供の時に、いつも驚嘆し乍ら眺めた佛國の奇異なる版畫に、アッシリヤの占星者の一團が畫いてあつたのを、不意に想ひ起した。しかし彼等の眼は、私共が近寄ると共に動いた。私が石段に達すると、彼等は私に對して、一齊に最も丁寧な禮をした。何故となれば、私は彼等の主人――太陽の女神の後裔て、この古い國の僻陬に住む幾萬の賤しい崇拜者からは、今猶生き神と呼ばれてゐる、尊

い祭司と、しかもこの神聖なる社殿に於て、面會の特權に與る始めての外國人の參拜者てあるからだ。敬禮が終はると、彼等はまた全然彫像的の態度に返つた。

靴を脫いで階段を登らうとすると、初めに門前で私共を迎へた長身の神官が、神殿へ昇る前には、宗敎の上からも舊慣の上からも、潔齋を行ふべきだといふことを、簡單な意味深い身振りて示した。私が手を差し出すと、神官が長い柄のついた竹製の杓子のやうな器から淸水を注いで、手を拭くために小さな靑色の手拭を與れた。この手拭は寄進の品てあつて、妙な白い文字が書いてあつた。それから私共は登つて行つたが、私は洋服の體裁の拙さに恐縮して、無作法な野蠻人のやうに自分が思はれた。

階段の頂上で立佇つて、神官は私の社會的階級を質ねた。何となれば杵築に於ては、階級組織及び階級的儀式が、神代に於ける如く正確嚴重に維持されてゐて、また、社會各階級の參拜人の待遇に對して、特別な儀式や規則があるからだ。私は是が私の身の上について、いかなるお世辭を、善良なる神官に陳べ立てたかを知らない。が、結局私はたゞ普通人民といふ階級に位することとなつた――疑もなく、この正直な事實のために、私は儀式作法の困惑を感じないで濟んだ。世界で日本人が最も御得意な精細複雜の儀禮に就ては、私はまだ全く無智てあつたから。

八

階段を昇ると廣い廊下があつて、全部廊下へ向つて開ける、廣くて高い室へと、神官は先導して行く。私は隨いて行き乍ら、この室には兩側に凹間があつて、そこに三つの大きな宮のあることに、辛つと目についた。二つの宮には天井から疊まで白幕が蔽うてある。この幕には金色の花を中心にした、直徑四寸位の黑い平圓盤の形が上下に列つた裝飾を施してある。しかし奥の隅の第三の宮からは幕が引除けてある。これは金巾の幕で、これを掛けたのが主要の宮、卽ち大國主神の宮だ。宮の中は唯だ普通の神道の諸象徵と至聖所の外面が見えるのみで、至聖所の中は誰人も拜觀することを得ない。長い低い榛が一端を廊下の方へ、他端を凹間の方へ向けて、この宮の前に据ゑられ、奇異な寶物が載せてある。この榛の廊下に近い方の端に、鬚の生えた莊嚴な人物が、異樣に髮を結ひ、全身眞白な裝束をして、最高の神官らしい姿勢で、疊を敷いた床の上に坐つてゐた。案內者の神官は、私にその人の前に坐つて禮をするやう指圖した。これが杵築の宮司、千家尊紀で、この人に對しては、私宅に於てさへ誰も膝を折つてでなくば、言葉を發しないし、太陽の女神の

後裔であつて、今猶人間以上に考へられて衆庶の尊敬を受けつゝある人である。私が日本の敬禮の習慣に隨つて平伏すると、初對面の者をも直ぐに寛ろがせるやうな、慇懃至らざるなき挨拶を受けた。私の案内を務めた神官は、今や宮司の左側の床の上に坐つた。同時にたゞこの聖殿の入口まで隨いて來た他の神官達は、外の廊下で、それ〴〵座に着いた。

九

千家尊紀は若い、元氣のよい人だ。そこに私の眼前に、その古代埃及希臘の僧侶風な不動の姿勢、その奇異な高い冠、その豐富な捲毛の髯と、その彫像のやうな波形を打たせて身邊に擴がつてゐる、ゆつたりした、雪白の神官裝束で、彼が坐してゐるとき、彼は私に取つては、舊日本の繪畫によつて古代の王公貴人や、英雄の莊嚴なる風姿に就て、私が想像してゐた、一切の面目を代表したものであつた。彼の人物の威嚴だけでも、尊敬を禁ぜざらしめる。しかし、その尊敬の感情と伴つて、私の心中にはまだ、日本で最も古い國の民衆によつて彼に拂はれる深い恭敬、彼の掌中にある無限の靈的權能、彼の血統の宏遠なる尊貴といふ考が、突如閃過したのであつた。て、私の尊敬は進んで畏懼に近い感情とな

つた。たゞ一個の神聖なる影像——神に祀られた彼の遠祖の一人の影像と思はるゝほど、彼は泰然不動てある。が、初めの數瞬間の嚴粛は、彼の親切げな黒眼を依然凝乎と私の顔に注ぎ乍らも、彼の豊かな低音て發せられたる最初の言葉て愉快に破られた。それから私の通辯人が、彼の挨拶を譯した——その長い懇懃な文句に對するに、私は出來る限り立派な應答を以てし、私に與へられた特別の厚意に向つて感謝を表した。

宮司は晃を通して答へた。『歐洲人て大社へ昇殿を許されたものは少々ありますが、貴下が最初てす。杵築を訪ねた他の歐洲人て、境内へ入ることを許されたのは、貴下だけが神殿へ入ることを許されたのてす。以前には、唯だ普通の好奇心から、こゝを訪ねようとした者は、境内へさへも近寄ることを許されなかつたのてす。しかし西田氏の書面に御來遊の趣旨が認めてありましたので、かやうに欣然御案内申上げる次第てす』

譯者註　當時松江中學校の敎頭たりし西田千太郎先生、今は故人。松江市の人、始め心理及敎育を專攻したる鋭利の頭腦は、後轉じてまた英語の敎授に發揮せられ、全校推畏の中心であつた。ヘルン先生の在校中、最も親密の間柄であつた。

私は謝意を述べた。して、第二回の敬禮の後、會話は晃の仲介を經て續いた。

私は尋ねた。『杵築のこの大社が、伊勢の神宮よりは古いてはありませんか？』

宮司は答へていふ ―ずつと古いのです。實際年代がよくわからないほど、古いのです。天照大御神の御命令によつて、神々ばかり住んでゐられた時代に、初めて建築されたからです。その當時は、非常に壯大なもので、高さ三十二丈、梁や柱は今頃の材木では作れない位巨大なもので、全體の組立を長さ一千尋の栲の繩で括つてあつたのです。

『始めて改築のあつたのは、垂仁天皇の時でした。柱は皆澤山の大きな木材を集めて、大きな鐵の輪でしつかり縛り合せたのでしたから、鐵輪の構造と呼ばれたのです。この社殿も壯麗ではありましたが、神々が御造營になつた最初の宮よりは餘程劣つて、高さは唯十六丈でした。

註。チエムバリン氏譯、古事記所載の珍らしき傳説參照。

『第三回目には齊明天皇の御代に改築せられて、高さはただ八丈でした。それ以來、大社の構造は決して變りません。當時用ひられた設計圖案が、現在の社殿の建築に於て、最も些細の點に至るまで嚴密に保存されてゐます。

『大社の改築は二十八回に及んでゐます。六十一年目毎に改築する習慣なのです。が、長く内亂の續いた時代には、百年間以上も修繕さへ出來なかつたのです。大永四年尼子經

久が出雲の國守となつた時、大社を佛僧の管理に委ね、附近に堂塔を建立し、神聖なる傳統を汚しましたが、毛利元就が尼子氏に代つてから、社殿を淸め、荒廢してゐた儀式祭典を興したのです』

私は尋ねた。『社殿が現在よりも、もつと大規模であつた時代に、建築用材は出雲の森林から獲られたのですか？』

神官佐々氏が答へた。『天仁三年七月四日、百本の大きな樹木が杵築の海岸へ漂流してきて、潮のため濱へ乘上げたと錄されてあります。その材木で永久三年に改築が出來ました。その社殿は「流れてきた木の建築」と呼ばれました。また同年、長さ十五丈もある大木の幹が因幡國、宮ノ下村の宇部の社といふ宮に近い海濱へ漂着しました。人々がそれを切らうとして見ると、怖ろしげな大蛇がそれを卷いてゐたので、皆驚愕して、宇部の社の神に助けを求めました。すると、神が顯れて、「出雲大社の改築每に、何れの國からも、そこの神々の一人が材木を送るのだ。今回わが番に當つてゐる。だからわがこの大木を以て造營を急いで吳れ」と云つたまゝ、その姿は消えました。かやうな諸記錄に因つて、神神がいつも大社の建築を監督したり、助け玉うたことがわかります』

私は問うた。『神有月の間、大社のどの邊に神々はお集まりになりますか？』

佐々氏は答へた。『內苑の東西兩側に十九社と申す長い建物がありますが、その十九個の宮のいづれにも祭神がないのです。て、神々がお集まり玉ふのは、その十九社だらうと思はれます』

『それから、毎年他國からの參拜者は、幾何でせうか？』と、私は問うた。

『約二十五萬人です。しかし農民階級の狀況如何に因つて、數に增減があります。豐年であれば、その數が增します。滅多に二十萬を下りません』と、宮司が答へた。

一〇

その他幾多の珍らしい事柄を、宮司と佐々氏は、それから私に話した。神苑や、柵や、森や、澤山の小祠と其祭神の尊稱や、殿內の九本の大きな柱の名を敎へた。中央の柱は眞中の心柱といふことであつた。すべて境內のものは、鳥居や橋に至るまで、尊號を有する。すべての神社と同じく、大社の社殿は東向きであるが、殿內の大國主神の宮は、西向きであることを、佐々氏が私に注意した。同じ殿內にある、東向きの他の二宮には、大國主神第十七代の裔なる最初の出雲の國造と、賢明な國主で、有名の力士なる野見宿禰の父が

祀つてある。垂仁天皇の御代に、當麻の蹶速といふ者が、誰も力に於て彼に匹敵するものはないと豪語した。野見宿禰は天皇の命令により蹶速と角力して、强く投げて倒したので、蹶速は絶命した。これが日本に於ける角力の濫觴であつた。て、力士は今猶力と技倆を野見宿禰に向つて祈る。

他にも多くの宮があつて、悉くその名を列擧すれば、神道の慣習や傳說に不案内な讀者に倦怠を與へざるを得ない。が、大國主神の傳說に現るゝ殆どすべての神は、こゝに住み玉ふものと信ぜられてゐる。こゝにそれらの宮がある。卽ち、太陽の女神の髮に着けた寶玉から不思議に生まれて、神多紀理毘賣の命と呼ばれた美しい神――それから、幽界の大神の娘て、大國主神を愛して、その妻となるために、黃泉比良坂まで追ひかけて出てきた女――また杵築に於ける神の宴會のために、火鑽と赤い粘土の盤を始めて造つた、水戶の神の孫、櫛八玉の神――その他幾多の神々。

一一

神官佐々氏はまた次の話をした――

大家康の孫で、二百五十年間出雲を治めた、偉大なる松平家の始祖直政が、この國へ來たとき、杵築大社へ參詣して、殿内の宮を開いて、神體を見せるやうに命じた。これは不敬な要求だから、國造は兩人とも一致して反對した。が、彼等の諫止と辯解にも關らず、彼は憤然要求を主張したので、神官は止むなく宮を開いた。すると、直政は宮の中に九つ孔の開いた鮑貝――その背後のものを、すべて隱すほどに大きな――を發見した。もつと近寄つて視ると、不意に鮑貝は長さ十尋以上もある大蛇と變じた。して、それは宮の扉前で、黑く堆くとぐろを卷いて、荒れ狂ふ火のやうな叱音を立てて、非常に恐ろしかつたので、直政と從者達は逃げて行つた――他に何をも見ることは出來なかつた。爾來直政は大社を畏敬した。

註一。往古から國造は理論上二人となつてゐる。尤も職に就くのは一人だけだ。同族の兩分家が、その職に對する傳來の權利を主張して、千家と北島の二家が競爭してゐる。政府はいつも前者に好意を有つた

定をしてゐる。北島家の家長は普通次位の國造に任じてある。

註二。國造といふ語は、正確に云へば、宗敎的でなく、寧ろ世間的の稱號である。國造はいつも帝室に對する天皇の代理――天皇の代りに神を祀る任務の人である。が、かやうな代理の宗敎的稱號を、現在の宮司が矢張り帶びてゐる『みつえしろ』が、それだ。

一二

宮司はそれから、私共と相挾んで置かれた、白絹を蔽へる長い低い檯に載せてある、奇異な遺物に私の注意を促がした。數百年前改築の際、社殿の礎を造るに當つて發見された金屬製の鏡、縞瑪瑙と碧玉の曲玉、硬玉製の支那の笛、天皇や將軍から獻納の名劍數口、壯麗な古代製の兜、銳い刄がついて、肉叉形をした、眞鍮製の叉股の箭の根など。

これ等の遺物を拜觀し、その緣起を少々私が承つてから、宮司は立つて『これから尊い火を燃やす古い火鑽を御目にかけませう』といつた。

石段を下り、また拜殿の前を通つて、境內の一方にある殆ど拜殿と同じ大いさの廣い館に入つた。私共が案內された室の一端に、立派な桃花心木製の長卓子を置き、その周圍に

桃花心木製の椅子を並べて、客の接待に備へてあるのを見て、私は愉快なる驚きを覺えた。私も通辯人も、それ〳〵椅子に就くやう、指示された。して、宮司と神官達もまた卓子に向つて椅子に就いた。それから、侍者が三尺ほどの長さの綺麗な青銅の臺を私の前へ据ゑた。雪白の布で入念に卷いて、何だか長方形のものが、その上に安置してある。宮司が卷いた布を取り除けると、東洋での最も原始的形狀の火錐を私は見たのだ。單に堅い白い厚板で、長さ約二尺五寸、その表の緣に沿つて錐で開けた孔が列んでゐて、孔の上部は板の側へ裂けてゐる。孔へ嵌めて置いて急に兩手の掌で揉むと火を起す木片は、もつと輕い白色の木で造つたもので、長さ二尺ばかり、普通の鉛筆位の太さである。

註。伊勢神宮に用ひらるゝ火鑽は、構造が一層複雜で、たしかに杵築のが示すよりは、遙かに一層進步した機械的知識を現してゐる。

傳說はこの珍しい簡單な器具の發明を神々に歸し、近代科學は人類の幼稚時代に歸してゐる。私がまだこの器具を調査してゐる間に、一人の神官が長さ約三尺、幅一尺八寸、兩側の高さ四寸、中央はやゝ高くて、龜の甲の如く穹形をなせる、輕い、大きな木箱を卓上へ載せた。これは錐と同一の扁柏の材で造られて、二本の細長い棒が傍に置いてある。私

は始めは別の火錐かと思つた。しかし誰人もそれが、實際何であるかを想像し得ないだらう。それは琴板と呼ばるゝ最も原始的樂器の一つだ。小さな棒は、それを彈ずるために用ひられる。宮司が一寸合圖をすると、二名の神官は床の上に箱を置き、その兩側に坐つて、小さな棒を取上げ、交互に悠々と蓋を打ち始めた。同時に頗る奇異で單調な音を唱へる。甲はたゞあん〳〵といふ音を唱へ、乙はおん〳〵と、これに應ずる。琴板は棒がその上に落ちる毎に鋭く、單調て、空虛な音を發して、あん〳〵、おん〳〵の聲に合する。

註　この次に杵築へ行つた時、私は琴板が一種原始的な調子合せ機械としてのみ使用さるゝことを知つた。最初の訪問の節、私が聞かなかつた眞正の誦歌に對して、それは正しい調子を與へる。眞正の誦歌、即ち古い神道の讃歌は、琴板を彈じて始められる。

一三

次の事實をも、私は聞いた——

毎年大社は新しい火鑽を受ける。が、それは杵築で作るのでなく、熊野で作る。そこではその作り方の慣例が、神代から傳つてゐる。最初の出雲國造は、宮司となつたとき、大

社の火鑽を太陽の女神の弟で、今、熊野の宮に祀つてある神の手から受けた。で、その時代から大社の火鑽は唯だ熊野(譯者註一)で作られた。

最近まで杵築の宮司に新しい火鑽を渡す式は、卯の日祭といふ祭の日に、大庭(おほば)の神社(譯者註二)で行はれた。卯の日祭といふ古式は十一月に何處でも行はれたものであつたが、維新後は廢絶して、たゞ神々と人間の母、伊弉冊の神を祀れる出雲大庭にのみ行はれた。

毎年この祭日に當つて、國造は二枚重ねの餅を献品として大庭へ携へて行く。大庭で龜太夫といふ男が出迎へる。この男が熊野から火鑽を持つてきて、大庭の神官へ渡したのだ。傳記によれば、龜太夫の役目はやゝ滑稽じみたもので、神官は誰もその役目を引受けることを欲しないから、人を雇つたのである。龜太夫の任務は、國造の献品に對して、文句を挿むのだ。で、この地方では今でも兎角、謂はれもなく疵をつけたがる人のことを『龜太夫のやうだ』といふ。

龜太夫は餅を調査して、批評を始める。『今年のは昨年のより餘程小さい』と言ふ。神官が答へて『いや、それは大變御見當違ひです。實際餘程大きいのです』といふ。『色が昨年のほど白くありません。また粉が細かく碾いてないやうです』とか、種々このやうな假想的缺點に對して、神官は懇到なる說明又は陳謝をする。

この式が了つた後、式に用ひられた榊の枝は、人々がそれを競ひ求め、呪符の功驗があるといふので、高價で賣れる。

譯者註一。八束郡熊野村にある、國幣中社熊野神社を指す。

譯者註二。熊野の隣村、八束郡大庭村。

一四

國造が大庭へ行つた日か、歸つた日に、殆どいつも天候が暴れた。この旅行は出雲では最も荒天の季節（新曆の十二月）に當るのであるが、民間の信仰に於ては、この暴風は、國造の尊嚴なる人格と妙に聯關せるものであつて、國造はやゝ龍宮の王に似た性質を有つてゐる譯になる。それは兎に角、この季節の定期暴風は、この國では依然『國造荒れ』と呼ばれる。それて、出雲では大嵐の際に到着したり、出立する客に向つて、『まあ、國造さまのやうだ！』と、面白く挨拶する。

一五

宮司が指圖をすると、廣間の向うの端から不意に奇異なる音樂が起つた——太鼓や竹の笛の音だ。振向いてみると、伶人がゐる。三人の男は座敷に坐し、一人の少女もこれに加つてゐる。宮司が更に合圖を與へると、少女が立つた。素足に、雪白の衣裳をつけた處女の巫女だ。白衣の裾の下からは、緋の絹の袴が光つてみえる。室の中央の小さな机に進み、下に垂れた小枝に、一々小鈴の附着せる木の枝の如き、異様な器が載せてあるのを兩手て取つて、私が未だ見たことのないやうな神聖の踊を始めた。巫女の一擧一動は詩だ。それは彼女が非常に優美だからてある。しかしその所作は、西洋ていふ意味の舞踏とは殆ど云へない。これは寧ろ圓の內を輕快敏速に歩行するやうなもので、その間一定の時間を置いては、器具を振つて鈴を悉く鳴らす。顏は綺麗な假面の如く凝然動かない。夢みる觀音の顏のやうに平靜て、うるはしく、白い足の線は大理石て刻んだ水精の像の如く淸らかだ。要するに、その雪のやうな衣、白い筋肉、冷靜な顏は大和少女と云はんよりは、寧ろ生きた美麗なる彫像のやうだ。して、始終不思議な笛は嗚咽したり、鋭い音を發したりして、

太鼓の囁く音は呪文のやうであつた。

私が見たのは、巫女の舞と呼ばれてゐる。

一六

それから私共は大社に屬する他の建物――寳庫、書庫、集會所――を巡覽した。集會所は二階建の堅固な構造で、三十六歌仙の繪があつた。土佐光起の筆で、數百年後の今日猶立派に保存されてゐる。こゝで私共はまた、大社から毎月發行する珍らしい雜誌を示された――神道に關する時報で、また古典に關する質疑應答の機關である。

私共が社殿の一切の珍什を見てから、宮司は社に近い彼の私邸へ私共を招いて、他の寳物を見せた。賴朝や秀吉や家康の書簡、昔の天皇の御宸翰、大將軍の直筆のもの、かやうな貴重文書が、夥しく杉の櫃に收めてある。火事の際は、直ぐさまこの櫃を安全の地に遷すことが召使どもの第一の任務であるだらう。

自宅でたゞ普通の日本式正服を着てゐる宮司は、一個の紳士としても、始め宮司として、その大きな白袍を着たのに劣ることなく莊嚴に見えた。が、いかなる主人公もこれほど親

切で、丁寧且つ寛大なるは稀れだらう。私はまた今は宮司と同じく日本服に着更へた、若い神官達の立派な姿なのに感心した。普通人と異つて、美はしい、鼻の高い、貴族的な顔――神官よりは寧ろ軍人の如き顔であつた。一青年は日本で滅多に見られない、堂々たる繁つた黑鬚を持つてゐた。

別れるに臨んで、親切なる主人公は御符――杵築の主神の二つの美しい畫像――と、社殿並に寶物の歴史に關する數個の書類を私に與へた。

一七

親切な宮司一行に別れを告げてから、神官佐々氏と外一名に案内されて、町の後ろの小灣、稻佐の濱へ行つた。佐々氏は和歌に巧みで、神道の歴史と尊い古典に通曉せる人で、濱邊を逍遙し乍ら、種々の珍らしい傳説を語つてくれた。

この濱は今は人氣の盛んな海水浴場で、風通しのよい小さな宿屋や、綺麗な茶店が海岸に並んでゐるが、稻佐と呼ばれるのは、こゝて大國主神が始めて正勝吾勝勝速日天の忍穂耳の命に、その出雲の領土を讓るやうに請求されたといふ神道の傳説によるのだ。稻佐と

いふ語は『然か、否か？』の意だ。古事記第一巻第三十二章に、その昔譚が載せてある。
私はその一部分を引用する。

『この二柱の神（鳥船の神と健雷の神）出雲の國伊那佐の小濱に降り着きて、十掬劒を拔きて、浪の穗を逆に刺し立てて、その劒の前に趺み坐て、その大國主の神に問ひ給はく、『天照大御神高木の神の命もちて、問ひに使はせり。汝が領ける葦原の中つ國は、我が御子の知らさむ國と、言依し給へり。かれ汝が心奈何ぞ』と問ひ給ふ時に、答へまつらく、『僕は得申さじ、我が子八重言代主の神、これ申すべき』……かれこゝに、その大國主のに問ひ給はく、『今汝が子、事代主の神、かく申しぬ。まだ申すべき子ありや』と問ひ給ひき。こゝにまた申しつらく、「また我が子、建御名方の神あり」』……かく申し給ふ折しも、この建御名方の神、千引石を手末にさゝげて來て、「然らば力競せん」と云ふ』

こゝの磯に近く稻佐宮といふ小祠が建つてゐて、力競に克つた武雷の神が祀つてある。して、濱邊に建御名方の神が指先きでもたげた大岩が、水から立上がつてゐるのが見える。それを千引の岩と呼ぶ。

そよ吹く風に面した一軒の小亭へ神官達を招待して、私共は食事を共にした。色々の話を交へたが、特に杵築と國造に關してであつた。

一八

僅々一つ時代を隔てた前までは、國造の宗教的權力は出雲全國に及んでゐた。彼は名義上並に事實上、出雲の靈的支配者であつた。彼の管轄區域は今は杵築の範圍を越えない。して、彼の正當なる稱號は、最早國造でなく、宮司である。

註。國造の稱は實際今猶存在してゐるが、何等それに關聯せる職務は無い。千家尊紀氏の父で、東京に住居せる千家男爵が、その稱號を有してゐる。『みつえしろ』の宗教的實務は、今は宮司の上に委ねられてゐる。

しかし僻陬の質朴な人々に取つては、彼は依然神聖又は半ば神聖な人物であつて、神々の時代から彼の家系に傳來せる、古い稱號によつて呼ばれる。往昔いかに深い畏敬が彼に捧げられたかといふことは、出雲の田舍人民の間に長く住まなかつたものでは、殆ど想像が出來ない。日本以外で、西藏の駄賴拉麻を除けば、恐らくは誰人もかやうに恭しく尊敬され、かやうに宗教的に愛されるものはあるまい。日本國内では、人民と太陽の間の仲介

者として立てる天子樣が同樣の敬意を受けたのみである。が、御門に捧げられた尊敬は、人物に對してよりは夢、實在に對してよりは名に向つて捧げられたのだ。といふのは、天子樣は隱れましますの如く、いつも目て見られないで、一般民衆の信念では、誰人もその顏を眺めると、生きて居られぬと思つてゐたからである。

註、一八九〇年頃でさへ、內地を多く旅行したことのある、或る在留外人から、ある地方では天皇の顏を拜すれば、死ぬると信じてゐる老人が隨分あると、私は聞いた。

見えないことと、神祕が御門の神々しい傳說を無限に強めた。が、出雲國內に於ける國造は、一般の目に映じ、また屢々民衆の間を往來し乍らも、殆ど同じほどの尊敬を受けた。だから、彼の實權は滅多に發揮しないまでも、出雲の大名の權力に殆ど劣らなかつた。實際それは將軍をして、彼に對して親善關係を有つのを得策と考へさせるほど大なるものであつた。宮司の或る祖先は、豐太閤をさへ物とも思はないで、平民から生れた人の命を奉じないと豪語して、軍勢を給することを拒んだ。この反抗が祟つて、領地を大部沒收されたが、國造の實力は新文明の時期に至るまで變らなかつた。

幾多のかゝる話の中から、二つの小話を擧げて、國造が昔時、尊敬を受けてゐた實例と

しよう〃

こんな話がある。或る人が、杵築大黒様の御蔭で富裕になつたからといふので、謝恩のため國造に裝束を贈らうと思つた。國造は丁寧にその申出でを斷わつた。が、敬虔なる信者は素志を主張して、仕立屋に裝束を造ることを依賴した。それが出來上つてから、仕立屋は依賴者がびつくり仰天するほどの直段を要求した。どういふ理由かと尋ねられてから、仕立屋が答へた。『國造の裝束を仕立ててからは、今後他人の衣服を造ることは出來ませぬ。だから一生暮らせるだけの金額が必要です』

次の話は百七十年ほど前のことだ。

松平家第五代宣維(のぶかず)の時代に、松江の藩士に杉原喜戸次といふのが、軍事上の資格で杵築に駐在してゐた。國造の御氣に入つてゐたので、每度國造と碁を鬪んだ。ある夜、對局の最中に、この士は不意に痲痺したやうになつて、動くことも、口をきくことも出來なくなつた。暫く誰も心配と狼狽を極めたが、國造は云つた。『この譯は分つてゐる。私の友は喫煙してゐた。私は喫煙を好まないが、彼の興を殺ぐのを欲しないので、それを告げなかつた。しかし神樣は私の氣分がわるくなつたのを知つて、彼に對して怒を發し玉ふたのだ。では、私は彼を癒やして上げよう』そこで、國造が呪文を唱へると、その士は直ちに回復

した。

一九

今一度私共はこの神聖な雲の國、傳說の國の靜かさの間を旅行して、熟せんとする稻が綠色數里に亙つて、祈禱の矢が白點々たる間や、神々の名を帶びた靑や靑綠の峯が遙かに列つた間を辿つて行つた。私共は杵築を遙かに後へ殘した。しかし大きな並木道、大きな注連繩のついた鳥居の長い列、宮司の莊嚴な顏、神官佐々氏の親切な微笑、雪の如き衣を着て美しい妖精のやうな踊をした巫女――それらがまだ夢にみる如くに見える。瀑布の砕けるやうな拍手の音が、まだ聞えるやうに思はれる。日本最古の宮の內觀といひ、人類學者及び進化論者の硏究に値する原始的禮拜の神聖なる器具や、異樣な儀式といひ、他の外人が、拜觀を許されなかつたものを見ることを得たのだと思ふと、私は幾分欣躍の情を抑へ難い。

が、私が見た如くに杵築を見たといふことは、唯一個の驚くべき社殿以上の或るものを見たといふことにもなるのだ。杵築を見るのは、神道の生ける中心を見る譯である。今は、

最早話されぬ言葉で書いてある古事記さへ、唯近代的記錄たるに過ぎないほど茫漠たる過去に於けると同様に、この十九世紀に於ても强く鼓動を打ちつゝある、古代信仰の命脈に觸れるといふことになる。佛教は幾世紀を經る內に、形式を變へ、又は徐々に衰頽して、初め單に外來の信仰として入つて來た日本の土地から、いよ〳〵失せて行きさうな運命にも見えるが、神道は變らないで、且つ活力も變らずに、依然としてその生まれた國で優勢を維持してゐる。して、時と共に力と威嚴を增して行きさうに見えるばかりだ。佛教は浩澣なる教理學、深遠なる哲學、渺茫として海の如き文學を有する。神道は哲學なく、倫理學も、心理學も持たない。しかしその實體がないために、西洋の宗教思想の侵入を拒ぎ得ることは、他の如何なる東洋の信仰にも優つてゐる。神道は西洋の科學に對して歡迎の手を擴げるが、西洋の宗教に對しては不可抗の敵となつてゐる。て、これと戰はんと欲する外國の熱狂者輩は、恰も磁力の如く說明し難く、空氣の如くに損傷されざる一種の力が、彼等の必死の努力をも打負かすのを見て驚いてゐる。實際西洋の極くえらい學者でさへ、神道はどんなものであるといふ事を未だ說明し得ない。神道は或る人々に取つては單に祖先崇拜のやうに見え、他の人々には自然崇拜が加つたものと見え、また他の人々には全然宗教とは見えないし、宣教師の中の無智頑迷の輩には、極めて劣等なる異教の形式と映ず

るのである。慥かに神道解釋の困難は、全く西洋に於ける東洋學者が、その起原を書籍に求めたといふことに歸するのだ。古事記と日本紀は神道の歴史であり、祝詞はその祈禱であり、またその最大學者、本居、平田は註釋を書いて居る。しかし神道の心髓は書籍にも、儀式にも、誡律にも存しないで、國民の心情の中に生きて居るのだ。神道は卽ち國民心情の永遠不朽にして、しかも無限に若々しい最高の感情的宗教的表現なのである。異樣な迷信とか、無邪氣な神話とか、奇怪なる魔術など、外部に露出せる鑛脈の遙かの裏面には、國民のあらゆる動機、能力、直觀を含める全部の魂、卽ち偉大なる靈力が潜在して慄へてゐるのである。神道の何たるを知らんと欲する者は、その神祕なる魂を知るやうにせねばならない。美の感覺、藝術の力、壯烈の火、忠義の磁力、信仰の感情などは、この魂の中に遺傳して含まれ、無意識的本能的になつてゐる。

註。古事記は書かれた本としては、唯だ西暦七百十二年に起原する。しかしその傳說と記錄が、口碑の形式で更に一層古い時代から存在してゐたことは知られてゐる。

自然を愛し人生を樂しむといふ點に於ては、日本人の魂は古代希臘人の魂と不思議にも似通つたものがある。これは左程學者でなくても認め得るほど明かである。私はこの日本

人の魂について幾らか知らうと欲してゐると共に、また將來いつかは、現今神道と稱せられ、もつと昔は神の道と呼ばれてゐた、あの信仰の生ける偉力に就て、語ることが出來得るかとも思つてゐる。

第九章　子供の精靈窟——潜戸

一

『髪の毛を三本動かす』ほどの風があつても、加賀へ行つてはいけない。が、全然無風の日といふのは、この荒い西海岸では滅多に無い。朝鮮、支那、又は北方の西比利亞から、日本海を越えて、西風或は西北風が、大抵いつも吹いてゐる。だから私は加賀(譯者註)へ行く好機會を得るために、數ケ月も長いこと待たねばならなかつた。

一番の近道によれば、先づ松江から車又は徒歩で御津浦へ行く。道路が出雲中で最も悪い一つであるから、距離は纔つと七哩のこの小旅行に、車で約二時間半ほどかゝる。松江の市を離れると、直ぐ湖水の如く平かな廣い野原へ出てる。一望田地で、樹木の生えた丘陵に圍繞されてゐる。道は一臺の車が漸く通るだけの幅で、この緑色の空寂の中を渡つて

から、向うの小高い處を登つて、また丘陵に圍まれたる、以前よりも大きな田野へと下りる。第二番目の丘陵を越える道は更に嶮しい。それから第三番目の野原を横過して、して、山といふ名にふさはしいだけ高い、第三番目の綠色の高處を越えねばならぬ。勿論徒步で登らねばならぬ。車夫に取つては空車を頂上へ引上げることさへ、少からざる骨折だ。道は石だらけで、荒々しく、激流の河床のやうだから、彼がどうして小さな車を損じないで引上げ得たのか、全く不思議だ。私は登るのに困難を感じたが、絶頂からの景色は、報酬に餘りがあつた。

それから下つて、まだ第四の廣い稻田を最後に横切らねばならなかつた。丘陵と丘陵の間に全然平かな廣野があること、こんな奇異な風に、丘陵が地方に區劃を作つてゐることは、日本の如き驚異の國に於てさへ、驚異の現象である。第四番目の稻の谷の向うに、以前より低くて樹木の茂つた第四番目の丘嶺があつた。その麓へ達してから旅客はいよいよ車を棄てて徒步で山へかからねばならぬ。この山の背後に海があるのだが、これから道中の最難處となる。道は小さな祠とか、高い籬をめぐらした綺麗な民家などの前を過ぎて、四五丁ばかり木蔭があつて、藪や小松や他の植物の生えた間をゆるく迂廻して上つて行く。すると、急に石段になつてくる。寧ろ石段の廢墟だ——一部分は岩を切り開いて、一部分

は築き上げたもので、到る處破れて磨滅してゐる——この石段は稜角がとれて、驚くばかり嶮しく御津浦へ下つて行く。決して滑ることの無い草鞋を履いて、田舍の人達はこんな道を輕快に馳せて、昇つたり降つたりするが、外國の靴では、殆ど一歩毎に滑べる。やつと麓まで達してから、いくら忠實な車夫の助力によつたとは云へ、どうして下りたのかと驚かれて、既に御津浦に來てゐることを暫しは失念してゐた。

譯者註。加賀浦は島根半島の脊梁山脈を越えて松江の北に當り、市の西北、ヘルン先生の舊宅のある邊より郊外に出で、最後に御津浦及び大蘆浦を經て陸路約四里。交通不便なる日本海岸の一小村である。今から三十八年前の昔に、かゝる僻陬の濱邊へ探討の足痕を印したことは、『知られぬ日本の面影』の著者が永遠の誇りの一であらねばならぬ。

二

御津浦は山を背にして、斷崖に取卷かれた深い小灣の奥にある。山麓には狹い一帶の濱があるのみだ。して、此村の存在するのは、その事實に因る。それはこの邊の海岸には濱が稀れだから。人家は崖と海の間に集まつて、苦しげに壓搾された光景を呈して、且つ何

となく大抵は船の破片て建てたやうな印象を與へる。小さな街、或は寧ろ小路は、小舟や小舟の髑髏といふべきものや、小舟の材木て滿ちてゐる。して、到る處に家屋よりも遙かに高い竹竿から、大きな、輝いた、褐色の漁網を吊るして乾してある。濱の曲線に沿うて、また小舟が相並んでつゞいてゐるので、舟を越えねば水際には行かれまいと思はるゝほどてあつた。宿屋はないが、車夫が何處かて加賀浦へ行く舟を傭ひに行つた間、私は或る漁師の家て休憩した。

十分も立たぬ内に、その家の周圍に、半裸の大人や、全裸の子供など、二三百人が集まつてきた。彼等は建物を閉塞した。彼等は外人を見るため、戸口に一杯に立つたり、窓へ上つたりして、室の光りを暗くした。漁家の老主人が抗辯しても駄目であつた。激語を吐いたが、群衆は夥しくなるばかりであつた。で、障子を悉く閉めた。が、紙に孔があつた。すると、すべて下方の孔では、好奇心に富める人々が交代して覗いて見る。上方の高い處の孔から、私は少々外を覗いて見た。群集は人好きのする相貌でなく、むさくるしく、愚鈍な、頗る醜い顏だ。しかし温和で無言だ。中に一人二人の綺麗な顏がある。他の概して粗末な顏の間に伍しては、異彩を放つて見えた。

車夫は遂に舟を雇ふことに成功した。して、私は車夫と私の包圍者全部に伴はれて、濱

邊へ突貫を成し就げた。濱の上の小舟を取除けて私共に通路が開かれ、それから私共は何等の故障もなく舟に乘り込んだ。私共の船頭は、櫓を漕ぐ者が二人だ――腰に唯六尺を卷いた老人が艫に居り、舳には全身着物を纏つて、松葉の如き笠を被つた老婦人が居る。無論二人とも漕ぎ出した。どちらの方が强いとも、どちらが一層上手に漕ぐとも言ひにくいだらう。私共乘客は舟の眞中の蓆の上に東洋風に坐る。眞赤に燃えた炭火を澤山備へた火鉢が、煙草を御吸ひなさいと云はんばかりに据ゑてある。

三

天空は世界の果てまでも靑く澄み渡つて、微かな東風がやつと海に皺を刻むほどではあるが、たしかに『髪の毛三本を動かす』だけ位ではない。然し船頭の男女とも心配さうな風に見えないので、私は有名な禁制も神話ではないかと疑ひ出した。透徹つた海水があまりに愉快さうだから、灣を出ない内に私は飛び込んで、舟の後方から泳いで行くといふ誘惑に從はざるを得なかつた。[譯者注] 舟へまた攀ぢ上つた時には、右方の岬を廻はる處であつた。して、この小舟は搖ぎ出した。こんな弱い風でも、海は長いうねりをして動いて居る。陸

が西の方へ走つてゐるのについて、外洋へ出ると、私が見た中で最も凄い海岸の一つの沖て、墨の如く黒い深海の上を走りつゝあつた。

暗黒で鐵色な絶壁のすさまじい線が、沙濱はなくて直ちに海となつてゐる處から聳えて、しかも頂上から下には一點の綠色も無い。この怖ろしい壁面に沿ふて、彼處此處に奇怪な突出や、罅隙や、地震の割れ目や、轉倒した處がある。すばらしい粉碎のために、天空へ向け擲げ上げられた地層が線を顯したり、或は地層が海中へ突入して、長さ數哩に亙つて立體形の絶壁が顚落してゐる。想像もつかぬ形の穴の前に、巨大な岩塊がすべて凶悍猛狀を呈して、深淵から立上つてゐる。して、今日は風が息を抑へてゐるらしいが、白浪は絶壁の遙か上まで打ち上げて、碎けた岩面へ泡沫を投げつけてゐる。私共は沖に遠く離れてゐるから、磯浪の雷音を耳にしない。然しその凄い稻妻の光は、充分に髮の毛三本の話を說明する。成る程、荒天の日に於て、この妖怪の如き海岸一帶では、どんな强い游泳家でも、どんな堅牢な船でも、助かる見込はあるまい。何處にも足がかり、手がかりの場所はない。たゞ鐵壁に向つて暴ばれ狂ふ海があるばかりだ。今日でさへ、最も微弱な風の呼吸の下にも、大きなうねりがざんぶりと舷側に當つては、私共に飛沫を浴びせる。して、二時間といふ長い間、この壁岩で睨めつけるやうな顏をした海岸が、舟の側に屹然としてゐ

て、進むにつれて、岩礁がぐるりに黑い齒の如くに現れる。して、始終遠い彼方には執念深き斷崖の脚下に、碎けた浪の泡が光つてゐる。しかしうねりが通る際に漣を起したり、水を撥ねたりする音と、櫓杭の上で軋る單調な櫓の響の外、何等の音もない。

たうとう大きな綺麗な灣が見えた。薄綠色の丘陵が半月形をして連つて、遙かに青い山脈がその上に聳えてゐる。灣の最遠の一地點に小村があつて、その前面に多數の船が碇泊してゐる。これが加賀浦なのだ。

が、私共はまだ加賀浦へは行かない。潜戸（くけど）は其處ではない。灣の廣い口を横切つて、凄い懸崖は更に半哩ほどついて行つて、それから露出した閻王岩の高い岬に向つた。岬の威嚇する如き麓に沿うて行つて、その横を通りぬけると、忽然、一角に驚くべき洞孔の半圓形の口が開いてゐる。洞孔は廣く高く且つ充分明るく、床は無くて、海である。中へ入ると、二丈も下の岩礁が見える。海水が空氣の如く明澄だ。これを新潜戸といふのだ。しかも人間の歴史よりは十萬年も古いに相違ない。

譯者註。ヘルン先生は夏を愛し、水泳を好み、水泳に巧みであつた。美保の關の海水浴場などでは、漁師達もその上手なのに感服してゐた。海豚さへ居ない海ならば、半日でも沖の方で游いで居ることが出來ると、譯者に語られたこともあつた。たしかに加賀浦への舟行には、海は幾多の誘惑を與へた。先づ舟が御

津浦を出でると、飛び込んで舟について泳いで行つた。潜戸の洞内の蒼淵は非常な衝動を與へたが、舟人の諫止で思ひとゞまらざるを得なかつたのは、頗る御不平であつたと、當時同行された小泉夫人は思ひ出話なされたことがある。

四

これよりも優れて立派な海の洞窟は、想像に描くことも殆ど出來ないだらう。海が高い岬の内部へトンネルを貫いて、また偉大な建築家の手腕を見せて、その堂々たる作品に肋材を施し、稜線を附け、磨きをかけてゐる。入口の弓形門は慥かに海拔二丈、幅一丈五尺もある。數へきれぬほどの波の舌が、圓天井と側壁を舐めて、非常な滑らかさにしてゐる。進むに從つて岩の屋根は段々高くなり、且つ水路は廣くなる。すると、不意に頭上から滴つた清水の大村雨の下を通つた。この泉を新潜戸さんの御手水鉢又は御滴水(みたらし)といふ。この邊の高い天井から大きな石が外づれて、惡心の者がこゝへ入らうとする際に、落ちて來ると信ぜられてゐる。私は無事にその試錬を通過した！

進行中、突然船頭の女が舟底から石を一つ取つて、強く船首を叩きだすと、洞壁の反響

が窟中に雷鳴の如き震動を繰返した。それから、直ちに大きな光りが急に洩れて來る處へ出る。この光りは右の方にある高い壯麗な拱廊の入口から差しこむので、その口は直角に曲つて洞内へ開いてゐる。初めは光りが下方から發するやうに思はれたが、これて長い圓天井の不思議な明るさが分つた。それは入口がまだ見えないのに、水面に光りが漲つた如く見えるからだ。この大きな弓形門を通じて碧水數哩の彼方、離散せる礁の間に、一帶の綺麗な綠色のうねうねした海岸が見える。舟は入つてきた口とは反對に當る第三の入口の方に進んで、神や佛の住み給ふ處へ入つた。この洞窟は神道からも佛敎からも尊まれてゐるのだ。こゝて潜戸は一番高く且つ廣くなつてゐて、天井は優に水上四丈、兩側は三丈も相隔つてゐる。右方遙かの上に天井に近く白い岩が突出してゐて、岩の上の孔口から岩の色と同じく白いやうな流れが徐々と滴下する。

これが傳說的な地藏さんの泉であつて、死んだ兒童の幽靈が吸ふ乳の泉である。流れやうの遲速はあつても、晝夜滾々と止むことがない。て、乳の不足に困まる母達が、こゝへ參つて、乳を與へられるやう祈れば、その祈願が叶ふ。また自分の子供に對して有り餘る乳を持つた母達も、こゝへ參つて、施し得るだけの量は死んだ兒童に取上げて下さいと地藏さんに祈る。すると、その祈願が叶つて、乳量が減じてくる。

兎に角、出雲の百姓どもは、かやうにいつてゐる。

洞外の岩礁にぶつかるうねりの反響、潮流が洞壁に激してぺちや／＼する音、滲じみ出てる水のぽた／＼落ちる重い雨、漣の舐る音、ごろ／＼する音、撥ねる音、何處から來るともわからぬ神祕な響などのため、お互の話聲も聽き難い。洞窟の中は聲音に滿ちて、恰も目に見えぬ群集が、騷々しい話をしてゐるやうに思はれた。

私共の乘船の下では、深底の岩が悉く玻璃の中にある如く、よく眼に映ずる。私にはこの窟内を通つて泳いで、冷つこい陰の中を潮流と共に漂つて行つたならば、これほどの快事はあるまいと思はれた。しかし私が今しも飛込まうとすると、舟中の他の人々が、はげしく反抗の叫びを擧げた。死ぬるにきまつてゐる！僅々六ケ月前、こゝへ飛び込んだ數名の人達は、それつ切り紛失して了つた！こゝは神の海だ！して、恰も私の誘惑を呪ひ拂はうとするかの如く、船頭の女は再び小石を捉へて、怖しく船首を叩いた。が、是等の不意の死亡と行衞不明の物語によつて、まだ私を全くは引留め得ないものと見て、彼女は突然私の耳へ魔力的な言葉、

『鱶！』

と叫んだ。

鱶！もはや私は轟々と響き渡る新潜戸の中を、泳いて通りぬけようといふ希望を止めた。私は熱帶地方にゐた經驗があるのだ！

て、私共は直ちに舊潜戸へ向つた。

五

神の海についての戰慄すべき空想に對しては、鱶といふ言葉は滿足な說明を與へたのであつた。しかし何故に小石て長い間、船音を叩いて、高く淒い音をさせたのだらう？その石は正しくたゞそのために、船中に藏めてあるらしい。その所作には誇張的な熱心ぶりがあつた。そのために私は或る薄氣味のわるさ——夜間淋しい道を歩いて、奇怪な影が滿ちてゐるとき、あらん限りの聲を立て、歌ひたくなるやうな氣分——を感じた。初め船頭の女は、叩くのは、たゞ奇異な反響を起すためだと明言した。が、私がもつと用心深く質問して見ると、その所作には更に不吉な理由のあることを發見した。またこの海岸のすべての男女水夫は、危險な場所、卽ち魔が棲むと信ぜらるゝ處を通るとき、これと同じことを

行ふのだと聞いた。魔とは何だ？
妖怪なのだ！

六

神の窟から約四五丁引返へしてから、黒い絶壁の長い線に大きな垂直の皺が寄つた處へ眞直に進むと、すぐその前に黒い巨岩が海から屹立して、激浪の泡で撓られてゐる。それを廻つて背後へ出ると、水が穏かで、懸崖へ生じた奇怪な裂隙の陰だ。突然思ひもよらぬ一角に、別の洞孔が口を開けてゐる。直ちに舟はその石の敷居に觸れて、小さな激動が地獄の谷の如き處にひゞき渡つて、寺院の太鼓の如く長い朗かな音を起した。一目見てこゝは何處だとわかる。暗い奥の方に青白い石に笑を含んだ地藏さんの顏が見えて、その前やすべてそのぐるりには、形狀の崩れた灰色の恰好のものが、凄い光景を呈して集まつてゐる。無數の奇々怪々の形のもので、墓地の頽れた跡かと怪しまれる。窟の畝立つた床はもつと奥の窟の黒い入口まで、海から奥へ段々暗くなる影の中を高い勾配をなして、無數の滅茶滅茶に壞れた墓のやうな形のもので、その傾斜面は蔽はれてゐる。然し眼が薄暗に馴

れてくると、墓ではなかつたのだと判明してくる。たゞ長い間辛抱して、骨折つて器用に積上げた石や、小石の小さな塔なのだ。

『死んだ子供の仕事』と、私の車夫が哀憐を含める微笑を浮べ乍ら囁いた。

それから私共は舟から上つた。岩が非常に滑り易いから、私は注意によつて、靴を脫ぎ、私に準備してあつた草履を履いた。他の人々は跣で上陸した。しかしどうして進むべきか、直ぐそれに窮した。澤山の積み石が非常に密接してゐるので、足を容れる餘地もないやうだ。

船頭の女房が案内に立つて、『まだ道があります』と云つた。

女の後へついて、右の壁と二三の大きな岩の間へ身體を窄めてはひると、石塔の間に狹い通路を發見した。しかし子供の亡靈のために、注意を拂ふやう私共は警告を受けた。もし亡靈の作つた塔を顚覆すると、泣くだらうから、徐々と極めて用心をして、積み石のない地面へ渡つて行つた。崩れかかつた層の碎屑の砂が、薄く一面に岩床の上に推積してゐた。して、その砂中に僅か三四寸の長さて、子供の小さな跣の輕い痕がついてゐた――幼兒の亡靈の足痕なのだ。

もつと早く來たならば、もつと澤山あつたでせうと船頭の女が云つた。夜間、窟の地面

か露や天井の滴て濕つてゐる時に、亡靈は足痕をつけるので、日が暖かくなつて砂や岩が乾いてくると、小さな足の印痕は消えてしまふ。

たゞ三つ足痕が見受けられた。しかしそれが異常に判然としてゐた。一つは洞壁の方へ向ひ、他の二つは、海の方へ向つてゐた。洞中の彼處此處に、岩の裥や突起の上に、小さな草履が横つてゐた。子供の足が石のため傷を受けないやう、參詣者が献げたのだ。が、すべて亡靈の足痕は裸足の痕である。

それから用心して石塔の間の道を拾ひ〳〵に、奥の窟の口の方へ行つて、その前にある地藏の像へ達した。花崗石に刻せる、坐つた地藏だ。片手には一切の願が叶ふ功德を有する神秘の玉を持ち、片手には錫杖を持つてゐる。その前へ小さな鳥居が建つてゐて、しかも一對の御幣がある。神道が妙に謙遜してゐる。このやさしい佛は確かに敵を有たないのだ。兒童の亡靈を愛し玉ふ地藏の足許では、神佛相提携してやさしい敬意を捧げてゐる。

地藏の足といつたものゝ、この窟中の地藏はたゞ片足しかない。地藏が安坐せる彫刻の蓮華は折れて壞れてゐて、二枚の大きな花瓣は失くなつて、その一枚に載つてゐたに相違ない右足は、踝の處てこはれてゐる。これは訊いて分つたが、波のわざである。暴風の折、波は狂鬼の如く洞内へ突進し、あらゆる小さな石塔を一掃して礫にし、石像を岩に投げつ

ける。しかしいつも暴風後始めての穩かな夜間に、元々通り再建される。

『佛が心配して、泣き〳〵積み直します』亡靈が悲しんで、泣き乍ら復た石を積み上げて、祈願の石塔を再築するのである。

奥の小洞の黑い入口を繞つて、骨の色を帶びた岩が恰も一對の大きな口を開けた顎に似てゐる。この陰氣な門からは、洞床が段々深い暗い罅隙の中へと傾斜して行く。して、視力が暗黑に慣れてくるに隨つて、その中には更に大きな石塔が見え出した。塔の先きに當つて、窟の隅に、各一個の鳥居を供へた三體の地藏が、微笑してゐた。こゝで私は前進しようとしたとき、不幸にも、先づ一ヶ所の積石を覆へし、それからまた他の一ヶ所のを倒した。私の車夫も殆ど同時に更に他のものを倒した。だから贖罪として、私共は六個の新しい塔、即ち私共が轉覆させた數の二倍のものを建てねばならない。私共がその仕事に忙殺されてゐるとき、船頭の女房は、終夜洞内に留つた二人の漁師が、目に見えぬ群集の遠い低い音や、子供の集まつて囁き合ふ如き言葉の聲を聞いたことを物語つた。

たゞ夜間にのみ子供の亡靈は出てきて、地藏の足許へ小さな積石を築く。して、毎夜その石は變はるのだといふ。何故晝間誰も見てゐない折に働かないだらうか、との私の質問に對して、『お日樣が御覧になるかも知れません。亡靈は餘程お日樣を怖れます』との答へを受けた。

『何故、亡靈は海から來るか？』との私の問に對しては、滿足な答へが得られなかつた。然し疑ひもなく、この國民の奇異なる想像の中ては、他の諸國民の想像に於けると同じく、海の世界と死人の世界の間には、神祕な怖ろしい連絡があるといふ、原始的な考へが依然殘存してゐる。盆の魂祭りの後、七月十六日に流される藁の小舟に乘つて、亡靈がその暗い國へ歸るのは、いつも海の上を通つて行くのだ。たとひ精靈舟が川へ流される場合も、或は亡靈の道を照らすため湖水や、運河へ燈籠を浮べるにしても、或は子供を失つた母親が、百枚の地藏像の刷り物を川の流れへ投ずるにしても、かやうな敬虔な所業の裏に潛む漠然たる思想は、一切の水は海に流れ、海はまた幽冥界へ流れて行くといふことである。

今日の經驗――暗い洞窟、暗黑の中へ上つて行く灰色の石の群、小さな跣の微かな痕、微笑せる奇異な佛像、それから海水の途切れ〳〵の音が、奥へ運ばれ、嗄れた反響によつて數が加はり、混じり合つて、賽ノ河原の低い群音のやうにひゞく、一つの大きな淒い囁き――かゝる光景と音響を伴へる今日の經驗が、他日何處かで、夜間復た私に現れてくることがあるだらう。

それから舟は紺碧の灣を渡つて、加賀浦の岩石多き磯へ、水面を滑るが如く行つた。

八

御津浦と同じく、海際には漁船が澤山密集して列んで、舳を海の方へ向けてゐる。して、その後にもまた列んでゐるので、やつと無理にその間を通り拔け、濱を越えて、眠さうな、綺麗な異樣な小さな町へ出た。始めて上陸した時に、町の人は皆眠つてゐるやうに思はれた。船尾に坐つてゐる一匹の猫が、唯一の生物と見受けられた。しかもその猫も日本の信

仰に從へば、眞正の猫でなくて、お怪け、または猫又かも知れぬ——それは長い尻尾を持つてゐたから。この町にたゞ一軒しか無い旅館を發見するのが、なか〳〵難事であつた。何れの家にも看板はなく、皆、漁師又は農夫の私宅のやうであつた。が、この狹い土地も逍遙の價値があつた。こゝでは、一種黃色の漆喰を用ひて、壁の外面が塗つてある。輝いた晴空の下に於けるこの明かるい黃色は、小さな町に頗る快活な趣を與へた。

たうとう宿屋を見附けると、はひるまでに隨分待たなければならなかつた。障子や戶は皆開けてあるが、誰も寢てゐたり、他出してゐて何の用意もしてはない。たしかに加賀浦には竊盜はゐないのだ。この宿は小丘の上にあつて、本町通（他は唯だ小さな路地に過ぎない）から石段の小さな坂を二つ上つて行かれる。すぐ道の向うに禪寺と神社が殆ど相並んで見える。

漸くのことに、腰に至るまで裸體の、泉の女神のやうな胸をした、若い綺麗な女が驚くほどの速さで宿屋へ戾つてきた。私共の傍を急いで家へ入るときに、笑顏をして低く禮をした。この小さな人物はお嘉代さんといふ給仕女だ。この名は『多年の幸福』といふ意味てある。やがてお嘉代さんは立派な着物を全身に纏つて、敷居の處へまた現れ、愛嬌よく私共に入るやうに迎へてくれたので、私共は非常に欣んで入つて行つた。さつぱりした、

廣い室であつた。杵築大社から戴いた神道の掛物が、床にも壁にも掛けてあつた。一隅には、また綺麗な禪宗の佛壇があつた。（厨子の形狀とその内部にある崇拜の像などは、宗派に隨つて異る）妙に室が暗くなるのに、俄かに氣が付いて、見廻はすと、戸口や窓や一切の隙間には、私を見ようと思つて、無言で笑顏を帶びた群集がぎつしり立塞がつてゐる。加賀浦にこんなに多くの人民があるとは案外であつた。

日本の家屋は、熱暑の季節中、微風の通ふやうに一切開放したまゝだ。窓の役目をする障子も、また他の季節に於ては室と室を劃する不透明の屏障も、すべて取除けられて、建物の骨骼の外は、床から天井に至る間に、何も殘つてゐない。住居の中は文字通りに障壁無しで、何れの方向へでも見通し得られる。宿屋の主人は群集がうるさいから表の方を閉めた。無言で笑顏を帶びた群集は背後へ行く。背後を閉めると、家の左右へ集まる。で、左右とも閉めねばならなくなつたから、暑さは堪へ難くなつた。すると、群集は穩和な抗議をした。

そこで主人は寢に障つて、議論と理窟で群集を叱つた。しかし大聲を立てない。（この邊の人は怒つても大聲を立てない）主人が云つたことを、語意を弱めて飜譯すると、次のやうなことである。

『あなた方は、まあ、非道いことなさる。何が珍らしいもんだ。
『芝居だねし。
『輕業だにやし。
『角力だなし。
『何が面白いもんか。
『御客樣だぜ、こりや。
『今御食べなさる時ね、見るのは悪いことだ。御歸へりなさる時ねは見てもえい』
しかし戸外で、柔かな笑聲が懇願をつゞけてゐる。氣をきかして、宿の女達にばかり願つてゐる。亭主の方はなか〳〵感動されぬから。して、願ふ方もまた理窟を言つた――
『おばさん！
『お嘉代さん！
『障子開けてごしやつしやい。見せてごしやつしやい。
『見たてゝも、見て減るもんだねわね。
『だけん、見せんやうにせんてもえいわね。
『早、だけん、開けて』

この無邪氣な、おとなしい人達に見らるゝのが、私としては別に厭らしくも、煩さくもないから、家を閉ぢることは欣んで差止めたいが、主人自身に迷惑を感じてゐるらしいから、私は干渉することを欲しなかつた。しかし群集は立ち去らない。段々増加してきて、私の出て行くのを待つてゐる。後方の高い窓には、その障子紙に數個の孔があつた。すると、孔へ達しようと、小さな人影の上るのが映つた。やがて何れの孔にも、人の眼が覗いてゐた。

私が窓に近寄ると、覗いてゐた者どもが、こつそりと地面へ下りて、きやつと弱い笑聲を立てて逃げる。が、また直ぐ戻つてくる。これほど面白い群集は、想像することも出來ないだらう。大抵男兒も女兒も暑いから半裸體であるが、蕾の如く新鮮て、清潔だ。驚く許り綺麗な顔も澤山あつて、あまり快感を與へないやうな顔は極く僅かだ。が、大人や老婦人は何處に居るのか知らん。實際これは加賀浦の人達てなくて、賽ノ河原の者のやうだ。男兒は小さな地藏さんのやうだ。

食事の間、私は梨や大根の小片などを、障子の孔から外へつき出して面白がつた。初めは人々が大いに躊躇したり、銀聲の笑ひを洩してゐたが、やがて小さな手の影法師が、用心深げに屆いてきて、一つの梨は消失する。それからまた第二の梨も攫まないて、宛然蟲

靈がそれを我が物としたかの如く手柔かに、取られて了う。その後は、ある老婦が『魔法使ひ』といふ言葉を叫んて、恐慌を起こさうと務めたにも關らず、躊躇は止つた。食事が終つて、障子も取除けられる頃には、お互に仲の好い間柄となつた。群集はまた元の通り四隅から靜かに觀察を續けた。

私は御津浦と加賀浦の若い人達ほど、二つの村民の容貌に顯著な差異を見たことはない。しかもたゞ二時間の航程を隔てるだけだ。日本の僻陬では、西印度のある島々に於ける如く、僅かばかり隔離せる住民間に、特種な容貌の發達を示してゐて、山の此側の村民は極めて美しいのに、彼側の部落では、全然人好きのせぬ顏が多いこともある。が、この國の何處に於ても、私は加賀浦の一少女ほど綺麗なのを見たことはない。

『お踊りの時ね、見てもえい』私共が灣へ下りると、村中のものが、久しく外出したこともない古老までも一緒になつてついてきた。下駄の音の外に聲を立てもしない。かやうにして私共は舟へ護送された。濱邊に引上げてあつた舟といふ舟には、若い者どもが輕く攀ぢ上つて、船首や船緣に坐つて、不思議な『見ても減るものでねぇ者』を凝視した。して、皆、微笑してゐた。しかし、相互にさへも言葉を發しない。兎に角、誰も寢てゐるといふ

感じを私に與へた。柔かて、溫和て、且つまた奇異て、恰も夢に見る光景であつた。して、舟が青く光つた水の上を走つて去るとき、私が顧望すると、半圓形に列んだ小舟の上に、村民が皆控へて、まだ見詰めてゐた。子供の細い褐色の脚は、舷からぶら下がり、天鵝絨の如く黑い頭はじつと日光を受け、男兒の顏は地藏さんの如き笑顏をして、黑い優しいすべての眼は、まだ倦きることなく、『見ても減るものでね者』を注視してゐた。この光景が、あまりにも迅速に段々と遠くなつて行つて、掛物の幅ほどに小さくなつたとき、私はこの最後の眺めを買つて、床の間へ掛けて、折々それを觀賞したいものだと、空望を描いた。が、次の瞬間に、舟は岩の岬を回つて、加賀浦は永遠に私の眼から消えた。一切萬物は、このやうに失せ去るのだ。

たしかに、最も長く記憶に殘り、いつまでも思出でに浮んでくる印象は、最も一時的なものだ。私共は分間よりは瞬間を、時間よりは分間を遙かに數多く覺えてゐる。それから、全一日を記憶してゐる人があるだらう？人の一生に於て、記憶されたる幸福の總量は、秒間が積んで作つたものだ。微笑ほど果敢ないものがある？しかも消え失せた微笑の記憶が、いつ滅びる？またその記憶が喚び起す、やさしい恨が、いつ滅びる？

或る一個人の微笑に對する愛惜の念は、一般の人情に幾分共通である。が、ある地方民

全體の微笑、抽象的性質として見たる微笑に對する愛惜の念は、たしかに稀有の感じてあつて、それはたゞ人民が恰も彼等の拜する石地藏の如く、永久に微笑してゐる、この東洋に於てのみ經驗せられることだと、私は思ふ。して、この貴重な經驗は既に私のものとなつた。私は加賀浦の微笑を名殘惜しく感じてゐた。

同時に、妙に凄い佛教の傳說が思ひ出された。嘗て佛陀が微笑んだ。すると、その微笑の不可思議な光りによつて、無限の世界が照らされた。しかし、そこへ或る聲が聞えた。『これは眞實てはない！これは永續する譯に行かない！』して、光りは消えた。

第十章　美保の關にて

關はよい所、朝日をうけて、
大山嵐が、そよ〳〵と。——美保の關の歌

一

美保の關の神樣は雞卵が嫌ひだ。だから雌雞や雛も嫌ひて、就中雄雞は大嫌ひだ。て、美保の關には雄雞も雌雞も雛も卵もない。卵の重さの二十倍ほど金貨を奮發しても雞卵は買へない。

何んな小舟大船汽船も、雛の羽毛さへ美保の關へは積んで行かぬ。況して卵は猶更のことである。實際誰でも、もし朝食に卵を食べたならば、翌日まで美保の關へ行つてはならぬことになつてゐる。それは美保の關の神樣は、船頭の守護神、また暴風鎭定の神なので、卵の臭さへ神社へ持ち行く船も罰が當たる。

松江から毎日美保の關へ通ふ小蒸汽船が、嘗て往航の際、今しも外海へ出てから案外

恐ろしい天候に出逢つた。水夫共は、何か事代主命の御機嫌を損ずるやうなものが、竊かに船中へ持込まれてゐるに相違ないと主張した。乘客一同に尋ねて見たが、何も分らなかつた。突然船頭は或る客の吸つてゐる眞鍮の煙管に、雄雞の鳴いてゐる圖の彫刻を認めた。その客はいかにも日本男兒らしく、死を犯して平然と喫煙してゐた譯であつた！言ふまでもなく、その煙管は船の外へ擲げ棄てられた。すると、怒濤は鎭まつてきて、船は無事に神聖な港へ入り、神社の鳥居の前の沖へ投錨した！

二

雄雞が美保の關の大明神にかくも嫉視され、土地から放逐されてゐる譯には諸說あるが、その要領はかうである。古事記にある通り、大國主命の子、事代主命は美保の岬に行つて鳥を追ひ魚を漁つてゐた。また他の理由もあつて夜間外出をしたが、夜の明けぬ内に家へ歸らねばならなかつた。信賴した召使の雄雞が、命の歸るべき時刻がくると、元氣よく鳴く任務を帶びてゐた。然るにある朝、雞がその務を忘れたので、命は慌てて舟に歸り、橈を取落し、兩手で水を掻いて、獰惡な魚に手を嚙まれた。

美保の關へ行く途中に當る中海に沿ふた安來町の人民は、この事代主命を頗る崇敬してゐるが、安來には澤山雞も居れば卵もある。また安來の卵は大いさといひ質といひ無類である。それて安來の町民は、美保の關の人々のやり方よりも、卵を食べた方が一層よく明神に仕へ奉る所以てあると主張してゐる。それは人が雞を一羽食べるか、卵を一個噉めば、事代主命の敵を一つ滅すことになるから。

三

汽船て松江から美保の關へ行くのは、晴天ならば愉快な旅てある。中海の美しい潟から外海へ出ると小蒸汽船は左方に當る出雲の長い海岸に沿ふて行く。この海岸は高く聳えて、丘陵絶壁が海から屹立し、大概山頂に至るまて綠色て、また層をなして耕作した所も澤山あつて、階段を疊んだ綠色のピラミッドのやうだ。崖下は岩がちて、而してこの海岸の珍奇な皺目は太古の火山作用を想はせる。遙かの右手、青い靜かな海のかなたに、伯耆の長い低い濱が蜃氣樓のやうに見える。その遠く連る濱は、青い水平線を無限の白い筋て縁を取つたやうだ。猶その先きに森や雲のやうな丘陵の漠とした輪廓がある。それから一切の

ものの上に超然として高い空にヌッと聳えてゐるのが、壯麗な幽靈のやうな大山（だいせん）の姿て、その頂上には雪の線條がある。

　かやうにして多分一時間位、出雲と伯耆の間を航行する。左方の峨々たる海岸には、折折谷間の小村落が隱見する。右方の茫平たる海岸は始終變はらない。やがて突然小蒸汽船は汽笛を鳴らし、左舷の怖ろしげな岬に向つて進路を取り、その裾の岩礁に沿ふて走ると、先刻までは眼界から遮られて見えなかつたが、何ともいへない立派な灣に入る。陸地へ喰込んだ貝殼形の罅隙――凸凹多き綠樹蓊鬱たる丘陵で圍まれ、水が澄んで深い半圓形の灣。灣頭を囘つて並んでゐるのが、頗る異樣な小さな町、美保の關なのである。

　灣に濱はなく、たゞ石垣の埠頭が半圓形をして、その上が家屋、そのまた上が綠色の神聖な丘陵となつてゐる。森の蔭から社殿の屋根の角が見える。家々の裏口から石段が深い水へ下つてゐて、大抵小舟がつないてある。私共の汽船は美保神社の沖へ碇をとめた。神社の石を敷いた大きな通路は水際まで傾斜して、この石段にも小舟が繋いてある。廣い門路を見上げると、巍然たる石の鳥居、巨大なる石燈籠、それから高い臺に坐して一丈五尺ほどの高さから人を見おろしてゐる二頭の壯麗な彫刻の唐獅子などが見える。是等の向うの方に、外庭の塀と門が見え、その向うに大きな拜殿の屋根が見え、それからもつと高

い本殿の千木が、緑色の山を背景としてクッキリと見える。大阪から來た新式の遠洋航海の船も二艘泊まつてゐる。切石で築いた頗る面白い小さな防波堤があつて、先端には石燈籠が載つてゐる。突堤と小島とをつなぐ彎曲した可愛らしい橋があつて、島には水の女神、辨天の祠が見える。

卵が手に入るかしらんと、私は考へた。

四

島屋といふ宿屋の可愛らしい給仕女に向つて、私は素知らぬ顔をして、しかし心では濟まないと思ひ乍ら、こんな怪しからぬ問を發した。

「あのね、卵はありますか」

觀音さまのやうな微笑を含んで、女は答へた。

『へえ、家鴨の卵が少しござります』

是は驚嘆の至りであつた。それては卵がござりまするのだ――家鴨のが。

しかし此處には家鴨は居ない。海水ばかりの町に住んでは、家鴨も生甲斐があるまい。

また家鴨の卵は悉く境港から持つて來るのである。

五

この綺麗な小さな宿屋は、二階から海を見おろし、三日月形の美保灣の殆ど一方の端にあつて、神社は殆ど他端にある。それで神社へ詣るには、全町を通らねばならぬ。左もなくば舟で灣を渡らねばならぬ。しかし町は一見の價値がある。海と山麓の間にギッシリ詰つてゐて、一本筋の町だけの餘地がある。しかもこの一本の町が非常に狹いから、どこでも灘側の家の二階から岡側の向うの家の二階へ飛べる。庇や磨いた緣側や風にひら〳〵してゐる模樣のついた暖簾などで、狹いけれども亦綺麗である。この本通から數個の小路のある所には長い小舟が着いてゐて、舳を突込まんばかりに埠頭の端へ出だしてゐる。私は水の中へ入つて見たいといふ氣になつて堪まらないので、神社へ詣る前に宿の背後から、一丈二尺の深さの透明な水中へザンブと飛びこんで、灣を横切つて一ト泳ぎをして身體が涼しくなつた。

神社へ詣る途中、澤山の小さな店先に竹を編んで作つた籠や、器物の面白い陳列を目撃

する。精巧な竹細工品がこゝの名物である。大抵の參詣者は土産として、何か小さな品を買ひ求める。

美保神社は建築からいふと、出雲の普通の神社より別段目立つたものではないし、又内部の裝飾も一々說明するほどの價値がない。たゞ花崗石の鳥居の下、大きな唐獅子と石燈籠の間にあつて、平坦な敷石が一面に廣く傾斜した門路は壯麗である。境內に入つては堅い靑銅の華麗な手水鉢の外、左ほど見るべきものはない。これは數噸の重さを有し、費用が數千圓もかかつたに相違ないが、寄進に係るものである。もつと粗末な奉納品には、拜殿の右の社務所に珍奇な蒐集がある。暴風に出逢つた船が事代主命の威力に導かれ、又は救はれて港へ入る光景をかいた、異樣な意匠と彩色を施した繪がズラリと掛けてある。これは船頭達が献上したのだ。

お札は出雲の他の著名な神社のものほどに珍奇ではないが、頗る熱心に求められる。あの數匣で賣られる、神名と誓約の數語を書いた白い紙片は、竹竿に結んで、この近國のあらゆる田畠に立ててある。こゝで賣られるもので、最も珍奇なのは稻の種子の小さな包だ。祈を唱へ乍ら、この種子を蒔けば、何ても願ひのまゝのものが、その種子から生ずるとのことである。竹、綿、豌豆、蓮、又は西瓜、何ても構はない。たゞその種子を蒔いて、信

じてさへすれば、望みの作物が生える。

六

美保神社のお札よりも、もつと私に取つて興味あるのは、神社の上の美しい丘頭に立つ寶壽寺の瑤珞だ。日本の少女に於ける、あらゆる美はしく純なるものの理想を表した觀音の三十三の諸相、即ち三十三觀音の像が並列せる壇の前に、數多の珍らしいものが集合して、異様な輝いた色の一團塊となつたのが、天井から垂下してゐる。さま〴〵の色の毛絲や、綿絲の球が幾百もある。絹の束絲や、絹織及び綿絲織の模樣がある。雀や他の生物の形をした、刺繡を施せる袋がある。竹の編みものや、針仕事のいろ〳〵の製作品がある。すべて是等は小學校の女兒が、一切の優美と慈悲の童貞母に對する奉納品だ。幼女が婦人の仕事——裁縫、織機、編物、刺繡など——を幾らか習ひ出すと、彼女はその初めて立派に出來た作品を、寺へ携へてきて、『美はしき眼』のやさしい神、『祈願の聲を見おろし玉ふ』女神に捧げる。幼稚園の子供さへ、彼等の最初の作品——彼等の小さな、花の如く柔かな手で、いろ〳〵の型に切り拔いたり、組んだりした、綺麗な紙片——をこゝへ持つ

てくる。

七

美保の關は晝間は極めて靜かで眠さうだ。たゞ長い間を置いて、子供の笑聲や舟を漕ぐ水夫の歌が聞える。その舟は熱帶以外で私が見た中では、最も異常なもので、御座船のやうにどつしりしてゐて、動かすに十人も要る。水夫は丁字形の柄が附いた橈（丁といふ字の下端を延長して橈身にしたと思へばよい）を用ひて、眞裸で仕事にかかる。一漕ぎ毎に足を舷に押當てて力を橈に與へ、手を停める都度、奇異な繰り返しの文句を歌ふ。その柔かな哀調が、私をして西印度の海邊で聞いた、西班牙種のクリーオール人の古曲を想ひ出させた。

アラ、ホーノ、サノサ、
イヤ、ホー、エンヤ。
ギイ、
ギイ。

歌は長く高い音で始まつて、極少々づゝ一字毎に低くなつて、終ひに殆ど不分明な微聲になつて消える。それからギイ、ギイと櫓音が響く。

しかし夜分は美保の關は、西部日本での最も騷がしく賑かな小港だ。灣の一角から他端まで宴會用の高い燭臺の燈光が水に映る。全體の空氣は酒宴の聲音で鼓動する。鼓の響、少女のうるはしい悲しげな歌、三味線の鳴る音、踊のとき拍子に合せて手を拍つ音、拳をうつ人が盛に叫び笑ふのが到る處に聞える。これは皆船頭達が道樂をする音に外ならない。いづこも同じ船員氣質で、美保の關へ入つた船は酒と舞妓のために、三百圓乃至五百圓の金を港へ殘しておくといふ話である。波を鎭め風を順にして期を違へず、無事に船を美保の關へ着かせるやう、水夫共はこの雞卵嫌ひの明神に祈るけれども、穩かな海上一路、和いだ順風に帆をあげてこゝへ來た揚句、神社に献ずる金品は僅少なもので、藝者や宿屋營業者に拂ふのは驚くべき巨額である。それでも神樣は御辛棒强い――卵の件を除いては。

しかし日本の水夫は西洋の水夫に比べると溫和なものである。而して一種の上品さと丁寧な風習さへ備へてゐる。暑いから腰まで裸で宴席に坐つて居るが、箸の使ひ振りの手際よく、酒の献酬の上品なことは、上流な人々に異らない。また女達を親切に遇してゐるらしい。町を隔てて彼等が宴を張つてゐるのを見るのは愉快である。その笑聲は普通の町人

よりはや〻やかましく、身振もや〻猛烈であらうが、眞に無禮らしいやうな點は少しもない。況して亂暴の點はない。綺麗な藝妓が芝居風の踊を始め出すと、皆が像のやうにジッとして無言になる――十五個の立派な銅像が座敷の壁に並んだやうだ。この踊は西洋の客に取つては一見不可思議で、妖女の藝當のやうであるが、實は昔の物語を、活躍させる優美な言葉と、婦人の微笑といふ詩に飜譯したのである。而して酒が廻るにつれて賑ひは更に慇懃を加へ、酒がもたらす心地よい眠が終に皆の上に落ちかかると、客は一人づ〻笑顔で立つて行く。彼等の夜の賑ひほど愉快で温和なものはあるまい。しかも水夫は日本では特別荒々しいものと考へられてゐる。こんな國では西洋のあばれ者をどう思ふことだらう。

さて、私は日本に來てから十四ヶ月にもなるが、まだ怒罵の聲を聞かねば、喧嘩を見たこともない。男同志撲り合つたり、婦人が窘められたり、子供が打たれたりするのをまだ一度も見ない。實際日本で眞の荒々しさといふものを開港場の外、何處へ行つても見たことがない。開港場では下等社會の者が歐洲人との接觸によつて、固有の丁寧さや、固有の風儀を失ひ、質素な快樂を樂しむといふ能力さへ無くしたやうに見える。

昨夕は舊日本の船頭を見た。今日は新日本の水夫を見ようとするのだ。沖に現れた帝國軍艦てふ怪物が、全港民を興奮させた。誰も彼も見物に行かうとしてゐる。路次に横つてゐた、すべての長い小舟は、好奇心に滿ちた人々を載せて、鋼鐵の巨像――五百人の乘組員を積める一等級の巡洋艦――へと、既に急ぎつゝある。

私は前に述べた喫驚するやうな舟に乘つて行く。尤も獨りで行くのではない。實際その舟には殆ど立つ餘地がない。老若さま〴〵の乘客、就中尋常の艀舟で海へ出るのをびくびくしてゐる婦人達で、非常に込合ふてゐる。今しも舟を出すといふ間際に、一人の藝妓が生命賭けで群集の中へ飛込んだ。飛込んだ時に私の葉卷煙草に腕が觸れて火傷した。私は非常に氣の毒に思つたが、女は私の心配に對して陽氣げに笑つた。それから漕手共は悲調を帶びた睡氣を催すやうな歌を始める。

軍艦へ達するには長い距離を漕がねばならなかつた。假睡せる機關の大きな肺臟からは、薄い煙の渦卷さへも揚げないで、夏の海上に美しい怪物が靜と聳えて居る。而してあの水

夫が眠を催させるやうな歌には、屹度何か太古の魔力が含まれてゐるに相違ない。何故といふに、軍艦の横へ來るまでに最早、私は夢を眺めてゐるやうに感じたから。實際この光景は睡眠中の幻影のやうに奇異である。巨大な艦體の周圍に異様な舟が群をなして徘徊戰慄してゐる。それからこの古風な港の、濶い袖の附いた長い着物をきた老若男女子供の群集は、蟻群の如くに一筋の絶間なき流れをなして、太い艦腹を徐々と上ぼりつゝある。しかも巣一杯の蜜蜂がぶんと唸るやうな口籠つた音を發するに過ぎない。低い笑聲と、小聲の喋々と、驚愕を抑へた囁きより成る音である。それは巨艦が人を威壓するからである甲鐵の壁や砲塔や巨砲や太い鎖や、それから舷牆から微笑だもせずに、光景を見おろしてゐる數百の白い制服をつけた水兵の嚴肅な態度を、人々は赤ん坊の如く不思議がつて見てゐる。水兵も日本人ではあるが、一種の神秘的な作用で變化されて、宛然外國人のやうである。經驗を積んだ眼で以て始めて、その嚴疊な水兵の國籍を見決めることが出來る。金て描いた帝國の紋章と、艦尾にちらつく日本字が見えなかつたら、褐色の拉丁人種が乘組んだ西班牙か伊太利の軍艦を眺めて居るのだと思ふ人があつても無理ではない。

　私は迚も乘船することは出來ない。鐵の梯子には縋りついた人々が、極限なき鎖をなしてゐる。紺色の着物の小學生徒、白毛交りの壽髮の老人、安心顏の赤兒を背負つて、帶て

結んで、しつかりと綱につかまつてゐる勇敢な若い母達、百姓、漁師、藝妓、悉皆全くそこへ蠅が附着したやうだ。或人が十五分間待たねばならぬと云つたので、彼等は微笑を帶びた忍耐を以て待つてゐる。また彼等の背後に艦隊をなせる、艫の高い舟には、數百人が待つて、不思議がつて見てゐる。が、十五分間待たぬ內に、すべての人々の希望は、甲板から發せられた大聲の告知で、忽然破碎された。『もう、時間がないから、見せることは出來ません！』怪物は蒸汽を發生させつゝある。將に去らうとしてゐる。最早誰も乘ることを許されない。すると、手綱に辛抱强くつかまつてゐた群集や、小舟の艦隊に辛抱强く待つて人々から、『あゝ！』といふ一つの非常に悲しげな、長く引いた失望の聲が起こつて、續いてまた出雲訛て、無邪氣な罵倒の言葉が發せられた。『軍人は嘘を云はぬかと思へば！嘘つきだな！あゝ、さうだな！』かゝる場面には慣れたものらしく、軍人は微笑だもしない。

しかし私共は巡洋艦の邊に低徊遊弋してゐて、見物人が小舟へ躁てて下りるのや、錨鎖が緩慢て重さうな動作を以て上がつて行くのや、水兵が集まつて、舷側の何か判らぬものを解いたり結んだりするのを眺めた。一人の水兵が倒さまに屈んだので、白い帽子を落した。すると、それを拾ひ上げる名譽を得ようとして、小舟の競漕が始まつた。一人の水兵

が舷牆に倚りかかり乍ら、仲間に云つてゐるのが明かに聞えた。『あゝ！外國人だな！何にしに來てゐるだらう？』仲間も思案に窮して、『耶蘇の宣教師だらう』と云つた。私が日本服をきてゐるため、たとひ外國人たることは隱せなくても、宣教師だといふ見當はつきかねて、依然私は謎として殘つた。それから、『あぶない！』といふ大きな叫が起こつた――もし今、巡洋艦が動いたならば、見物人達は水に浸されたり、壓し潰されたり、溺れたり、名狀し難い騷擾が起こるだらう。すべての小舟は散亂逃去した。

私共の十人の裸體の漕手は、またその丁字形の柄のついた櫂に向つて、全力を發揮し、またその古い哀しげな歌を始めた。舟が漕いで歸る間、私の心には、私共が見物に行つた、あの鐵や蒸汽やあらゆる複雜な殺戮の機關を備へた、壯麗な怖ろしい物の莫大な費用のことが浮んできた。その費用は、膝まで沒する泥濘の田の中で絶えず骨を折つて、しかし自分の作つた米が食べられない、數百萬の貧民から出して居るのだ。彼等の生命を養ふ食料の方が遙かに安價なのに相違ない。而かも彼等が所有せる少許のものを保護せんが爲めに、こんな怖ろしいものを作らねばならぬ――破壞の目的に對して數學的に應用したる科學の咄々奇怪なる創造物だ。

神聖な山の麓、藍色の瓦の下、遠方に眠れる美保の關が今度は非常に愉快なものに思は

れてくる――石燈籠や唐獅子のある、卵の嫌ひな神様の居玉ふ古い〳〵美保の關――學校を除けば一切のものが、今猶中世紀である夢幻的な美保の關――艫の高い船や、尖つた舳の舟があつて、船頭の悲しげな歌の聞える處。

アラホーノサノサ、

イヤホーエンヤ。

ギイ、

ギイ。

また苔の生えた古い古い石の埠頭へ着いた。輝ける海を漕ぎ歸ること一哩にして、私共は飄然一千年の昔へ飛行したのだ。顧みてあの兇惡な幻の居つた所を見ると、何も居ない。たゞ蒼穹の下に平滑な青い海があつて、岬の少し向うには、小さな一點の白いものが見えるだけだ。それは一隻の帆船の帆である。水平線上には何も無い。軍艦は去つたのだ。しかし音も立てないで、また實に早い。十九浬の速力が出るのだ。事代主命よ、あの艦內には多分雞卵があつたものを！

第十一章　杵築のことゞも

一

一八九二年七月二十日　杵築にて

晃は最早私と共には居ない。彼は佛教雜誌を發行するため、神聖な佛教の都なる京都へ行つた。それて私は迷ひ子になつたやうな氣がする——彼は神道のことを何も知らないから、出雲てはあまり役に立つまいと、彼が再三斷言したけれども。

が、私が今夏休みの初めの期間を送つてゐる杵築では、當分澤山の伴侶を得られさうだ。この小さな町には、私を知つてゐる學生や教師が多いのだから。杵築は山陰に於て最も神聖な場所であるのみならず、また最も繁盛なる海水浴場だ。稻佐の濱は日本中て最もよい濱の一つだ。海濱の旅館は廣く、風通しがよくて、心地よい。浴室には游泳後に鹽分を洗ひ落すため溫浴と新鮮の冷水浴があつて、全く完備したものだ。それから、晴天の日、夏のひろ〳〵とした海原を見渡す眺めは快絕だ。灣の右方を塞いて、町を蔽うた山から、松

樹の生えた、大きな、崎嶇たる岬――杵築岬――が延び出てゐる。左方には低い長い山嶺が、濱傳ひの彼方の眼界に鋸齒狀をなして、その背後には靄然たる一巨形が蒼空へ聳えてゐる――三瓶山の截頭圓錐形の影法師。前面には日本海が天に連つてゐる。して、そこには晴夜、火の水平線が現れる――三四哩の沖に碇を卸した無數の漁船の松明――肉眼てはその火光が一帶の連續せる炎と思はるゝほど夥しい。

宮司は私と私の一友を、天神祭りの晩に、その邸で催される豐年踊の見物に招いた。この踊は出雲特有である。また宮司の命によつてのみ行はれるから、それをこゝで見るのは稀有の好機會だ。

二

強健な宮司は、海の好きなことが杵築の誰人にも劣らない。しかし海濱の旅館へは決して來ない。況して共同の湯に入らない。稻佐の濱の上へ迫つてゐる絕崖の上に、特別な浴室が彼の專用として設けてある。そこへは一本の狹い道が松林の中に通じて、その前には鳥居と注連繩がある。海水浴の期間、この小さな家へ宮司は每日上つてくる。お伴の下男

が海水浴服を準備し、また宮司が海から歸つてくると、宮司が憩ふために清潔なる莚を擴げる。宮司はいつも衣を纏つて浴を取る。彼とその下男の外、誰もこの小さな家へ近寄らない。こゝからは灣の眺望がよい。宮司の身體に對する一般の尊敬は、この休憩所をさへも神聖な地にした。田舍の人々は、今も心身兩方で彼に崇敬の念を示す。昔の人達のやうに、國造の視線を浴びたものは、直ちに物を云ふことも、動くことも叶はぬやうになるとは信じなくなつたが、宮司が境内を通る折には、彼等は生き神として、路邊に平伏する。

七月二十三日　杵築にて

三

私の杵築に於ける最初の日の記憶の中には、幽靈の如く全然冷靜な顏を有し、奇異で、優美な、音を立てない歩み方をする巫女の美しい白い姿が、いつも通過して行く。

巫女といふ名は、神々の寵兒といふ意味だ。

親切な宮司は、私の懇請によつて、巫女の寫眞を買求めて――寧ろ私のために取つて呉れた。緋の袴を穿いた上へ、足まで垂るゝ雪白の齋服を着けて、神祕的な鈴を高くあげた舞姿である。

して、博學の神官、佐々氏が神々の寵兒と、その神聖な踊の巫女神樂に關して、つぎのことを話してくれた。

伊勢の如き他の大きな神社の習慣に反して、杵築の巫女の職はいつも世襲的だ。昔は杵築では、三十有餘戸の娘が、巫女として大社に仕へた。今日は二戸あるだけで、少女の神女の數は六名を超過しない――私が寫眞を獲たのは、第一の巫女のものである。伊勢やその他の處では、神官の娘は誰でも巫女になれる。しかし婚期に達してからは、その資格で仕へる譯には行かぬ。で、杵築以外では、すべて大きな神社の巫女は、十歳乃至十二歳の女兒である。が、杵築大社では、少女の神女は、十六歳乃至十九歳の美しい娘であつて、人氣ある巫女は結婚後でさへ奉仕を許されることもある。神樂は學ぶことが左程困難ではない。將來神社に仕へる兒女には、母親又は姉が敎へる。巫女は家庭に住んでゐて、ただ祭祀の日にのみその任務のため參殿する。彼女は何等の嚴重な規律に從つたり、制限を受けてゐるのでない。何等特別の誓約をするのでもない。少女で居ることを止めたからといつて、恐ろしい罰に處せらるゝ心配もない。しかしその地位は高い名譽であるし、家族に取つては一つの財源にもなつてゐるから、彼女の職務に對する束縛力は、古代西洋の巫女

の神に對する誓約と殆ど同樣に强いものである。

希臘デルフアイの神巫の如く、昔時巫女はまた卜女でもあつた――彼女の奉仕する神が憑移つた場合には、未來の祕密を語る、生ける神託てあつた。今日は何れの神社に於ても、巫女が女豫言者として務めることはない。しかしまだ一種の巫婆があつて、死人と交通を行ひ、未來のことを告げ得ると稱し、また自から巫女と名乘り、祕密にその業を行つてゐる。法律て禁じてあるから。

種々の大きな神社に於て、巫女神樂の踊り方に差異がある。最も古い杵築ては、踊りが最も簡單て、また最も原始的だ。その目的は神々を樂しませるといふのだから、宗教的保守主義が信仰の初期以來、變はることなく、その傳說と歩み方を維持してゐる。この踊の起原は古事記に載つてゐる天の宇受賣命の踊に見出される。この女神の感興と歌によつて、天照大神はその隱れ玉ふた岩洞から誘ひ出されて、復た世界を照らしたのてあつた。して、鈴――巫女が舞に用ひる、鈴の簇生せる靑銅製の器具――は、天の宇受賣命が愉快な歌を始める前に、葦て小鈴を結び付けた笹の枝の形を保存してゐる。

大社の背後にある文庫の裏に、文庫よりも更に古い巫女屋敷といふ建物がある。昔はすべて少女の神女は、今よりもやゝ嚴格な規律の下に、こゝに住まねばならなかつた。晝間は勝手な處へ出かけることを得たが、夜は是非とも境内の門が閉まるまでに、屋敷へ歸らねばならなかつた。それは神々の寵兒達が、その身分を忘れて、冒險的な人間に寵幸せられるやうな羽目に陷らないためであつた。またその心配も滿更無理ではなかつた。巫女は美しいと共に、また非常に純潔なるべき義務があつたから。して、大社に仕へた最も美しい巫女の一人は、實際さやうな風に墮落したのであつた――いづれの大書店でも安價の本として買ひ得る情話を、日本の史上に殘して。

彼女の名はお國といつて、杵築の中村門五郎といふものの娘であつた。今も猶その子孫がこゝに住んでゐる。大社の舞女として仕へてゐる際に、彼女は名古屋山三といふ浪人と戀に陷つた――彼は仕方のない破落戶の美男子で、劍の外には無一文であつた。彼女は竊かに社を脫して、戀人と共に京都の方へ驅落をした。これは少くとも三百年昔のことだ。

京都へ行く途中で、その名を私は聞き洩らしたのであるが、彼等は別の浪人に逢つた。この浪人はたゞ暫くの間、話中に現れて、忽然死と忘却の永久の夜へ消えて了ふ。記錄に傳へられてゐるのは、彼は彼等の旅に同行を求めたこと、美しい巫女に愛着を感じてきたこと、して、彼女の戀人の嫉妬を招いて、結局激しい決闘となつて、山三はその競爭者を殺したといふことだけである。

それから後、逃亡者は無事に京都へ彼等の旅を續けた。お國はこの時既に彼女の行動を悔いるべき充分の理由を悟つたか、否か、わからないが、その後の身の上から察すると、彼女に對する熱情のために死んだ美しい浪人の顏が、彼女の胸裡に纒綿離れ難きものとなつたやうに思はれる。

その次に、彼女は京都で妙な役目を演じてゐる。彼女の戀人が全然窮乏に陷つたものと見えて、彼を養ふため、四條磧で巫女神樂の見せ物を出した。こゝは鴨川の乾いた河床の一部で、またかの恐ろしい酷刑の行はれた場所である。彼女は當時の公衆からは、浮浪者と看做されたに相違ない。しかし彼女の非常な美しさが、幾多の觀覽者を惹きよせ、大當りとなつたらしく、山三の財布は重くなつた。が、この踊は今日杵築の巫女が緋の袴と雪白の衣をつけて、優しく滑るやうに足を運ぶ踊と同一のものに過ぎなかつた。

兩人は更に江戸で役者として現れた。實際お國は傳說上、日本の近代劇――初めての俗劇――を創めたものと一般に認められてゐる。彼女以前は、たゞ僧侶の作に成つた宗教劇だけであつた。山三自身も彼女の敎を受けて評判の高い、立派な役者となつた。彼には多くの弟子があつた。その一人の猿若は後、江戸に一つの劇場を起し、彼の名に因んで猿若座と呼ばれたが、今日猶猿若町に殘つてゐる。が、お國の時以來、女は――少くとも極最近まで――日本の舞臺から除かれてゐた。女の役は、古代希臘に於ける如く、最も烱眼の觀察者も性の區別がつかないほど、容姿が女らしく、技に巧みな男や、少年によつて演ぜられた。

名古屋山三は、彼の伴侶よりも數年早く死んだので、お國は故鄕の杵築へ歸り、美しい髮を斷つて、尼となつた。彼女はその時代の割合には學問があつて、特に連歌といふ詩の藝に巧みで、死ぬるまでその敎授をした。彼女は女優として儲けた僅かの資產で、市の眞中に連歌寺といふ寺を建てた――そこで彼女が連歌を敎へたから、かく名をつけた。さて、寺を建立した譯は、彼女の美貌のために身を亡くした男――またその微笑は、彼女の心裏に山三が決して知らなかつた、或るものを起さしめたことのある男――の靈魂のために、その寺で常に祈をするといふのであつた。彼女が日本劇壇の創始者であつたため、彼女の

家族は數世紀間、ある特權を享有してゐた。維新の頃までも、中村門五郎の後裔の戸主は、いつも杵築座の利益の分配を受ける權利があつて、座元といふ稱號を有つてゐた。が、その家は現今頗る貧乏だ。

私は連歌寺を見るために行つたが、それは失くなつてゐた。數年前までは、觀音寺に通ずる石段の坂下にあつたが、今では何も殘つてゐないで、破れた地藏像へ人々が祈を捧げるだけだ。小さな寺の昔の境内は野菜畠に變はつて、古い建物の跡には、その材料を利用して、不敬にも數個の小舍が建つてゐる。ある百姓が、掛物や他の尊い物は、近所の寺へ讓られて、そこで見物が出來ると私に告げた。

五

觀音寺の大きな墓地內にある、連歌寺の跡から左ほど遠からぬ所に、甚だ珍らしい一本の松がある。その幹は地面に支へられずに、四本の巨大な根の上に支へられて、恰も四本の足で步いてゐるやうな角度になつてゐる。畸形の樹木は往々神の住所と考へられる。し

て、その松はこの信仰の一例を與へる。周圍には垣を作り、その前に一小祠を安置し、更に數個の小さな鳥居が立ててある。して、多くの貧民が大槪いつでも、その場所の神様に祈つてゐるのが見受けられる。小祠の前に、普通杵築に於ける海草の奉納の外に、數個の藁で作つた馬の像があつた。何故藁馬を捧げるのか？この祠は道路の神の庚申を祀つたものらしい。て、馬の飼主がその健康を心配し、馬が疾病死亡より免るゝやう、庚申に祈つて、同時に祈願の象徵として藁馬を捧げるのだ。しかしこの獸醫の役目は、普通庚申の受持になつてゐない。だから、この樹木の畸形な點が、かゝる考を唆つたのだらう。

七月二十四日　杵築にて

大社の第一の境內で、正門の左に當つて、灰色に古びて、普通の宮の形をした、小さな木造建築がある。その閉めた戶の木格子に通常、神に對する誓詞や祈願を書く白紙が、夥しく結んである。しかし格子の中を覗いてみても、暗い內部には神道の象徵は一つも見えない。それは厩だ！して、中央の部屋に立派な馬が居る——見物人の方に向つてゐる。藁で作つた日本の馬沓が、その背後の壁に吊るしてある。馬は動かない。唐金で作つてある

のた！

博學の神官、佐々氏に就いて、この馬の話を尋ねたとき、次のやうな珍らしいことを告げられた——

舊曆七月十一日が『身逃げ』といふ異様な祭日に當る。その日、杵築の大神は社殿を出でて町々を通つて、海濱に沿ひ、それから國造の屋敷へ入る。だから、其日いつも國造は屋敷を空けて外出した。現今は實際さうはしないが、彼とその家族はある室に退いて、邸宅の大部を神の使用に供するやうにしておく。此國造が引込むことを『身逃げ』と呼ぶ。さて、大國主神が町を通行の際、最上席の神官がお伴をする。この神官を昔は『別火』と稱した。その譯は、神に對して淸淨潔白を保つため、祭の始まる一週間前から、彼は特別な火を用ひて煮た食物を食べてゐるからだ。『別火』の職は世襲であつたので、その稱號が遂に家名となつた。今日ではその式を行ふ神官も、最早『別火』と呼ばれない。

『別火』が彼の任務施行の際、街頭で人に出逢ふと、彼は『犬め、退け！』と言つて、道を避けさせた。で、昔は固より、今も俗衆は、かやうに言葉をかけられた者は犬に變つて了ふと信じてゐる。だから、『身逃げ』の當日、ある時刻の後は、誰も町へ出なかつた

もので、今でもこの祭典中は、あまり外出するものが無い。

註。私の杵築滞在中、泊まつてゐた海濱の小さな綺麗な旅館因幡屋では、親切な老主婦は『身逃げ』中は外出せぬやう、殆ど涙を流さんばかりの熱心を以て、客に說き勸めた。

すべての町々を通つた後で、『別火』は朝の二時から三時の暗い内に、ある祕密の儀式を海岸で行つた。（この式は今も猶每年同時刻に行はれるとのことだ）しかし『別火』自身の外、一人もそこにゐてはならぬ。もし不幸にして、その式を見た人があると、その人は卽死するか、または獸に變はつてしまふのだと、一般人民は信じてゐた。また今もさう信じてゐる。

　この儀式の祕傳は頗る神聖なもので、『別火』がその相續者に傳へるにも、死んだ後でなくては、それを語ることは出來なかつた。

　だから、彼が死ぬると、その死骸を社の或る奧の室の蓆の上に乘せて、すべての戶を堅く閉めて、その息子だけを殘しておく。すると、夜間或る時刻に、靈が死體に歸つて、死んだ神官は身を起し、息子の耳へ恐ろしい祕密を囁く――して、また倒れて死する。

しかし一切こんな話は、唐金の馬と何の關係がある？と讀者は尋ねるかも知れない。
たゞこれだけだ。卽ち――
『身逃げ』の祭には、杵築の大神は、その市の町々を唐金の馬に乘つて步き玉ふのだ。

七

だが、出雲で夜間折々步き廻はると信ぜられてゐる像は、唐金の馬だけではない。少くとも他に同樣の凄い性癖を有するものと、思はれてゐる藝術的作品が二十位もある。杵築の拜殿の入口の上に蟠屈する龍の彫刻は、夜間屋根を匍匐ひ廻つたといふことだ――たうとう大工に命じて、その咽喉を鑿で切らせた。それからは龍が徘徊を止めた。その咽喉の鑿痕は、誰の目にもあり〳〵と見える！松江の壯麗な春日神社には、牝牡二個の等身大の立派な鹿がある。その頭だけは別に鑄造して、あとから巧みに胴へ打付けたもののやうに私に思はれた。が、私はある親切なる田舍人から、もとは一つの完全な鑄像であつたが、後に及んで、夜間靜かにしておく爲めに、頭を切斷せねばならなくなつたのだといふことを告げられた。しかしこの種の薄氣味のわるい仲間の內で、夜間出逢つて最も凄いのは、

松平家代々の塋域たる松江の月照寺境内の奇怪なる龜であつたらう。この石の巨像は長さ殆ど一丈七尺で、頭を六尺も地上からあげてゐる。その今では破碎せる背面には高さ約九尺の大きな立體の一本の石に、半ば消滅せる碑文を書いたのが立つてゐる。出雲の人々が想像してゐたやうに、この墓地の惡夢が、夜半動き出して、附近の蓮池で泳がうとするのを想像して見るがよい！さて、この怖ろしい脫線的行動のために、龜の頭は遂に折らねばならなかつたと傳へられてゐる。しかし實際で見ると、たゞ地震で壞はれたに過ぎないかのやうになつてゐる。

八

七月二十五日　杵築にて

大社では、今日は、學問の神、書道の神なる天神樣の每年の祭だ。他所では廢れてゐるが、こゝ杵築では、書聖の祭、卽ち天神祭が依然として美しい古式によつて行はれる。社の外苑には、臨時の掛小屋が長く連つて、その中に習字の見本の、長い白い額が掛けてある。杵築の小學生は銘々の傑作を展覽のため出したのだ。文句は漢字のみで、平假名や片假名を用ひてない。また大抵孔孟の書から引用したのだ。

私に取つては、この習字の陳列は驚くばかり美しいものと思はれた——實際殆ど奇蹟だ。すべて極めて幼い兒童の作品だからである。成程日本で書くといふ言葉は、また最高の藝術的意味に於ては、畫をかくといふことをも表すのは尤ものことだ。私は嘗て英國兒童に日本の習字を教へようと試みた成績を研究する機會を有した。是等の英國兒童達は、日本人の習字教師に教へを受けた。矢張り同じく初學者で、且つ同じ年齡の日本兒童と共に机を並べて習つた。しかし彼等はどうしても、日本の生徒のやうには書くことは出來なかつた。彼等の內部にある祖先傳來の傾向は、教師が筆を以て恰好のよい線畫の祕訣を教へようとする努力を無効に歸せしめた。日本の子供が書くのは、獨りで書くのではない。祖先の指が、彼の筆を動かし、彼の線畫を導くのだ。

しかしこの書が私には美しく見えるものゝ、まだ私の日本人の伴れの賞讃を博するには至らなかつた。この人自身が餘程經驗ある教師なのだ。『大部分、頗る拙いものです』と彼は斷言した。私がまだこの十把一からげの批評に狼狽させられてゐる內に、彼は幾分小文字で書いた一つの額を私に指し乍ら、言葉を添へた。『あれだけは可なり立派です』

『でも、あれは左程骨が折れなかつたでせう。非常に小さな文字です』と、私は敢て意見を述べた。

いや、文字の大小は、この問題に關係ありません』と、先生は私を遮つた。『恰好が要點です』

『それなら、どうも私には合點しかねます。貴下が頗る拙いと仰せられるのが、私から見ると、極めて美しいと思はれます』

『無論、あなたには解りませぬ』と批評家は答へた。『それがお解りになるまでには、多年の研究が要りませう。して、それでも……』

『それでも？』

『さうです。それでも、たゞ一部分しかお解りになりますまい』

それから、私は習字の問題については、沈默を守ることにした。

九

廣大な大社の境内も、今日は群集が大いに込んでゐるので、參詣者は頗る徐々と動かねばならぬ。お祭りのため、杵築の町や、附近から擧つて人出があつたからだ。堀池の中央の島に建てられた小祠へ、狹い築堤を經て、群集は悠かに進んで行く。この小祠を私は始

めて見るのである（杵築大社はなか〳〵廣い處だから一回の參詣では總てのことを見聞する譯に行かぬ）が、これが天神宮なのだ。宮の前で手を拍つ音は、瀑布の響のやうだ。それから、幾萬の一厘錢や、一握りづゝの米が、幾斗に達するほど、大きな木欄の賽錢函の中へ投ぜられる。幸にもこの群集は、日本のすべての群集と同樣、非常に同情的謙讓な精神を持つてゐるから、何れの方向へでも、その中を渡つて行つて、何でも見ることが出來る。私は天神宮に私の賽錢を捧げた後、外苑に並列せる玩具店に注意を向けた。

日本の大抵のお祭りには、通常社寺の境內で、玩具の盛んな賣出しが行はれる――掛小舍の連れる小さな町が、この面白い商賣のため、臨時に建設せられる。すべての祭禮は子供のための休日だ。何んな母親も、お祭へ參つて子供に一個の玩具も買はないで歸ると思つてゐるものはない。最も貧しい母親でも、それを買ふことは出來る。何故といふのに、社寺の境內で賣る玩具の代價は、二厘乃至三四錢で、五錢にも達するのは、かゝる小さな店では滅多に陳べてゐないからだ。が、値段は安いけれども、是等の脆弱な玩具は、美と暗示性に滿ちてゐて、日本を知り、日本を好む者に對しては、巴里の玩具製造者の最も高價なる發明品よりも遙かに興味が多い。しかしその多くは英國の子供に取つて、全然不可解なものだらう。さて、二三のものを覗いて見よう。

こゝに小さな木槌がある。柄の先端の凹窩に緩かな小さな毬がはめてある。これは赤兒がしやぶるためだ。槌先きの上下には、神祕的な巴が繪いてある――巴は支那の象徵で、一つの圓になるやうな形に二個の大きなコンマを合せたものだ。讀者はローウェル氏の美しき『東洋の靈(ザ・ソール・オブ・ジー・イースト)』の表題紙に、それを見たかも知れない。が、多分この小さな木槌は、讀者には唯だ小さな木槌に過ぎないで、それ以外の何でもないだらう。しかし日本の子供に取つては暗示に滿ちたものだ。それは杵築の大神、大國主神、俗に大黑樣と呼ばれる、福の神の槌で、この槌の一打で以て、崇拜者に富を與へ玉ふのだ。

恐らくは西洋では見られぬ形のこの小さな鼓、また三つ巴の繪いてある大きな鼓は、讀者には宗敎的意義がないやうに思はれるだらう。が、二つとも神道の社と佛敎の寺に使はれる鼓の雛形だ。この奇異な小さな机は、小形の三寶だ。こんな臺の上にのせて、神々に獻げものをするのである。この珍らしい帽は、神官の帽の雛形だ。こゝには高さ四寸の玩具の宮がある。この木の柄に一朶の錫の小鈴を結附けたものは、西洋の錫の鳴り物に似てゐると思はれるだらう。しかし、これは巫女が神前で舞ふとき用ひる尊い鈴の見本だ。この丸ぽちやの娘の笑顏――額に二つの斑點が附いてゐる――卽ち土燒の假面は、普通お多福と呼ばれ、彼女の賑かな笑を以て、太陽の女神を暗窟から誘ひ出した天の宇受賣命の傳

説的肖像である。して、こゝには盛裝した小さな神官がある。兩足の間のこの小さな絲を引くと、祈をしてゐるやうに拍手をする。

幾多の他の玩具がある。その譯を知らぬ歐洲人には不思議なものであるが、日本の子供に取つては愉快なる宗教的意味に滿ちてゐる。極東の是等の信仰には、あまり嚴酷又は陰凄が無い——神は祖先の靈に過ぎない。佛陀や菩薩は人間であつた。幸にも宣教師は、まだ宗教を恐はいものとするやう、日本人に敎へるのに成功してゐない。是等の神々は永久に微笑してゐる。不動の如く澁面を示すのがあつても、その澁面はたゞ半ば本氣のやうに見える。やゝ人を驚愕せしめるのは、死の神、閻魔だけだ。宗教といふものは、非常に畏敬すべきもので、子供等がそれを面白がるべき性質のものでないといふ考は、一般日本人の念頭には決して起らない。だから、こゝに玩具の神々や聖徒の像がある——美しい書の神なる天神——笑ひ好きの宇受賣——幸福なる小學生のやうな福助——一つの群像をなせる七福神——梯子の助を藉りてのみ、理髮師が顚頂を剃り得るほどに長い頭の、長壽の神なる福老人——輕氣球の如く圓く大きな腹を有する布袋——脇の下に鯛を挾める、市場と漁師の神なる惠比壽——それから、絶間なき冥想のため兩脚が腐つて失せた、佛陀の古い弟子なる達磨。

こゝにまた、何等宗教的意味なくて、しかも歐洲人が殆ど推測を下し得ないやうな多くの玩具がある。二本の前肢で自身の腹を叩いてゐる形をした、この小さな狸はその一つの種類だ。狸はその腹を太鼓の如くに使ひ得るものと信ぜられてゐる。坊間の迷信では、またさま〴〵の超自然力を有するものとなつてゐる。この玩具はある獵夫が狸の生命を宥したので、不思議な御馳走と、音樂の饗應を受けたといふ、美はしい御伽噺を現してゐる。こゝには兎が軸の上に水平に置かれた杵の端に坐つてゐる。小さな絲を引くと、杵は兎が動かす如くに、上つたり落ちたりするやうに作つてある。讀者がもし一週間でも日本に滯在せば、それは稻を踏んで動かす米搗の杵だと認めるだらう。しかし兎は何者だ？この兎は『兎の米搗』と呼ばれて、月中の兎である。讀者が晴夜仰いで月を眺めると、兎の米を搗いてゐるのが見える。

今度は安價な細工物の方面をあさつて見よう。

蜻蜓。單に二本の木片を丁字形に結合したもの。下方の木片はマッチほどの太さて、長さはその二倍ある小さな圓い木條て、上方のは扁平て、色筋がついてゐる。祕訣を探がすことに馴れた人てなければ、その扁平な木片は兩側の緣に沿つて、ある角度に釣合がつけてあることを殆ど注意し得ないだらう。下方の部分を兩手の掌て挾んで、急に廻轉させ、

突然それを放す。忽ちこの奇異な玩具は、空中を旋回し乍ら昇つて、それから異狀な旋轉を行つたり、また少くとも見た處では、正しく蜻蜓の徘徊するやうな動作を眞似たりして、徐々と可なり遠方へ空中を滑走して行く。上方の部分にある色筋が、今やその目的を發揮する。蜻蜓があちらこちらに突進する際、その色合までも眞正の蜻蜓のやうに見える。また玩具の飛んで行く音も、蜻蜓のぶん／＼いふ聲に似てゐる。この面白い發明の原理は飛去來器（ブーメラン）[譯者註]に似たものである。で、器用な人は、それを大きな室の向うへ飛ばせたあとで、また自分の手へ歸らすことが出來る。が、賣つてゐるもの悉くこの通りではない。私共は運がよかつた。代價、一錢の十分の一！

譯者註一。濠洲土人の用ひる木製の投げ道具。これを空中へ投げると、大曲線を描いて飛行し、またもとの投者の方へ歸つてくる。

こゝに針金を張つた、竹の弓に似た玩具がある。しかし針金は、塞子拔きの螺旋のやうに捩ぢてあつて、その上に一對の小鳥が金屬の弦で吊るしてある。絲の上端の鳥に對して、弓を垂直に保つてゐると、鳥は自らの重量で廻轉し乍ら、恰も互に廻はり合ふやうになつて下る。して、二羽の鳥が囀るやうな音が、螺旋形の針金に金屬の弦の、鋭く擦れるために眞似られる。一羽の鳥は頭を上にして、他の一羽は尾を上にして飛ぶ。彼等が底へ達す

るや否や、弓を倒さにすると、彼等はまた廻轉飛行を始める。代價、二錢——針金が高價だから。

お猿。綿で作つた、靑い頭と赤い胴の小猿が、竹の棒を抱へてゐる。彼の下に竹の彈機があつて、それを押すと、彼は棒の頂上へ駈け上る。代價、一錢の八分の一。

お猿。この猿の動作はやゝ複雜なので、代價一錢。彼はその尾を引くと、左右の手を交互に上げて、絲を昇つて行く。

鳥籠。金色に飾つた小さな籠に、一羽の鳥と梅の花が入つてゐる。籠の底の絲を押すと、小さな風管が鳥のちよう〳〵といふ聲を眞似る。代價、一錢。

輕業師。二本の竹條を、開いた剪刀の形に合せて、中間に絲を張つて、そこへ頗る關節の緩んだ、木で作れる子供が、兩手でぶらさがつてゐる。竹條の下端を押すと、小さな輕業師は兩脚を絲の上へ投げ、その上に坐し、終には宙返りをする。代價、一錢の六分の一。

木挽。腰に褌を卷いただけて、兩手で長い鋸を持つて、板の上に立てる日本の職人の形。彼の足の下の絲を引くと、一所懸命になつて板を挽き出す。西洋の大工の如く、鋸を向うへ押さないで、日本人は手前へ引くのを注意するがよい。代價、一錢の十分の一。

智恵の板。約十二枚の扁平て、四角形な、白い木片を、紐て繋いだる一種の鎖。これを

一端の木片で垂直に保ち、それからその木片を鎖に對して直角に向けると、忽ちすべて他の木片は鎖を外れないで、目醒ましい樣にばた〳〵倒れて行く。大人もこれを弄んで半時間娛むことが出來る。これは機械的調節に於ける全くの魔法だ。代價、一錢。

狐狸。可笑しげな、扁平な紙製の假面で、後ろの厚紙の小片を引くと、眼を開け、驚くばかり長い舌を出す。代價、一錢の六分の一。

狆。白い小犬が頸卷をつけてゐる。吠えてゐる態度だ。佛敎的見地から云へば、この玩具はやゝ不德だ。といふのは、犬の頭を打つと、苦痛を感じたやうに、鋭い叫びを發するから。代價、一錢五厘。少し高い。

起き上がり小法師。負けない力士だ。これは更に高價だ。陶器で作つて、立派に色を塗つてあるから。力士がその兩腿の上に蹲つてゐる。何んな方向に倒しても、彼はいつも獨りで眞直ぐな位置に戾つてくる。代價、二錢。

おろが陛下子供。天皇陛下を拜する子供。手風琴を持つて、君ケ代の國歌を歌ひつゝ、奏してゐる。小學生だ。玩具の底に小さな鞴がある。それを働かせると、子供の腕は恰も樂器を奏するやうに動いて、鋭く細い聲が聞える。代價、一錢五厘

磁石。前者と同じく、全く近代的玩具だ。小さな木箱に磁石と小さな獨樂が入つてゐる。

獨樂は赤い木製の小さな球形體に、鐵釘を通して作つたのだ。指の廻轉によつて、獨樂を回らせ、それからその釘の上へ磁石を持つて行くと、獨樂は磁石へ跳び上がつて、空中でも廻轉をつゞける。代價、一錢。

すべての玩具を調べて見るには、少くとも一週間を要するだらう。こゝに絲紡車の見本がある。全然よく出來てゐる。代價一錢の五分の一。こゝには水中へ放せば泳ぎ廻はる、粘土製の小龜がある。二個で一厘だ。こゝには玩具の軍人——正裝の甲冑をつけた武士——が、たゞ九厘だ。こゝには風車がある。木製の笛の息が洩れ出る穴の前に、紙製の車が張つてある。だから笛を吹くと、車が猛烈に廻はる。代價は三厘だ。こゝには扇がある。一種の小さな四つ折りの扇が、鞘に挿してある。擴げると、美麗な花の形になる。一厘だ。が、私に取つて、すべての中で、最も美しいのは小さな人形——お雛樣又は別嬪だ。胴體は俤に過ぎない——紙の着物で蔽はれた、扁平の枝條だ——しかし頭は眞に藝術品だ。眼尻の上つた眼に、柔かな影を含んで、羞しげに俯視せる、美しい卵形の顏——それから、立派な少女風な髮の結ひ方——帶形や、渦形や、楕圓形や、包旋形や、小葉のちゞれた形など、實に異常なる美觀だ。ある點では、この玩具は、日本の處女や花嫁の實際、髮の結ひ方を模してゐるから、衣裳の雛形だ。が、別嬪の顏の表情は、此玩具の非常なる妙味だ

と、私は考へる。羞んだ、悲しげな美はしい趣があつて、何とも名狀し難いけれども、それが日本の娘の美の典型を極めてよくほのめかしてゐる。しかも全體は、たゞ小さな皺のよつた紙で作られ、巧みな筆で色を二三回塗抹したのに過ぎない。無數のお雛樣がそれぞれ形狀を異にしてゐる。して、永く日本に滯在した人が、日本人の型に通曉してくる時、人形は彼が見たことのある綺麗な顏を彼に思ひ出させるであらう。是等の玩具は少女のために、代價五錢。

一〇

こゝに讀者が日本の人形に關して、未だ聞いたことのないもののことを少し語らう。――今話してゐた小さなお雛樣でなく、二歲乃至三歲の子供を現せる美しい等身大の人形だ。西洋の精巧な種類の人形よりは、ずつと安價に、また簡單に作られてゐるが、この玩具の赤兒は、日本の女兒がこれを操つるときには、遙かに一層面白いものとなる。かやうな人形は美裝を施されて、非常に實物らしく見える――小さな傾斜した眼、剃つた頭、微笑の趣など、眞に迫つてゐるので、具眼の人も欺かれるほどだ。だから澤山開港場で賣ら

れる、日本風俗のお定まりの寫眞で、母親が背に負つてゐる常例の赤兒は、最もよく人形を使つて現してある。若し讀者がかやうな人形を見るとき、極めて近く眼の前へ差出されたにしても、それが日本の母親によつて、手を伸ばしたり、小さな露はな足を動かしたり、頭を廻はしたりさせられると、それはたゞ人形だと斷言するのを殆ど憚るだらう。精細に實物を檢した後でさへ、讀者はそれとともに獨りぼつちにされるのを、まだ幾分びく〳〵することと私は想像する。その巧みな操つりやうの蠱惑は、素敵に强いのだから。

また或る人形は、實際に生きてくるといふ信仰がある。

昔はその信仰が現今ほど稀れてはなかつた。或る人形は神樣にふさはしい尊敬を以て噂をされた。またその所有者は羡望の的であつた。かゝる人形は眞正の息子や、娘のやうに待遇され、定時の食物や、寢床や、夥しい美服など與へられ、また名も與へられる。女の人形ならば、お德さんとか、男の場合には德太郎とか命名される。人形を疎略にすれば、怒つて泣き、虐待をすれば、その家に不幸を齎すと考へられてゐた。加之、頗る高級の超自然的力を有するものと信ぜられてゐた。

松江の武士の千石といふ家に、一個の德太郎さんがあつて、子供の生まれるやう祈願をかけて鬼子母神にも劣らぬほど、その邊では有名であつた。子の無い夫婦はその人形を借

りて、暫く預つて置き――それに奉仕して――それから、感謝して返却するときに、新しい着物を與へる。すべて、さうした人々は念願通り子供の親になつたとのことだ。『千石家の人形さんには魂がある』といつてゐた。嘗てその家が火事で類燒した時、德太郎さんは自分から無事に庭へ駈け出したといふ傳說もある。

かやうな人形に關する思想は、次の如く思はれる――新しい人形は、たゞ人形に過ぎないが、多年の間一家に保存されて、代々の子供等によつて愛され、一緖に遊ばれた人形は、次第に魂を獲てくる。私は可愛らしい日本の娘に尋ねた。『どうして人形は生きてゐるのです？』

『充分愛すれば、生きます！』と彼女は答へた。

これは全く進化徑路中の神といふルナンの思想を、子供心で吐露したものに外ならないてはないか？

註。實際澤山の立派な人形は、多年一家に保存される。富家のお雛祭に祭られる優秀なるお雛樣は、家寶となつて傳へられる。人形は子供に損はすために與へるのではない。また日本の子供は滅多に人形を毀はさない。私は出雲の知事邸に於ける人形の節句の際、百年も古い人形數個を見た――古風な宮廷の服裝を着た可愛らしい小像であつた。

一一

しかし何んなに可愛がられたお人形も、遂には磨滅したり、または數百年も經つと、破損してくる。して、お人形が全く死んだものと見做されねばならぬ時、その殘骸は依然として尊敬を與へられ、決して不敬に放棄されない。またすべて社祠の神聖なる品が、役に立たなくなつた場合に於ける如く、燒き捨てたり、或は清流へ投じたりなどしない。それから土中へ埋める事もしない。それを何うするか、讀者はなか〳〵想像が出來ないだらう。

それは荒神へ捧げられる。これは半ば神道、半ば佛教の神秘的な神で、昔の佛教の方の像では、澤山の手を有つてゐたが、出雲の神道の荒神には何等藝術的形式は無いやうだ。これは、殆どあらゆる神社、又は多くの寺院の境內には、榎といふ樹木が植ゑてある。で、彼等は荒神に取つて神聖て、百姓達はその中にこの神が住み玉ふものと信じてゐる。して、普通その木の前に小さな祠が置かれ、いつも榎の前で荒神に向かつて祈を捧げる。かやうな荒神の祠の前、その神木の根元、或は樹の洞穴にまた小さな鳥居が立つてゐる。か、人形はその所――もし洞穴があれば――哀れな人形の遺骸が、屢〻並べてあるのだ。かやうに曝されてゐるのは、大概貧乏な女有者の存命中は、滅多に荒神に捧げられない。

が死んでから、その所持品の中に發見されたものに相違ない――彼女の娘時代、或はまた彼女の母や彼女の祖母の娘時代の無邪氣な紀念品なのだ。

一二

さて今、私共は豊年踊を見物することとなつた――夜の八時に始まるのだ。月が無く、空は眞暗だ。しかし百個も提燈が點ぜられ、吊るしてあるので、宮司邸の廣庭には充分に明りがある。私と私の友人は、庭に向つた大きな亭に、心地よい席を設けられ、また宮司は旨い晩餐を私共に準備した。

既に亭前には、杵築の青年や、附近から出た百姓の若者や、女に子供、幾百といふ娘どもが群集してゐた。庭は非常な人込みて、踊れさうにもない。燈光に照らされて、光景は非常に綺麗て、謝肉祭(カーニバル)のやうな晴れ著の美觀だ。無論百姓共は古風な服裝て來た。黄色の藁の外套、卽ち蓑をきたものもあり、青手拭を頭に卷いたのもある。大きな松蕈形の笠を被つたのが澤山ある――すべて彼等の紺の衣服を充分捲くり上げてゐる。が、町の若衆達は、いろ〱の服裝や、また假裝をしてきた。女裝をしたのが夥しい。巡査の如く白帆布(ズック)

ある。マントを着たものや、墨西哥人が着けるやうな肩掛をつけたのもある。若い職人には、働く時と殆ど同じ輕快な服装で、臂まで脚を露はし、肩まで腕を出したのもゐる。娘の中に、なか〳〵驚くべき衣裳が見られた——紅玉の色や、濃い灰色や、褐色や、紫色の衣を精巧な帶で結んでゐる。が、最も優れた趣味は、上流の少女達が着てゐる、單純でしかも頗る優美な、黑と白の衣裳だ——踊のため特に調製したもので、他の場合には着けない。幅廣い藁帽の柔靱なる雨緣を頰まで引下ろして、結びつけて、全く顏を隱せる內氣な娘もあつた。私は子供等の美しい着物に就いては、敢て說明しかねる。蝴蝶や蛾の變幻萬態の美を、繪の具なしに描かうとするに等しいから。

この群集の眞中に、大きな米臼が倒まに伏せてある。やがて、草履を穿いた一人の百姓が、輕くその上へ飛び上つて、そこに立つた——頭の上には紙傘を擴げて、しかし雨は降つてゐない。それは音頭取りの男で、出雲中で評判の謠ひ手である。舊慣によつて、豐年踊の音頭取りは、歌ふときにいつも傘を差すことになつてゐる。

突然、今しも亭へきて席に就いた宮司の合圖で、音頭取りの豐年感謝の歌は、群集の低い騷音の上を銀の喇叭のやうに鳴り渡つた。驚くべき聲、また驚くべき歌だ。名狀し難い顫音と震聲に滿ちて、また美はしさと眞の音樂的好調に滿ちてゐる。して、彼は歌ひ乍ら、

いつも傘は頭の上に擴げて、彼の高い足臺の上で、ゆるりと廻はる。右から左への轉廻の間、決して停まりはしないが、たゞ歌は二節毎に一定の休みをおく。すると、群集は愉快さうに『や、は、と、ない！や、は、と、ない！』と叫んで應ずる。同時に、群集の間に非常に敏速な分離運動が起こつた。踊り手が大きな二重の輪となつて、他のものは悉く踊のために場所を讓つて、後方へ押し寄せて退いた。それから、この優に五百人の踊り手から出來てゐる大きな二重の輪もまた右から左へと廻轉し始める――輕やかに、また奇異にすべての腕の上がるのも、足の白くちら〳〵動くのも、歌の拍子としつくり合つてゐる。踊は音頭取りを中心とした巨大なる車輪だ。彼はいつもゆるりと米臼の上で傘を差して廻り乍ら歌ふ――！

一には――出雲の大社様へ、
二には――新潟の色神様へ、
三には――讃岐の金比羅様へ、
四には――信濃の善光寺様へ、
五には――一畑御藥師様へ、

第十二章　日ノ御崎にて

一

一八九一年八月十日　杵築にて

私の日本の友達が日ノ御崎へ遊ぶことを慫慂する。そこへは歐洲人で行つたものは一人もないし、天照大御神とその弟の建速須佐之男命を祀つて、音に聞えた双棟造の社殿がある。杵築から五哩位、出雲の海岸の小村である。山道を經ても行かれるが、路が非常に嶮悪で骨が折れる。舟では晴天ならば愉快な遊である。それで一人の友と居心地のよい漁船の中へ納つて、二人の若い漁夫が巧みに櫓を漕いで日ノ御崎へ向ふ。

綺麗な稲佐灣を後に見て、右の方へ海岸に沿うて行く。沙濱がなくて聳え立つた怖ろしげな海岸である。下は澄んだ水が深さの增すにつれて、次第に墨のやうな黒さに暗くなる。しかし折々青白い突角のある岩が、五丈の水中で光線を受けて、この下界の暗黒から立ち上がる。舟は可なり絶壁にくつついて行く。絶壁は處によつて高さを異にして、三百尺か

ら六百尺に至る。海から上がつた麓は、鈍い鐵灰色で、側面と頂は海風で硬くなつた小松や、黒じみた草とで綠色である。一帶の海岸が險峭で、峽谷が出來て、不規則で、妙な具合に裂け目を生じてゐる。海岸が大塊を作して海へころがつてゐるし、黒い廢墟が深水から威嚇の百面相を露はしてゐるので、舟は兩者の間を快走したり、或は暗礁間の迷路を迂曲して進む。小舟が非常に迅速巧妙に左右へ進められるので、舟は自分で方向がわかつて自分の智力で動くのかと思はるゝほどである。それから、また私共は三稜形の小礁の側を過ぎた。水面のすぐ下から、その岩には海草が繁く苔生してゐた。かやうな小礁を組織せる多角形の岩塊を、漁夫達は龜ノ子石と呼んでゐる。嘗て大國主神が自らの腕力を試すため、こゝへ來て、是等の玄武岩の塊の一個を持上げて、三瓶山の方へ海を越えて擲つた。その大きな岩は、今猶、三瓶山の麓に見られるとのことである。

　行くに隨つて、海岸はます／＼露骨になつて、でこぼこで物凄く、暗礁は益々多くなり、突出した岩は益々危險になつて、三十尋の深さから地層の裂片が水面を刺し通してゐる。すると、急に舟は黒い絶壁の方へ突進し、その大きな間隙の中へ疾走する。地震で出來た裂隙で、兩側面は大谿谷のやうに高く直立してゐる。驚いたことには、先きは明るい。これは小型の海峽で、灣への捷徑である。十分間で通り拔け、またおつ開いた海に出ると、

日ノ御崎は眼前にある——人家が曲灣のほとりに半圓形をなして集まり、その中央が開いて、直ちに鳥居がある。

私が日本で見た灣の中では、この灣が最も異常なものである。大きな斷崖をもぎ取つて、水平面と一致するまで毀はして行つて、陸地の中へ大きな匙形の凹處を殘したのだと思へばよろしい。その凹處の中央に昔の絶壁の一斷片がある。奇怪な四角形の塔のやうな岩で、頂には樹木が生えてゐる。そして磯から一千碼ほどの處に今一つ巨岩が屹立して、優に百尺の高さがある。文島又は御經ヶ島と呼ぶ。これから語らうとする天照大神の宮は、昔はこの小嶼の上にあつたのである。日ノ御崎の灣を作つた驚くべき力は、屹度また文島の大塊をもこの堅牢な海岸から引離したに相違ない。

私共は灣の右端から上陸する。こゝにも濱邊はなく、岸際まで水が深くて紺色で、岸は急勾配をなしてゐる。そこを登つて行くと、異樣な光景が面前に顯れた。何千といふ竹の枠に——一寸西洋の乾衣臺のやうな——無數の薄黃色のものがぶら下がつてゐるが、一目では何だか識別が出來ない。しかし、よく視ると不思議が讀めた。數百萬の烏賊が日に乾かしてあるのだ。この邊の海にこんなに澤山烏賊が居るとは思はれぬほどであつた。それからまた、その大いさが丁度揃つてゐる。一萬尾の中で、長さが五分も違ふのがない。

二

日ノ御崎の海門なる大鳥居は、白の花崗石で、飾氣なくして立派だ。それを潜つてから、私共は本通りへ上つて行く。町へ入ると、右は庇や緣側のある灰色の木造の家が長く續いて見える——小店や漁師の小さな二階建の家——それから、その前には、また無數の竹の枠が連つて、今しも獲れた數百萬の烏賊が吊るしてある。町の左側に大きな擁壁が聳えて、大名の城壁のやうに巖疊で、處々に通門の附いた高い木造の胸牆が載つてゐる。その上に屹立するのが、いかめしい建物の屋根で、こゝの建築法は杵築のと酷似してゐる。而して綺麗な綠色の山が背景をなしてゐる。是が日ノ御崎神社である。が、境內の正門へ達するには、道路を上ミ手の方へ可なり步かねばならぬ。正門は垣の最遠端にあつて、花崗岩の堂々たる石段で上つて行くやうになつてゐる。

境內は驚異であつた。それは殆ど杵築大社の外苑ほどに奥行があつた。尤も幅はさほどまでなかつた。して、石を鋪きつめた廻廊が、その兩側をなしてゐた。門からは、幅の廣い鋪石道が、境內の反對の端にある拜殿と社務所に通ずる——この二つの建物は、廣やか

な品位あるもので、その屋根の上から、奇怪な横桁を有する本殿の異様な、重々しい破風が現れてゐる。この海に背を向けて立てる社殿は、太陽の女神を祀つたものだ。入つてから境内の右側に當つて、今一つの石段が更に高い庭へ通じて、そこにまた立派な一圍の神道の建物――拜殿と宮――が建つてゐる。しかし餘程小さくて、下の廣い境内の建物の小型だ。その造作も全然新しいやうに見えた。これは天照大神の弟、素戔嗚尊の祠である。

三

私に取つて日ノ御崎神社の大なる驚異は、こんなに大きく、また維持に費用のかかる建物が、日本の最も荒寥たる海岸に於ける、僻陬の一漁村に存在し得るといふことだ。たしかに百姓の參拜者の賽錢だけでは、一人の神官の俸給を拂ふにも足りないだらう。といふのは、杵築と異つて、こゝは平常どんな天氣にでも參拜が出來る場所ではないからだ。私の友は私のこの意見を確認した。が、私は彼から、この神社には三つの大きな財源があることを聞いた。こゝには政府からの補助がある。毎年信心深い商人から多額の寄附金がある。また所有の土地からの收入も莫大の金高である。最近に於ても、餘程の金が使はれた

に相違ない。小さな方の宮は此頃再築されたばかりのやうに見える。美しい指物細工は悉く新しく白い。また大工仕事の木の香のする屑片さへ、まだ全部片付けてはなかつた。

社務所で日ノ御崎神社の宮司に御目にかかつた。壯年な、働き盛りの、氣高き容貌の人で、日本の身分の高い貴族の間でなくては、滅多に見受けない立派な尖つた顏である。どつさり黑髭が生えてゐて、神官の裝束を着けながら、退職軍人の趣がある。私共は社殿參拜の懇許を與へられた。また案內役として特に一名の神主を附せられた。

杵築大社の嚴正なる質素の趣を見ることと期待してゐたが、この太陽の女神の社祠は非常に壯麗な觀を呈してゐて、初めは眞に神道の社殿であるかを怪しむ位である。實際こゝには純粹の神道式は皆無で、是等の社殿は古代の信仰が佛教に浸染し、それと提携し、外來宗教の華やかな儀式と驚くべき裝飾技術を採用した時代、卽ち有名なる兩部神道の時期に屬するのである。東京の大きな佛寺を見てから後、私はこれに比肩すべき社殿の內觀を見たことがない。上品で綺麗なことは文匣のやうである。精緻を極めた木細工は深紅色と黃金色に漆を施され、神壇は彫刻と彩色の珍。天井には雲龍の夢が群がつてゐる。而かも猶、裝飾師——疑もなく五百年前に墓に入つた——の絕妙なる趣味は、極めて正確に裝飾

を場面の要求と比例せしめ、旨く色彩を調和せしめてゐるので、ぴか〳〵した派手さはなく、唯だたつぷりした落着き纏まつた趣がある。

この宮は下の庭からは見えない、輕快な外廓で繞らされてゐる。この外廓を巡覽して行くと戸の上と軒の下にある驚くべき彫刻帶――宮の壁を廻ぐつてゐる彫刻帶を眺めることが出來る。西海岸の荒々しい風雨に何百年も曝され乍ら、是等の珍らしい彫刻の傑作は保存されてゐる。猿や兎が驚くべく巧みに刻まれた、木の葉の中から覗いてゐるのもあり、鳩も居れば鬼も居るし、龍が暴風雨の中に悶え苦しんでゐるのもある。これ等のものを仰ぎ見つゝあるうちに、私の眼は大きく突出した樒を組成する木細工の、一種天鵞絨の如き有様に惹きつけられた。それを葺いた厚さが、一尺以上もある。爪先きて立つと、私はそれに觸れることが出來る。して、見ただけよりも觸はつて見た方が一層滑かであつた。更によく調べてみると、この巨大な屋根は堅い材木でなく、ただ桁だけ堅固だ。桁に支へられてゐる。素晴らしい材料は、最も薄い柿板の如き、無數の幅廣い薄片を重ね合せ、接ぎ合せて、一つの堅固さうな塊に作つたものだ。私はこの複合細工は如何なる材木よりも、永久的に堅牢だと告げられた。風や日光に曝された緣端は、指て磨滅した大きな書册の紙端のやうな觸感を覺えた。いかにもその斑點を帶びて滑かな黃色がかつた趣は、書册の外

觀を呈してゐたので、私の指で少しくそれを分けてみようとして、覺えず知らず最大版本の逐頁冠語や號數を覗いて見るやうな氣になつた！

私共はそれから小さな方の宮へ行つた。神聖な室の内部は、同樣に漆塗の裝飾や金塗が豊かである。山の景色を背景とし、前面には狐の群が徜徉せる奇異な繪があつた。しかしこゝでは年代のため稍ゝ色彩が損じ、繪も褪めてゐる。宮の外側にある立派な彫刻は、正殿の彫刻帶を刻んだ人の作に相違ない。

二つの宮のただ內陣のみ非常に古いのだ、といふことを私は聞かされた。その他の部類は一度ならず再建された。小さな宮と拜殿は、その內陣を除いて、恰も再築されたばかりで、事實、工事はまだ完成してゐない。だから、神樣の象徵はまだ聖所に安置されて無い。神龕だけは決して修復を加へない。改築が必要となつた時、單に新しい建物の中へ嵌め込むだけである。それを修繕又は復舊することは今日では不可能だらう。それを創造した藝術は既に亡びたから。しかしその材料と漆塗が非常に優秀なので、數世紀を經ても、あまり損傷を受けてゐない。

今一つの驚異が私を待つてゐた――それは私を親切に招いて、食事を共にしてくれた宮司の邸である。この款待は、一層に嬉しかつた。日ノ御崎には旅館は無く、唯だ巡禮者のため木賃宿があるのであつたから。

註。木賃宿は旅人が米を炊ぐために用ひる薪の代だけを拂ふ宿屋である。

宮司の先祖代々の邸宅は、立派な庭園を控へて、社の境內ほどの廣さがある。多くの公卿や武士の古風な屋敷と同じく、平屋造りて、高く築上げた大きな別莊とも云へるが、室は皆高く、濶やかて、綺麗て、百疊座敷も一つある。私共は旨い手輕な食物に、よい酒を澤山添へた饗應を受けた。私は一つの珍異な料理をいつまでも忘れ難い。初めは菠薐草かと思違ひをした。だが、海草を味よく調理したのであつた。普通の食用海草でなく、苔の如く纖細て、珍稀な種類てある。

親切な主人に別れを告げて、私共は村端れまて上つて逍遙して行つた。烏賊を乾したのは後方となつたが、前方は、路面の大部は、莚て蔽はれ、その上に藍が乾してある。村は山の頂上て、急に終點に達する。そこにまた花崗石の大鳥居がある――こんなに巨大な構

造のものを、どうして山上へ運んだかを想像するのは、ストーン・ヘンヂの石を積み上げた方法を理解することほど困難だ。この鳥居から、道は岬の彼方の側にある綺麗な小さな宇龍港へ下る。日ノ御崎はその名の示す通り、大きな岬――日本海へ突出する一つの山脈――の此方の側にある譯だ。

譯者註。英國ソーズベリー平原に遺存する有名なる大石環。

四

日ノ御崎宮司の家は、出雲の華族の内で最も舊家の一であつて、今猶、令嬢は古風な尊稱で御姫様と呼ばれる。丁度杵築の宮司を國造といつた如く、こゝの宮司の古代の官名は檢校といつた。而して日ノ御崎檢校の長い歴史の中に、一つの哀れな怖ろしい傳說がある。此傳說は此國の封建時代に於ける、社會狀態が奇異なものであつたことを示すものである。

七代前のこと、出雲の大名松平侯が、盛大な儀式で日ノ御崎神社へ、始めて正式の御參拜があつて、檢校の渥い饗應を受けられた　多分私共が今日見る特權を得た百疊敷の間てあつたらう。慣例に従つて、主人の若い妻は客の大名の前へ侍し、美味や酒でもてなし

た。夫人は稀れなる美人であつた。而して不幸にもその美が大名の心を迷はした。大名は君主然と傲慢に夫人に向つて、夫を捨てて自分の側室になれと命じた。夫人は驚き恐れたが、流石武士の娘にふさはしく、夫と子供を愛する妻であり母であること、夫や子供を捨てるよりは寧ろ自害するといふことを大膽に答へた。雲州侯は御不興で一言もなく去られた。あとでは宮司の一家は非常な悲歎憂慮に暮れた。それは侯が情慾や憎惡の目的を達するためには、どんな障害でも取除けずにはおかぬといふことは、世に知れ渡つてゐたからである。

その心配は無理もなかつた。大名が御歸城あるや否や、檢校を亡ぼす工夫を講じ始めた。やがて檢校は突然無理に家族から引離され、急にある假構の罪に處して、隱岐に追放された。檢校の乘つた船は乘組の者もろとも沈沒したといひ、或はまた檢校は隱岐に流されて空しく悲慘と寒氣のために死んだともいふ。兎に角出雲の古い記錄には、西暦一六六一年に相當する年に『檢校尊俊隱岐にて死す』と記してある。

檢校の死んだ報知を受けて、松平侯は欣躍殆ど禁じ得なかつた。彼の熱情の目的は松江の五家老の一人、神谷といふ武士の娘であつた。神谷は早速御前へ召出された。『汝の娘の夫既に死したれば、彼女わが邸へ參ること、最早更に差支あるべからず。汝こゝへ彼女

をつれ來れ』と大名が云つた。家老は座敷へ額をつけた。而して御用に向つた。

翌日家老は再び大名の御部屋へ入つて、例の如く匍匐の禮をしてから、御意を奉じて娘を献上に參つた旨申上げた。

欣然微笑したる松平侯は、すぐさま御前へ彼女を伴れ申せと命じた。家老は這うて下がり、また引返して來て、美しい女の今切離したばかりの首——死んだ檢校の若い妻の首が載つた首桶を主公の面前へ据ゑて、『これが拙者の娘で御座いまする』と單に申上げた。

彼女は汚辱を受けんよりは、寧ろ彼女自身の雄々しい意志で死んだのである。

松平侯が彼の犧牲となつた女のために、神社や記念碑を建立して、自ら慰めようとしてから七代を經て居る。彼の血統は彼限りで絶えて、今その大名の長い系統の赫々たる名を嗣いでゐる人々は、同じ血統ではない。草苔に嚙まれた怖ろしいやうな城の廢墟には、蜥蜴や蝙蝠が住んでゐる。然し神谷家は續いてゐて、封建時代に於ける如く富んではゐないが、松江の市で今猶、非常な尊敬を受けてゐる。それで日ノ御崎の宮司は、いつもその凜凜しい家系の娘から花嫁を選ぶのである。

註。この物語の檢校は、松平家によつて、松江市の東郊、御山(おやま)の推惠(すゐけい)神社に祀られた。この宮は罪を贖ふ

ために建てられた。して、人民は今猶檢校の靈に祈る。昔この宮の近傍に頗る繁昌した劇場があつた。これも亦た檢校が芝居を大いに好いてゐたといふので、大名は彼の犧牲者の靈を宥めるために建てたのだ。宮は立派に保存されてゐるが、劇場は夙くに失くなつた。その跡は畠となつてゐる。

第十三章　心中

一

彼等は單に兩腕で互に抱き合つたまゝ、急行列車の來る前に、レールの上に二人の身を載せておくこともある。（しかし出雲ではこれは出來ぬ。まだ鐵道がないから）時としては、自分等だけの小宴を催し、兩親や友達へ宛てた奇異な手紙を書きのこして、彼等が擧げる酒杯に或る苦がい味のものを交ぜて、永遠の眠に入つて行く。時としては、もつと古い、もつと名譽ある手段を選ぶ。男は最初一刀で彼の戀人を殺し、それから自分の咽喉を貫くのだ。時としては女の長い縮緬の如き腰帶で、彼等は相向き合つて、しつかりと二人の身を縛つて、かやうに抱擁したまゝ、深い湖水や川に跳び込む。あの世界開闢このかた存在する古い悲哀によつて苦しめられる時、彼等が冥途に行く方法はさまざまある。――ショペンハウエルはこの悲哀について、頗る奇拔な理論を書いてゐる。

彼等自身の理論は、もつと簡單なものだ。

日本人ほど人生を愛するものはない。日本人ほど死を怖れぬ者はない。未來の世について、彼等は何の恐怖も有たぬ。彼等が現世を去ることを惜しみ悲しむのは、この世が彼等に取つて、美と幸福の世界と思はれるからだ。しかし歐洲人の心に對して、永く壓迫を加へてゐる未來の不可思議は、彼等にあまり心配を惹起こさない。私が今、語つてゐる若い戀人達は、一種奇異なる信仰を有してゐるので、それが彼等のために不思議を拭ひ去つて了う。彼等は限りなき信頼を抱いて、暗黑に振り向く。若し生涯があまりに不幸であつて、生きて行くに堪へられぬ場合、その責任はある他人のものでもなく、世間のものでもない。それは彼等自身のものだ。それは因緣、卽ち前生に於ける過誤の結果である。この世でどうしても夫婦になれないといふのは、前生に於て彼等が婚約を破つたことがあるか、或はまた相互に殘酷であつたために過ぎない。すべて以上の考は異端ではない。しかし彼等はまた、もろ共に死ぬることによつて、未來の世界で忽ち夫婦になれると信じてゐる。尤も佛教では、自殺は恐ろしい罪だと斷言してゐる。さてこの死によつて夫婦の結合を獲るといふ觀念は、釋迦の信仰よりは遙かに古いものである。しかしそれが近代に於ては何ういふ譯だか、佛敎から一種特別の歡喜的色彩、神祕的光耀を借用してきた。蓮の花の上で一

緒に休息するといふのだ。佛教は無限の輪廻を敎へる。靈は何億年に亙つて轉生して、遂に無限の視覺、無限の記憶を得て、白雲が夏の蒼空に溶け行く如く、涅槃の幸福に沒入する。しかし是等の惱める人達は、決して涅槃のことを考へぬ。彼等の至上の願望なる戀愛の結合は、ただ一回、死の苦しみを經て達成せられるのだと、彼等は空想してゐる。尤も彼等の空想は――その哀れな手紙が示す通り――同一では無い。あるものは阿彌陀の光明の極樂へ入つて行くと考へてゐる。あるものは、彼等の幻想的希望の中には、ただ先きの世のみを見てゐる。そこで生まれ變はつた別個の若さの愉快の中に、愛人同志相逢ふものと期してゐる。實際大多數のものの觀念は、更に漠然としてゐる――夢の茫乎たる幸福に於けるが如く、霞める靜けさの間を、相共に影の如く漂うて行くといふ觀念に過ぎない。

　彼等はいつも兩人一緒に葬られることを願ふ。往々この願ひを親達や、後見人どもによつて拒まれることがある。すると、世間ではこの拒絕を殘酷な所業と考へる。といふのは、互に愛し合つて死んだ人達は、同一の墓を與へられないと、安心を得ないものと信ぜられてゐるからだ。が、其願ひが許された場合には、葬式は美はしく、また可憐なものである。二つの家から二つの葬列が出てて、提燈の火光によつて、寺の境內で相會する。そこで讀經と人を感動させるやうな慣例の式があつた後、主僧が死人の靈に向つて、挨拶を述べる。

彼は深い同情を以て過誤と罪惡に就いて語り、犧牲となつた若い人達が、春と共に咲いて、また落ち行く花のやうに短命で、且つ美しかつたことを語る。彼は彼等をしてかゝる行動に出てしめた迷妄について語り、佛陀の訓戒を誦讀する。が、時として彼は、戀人達が未來の一層幸福にして高尙なる世界で、また結合するだらうと預言することもある。彼が單純なる雄辯を以て、かやうに一般世人の衷情を吐露するとき、聽衆は涙に暮れる。それから二つの行列は一つとなり、墓穴が旣に掘つてある墓地の方へ進んで行く。二つの棺は共に下ろされ、穴の底で棺側が相接する。そこで『山の者』[註]が二人の境界をなせる板を撤して、二つの棺を一つにする。結合された兩死人の上に、土が盛られる。して、彼等の悲運の物語を刻める墓石が、恐らくは小さな歌をも刻み添へて、彼等の遺骨の交り合つた土の上に置かれる。

註。『山の者』は死體を洗つたり、墓穴を掘つたりするのを專門の業とする特殊階級の人々である。洞光寺の上の山に、その部落があるので、斯く呼ばれてゐる。

これらの戀人達の自殺は、心中または情死と名づけられてゐる――心の死、情の死、愛の死を意味する。それは女の場合では大部分、女郎の階級に於て行はれる。が、折々相當に立派な階級の娘の中で起こることもある。若し女郎屋の抱へ女の中で、一つの心中があると、必ず更に二つ起こるといふ宿命的信仰がある。屹度この信仰そのものが原因となつて、往々三つの心中が續いて起こるのだ。

家族が窮乏の極に瀕した際、自分から進んで恥辱の生活へ身を賣る哀れな娘達が、日本に於ては、（歐洲人の罪惡と殘忍が、風俗を壞亂する力となつてゐる開港場を除けば）西洋に於ける彼等の同胞姉妹ほど墮落の淵に落ちない。實際多くのものは、彼等の恐ろしい苦役の期間を通じて、かゝる狀態の下では、哀れにもまた異常と思はれるほどに、上品な風采、優雅な感情と生來の溫淑を維持してゐる。

二

つい昨日のこと、一つの心中沙汰がこの靜かな市を愕然たらしめた。灘町といふ町の醫

師の下男が、夜明けの後暫くしてから、主人の息子の室へ上つて見ると、若主人が娘を抱いて共に死んでゐるのを發見した。この息子は勘當を受けてゐたのであつた。娘は女郎であつた。昨夜彼等の葬式が行はれたが、一緒には葬られなかつた。それは、父親がかやうな事件の起こつたことを悲しむと共に、また立腹したからであつた。

女の名はおかいねといつた。彼女は人並優れて美しく、また非常に温順であつた。して、皆の話によれば、樓主はかやうな醜い商賣柄には珍らしいほど親切に、彼女を遇してゐたらしい。父は死んで、一家は無一物となつたので、彼女は母と幼妹のために身を賣つたのだ。それは彼女の十七歳の時であつた。樓主の許へ來てから一年も經たぬ内に、その青年に逢つた。彼等は忽ち一所懸命の戀に陷つた。實に怖ろしい破目になつたものである。何となれば彼等は到底夫婦となり得る望みはなかつたからだ。青年はまだ息子といふ特權を許されてゐたが、彼よりも品行着實なる養弟のために、廢嫡の身となつてゐた。不幸なる男女は互の逢瀨を樂しむために、所有金を悉く使ひ果たし、女は自分の衣類をさへ賣却したのであつた。いよ〳〵最後に、夜が更けてから、彼等は窃かに醫師の家で會合し、劇藥を仰ぐとともに、永遠の眠に就いた。

私は女の葬列が、提燈の光り——微かな青白い燐光のやうな——によつて、寺町の方へ

道を縫つて行くのを見た。白い頭巾をかぶり、白い衣をつけ、白い帶をしめた女達の長い列が、ひつそりと音を立てずに續いて通つて行つた——幽靈の一群のやうに。

丁度かやうに、佛敎の下界の想像畫に於ては、冥途へ行く暗黑の中を、白い亡靈が——亡靈のはてしなき行列——が飛んでゐる。

三

この悲劇の記事は、明日の山陰新聞に載るであらうが、私の友人なる該新聞の記者は、同情ある人々が最早、花と樒の枝を捧げて、新墓を飾つたといふことを私に話した。それから彼は、日本の長い封筒から、美しい文字の滿面に書かれた、長く卷いた、輕い薄い紙を取出し、私の前へそれを擴げて、つけ加へた——

「彼女はこの手紙を樓主に遺して置いたのです。これは新聞へ發表するため、私共が貰ひました。非常に立派に書いてあります。女のかく手紙の言葉は、男のと異つて、女は特別の言葉や文句を使ひます。例へば男の言葉では、その人の地位により、また場合により、私とか、我とか、予とか、僕とか申しますが、女の言葉では妾と申します。それから、女

の言葉は非常に柔かです。そんな柔かな、愛嬌のある言葉は、とても他國語には譯されないものと思ひます。ですから、私は手紙のただ大意をお話申上げるだけです』

して、彼は徐々と、次のやうに通譯してくれた――

『書置のこと

御存じの通り、去年の春このかた、田代樣とわりなきおん仲と相成り候處、前世の因緣應報のため、夫婦となること相叶はず、止むなく今日冥途へ旅立申し候。

不束者の妾に對し、御親切なる御取扱ひを戴き、且つまたいろ〳〵母や妹を御助け下されしにも係らず、誠に海山の御恩の萬分の一をも御返し申上げず。大罪人と御憎み下され候はんも御尤もの儀に存上候。

さぞ言語道斷の非行と御思召され候ことと恐入り候へ共、事情止むを得ざる次第、何卒御勘辨下され候樣願上候。妾冥途に參り候ても、海山の御慈悲は決して忘却致間敷、草葉の蔭より御禮申上ぐべく候。返へす〳〵も御宥るし下され度願上候。

猶申上度こと山々に御座候へ共、今は心も心ならず急がれ候まゝ、惜しき筆相納め申候。亂筆御免下さるべく候。かしく。

かねより

私の友人は脆い白紙を封筒に收め乍ら、霎時無言の後、批評の言葉を加へた。『これはいかにも心中の手紙です。それで貴下に面白いだらうと思ひました。それから、もはや日も暮れかけましたが、墓がどうなつてゐるか、私は行つて見ようと思ひます。いかがです、貴下も御出てになりませんか？』

私共は長い白い大橋を渡つて、陰氣な寺町を通つて、妙興寺の古い墓場の方へ向つた、――すると、歩いてゐる内に段々暗くなつて、細い月が今しも寺の屋根の上にかかつた。

忽然遠い聲――朗かな美しい男聲――が星空の下で歌ひ出した。鳥の囀るやうな、不思議な魅力と調子に富んだ歌――かの民衆的感情を現した日本の歌調で、鳥の歌から學び得たやうに思はれる。或る愉快な職人が、家へ歸つて行く道すがら歌つてゐるのだ。冴えた霜夜に一つ〳〵の音が、私共の耳に顫へながら迫まつてくる。しかし私には文句はわからない。

『あれは何です？』と、私は友人に問うた。

彼は答へた。

「戀歌です――

指して行けとや、あの家をさして、

行けば近寄る、主のそば」

第十四章　八重垣神社

一

出雲國意宇郡佐草村に鎭座ましますハ重垣神社へ、戀愛を感じてゐる、すべての青年男女は參詣するのが習慣となつてゐる。何故となれば、こゝに猛速素戔嗚尊とその妻稻田姬、及びその子佐草命が祀られてゐるからだ。彼等は夫婦の道と戀愛の神なので、獨身者を娶はせて家庭を作らしめ、人の生まれ落ちた時から配偶の運を定め玉ふのだ。だから、夙くの昔に取返しのつかぬやう、決まつてゐることについて、祈るためこゝへ參るのは、全く時間の浪費と思ふ人もあるだらう。しかし何れの國に於て宗敎的實行と神學の一致したことがあるだらうか？神學者と僧侶は敎理及び宗義を作つたり、發布したりするが、善良なる民衆は、いつも必ず彼等自身の好むやうな神々を作らねば止まない――して、かやうな神はなか〳〵善い種類の神なのだ。加之、慓悍猛烈なる男神、素戔嗚尊の歷史は、運命が

彼の特別なる場合と何等の關係あつたことを示してゐない。彼は櫛稻田姬を一見して戀ひそめたのであつた。古事記によれば――

故、避追はえて、出雲國の肥河上なる鳥髮の地に降りましき。此の時しも、箸其の河より流れ下りき。是に、須佐之男命其の河上に人有りけりと以爲ほして、尋ま覓ぎ上り往てましゝかば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に置ゑて泣くなり。「汝等は誰ぞ」と問ひ賜へば、其の老夫「僕は國神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂す」と答言す。

亦「汝の哭く由は何ぞ」と問ひたまへば、「我が女は本より八稚女在りき。是に高志の八俣遠呂智なも年毎に來て喫ふなる。今其來るべき時なるが故に泣く」と答へ白言す。爾ち「其形は如何さまにか」と問ひたまへば「彼が目は赤加賀如して、身一つに、頭八つ、尾八つ有り。亦其の身に蘿、及檜、榲生ひ、其長さ谿八谷、峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常も血爛れたり」と答白す。

爾、速須佐之男命其の老夫に、「是、汝の女ならば吾に奉らむや」と詔りたまふに「恐けれども御名を覺らず」と答白せば「吾は天照大御神の伊呂勢なり。故、今天より降り坐しつ」と答詔へたまひき。

爾に、足名椎、手名椎神「然坐さば恐し。立奉らむ」と白しき。爾に速須佐之男命、乃ち其の童女を湯津爪櫛に取り成して、御美豆良に刺さして、其の足名椎、手名椎神に告りたまはく「汝等、八鹽折の酒を釀み、且、垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐を結ひ、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて待ちてよ」とのりたまひき。故、告りたまへる隨にして、此く設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に己が頭を垂れ入れて、其酒を飮みき。是に、飮み醉ひて留り伏し寢たり。爾ち、速須佐之男命其の御佩かせる十拳劍を拔きて、其の蛇を切り散りたまへば、肥河血に變りて流れき。

故、是を以て、其の速須佐之男命宮造るべき地を出雲國に求ぎたまひき。玆の大神初め須賀宮作らしゝ時に、其地より雲立ち騰りき。爾ち御歌を作みたまふ。其の歌は

やくもたつ　いづもやへがき
つまごみに　やへがきつくる
そのやへがきを

さて、八重垣神社は、尊い歌の八重垣といふ言葉から、その名を取つたものだ。して、

彼の特別なる場合と何等の關係あつたことを示してゐない。彼は櫛稲田姫を一見して戀ひそめたのであつた。古事記によれば――

故、避追はえて、出雲國の肥河上なる鳥髪の地に降りましき。此の時しも、箸其の河より流れ下りき。是に、須佐之男命其の河上に人有りけりと以爲ほして、尋ま覓ぎ上り往てましゝかば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に置ゑて泣くなり。「汝等は誰ぞ」と問ひ賜へば、其の老夫「僕は國神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂す」と答言す。

亦「汝の哭く由は何ぞ」と問ひたまへば、「我が女は本より八稚女在りき。是に高志の八俣遠呂智なも年毎に來て喫ふなる。今其來るべき時なるが故に泣く」と答へ白言す。爾ち「其形は如何さまにか」と問ひたまへば「彼が目は赤加賀如して、身一つに、頭八つ、尾八つ有り。亦其の身に蘿、及檜、椙生ひ、其長さ谿八谷、峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常も血爛れたり」と答白す。

爾、速須佐之男命其の老夫に、「是、汝の女ならば吾に奉らむや」と詔りたまふに「恐けれども御名を覺らず」と答白せば「吾は天照大御神の伊呂勢なり。故、今天より降り坐しつ」と答詔へたまひき。

爾に、足名椎、手名椎神「然坐さば恐し。立奉らむ」と白しき。爾に速須佐之男命、乃ち其の童女を湯津爪櫛に取り成して、御美豆良に刺さして、其の足名椎、手名椎神に告りたまはく「汝等、八鹽折の酒を醸み、且、垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐を結ひ、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて待ちてよ」とのりたまひき。故、告りたまへる隨にして、此く設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に己が頭を垂れ入れて、其酒を飲みき。是に、飲み醉ひて留り伏し寢たり。爾ち、速須佐之男命其の御佩かせる十拳劒を拔きて、其の蛇を切り散りたまへば、肥河血に變りて流れき。

故、是を以て、其の速須佐之男命宮造るべき地を出雲國に求ぎたまひき。茲の大神初め須賀宮作らしゝ時に、其地より雲立ち騰りき。爾ち御歌を作みたまふ。其の歌は

やくもたつ　いづもやへがき
つまごみに　やへがきつくる
そのやへがきを

さて、八重垣神社は、尊い歌の八重垣といふ言葉から、その名を取つたものだ。して、

昔の古典註釋者達は、出雲といふ名も、また、その神様の歌から取られたものだと云つてゐる。

註。チエムバリン教授は立派な理由を擧げて、出雲に關するこの語原を駁してゐる。しかし出雲の國では、依然とこの昔の語原が承認されてゐる。また日本古典に於ける外國學者の研究の結論が、猶一層廣く知られるまでは、この語原說が繼續して行くだらう。

二

八重垣神社のある佐草村は、松江の南殆ど一里少してあるが、うねくした道が車にはあまりに凹凸で且つ嶮しい。三つの道の中で一番遠く、且つ凹凸の多い方が、最も興味がある。その道は竹藪や原始的な森の中を上つたり下つたりして、それから稲田麥圃や、景色がよかつたり、或は一風異つた處のある藍と人蔘の栽培地の中を曲つて行く。途中には神功皇后の老臣武內宿禰を祀つて、人々が健康と長壽を祈る武內神社、出雲五大神社の一なる大草ノ宮、神々の母なる伊弉諾命を祀つて、創造の二神の奇異な繪を受けることの出來る眞名井神社、それから伊弉冊命を祀つた大庭ノ宮、一名神魂(カモシ)神社など有名な神社が澤

山ある。

毎年莊嚴な儀式て杵築の國造へ、貴い火を鑽る道具を授けて居つた、神魂神社には珍らしい物がある——長さ一寸以上もある、大きな米粒て、神代の昔稻が木の如く高くのびて、神々に相應しい粒を生じた頃から傳はつたのや、初めての國造が乘つて天降りしたと百姓共のいふ鐵鍋や、それから太い岩をどうして重ねたものかと想像のつかぬ、巨大な鳥居がある。また大庭の音のする石といふのは打てば鐘のやうに響く。これらの石は、一定の距離以上へ運び去ることは出來ぬといふ傳説がある。松平といふ大名が、その一個を松江にある彼の城へ運ばせようとした時、石が非常に重くなつてきて、千人かかつても大橋から先きへ動かすことが出來なかつたと記されてゐる。それて、その石は橋の前で放棄されて、今日でも地中に埋まつてゐる。

大庭の邊には鶺鴒が澤山居る。これは伊弉諾、伊弉冊神の嘉みし玉ふ鳥てある。それは傳説によれば、二神は鶺鴒から始めて男女の道を學ばれたからだ。だから最も慾の深い農夫でも、この鳥を害したり、威嚇したりなどしない。鳥も大庭村の人々や畠の案山子を怖れない。

案山子の神は少彥名神てある。

三

佐草へ行く道中は、少くとも最後の一里間は、非常に狹い。そこへ信心深い人々の寄附によつて、約一尺づゝの間隔を置いて、平らな大きな岩が鋪かれ、飛び石の限りなき線路をなしてゐる。その石と石の間を歩くことも、石の側を歩くことも出來ないし、石の上を歩くと、ほどなく倦きてくる。しかしそれは道しるべの價値がある。幾十の小徑が到る處の角で、本道から分岐してゐるから、これがために曲り角で、途方に暮れる憂のないだけ、少からざる助けだ。谷間の田や藪などの間で、いろ〳〵の迷路をこの飛び石に導かれて無事に通つた後、かやうな線路を寄附した百姓達に對し有難く感じた。路傍の森の中には風變りの小祠が幾つもあつた――その龍や獅子の頭や、小川などの珍らしい彫刻は、すべて多年の昔、立派な欅の樹の製作て、石のやうな色になつてゐる。しかし龍や獅子の眼は盗まれてゐる。それは精良な水晶て作られ、しかも番人はなく、また法律も神々も、今は明治以前ほどには怖れられてゐないから。

佐草村は森の間際にある八重垣神社の前に、百姓家が小さな集團をしてゐるのである。

參詣道の踏石は境內の鋪石に達して終を告げてゐる。鳥居と支那式の門から入つた內苑との間には、數株の老幹が生えてゐて、異様な碑などもある。

大きな門路の兩側に、祠室があつて、重い木柵で室の兩面を圍んである。その中に二個の完全に武裝せる獰猛な像があつて、手に弓を持ち、背に箭筒を負つてゐる――これは神神の家來、且つ門の番人なる隨身だ。杵築を除いて、出雲の殆どあらゆる神社の前で、是等の隨身は恐ろしい見張りをしてゐる。多分佛敎から起こつたのであらうが、神道の歷史と神道の名を有してゐる。もとは豐櫛岩間戶命といつて、隨身の神は唯一人であつたが、或る時代にその神とその名は、共に二つに分けられた――恐らくは裝飾的の考へからであらう。て、今は左方に立つのは、豐岩間戶命で、右の方が櫛岩間戶命だ。

註。出雲に於ける神道は佛敎に起原する唐獅子を全く占有して了つたので、佛寺の前でに滅多にそれを見ることが無い。狐の神が唐獅子を印度から、日本へ持つてきたといふ神道の神話さへもある！

門の手前の左側に、石碑がある。朝雲といふ人の詠んだ俳句、卽ち十七文字の詩が刻まれてある。

木枯や神の御幸の山の跡

私の伴侶がその文字を飜譯してくれた。

附近に石燈籠と唐獅子がある。今一つの石碑は、五角形の扁板岩て、漢字を以て地神の名が彫んである――宇賀御魂命、天照大御神、大巳貴神、垣安姫命、少彥名神。して、宇賀御魂命の名の前には、一匹の狐の石像が坐つてゐる。

社殿は極く小さい。此地方の大抵の神社よりも小さく、薄黑く、古くなつて汚れてゐる。しかし出雲の神社の中では、杵築に次で最も有名だ。素戔嗚尊と稻田姬、並にその子を祀れる本殿の左右兩側には、幾つかの小祠がある。その一つには稻田姬の父、足名椎、今一つには母の手名椎の靈が住むと思はれてゐる。また太陽の女神の小祠もある。が、是等の宮には別に特徵がない。これに反して、本殿は頗る珍らしい興味を與へる。

灰色で風雨に曝らされた社殿の格子戶に、無數の柔かな白紙の片を結んで節が作つてある。何も書いてないが、一つ一つ心願と熱禱を表したものである。實際戀の祈ほど熱烈なものはない。また竹を節の下の處て截つて水筒となるやうにした切片が、澤山吊るしてある。これは小さな藁繩て一對づゝに束ねてあつて、その繩は吊る役にも立つ。水筒には可なり遠方から汲んて來て献げた海水て充たされてある。それから、結び附けた紙片が白く亂れてゐるのと交じつて、少女の髮毛の束――戀の献げ物[註]――と、纖維のやうに細かく且

つ日に焦げ黑ずんで、少々遠方から切つた長い髮束と、區別のつかないやうな澤山の海草の献げ物とが、格子戸から垂下してゐる。して、戸といふ戸、格子といふ格子の一切木細工の部分には、献上品の下にも、中間にも、彫刻した文字や書いた文字が一面に散らばつてゐる。これは參拜者の名である。して、私の伴侶はよく覺えてゐた名——晃の名——を聲高く讀み上げた!

註。これを『願解き』といふ。

もしこの親切な神に向つて捧げられた祈の効果を、その懇禱者が示せる證明によつて判斷するならば、晃は頗る有望だと私は言はざるを得ない。社殿の礎石の緣端に沿つて、竹を割いて作つた小條片に、紙を貼りつけた夥しい小さな幟が、地に立ててある。是等の小さな白いものは、一つ〱勝利の旗であり、戀人の感謝の證表なのだ。かやうな小旗が、出雲の殆どすべての大きな社殿の周圍に、地に挿してある。杵築では冬の嵐の雪片の如くに、數へ切れないほどだ。

註。祈の叶つた人は、普通感謝の證として一本の幟を立てる。時としては黑、黃、赤、青、白の五色の幟を百本又は千本、一人で立てるのも見受けられる。しかしこれは餘程特別の祈願を掛けた場合のみである。

大抵出雲の有名な神社に見出されるのであるが、こゝにまた社殿の戸の前の柱に、一つの箱が結び附けてある。中には小さな竹片が入つてゐる。讀者がその數を計算すれば、正しく千本あることを發見するだらう。これは千度詣りの誓を立てた人に對する數取りである。千度詣りはある神社へ一千回參詣することを意味するが、それはなか〳〵困難だから、多忙なる信心家は、神に對して一種の妥協をする。即ち社殿から門の外へ一尺だけ歩いて出て、また社殿へ戻つて行く。これを千回繰返す。小さな紙片で數を計へ乍ら、すべて一日の中に行ふのである。

社の背後の神聖な森へ詣る前に、今一つの有名なものを觀ねばならぬ。それは八重垣の玉椿である。神主の家に近い田の中の、出張つた壁で固めた、小高い處の上に生えてゐる。この樹に柵を作り石燈籠も供へてある。非常な老木で、頂が二本、根本が二本であるが、中央に於て二本の幹は合してゐる。この一種無類な恰好と、それから、すべて椿類に共通と信じられてゐる長命といふ美質のために、この樹は永遠易はらぬ夫婦の愛の象徴として、且つまた緣結びの神が、そこに住み玉ふものとして、崇敬されてゐる。

しかし椿の木には奇異なる迷信がある。して、この八重垣の神聖な木だけは、例外であつて、同種類の木が一般に有する、凄い性質を帶びてゐないものと思はれてゐる。椿の木

は怪木で、夜間歩き廻はるものだと、普通に云はれてゐる。松江のある侍の庭園にあつた椿は、あまり夜中に徘徊したため、切り倒されねばならなかつた。すると、その樹枝は跪いて、陰氣な唸り聲を發し、斧の一撃毎に血を散らしたのであつた。

四

廣い神主の屋敷で、須佐之男命と稻田姫が、彌重垣の雲に包まれた繪と共に、珍らしい御札や御守が賣られる。繪の上には社名の起原である八雲立つの歌も書いてある。御守には色々あるが、極く面白いのは出雲八重垣神社緣結御雛と題したのである。この漢字を書いて社印を捺した長方形の折紙は、戀をしてゐる人計りが買ふので、また唯願通り夫婦にするだけしか請合はない。折紙の中には古代の衣裳を着けた、夫婦の形をした非常に小さな二つの雛人形が入つてゐて、小さな妻は小さな夫の胸へ、長い袖をつけた腕で抱かれてゐる。この御守を買つた男でも女でも、自分が愛した人と結婚成就の曉には、御守を返納せねばならない。前にいつた通り、この御守は二人を娶はす以上のことは保證しないと信じられてゐる。それから後の成行に關しては、責任を帶びない。永遠渝らぬ愛情を希ふ者

は今一つの連理玉椿愛興御祈禱御守と題したのを戴かねばならぬ。この靈符は愛情の温さを一定不易の度合に維持して行くに違ひない。この中には、たゞ前に云つた珍らしい雙幹の玉椿の葉が一枚入つてゐる。

これから神聖な森、卽ち八重垣の奥の院へ行く。

五

この古い森は——樹木が非常に蓊蒼として、明るい處からこの蔭へ始めて入ると、一切眞黑く見える——巨大なる杉や松、それに竹、椿及び神道で尊ぶ靈木の榊が交つて出來てゐる。暗いのは主として巨竹のためである。大概の社林には、竹が繁く樹間に植ゑてあつて、その羽毛のやうな葉が、樹々のもつと重い梢頭の高い隙間を塞いで、全く日光を遮斷してゐる。すべて藪の中は他の樹がなくても、いつも深い薄明を呈してゐる。

眼がこの綠色の薄暗に慣れてくると、樹間に一道の通路が浮んでくる。それは天鵞絨の如く滑らかで柔かく、且つ美しい青綠の苔で蔽はれてゐる。以前、參拜者が此社林へ入る際、履物を脫がねばならなかつた頃は、この天然の毛氈は疲れた足に取つて、一の恩惠で

あつた。第二に目につくのは多くの大木の幹が七八尺の高さまで、厚い繭蓆で包んであつて、處々蓆を破つて穴が明いてゐることである。こゝの巨木は一切神聖だから、靈驗の功德があると信じられてゐる木の皮を、蓆で卷いて、參詣人に剝取らせぬやうにしたのであるが、正直よりも熱心の方が勝つて、皮に達せんが爲めに蓆を裂くのを敢て辭せぬ連中が隨分あるのである。第三の珍らしい事實は、大きな竹の莖には字が一面に書いてあることで、これは戀人の祈願と少女の名である。植物界に於て、竹の滑らかな皮面ほど情人の名を書くによいものはない。いくら初め輕く書いた文字でも、一字一字が皮の成長に伴つて擴大して黑くなり、決して消え失せない。

　苔深い徑路は、森の中心にある小さな池まで傾斜して行く。これは出雲で有名な池である。この邊には蠑螈が澤山居る。五寸位の長さで腹は赤い。こゝは木蔭の最も深い處であつて、竹の莖は娘の名で最も濃密に蹤がしてある。八重垣の神聖な池の蠑螈の肉は、催戀的性質を有するものと信ぜられてゐる。昔はその肉を燒いて、粉にしたのを戀藥としたのであつた。この習慣に就いて、小さな歌がある——

　惚れ藥、外にはないかと、いもりに問へば、
　　指を圓めて、これぱかり。

池の水は澄んでゐて、澤山蠑螈が見える。戀人は紙で小舟を作り、一厘錢を乘せ、水に浮べて、注視するといふ習慣である。紙に水が滲み込むと、銅貨の重さで底へ沈んでも、水が澄んでゐるから判然見える。若し蠑螈が近寄つて來て、それに觸れると、戀人は自分の幸福は神意で保證されたものと信ずる。しかし若し蠑螈が近寄つて來なければ不吉の兆である。一つの小さな紙舟は可哀相にも、どうしても沈み得ないで居るものを私は目撃した。それは人が寄りつかれない方の側へ流れて行つて、水際から樹木が立上がつて、幹で作りあげた固い壁のやうになつてゐる處で、垂れた小枝に引懸つてゐた。その紙舟を流した戀人は悲しい思ひを懷いて去つたに相違ない。

池に近く、路傍に椿の叢林が澤山ある。その枝端を二つづゝ白紙の紐で結んである。これは占ひの森だ。誠實な戀人は二本の枝を一緒に曲げて、緊かりと紙を結んで、それを合はせることが――片手の指で――出來ねばならぬ。これが立派に出來るのは、吉兆だ。紙片には何も書いてない。

しかし藪の竹には、その幹の表面に澤山の文字が書いてあつて、蚊が居るのにも拘はらず、幾時間でも好奇心を働かせるに足りる。大部分の名は、女の綺麗な呼び名であるが、また男の實名[注]もある。

註。日本の人名には少くとも十一の主要なる種類がある。實名は西洋の受洗名に當る。この複雜且つ趣味ある問題について、讀者はチェムバレン教授の名著『日本のことども』第二五〇頁――二五五頁を參照するがよい。

して、奇妙にも女の名と男の名が、いづれの場合に於ても併記してない。この文學上の證明から判斷すると、日本の戀人達は――少くとも出雲では――西洋の人々よりも一層祕密的だ。戀に焦れてゐる青年が、決して彼の實名と、彼の情人の呼び名を一緒には書かない。して、氏名を錄することは殆ど敢てしない。彼が自身の實名を記しておけば、單に彼の情人の呼び名を、神と竹に向つて囁くだけで滿足する。もし彼が彼女の呼び名を竹の表皮に刻み込むならば、彼の名の代りに、單に彼の存在と年齡だけを表しておく。次の可憐なる一例の如く――

高田ときと緣結び願ひ升　　十八歲男

この戀人は彼が慕つてゐる、娘の完全な名を書くことを辭せなかつたが、かやうな例は、私の發見し得た限りでは、無類であつた。他の戀人達は、たゞ彼等の魅惑者の呼び名だけを書いてゐる。して、おとかさんとかの敬稱は、愛の無遠慮な親密に於ては存在を示さな

い。お春さん、お金さん、お菊さん、お竹さん、は一つもなくて、春、金、竹、菊が無數だ。娘達は勿論彼等の戀人の名を明記することを、夢にも思つてゐない。しかしこゝに多くの藝名がある。黄金の猫を崇拜する、いたづらものの藝者が臆面もなく、樂榮、朝榮、若榮、愛吉、壽、幸八、小花、玉吉、勝子、朝吉、花吉、勝吉、千代榮、千代鶴などといふ名を書いてゐる。朝榮と戀に落ちた男は、屢々自分の生まれた朝を呪はねばならぬこととなるだらう。幸八に迷つた男は、不幸の骨頂を見るだらう。また花吉を愛撫しようと望む男は、兇災を招くだらう。して、私は二十三歳といふ年齢を書いてゐる一人の青年は、春の嫩かな葉といふ意味の名を有する、若草といふ女に魅せられてゐることを知つた。青年よ、君が若草を戀ひそめるよりも、もつと不幸なる災難は、たゞ一つあるのみだ――それは彼女が偶然にも君に對して戀に陥ることだ。といふのは、すると、君達兩人は親戚知友へ美しい手紙を書いて、死の藥を傾け、お互の腕に抱合つて、一蓮託生の信仰を囁きつつ、この世を去るといふ破目になるから。否、君が彼女の色香に迷つてゐる魅惑が消えるやうにとこそ、神に祈るがよい――

手にとるな、矢張り野におけ、げんげ花

それから、こゝに戀人が英語で書いたのがある！この神が英語を知り玉ふと、勝手に考へてゐるのは誰だらう。屹度ある學生が、全くの羞恥から、彼の心の祕密を外國語――この私の外國語で刻んだのだ。ある外國人の眼が、それを眺めようとは夢にも思はないで、I wish you, Haru! と、一度ならず、四度まで、否、五度！每回前置詞を省き乍ら書いてゐる。この古い森の中で――この古い出雲の國で――最も古い神へ對して――英語で祈つてゐる！たしかに、戀愛では最も內氣な者でさへ神の寬容に附け上つてゐる。實際、猛遠素戔嗚尊の忍耐が甚だしいのか、それとも、尊が帶び玉ふた十拳の劍の錆びが甚だしいのか、その孰れかであるに相違ない。

第十五章　狐

一

日本の本州を旅行すると、あらゆる路傍の木蔭や、古い森や、殆どあらゆる小山の上や、村外づれなどに神道の小祠があつて、祠の前又は祠の兩側に石て作つた、狐の坐像が見受けられる。普通は一對の狐が相向き合つてゐる。しかし十、二十、乃至數百にも及ぶことがある。數百の場合には大抵、形が非常に小さい。大都會ては往々、大きな神社の境内に、いろ〳〵の大きさの石の狐が、小は數寸の高さの玩具形から、大はその臺座が人の頭上に聳える巨像に至るまで、數へ盡くせぬほど、層列をなして社殿の周圍に蹲つてゐることがある。誰ても知つてゐる通り、かやうな社祠は米の神である、稻荷を祀つたものだ。日本を廣く漫遊した人は、その訪ねて行つたことのある、いづれかの田舍の場所を想起する每に、記憶の一隅に、一對の鼻の缺けた、灰綠色の石の狐が現れるてあらう。私自身の日本

旅行の記憶に於ては、これらの姿が美しい特徴として、一定條件をなしてゐる。
東京附近及び東京内に於て――時として墓地に於て――頗る美しい理想化された狐の形が見られる。獵犬の如くに優美なものだ。彼等は水晶又は、他の半透明體の長い綠色又は灰色の眼を有し、神話的着想として强い印象を與へる。が、田舍の方では、左程藝術的に出來てゐない。特に出雲では、かゝる石彫は頗る原始的な趣を示してゐる。この神國では狐の像が驚くばかり多種多樣である――滑稽じみたのや、風變りなのや、怪奇なのや、魁偉なのや、いろ／＼あるが、大部分非常に粗野な彫刻だ。しかし私はそれがために、興味索然たるものだと斷言する譯に行かない。東海道の彫刻家の作品は、輕快な優美及び妖怪的といふ因襲的藝術觀念を模倣してゐる。出雲の田舍びた狐は、優美を缺ぎ、野暮ではあるが、さま／＼奇異な趣に作家の個人的好尙を發揮してゐる。氣まぐれ、冷淡、穿鑿好き、沈鬱、滑稽的、皮肉的など、種々の氣分を示してゐる。油斷なく見張りをしてゐるもの、居睡りをしてゐるもの、横目を使つてゐるもの、まばたきをしてゐるもの、冷笑してゐるもの、微笑を湛へて待つてゐるもの、口を開け又は閉ぢて、こつそりと聽き耳を立ててゐるもの――すべてのものに面白い個性と、また大部分のものに、鼻が取れたのにさへも、何となく萬事を心得たやうな、人を馬鹿にしたやうな風がある。加之、是等の古い鄙びた

狐達には、その現代的な東京の仲間が示し得ない自然美がある。彼等が臺座に乘つたまゝ、世紀の潮の干滿に耳を傾けつゝ、人類に向つて薄氣味惡るく笑を偸んでゐた内に、長い歲月は彼等の上に、美しく柔かな色の、さまざまに斑點ある上衣を與へた。彼等の背は最も細やかな天鵞絨のやうな蒼苔て蔽はれ、彼等の手足や、尾の尖端は纎細な菌類のために、燻ぶし金や、燻ぶし銀の斑紋をつけてゐる。また彼等が最も多く集まる處は、最も美しい土地だ——高く聳えた蔭深い森て、靜かな社祠を蔽へる、綠の薄明りの中に鶯が啼いて、石燈籠や唐獅子は、苔を帶びて、土地から生えたやうだ——松蕈の如くに。

私は何故に千匹の狐の中、九百匹まて、毀はれた鼻を有つてゐるのか、合點が行き兼ねた。松江の本町通りは、出雲の不具にされた狐の鼻の尖頭で、端から端まて敷きつめることが出來るかも知れぬ。ある友はこの點について、私が不思議に思つたのに對し、簡單乍ら暗示に富める『子供』といふ言葉て答へた。

二

狐の神の通稱である稻荷は、『稻の荷』といふ意味であるが、この神の太古の名は『食物の尊い靈』即ち古事記にある、宇賀御魂命[註一]である。この神が狐の崇拜との關係を示す、三毛津神、即ち三匹の狐の神といふ名を帶びるに至つたのは、極めて近代のことなのだ。實際、狐を超自然的のものと見做す考へは、十世紀乃至十一世紀までは、日本にまだ入つてゐないやうだ。して、狐の澤山の像を有する、狐の神の祠が、多くの大きな神社の境内に見出されるのであるが、日本最古の社殿――杵築――の廣い境域中に、狐の像を發見し得ないのは、注目に價する。また稻荷が白狐[註二]に乘れる髯の生えた人として、表現されてゐるのは、たゞ近世の藝術――豐國などの――に於てである。

註一。豐受姫神又は宇賀御魂命（この神には他にまだ八つの名がある）は古事記及びその註釋者によると、女神である。且つ神道の最大學者平田篤胤は、サトウ氏の引用する處に據れば、稻荷といふ神は決して實際に存在しないで、その名さへも誤りであると云つてゐる。しかし坊間で稻荷といふ神を創造してゐるから、存在してゐるものと假定せざるを得ない――單に民俗學者のためにでも。して、私は彼を男の神とし

て述べてゐるが、それは繪畫彫刻にかく現してあるからだ。彼の神話的存在については、京都に於ける彼の大きな、富裕な社祠は、目醒しい證據である。

註二。白狐は日本の藝術家の得意とする題材だ。一八九〇年の京都大博覧會に、白狐を畫いた數幅の美しい畫が出品してあつた。燐火を帶びた狐が、今日世界的名聲を博することとなつた、畫家達のかいた、非常に稀で高價な、古い錦繪に屢ゝ見える。往々夜間、頭の上に淡い光を放つ火――狐火――を有つて、ぶらついてゐる狐が畫かれてゐる。狐の尾の先端は、彫刻に於ても畫に於ても、普通古い佛教藝術の象徴的の玉で飾つてある。私は尾に輝ける玉をつけた白狐の掛物を藏してゐる。松江の御城山の稲荷社で買つたのだ。その掛物の藝術は拙いが、その著想には妙味がある。

稲荷はたゞ米の神として崇拜されるばかりではない。實際、多くの稲荷がある。恰も上古希臘にハーミーズ、ジュウス、アセィナ、ポサイドンの諸神があつて、學者の知識上では同一ても、一般人民の想像に於ては、全く異つてゐたやうなものである。稲荷はそのさまざまの性質のため數を増した。例へば松江に神谷樣の稲荷さんといふのがある。出雲地方て最も普通て、また特に烈しい咳と風邪の神である。田町に小祠があつて、俗に風の神樣と呼んでゐる。して、こゝへ祈つた後、咳や風邪の癒つた人々は、御禮として豆腐を捧げる。

また大庭村に有名な特殊の稲荷さんがある。その祠の壁には、粘土製の小狐の滿てる大

きな箱が掛けてある。祈願をする人は、その一つの小狐を袂に入れて家へ持つて行つて、祈願の叶ふまで、大切に保護して尊敬する。その後、また祠へ持つて行つて、箱の中へ返へし、出來るならば、祠へ幾分の寄附を獻げるのである。

稻荷は屢〻病氣を癒すものとして、更に一層富を與へる神として拜まれる。（恐らくは舊日本のすべての富は、米の石高で計られたからだらう）だから、稻荷の狐は、時として口に鍵を含むものとして現してある。して、富を與へる神であるため、或る地方では女郎階級の特別な神となつてゐる。例へば橫濱の遊廓附近に、遊覽の價値ある稻荷がある。それは辨天の社と同一の境内にあつて、稻荷の祠としては、並外づれて大きい。參道には鳥居が連續して、其高さは祠に近づくに隨つて低くなり、又高さの低くなるに比例して、ますますその間隔は密になる。鳥居每に、左右に奇異なる一對の狐が坐つてゐる。最初の一對は、獵犬の如く大きい。第二番のはもつと小さい。して、他のものは鳥居の小さくなるに從つて小さくなる。祠の木造の階段の下に、一對の頗る優美な石彫りの狐がある。黑褐色で、頸の回はりに赤い布片が卷いてある。階段の左右にも木彫りの白狐が一匹づゝゐて、階段を上るに從つて、順次に小さくなつてゐる。して、戶の敷居の處には高さ三寸にも達しない、極く小さな二匹の狐が、碧空色の臺に坐してゐる。是等の狐の尾は、金で尖端を

飾つてある。それから、祠內を覗いて見ると、左方の長い低い卓子の如きものの上に、幾百の小さな狐の像が乘つてゐる。それはたゞ白い尾を有つてゐて、戶口のものよりも小さい。稻荷の神像は無い。實際私はまだ稻荷神社て、稻荷の姿を見たことはない。神壇の上には、普通の神道の象徵が見える。して、戶口と相對して、壇前には一種の燈籠が立つてゐる。その四側は玻璃て、木造の底には奉納の蠟燭を立てる釘の尖頭が散在してゐる。

して、若し讀者がこゝに見張つてゐると、折々恐らくは一人や二人でなく、綺麗な娘が階段の下へ來るのを見るだらう。彼女の唇には華かな紅が施され、またいかなる少女も妻も着ないやうな美しい古風な服裝をしてゐて、一個の貨幣を戶口の賽錢箱に擲り込み、それから、『お蠟燭』と呼び上げる。直ぐに奧の室から、點火せる蠟燭を携へた老人が現れ、それを燈籠の釘の尖頭に立てて退く。かやうな蠟燭の奉納には、いつも幸運に對する祕密の祈願が伴つてゐる。しかし、この稻荷は女郎社會以外の人々からも、大いに崇敬を受けてゐる。

狐の頸の回りの赤い布片も、また奉納品てある。

三

出雲では、他國よりも狐の像の數が、多いやうに思はれる。して、出雲では、少くとも一般百姓の間では、米の神としての崇拜以外のあるものを象徵してゐる。實際狐の田の神といふ古い觀念は、下等社會では純然たる神道の精神とは全然異れる奇怪な崇拜――狐の崇拜――によつて、蔽ひ隱され、殆ど消されて了つてゐる。家來の崇拜が、殆ど主人たる神の崇拜に取つて代つてゐる。始め狐が稻荷に取つて神聖であつたのは、たゞ現在猶、鑑が金比羅に對し、鹿が春日大明神に對し、鼠が大黑に對し、鯛が惠比壽に對し、白蛇が辨天に對し、百足が戰鬪の神なる毘沙門に對して、それ〳〵神聖であると同じことに過ぎなかつた。しかし世紀の數を重ねる內に、狐の方が神を横領したのであつた。また狐の石像が、狐の崇拜の唯一の外形的證據ではない。殆どあらゆる稻荷の背後に、社祠の壁の地上一二尺の邊に、直徑約八寸の圓い穴が見出される。往々それは引き板によつて、自在に閉められるやうに作つてある。この圓孔は狐の穴で、その中を覗いて見ると、恐らくは豆腐又は狐が好むと想像される、他の食物が献げてあるだらう。また穴の下又は附近に突出せ

る板の上に、或は穴の縁に、多分米粒が撒き散らしてあるだらう。して、百姓が穴の前で手を拍つて、小さな祈を述べ、その米を一粒乃至二粒嚥み込むのを見受けることがある。その米粒が病氣を癒やし、又は豫防すると信じてゐるからだ。かやうな穴を備へてある狐は、見えない狐、幻ろしの狐で、百姓はお狐樣とあがめて呼んでゐる。若しその狐が自からを人の目に現すときには、その色は雪の如く白いと云はれてゐる。

さまざまの靈狐の種類があると、唱へる人もあれば、また狐は唯だお稻荷樣と野狐の二種のみだといふ人もある。また或人は優劣の二つに分けて、優等に四種――白狐、黑狐、善狐、靈狐――の存することを主張する。或る他の人々は唯だ三種の狐――野狐、人狐、稻荷狐――を數へるが、野狐を人狐と混じたり、稻荷狐と人狐と同一視したりするものが多い。是等の信仰の混亂を解くことはなかなか出來ない。特に百姓の間ではさうだ。加之、信仰は地方によつて異る。私はこの迷信が特に強く、且つ一種無比な特色を有する出雲に十四ヶ月滯在の後、狐の迷信について、次のやうな甚だ散漫なる概説を作ることを得たのに過ぎない――

すべての狐は超自然力を有する。善惡の兩種があつて、稻荷狐は善い方で、惡るい狐はそれを怖れる。一番惡るいのは、人狐で、これが特別に惡靈憑依の狐だ。大いさは鼬鼠位

て、尾の外は恰好もや〻似てゐる。尾は他の狐と同じい、その狐が屬してゐる人の外には、いつも姿を見せない。人家の内に棲んで、養はれることが好きで、よく待遇をする家を繁昌させ、田には水の乏しくならぬやう、釜には米の缺けないやうにする。しかし、若しその感情を害すると、家族に災を與へ、作物を損める。野狐もまた惡るい。これも人に憑くことがある。が、これは特に魔法師て、人を魅惑して欺くことを欲する。どんな形にでも化け、且つ自からを見えないやうにする力を有つてゐる。しかし、犬はいつでも、それを見ることが出來るので、非常に犬を怖がつてゐる。それから、他の形に化けてゐるとき、水にその形の影が落ちると、水はたゞ狐の影を映すに止まる。百姓共がそれを殺すと、その狐の親類のもの、又は狐の靈氣によつて迷はされる。たゞし狐の肉を食べるならば、後に迷はされない。野狐もまた家屋へ入る。家族がその家屋内に狐を有つてゐる場合、小さな種類、卽ち人狐を有つてゐるのが多い。しかし折々兩種が同じ屋根の下に棲むこともある。野狐が百年間生きると、眞白になつて、稻荷の位に列すると云ふ人もある。

是等の信仰の中には、珍らしい矛盾が含まれてゐる。また更に他の矛盾が、本章の後頁に發見されるだらう。狐の迷信を幾分でも明白にすることは六づかしい。信者自身の間に於て、此問題に關する思想の混淆のためばかりでなく、またその思想の作られた要素の雜

多なるにも因つてゐる。その起原は支那である。が、日本では妙に神道の一つの神の崇拜と交り合つて、それからまた佛敎の奇術的思想によつて、變化され、また擴張された。一般人民だけについて云へば、彼等が狐を崇敬するのは、狐を怖がつてゐるからだと云ふのが恐らくは安全だ。百姓は今猶、彼の怖れてゐるものを拜んでゐる。

四

狐の種類や、稻荷狐と人憑き狐の區別に關する坊間の觀念は、昔の學者の著書以外に於ては、今日ほどに判然確立してゐたか、どうかは非常に疑はしい。現に秀吉から稻荷へ宛てた手紙が存してゐるが、それによると、太閤時代には、稻荷狐と惡靈の狐とは同一視されてゐたらしい。この書簡は今猶、奈良の東大寺に保存されてゐる――

其方支配之野干、秀吉召使の女房に取附、爲レ惱候、有二何之遺恨一、成二其讐一候哉、此儀被二聞屆一可レ被二申越一候、其子細なく候はゞ、早々可レ被二引取一候、猶於二延引一は、日本國中、狐狩可二申付一候、委細之儀者、吉田神主、口上に申含候、恐々不宣。

三月十七日

太閤華押

稻荷大明神殿參

しかし武士階級が稻荷を崇拜したため、地方によつては、たしかに或る區別があつた。出雲の武士に取つては、稻荷は明白なる理由によつて、頗る人氣の盛んな神であつた。だから今でも松江の殆どすべての舊士族屋敷の庭園には、稻荷大明神の小祠があつて、その前には小さな石の狐が坐つてゐる。して、下級人民の想像では、すべての武士は狐を有つてゐた。しかし武士の狐は何等の恐怖心を起こさなかつた。それは善い狐だと信ぜられてゐた。で、封建時代の間は、人狐の迷信が松江のいかなる武士の家族にも、不快なる影響を及ぼしたことは無いやうだ。武士の階級が廢せられ、其名が單に一團の紳士社會として、士族と變つてから後、漸く始めてある家族達は、この信仰の常に强大であつた町人階級との婚嫁のために、迷信の犧牲となつた。

出雲の大名松平氏は、最も多くの狐を有つものと、百姓共によつて思はれてゐた。その一人の大名は、東京へ狐を使者[註]として用ひたと信じられてゐる。（一般の信仰では、狐は橫濱から倫敦へ數時間で行き得るといふことを注意せねばならぬ）て、東京の附近で罠に

かかつて捕へられた或る狐の頸に、その朝出雲の大名が書いた手紙が結んであつたといふ話が松江にある。

註。狐の使者は人目に見られずに旅行する。しかし若し罠で捕られるか、又は怪我をすると、彼の魔力が失せて、人に姿を見られる。

數千の石の狐がある、松江の御城内の稲荷様は、松平家が稲荷へ對してでなく、狐へ對して信奉の念篤い顯著なる證據だと、田舍の人々は考へてゐる。

しかし現今では、各〻の種があらゆる他の種に發達してゆくやうな、此幽靈の如き動物學に於て、明確なる類別をなすことは、最早不可能である。百姓の信心家の茫漠たる觀念のために、狐の靈氣と『尊い食物の魂』は、途方もなく混淆してしまつたので、兩者を區別することも出來ない。實際古の神道の神話は、『尊い食物の魂』に就いては、全然明白であるが、狐の問題に就いては何も云つてゐない。が、出雲の百姓は、歐洲舊教國の百姓の如く、自から神話を作るのだ。稲荷へ對して祈願するのは、惡神としてか、或は善神としてかと尋ねる時には、彼等は稲荷は善神で、稲荷狐は善い狐だと答へるだらう。彼等は白狐と、黑狐――崇拜すべき狐と殺すべき狐　こん〳〵と叫ぶ善い狐とくわい〳〵と啼

く惡るい狐のことを諸君に語るだらう。しかし狐に憑かれた百姓は、『私は稻荷樣だ――山伏の稻荷樣だ』とか、または他の稻荷の名を擧げて叫ぶ。

五

妖狐には三つの惡癖があるものとして、出雲では特に恐れてゐる。第一は復讐のため、又は單なる惡戲のため、魅惑によつて、人を欺くことである。第二には家來として、ある家の內に住み込むので、近隣からその一家は怖いものと思はれる。第三の最も惡るいのは、惡靈となつて、人の身體に入つて、狂亂苦惱に陷らしめることだ。この惱みを狐憑きといふ。

人を欺くために妖狐が最も好んで粧ふのは、美しい女の姿だ。その次には青年の形を假りて、異性を迷はすことである。狐の女の奸計について書かれたり、話された物語は數へ切れない。して、かの狡猾な手管にのせて、男を擒にし、一切財產を奪ひとる種類の危險な女は、言語道斷の侮辱なる「狐」といふ語によつて一般から呼ばれてゐる。

狐は決して眞に人間の形を帶びるのではなく、一種の磁石力によつて、或は魔法的毒氣

を擴げて、實際人間の形のやうに人をして信ぜしめるのだといふ人も澤山ある。

狐は必ずしもいつも惡るい目的のために、女に化けるといふのではない。次のやうな話が幾つもあるし、また一つの極めて立派な劇もある。ある狐が美女の形になつて、男と結婚し、子供を生んだ――それは全く以前に受けた恩惠に對する感謝からであつた――家庭の幸福は、たゞその夫婦の間に出來た子供の、奇異なる肉食的性癖のために擾されただけであつた。單に惡魔的目的を果すためには、女の形が必ずしもいつも最上の假粧ではない。全然女の魅力に無感覺な男もあるのだ。しかし狐の方でも決して、假粧の方法には窮しない。彼はプローテウス(譯者註)よりも更に多くの形に化ける。加之、彼は人をして彼の思ひ通りに、見たり、聞いたり、想像したりさせ得る。彼は人をして時間と空間を離れて物を見させる。彼は過去を思ひ起こさせ、未來を悟らせる。彼の力は西洋思想の輸入によつて破壞されてゐない。その證據には、僅かに數年前のこと、彼は幽靈列車を東海道線の上に走らせ、それがために非常に機關手を迷はし、怖れしめたてはないか?しかしすべての妖怪と同樣に、彼は好んで淋しい處へ出沒する。夜間彼は提燈の灯のやうな、奇怪なる狐火を危險な場所の邊に飛び廻らせるのが好きだ。この惡戲を防禦するには、交叉した指間にダイヤモンド形の空隙を存するやう兩手を合はせ、狐火の方に向つて、單に空隙を通じて息を吹き、或

る佛教の文句を唱へると、如何なる遠方からでも怪火を消すことが出來る。
しかし狐が惡戲の力を發揮するのは、夜ばかりではない。白晝でも彼は人を誘惑して、屹度殺されさうな場所へ行くやう導いたり、或はある幻影を浮ばせ、又は地震が起こつたと思はせ、人を怖がらせてそこへ行くやうにすることもある。隨つて古風な百姓は、何か非常に奇怪なことを見ても、自身の眼の證據を容易に信じない。一八八八年に起こつた磐梯山の素晴らしい爆裂——大火山を吹き飛ばして斷片とならしめ、二十七方哩の面積を荒廢に歸せしめ、森林を倒し、河流の方向を轉ぜしめ、數個の村落を其住民とともに埋めた、災害の最も興味と價値ある目擊者は、一人の農夫であつた。彼は恰も芝居を眺めてゐる如く平氣に、附近の山巓から全慘劇を見守つてゐた。彼は灰煙と蒸氣の眞黑な柱が二萬尺の高さへ立騰つて、その絕頂で傘のやうに擴がり、太陽を遮蔽したのを見た。それから湯よりも熱い不思議な雨が、彼の身體の上にふりそゝぐのを感じた。やがて一切暗黑になつた。それでも彼は一切萬事の終熄するまでじつとしてゐた。彼は初めから怖がらないことに決心したのであつた——彼の目に見え、耳に聞えるものは、悉く狐の魔法によつて、行はれたる瞞着だと考へたので。

譯者註。希臘神話の豫言の神。豫言を聽くために行く者があると、樣々に形相を變へて逃げる。

六

妖狐に憑かれた人々の狂氣は奇妙なものだ。彼等は裸體で絶叫し乍ら、町中をかけ廻ることもある。時としては横に倒れたまゝ口から泡を吹き、狐のやうな啼き聲をする。して、憑かれた人の身體の或る部分の皮膚の下に、動搖不定の塊まりが現れる。それは、特別な獨立の生命を有つてゐるらしい。針でそれを刺すと、忽ち他の場所へ滑つて移動する。いかにしつかり强い手で握つても、それは指の下から逸し去る。憑かれた人は、また以前に全然知らなかつた言葉を話したり、書いたりすると云はれてゐる。食べものは、たゞ狐が食べると信ぜらるゝもの——豆腐、油揚、小豆飯など——を食べるだけだ。しかも頗る多量に食べる——自身ではなく、憑いてゐる狐が空腹を感じてゐるのだと主張して。

狐憑きの犧牲となつたものが、家族親戚によつて、虐待を受けることは珍らしくない。——火で燒いたり、鞭つたりして、かやうにして狐を追拂ひ得ると思つてゐる。それから法印又は山伏——惡魔を拂ふ人——が迎へられる。惡魔拂ひをする人が、狐と議論を鬪は

せる。狐は憑かれた人の口を通して喋べる。狐が人に憑くことの邪惡に關する宗教的議論によつて降參させられると、彼は普通豆腐又は他の食物の澤山供給を受けるといふ條件で、立退くことに同意する。して、約束の食物は直ちに、狐が自からその家來と名乘つてゐる稻荷神社へ捧げられねばならぬ。人に憑く狐は、誰から送られるにせよ、或る稻荷の家來だと自稱するのが常である。尤も時には自からを神と呼ぶこともある。

憑かれた人が惡狐から解放されるや否や、彼はがつくり無感覺に陷つて、長い間倒れたまゝてある。また、一たび狐に憑かれた人は、それから後、豆腐、油揚、小豆飯又は狐の好きなものを食べることが出來なくなると云はれてゐる。

註。法印或は山伏は惡魔拂ひをする佛教の僧である。嚴密に云へば、法印は山伏の高級なものであつた。山伏は常に魔除けと共に易占を行つたが、現政府によつてかゝる營業を禁ぜられたので、山伏等が所有してゐた小寺は大概廢絕した。しかし百姓の間では、佛教の陰陽師がまだ狐憑きの病氣を癒すために迎へられ、依然山伏と稱せられてゐる。

七

人狐は姿を見せないと信ぜられてゐる。しかし彼が靜止せる水に近寄ると、その影が水中に見られる。だから『狐持ち』は、川や池のほとりを避けると信ぜられてゐる。

旣に陳べた通り、見えない狐は人間に附屬してゐる。日本の奴婢と同樣に、彼はその一家內のものだ。しかしその家の娘が嫁に行くと、狐は花嫁に隨つて、その新しい家へ行くのみでなく、またすべて結婚によつて、或は夫の家との血族のために、緣戚となつた家に狐の同族を繁殖させる。さて、あらゆる狐は七十五匹――七十五匹より多くもなく、少くもない――の家族を有つものと思はれてゐる。して、それには悉く食物を給せねばならぬ。かやうな狐は幽靈のやうに、一人づゝて食べるのは極く少量であるが、狐を持つてゐるのは、なかなか費用の要ることだ。『狐持ち』は一定の時刻に、狐に食物を供給せねばならぬ。して、狐が――全部七十五匹のものが――先づ始めに食べる。大きな釜で米を炊いてから、狐持ちは釜の側面を强く叩く。それから、蓋を取る。すると、狐が床を通して上つてくる。固より彼等が食べるのは、人間の耳には音も聞えないし、目にも見えないが、飯

は段々減つて行く。だから貧乏人が狐を持つのは、恐ろしい譯である。狐は一定せる倫理の法則を持たない。して、信用し難い召使たることを示してゐる。彼等はある家の繁榮を創め、また永くそれを維持することがある。しかし、七十五匹の目に見えぬ家來共の努力にも拘はらず、其家の上に重い災難がふりかかつてくると、彼等は突然あらゆる財寶を携へて逃亡する。それで、狐がその主人に齎らす一切の立派な贈與品は、他人から盗んできたものである。だから狐を持つてゐるのは、非常に不道徳なことなのだ。また一般の平安にも危險だ。狐は妖怪であつて、人間的感受性を缺いてゐるから、或る用心をしないからである。彼は夜間隣家の財布を盗み出して、主人の戸口に置くことがある。それがために若し隣人が先きに起きて、それを見付けると、必ず喧嘩が起こる。

狐の今一つの惡弊は、內密に話されたことを公にして、望ましからぬ誹謗事件を起こすことである。例へば、小林さんの家の狐が、主人の心祕かに嫉んでゐる隣りの中山さんについて不平を洩らすのを聞くことがある。すると、この熱心な家來は中山さんの家へ行つて、その人の身體へ入り込み、激しく彼を惱まし、『私は貴下がかく〳〵の害を加へた、小林さんの家來です。小林さんが私に立去るやう命ずるまで、私は貴下を惱ますのです』

といふ。

それから、最後に擧げるのであるが、しかも最惡の危險は、彼等が家族の誰かに對して怒を發することだ。成程狐は親友となつて、彼が住む家を富ますこともあるが、人間ではなく、隨つてその動機と感情は人間のと異つて、妖怪のそれであるから、彼の不機嫌を招くことを避けるのはむづかしい。如何なる明白な原因もないのに、最も不意な瞬間に、彼が怒り出すことがある。して、また其結果がどんなことになるかもわからない。といふのは、狐は本能的無限の幻覺——凡てのものを聞く耳なる天耳通、他人の最も祕密の考を知る他思通、過去の知識なる宿命通、すべての現在を知る知識なる全觀通——と、また變形變質の能力を有してゐるからである。だから、假令人を迷はす特有の力を別にしても、彼は本來殆ど惡に對して萬能なのだ。

註。天狗、即ち無限の幻覺といふ問題に關する、頗る珍らしい論文——佐田介石といふ佛僧の說敎を反譯したもの——が、ゼー・エム・ゼームス氏の筆によつて、日本亞細亞協會紀要第七卷に現れた。その中には狐の超自然力に關する面白い考察が入つてゐる。

八

是等並に幾多他の理由によつて、狐持ちと信ぜらるゝ人々は忌避される。世人は狐持ちの家族との婚嫁を勿論行はない。て、出雲に於て幾多の美しく、且つ技藝の嗜みある娘も、一般から彼女の家庭が狐を宿してゐると信ぜられるために、夫を得ることが出來ない。概して出雲の娘は、自國以外へ嫁に行くことを好まぬ。しかし狐持ちの娘は、他の狐持ちの家へ嫁に行くか、又は遠い國に夫を見出さねばならぬ。資産のある狐持ちは、このいづれかの方法によつて、娘を片付けるのに甚だしい困難を感じないが、貧乏な狐持ちの立派な娘は、迷信のために止むを得ず未婚でゐなくてはならぬこととなる。それは彼女を愛し、彼女と結婚を欲するものが、皆無だといふのではない——學校を出でてゐるから、狐などを信じない青年もある。が、それは富豪でない以上、田舍ではまだ一般的迷信を無視しても、大丈夫安全といふ譯に行かないからである。かゝる反抗の結果は、啻に夫ばかりでなく、一家一族によつて負擔されねばならぬこととなる。それはなか／＼考へねばならぬ結果なのだ。

狐持ちと信ぜられる人の中には、その迷信を利用することを知つてゐる人もある。概して田舍の人は狐持ちの感情を害することを恐れてゐる。狐持ちがその人目に見えぬ家來を遣はして、彼に憑かせる惧れがあるのだ。それて或る狐持ちは、その地方に對して非常な勢力を有つ。例へば米子の町に繁昌してゐる一人の町人がある。彼の意志は法律であり、彼の意見は決して逆はれない。彼は實際土地の支配者であり、して、またまさに富豪となられとしてゐる。これは全く彼が狐持ちと思はれてゐるからだ。

力士の階級は、狐に憑かれないと誇つてゐて、狐持ちも、狐をも恐れない。非常に力の強い人々は、すべてかゝる妖怪の力に對して安全だと信ぜられ、狐が彼等を恐れると云はれてゐる。人に憑いた狐が『私は貴下の兄に入らうと思つたが、あまり力が強くて叶はなかつたから、誰でも貴下の一族の中の人に復讐をしようと思つて、貴下に入つたのです』と云ふ例が、幾つもある。

さて、狐の信仰は、人に影響するばかりでなく、財産にも影響する。それは出雲に於ける土地の價値に數十萬圓の影響を及ぼしてゐる。

狐持ちと思はれる家の土地は、適當の價に賣ることが出來ない。世人がそれを買ふのを恐れる。狐が新しい所有主に損害を及ぼすかも知れぬと信ぜられてゐるからである。買主を求める困難は、山奥の方で、田が壇をなしてゐる場合に最も大きい。かやうな場合の農作で緊要なのは灌漑である。いつも困難を排して、さま／＼の巧妙なる工夫を施して水を引く。非常な渴水の季節には、百姓が水喧嘩をするに至ることもある。狐持ちの地面では、狐が甲の田から乙の田へ水を轉じたり、或は惡意のため、堤防に孔隙を作つて、作物を滅ぼしたりする危險がある。

この奇異なる信仰を利用する、拔目のない人も往々ある。松江の一紳士で、新式の立派な農業家は十五年前に、狐の恐怖といふ點に見込をつけて、出雲の東部で誰人も手を出さない廣大なる田地を買つた。その土地は彼の耕作法によつて、潤澤なる收穫を見た外に、

地價は六倍に及んだ。今日それを賣却すれば、彼は巨富を握り得るだらう。彼の成功と、彼が政府の官吏であつたといふ事實が、迷夢を醒ました。しかし、耕作の成功のみては、迷信の呪から土地を救ふことは出來なかつたであらう。彼が狐を追拂ひ得た力は、彼の官吏といふ資格に基いたものであつた。百姓に取つては、政府といふ語は、呪符である。

實際、出雲で最も富み、最も成功せる農業家て、數十萬の財産を有する神門郡××村の○○さんは、殆ど一般の百姓から狐持ちと信ぜられてゐる。彼については珍らしい話が傳つてゐる。まだ貧乏てあつた折、或る日森の中て白狐の子を發見したので、それを愛撫して、狐の好きな三種の食物――豆腐、油揚、小豆飯――を澤山與へたのだといふ人がある。また彼の家には、狐のために特別の座敷があつて、毎月一回、數百の人狐のために盛宴を行ふのだといふ人もある。しかし彼はすべて、かやうな噂を一笑に附し得て餘裕綽々だ。彼は上品な人物で、迷信の入り込まない教養ある社會ては、餘程尊敬を受けてゐる。

一〇

人狐が夜間に訪ねてきて、戸を叩くときは、その叩き方に一種の掩ひをかぶせたやうな

音があるので、經驗ある耳には、狐だといふことがわかる。狐はその尾で戸を叩くからだ。戸を開けると、一人の男か、或は恐らくは美しい娘か居るだらう。して、その人物はたゞ跡切れ跡切れの言葉で挨拶をする。決して、完全に理解されるやうな言葉使ひをしない。狐は或る言葉の全部を發音する事が出來ない。たゞ一部分に止まる。例へば『西田さん』を『にし……さ……』、『てござります』を『てごず……』、『內ですか?』を『うち……て……?』といふ。それから、もし讀者が狐の友人であるときは、訪問者は何かの小さな進物を讀者に與へて、直ちに暗黑の中へ消え去る。その進物は何であらうとも、朝に及んでそれを見るよりも、夜間の方が遙かに大きく見えるだらう。狐の土産品は、たゞ一部分だけ眞實である。

或る松江の士族が、一夜歸宅の途中母衣町を通りかかると、一匹の狐が數匹の犬に追はれて、一所懸命に走つてゐた。彼が傘で犬を擊退したので、狐は脫する機會を得た。翌夜彼は誰かが戸を叩く音がして、開けて見ると、非常に綺麗な娘がそこに立つてゐた。彼女は『昨夕は若し御親切を受けませんでしたら、屹度死にましたのでせう。どう御禮を申上げてよろしいか存じません。これは誠に御粗末なものですが』と云つて、彼の足許へ小さな包を置いて去つた。彼が包を解いて見ると、二羽の美しい鴨と銀貨二枚——長い重い葉

狀の貨幣で、一枚が十弗乃至二十弗の價を有し、今では古物蒐集家が熱心に探してゐるもの――が現れた。暫くすると、一枚の銀貨は彼の眼前で一片の草に變つた。他の一枚はいつまでも眞正のものであつた。

松江の醫者、杉貞庵は或る夜臨産の場合に迎へられて、市外の白鹿山にある家へ行つた。下男が家紋の附いた提燈を携へて、彼を案内した。彼は堂々たる邸宅へ着し、鄭重なる接待を受けた。産婦は無事に天晴れ立派な男兒を生んだ。一家のものは醫者に對して、饗應至らざる處なく、澤山の金品を贈つて彼を歸した。翌日彼は日本の作法に從つて、謝禮を陳べるために行つたか、その邸宅は見付からなかつた。實際、白鹿山には森の外、何もなかつた。家へ歸つてから、彼は再び黄金を調べてみた。いづれも眞正の貨幣であつたが、唯一枚は草と變つてゐた。

稻荷に關する迷信を利用した珍らしい話がある。

數年前、松江で非常に繁昌した豆腐屋があつた。豆腐は大豆から製して、外見は立派な

カスタードに似てゐる。すべての食品中、狐は豆腐と蕎麥を一番好いてゐる。嘗て一匹の狐が美装せる人間に化けて、湖畔の有名な蕎麥屋なる、乃木村の栗原屋へ行つて、多量の蕎麥を食べたといふ傳說がある。しかし、その客が去つてから、彼の拂つた金錢は鋸屑に變つた。

豆腐屋の主人の經驗は、これと異つた。或る見すぼらしい服裝の男が、毎晚一丁の豆腐を買ひにきて、長く飢ゑてゐたやうに急いで卽座に食べた。彼は數週の間、毎夜來て、しかも一言も言葉を交じへなかつた。しかし主人はある晚、この男の襤褸の下から、突出してゐる髦々たる白い尾の尖端を見た。この光景はこの主人に不思議な驚異と、凄い希望を與へた。その夜から彼は、その神祕な客を追從的慇懃を以て待遇し始めた。が、一ヶ月も立つてから漸つと、客は言葉を發した。それは次の如くであつた――

『私は人間のやうに見えるでせうが、人間ではありませぬ。たゞ貴下を訪ねるために、人間の形を冒したのです。私は貴下が毎度參詣される、高松の稻荷から來ました。貴下の信心と親切に酬ひようと思つて、今日は貴下を非常な危險から救ふために來ました。その譯は、私の有つてゐる靈力で、明日この町に大火事のあるのがわかつたのです。町内の家は皆燒けても、この家は燒けないやうにします。この家を救ふために、私は魔除けをしよ

うと思ひます。が、それをするには、貴下の倉庫を開けて私を入らせ、誰も覗いて見てはいけません。人に見られると、魔除が駄目になりますから』

主人は篤く感謝の言葉を陳べて、倉庫を開いて、恭しく稻荷樣を入れ申し、家族や僕婢に、誰も見ないやうにと嚴命した。この命令は非常によく遵奉されたので、倉庫内の一切の物品と貴重品全部は、夜間易々と運び去られて了つた。翌日、倉庫は空虛になつてゐるのがわかつた。して、火事は起らなかつた。

今一人松江の富裕な商人が、容易に或る贋稻荷の餌となつたといふ、證據確實な話がある。この稻荷は彼に夜間或る宮へ、幾何かの金額を捧げて置けば、彼の平生の信心が酬ひられて、朝になると、二倍になつてゐるだらうと告げた。商人は數囘小額の金を宮へ捧げて、それが一夜の内に二倍になることを發見した。それから、彼はもつと巨額を置いても、同じく增加したので、數百弗の冒險を試みて、それも二倍になつた。最後に彼は銀行から彼の所有金全部を引出して、或る夜それを宮へ置いた——すると、彼はもはや再びその金を見なかつた。

一二

靈狐を題材とせる文學は頗る夥しい。古いのは十一世紀からのもある。古い物語や、近代の安價な小說や、歷史的傳說や、通俗のお伽噺の中で、狐は驚くべき役割を演じてゐる。狐については非常に美はしい、非常に哀れな、非常に怖ろしい話も隨分ある。大學者によつて論究された狐の傳說もある。また日本のあらゆる子供の知つてゐる傳說——玉藻ノ前の歷史のやうな——もある。玉藻ノ前は鳥羽天皇の美しい寵姬で、その名は諺となつたほどであるが、實は結局九尾金毛の妖狐とわかつたのであつた。しかし、狐の文學の最も興味ある部分は、日本の戲曲に存してゐる。戲曲の中では、通俗の信仰が屢〻最も滑稽的に反映されてゐる。十返舍一九の膝栗毛の喜劇から次に抜いたもののやうに——

「喜多八と彌次が、江戶から大阪へ向つて旅行してゐる。赤坂の少し手前で、喜多八はよい宿を取つておくために一ト足先きへ急ぐ。彌次はゆつくりと步いて行つて、路傍に老婆が出してゐる茶店に一寸休んだ」

老婆。御茶を召上がりませ。

彌次。難有う。これから次の驛へは――赤坂へは、どれ位あるだらう？
老婆。まあ一里位で御座います。しかし御伴侶樣がなくては、今晩こゝで御泊まりになつた方がよろしう御座いますよ。途中に惡るい狐がゐまして、道中のお方を誑ましますから。
彌次。それは怖い話だ。しかし僕は行かなくちやならん。伴侶が先きへ行つて待つてゐるんだ。
〔茶代を拂つてから、彌次は出掛けたが、夜は眞暗で、老婆から聞かされた話のために、大いにびく／＼してゐる。可なり歩いてから、不意にこん／＼と狐の啼く聲がした。いよいよ怖くなつて、彼は聲の有らん限り絶叫した〕
彌次。僕の側へ來て見ろ、狐め、すぐ殺してやるから！
〔喜多八も老婆から話をきいて、喫驚したので、彌次を待たうと決心して、暗黑の中で、『僕が待つて居ないと、我輩兩人とも、屹度誑されてしまふだらう』と、獨り言をいつてゐる。突然彌次の聲が聞えたので、大聲で彼を呼ぶ〕
喜多八。おい、彌次さん！
彌次。君、そこで何してるんだ？

喜多八。僕は先きへ行かうと思つたんだが、怖くなつたから、立止まつて、君を待つことにしたんだよ。

彌次。（狐が喜多八に化けて、誑まさうとするのだと思つて）僕を誑まさうとしてるだらう？

喜多八。變なことをいふねえ！僕はうまい餅を君に食べさせうと思つて、買つてきてるんだよ。

彌次。馬糞は食べられないよ！

註。狐は人に馬糞を食べさせて、餅を食べてゐると思はせたり、湯に浴る積りで下水溜に入らせたりして、面白がつてゐるものと、一般に信ぜられてゐる。

喜多八。疑つてはいかんよ！――僕は實際喜多八だよ。

彌次。（猛烈に喜多八に跳びかかつて）さうだ、貴樣は僕を欺くために喜多八に化けたのだ。

喜多八。君は何うしたんだ？僕を何うするといふんだ？

彌次。殺してやるんだ！（喜多八を倒す）

喜多八。やあ！ひどい目にやられた。どうかゆるしてくれ。

彌次。實際怪我をしたといふなら、貴様本當の姿を見せてくれ。（兩人相もがく）

喜多八。何をするんだ？そこへ手をやつて。

彌次。貴様の尻尾を觸はつて見るんだ。すぐ尻尾を出さなけりや殺すぞ！（手拭を取出し、喜多八の兩手を背後で縛りつけて、追ひ立てて行く）

喜多八。どうか解いてくれ！まづ解いてくれ！

（兩人はやがて殆ど赤坂へ達した。すると、彌次は犬を見付けたので、それを呼んで、喜多八を近く犬に引きずりよせた。狐が如何に化けの皮を被つてゐても、犬は看破するものと信ぜられてゐるから。しかし犬は喜多八に一向頓着しない。彌次はそこで喜多八を解いて詫びを述べる。兩人とも先刻、恐れたことを笑ひ合ふ）

一三

しかしまた二三の頗る愉快な形式の狐の神もある。

例へば松江の非常に邊鄙な町――旅人は道に迷うた場合の外は、行きさうにもない町―

ーに、地行場(ちぎやうば)の稻荷又は子供稻荷と呼ばれるのがある。それは極めて小さいけれども、また極めて有名である。最近一對の新しい石の狐が献納された。餘程大きくて、齒には金が塗られ、一種可笑しげな容貌を帶びてゐる。これが門の兩側に坐つて、雄は顎を開いて齒を露出し、雌は愼ましやかに、口を閉ぢてゐる。

註。この形式は唐獅子とか、柱や壁板に刻める登り龍、降り龍の如き、社寺の象徴的護衛の態度に對して、昔からの藝術的法則と見える。熊野神社では、隨身さへも、一方は口を開き、他方は口を閉ぢて、表現されてゐる。

かやうな二つの表象の區別の起原について、私が質問をした時、若い佛教學者が告げた。この形の雄像は阿といふ音を發音し、口を閉ぢたる雌像は、吽といふ鼻音を發音してゐるものと思はれてゐる。阿と吽は希臘の字母のアルファとオメガに相對して、即ち始と終を象徵してゐる。法華經に於て、佛陀もまたかやうに、宇宙の最始であり、最終であるものとして、且つ世界の父として、自身を啓示してゐる——婆伽梵神歌に於ける訖哩史那(クリシユナ)の如く。

境内には幾多の鼻や頭や尾の損はれた、古い狐の像がある。二個の大きな唐獅子がある。その前へ奉納の草鞋を掛けてある。足の痛い人が唐獅子樣に平癒を祈願したのだ。それから荒神の祠もあつて、子供等の人形の遺骸を、澤山そこに置いてある。

註。通例死んだ子供の人形や、人形の破損したのを荒神に與へるのであるが、一つ例外がある。男兒の節句に進物として男兒にいつも與へる書道及び學問の神の像は、破損した時には、荒神に與へないで、天神様白神へ與へる。少くとも、それが松江の習慣である。

地行場の稻荷社の格子戸には、八重垣神社と同じく、無數の小紙片が結ばれて、白くなつてゐる。紙片は祈願を意味する。しかしその祈願が特別で且つ珍らしいものだ。戸の左右と上方に、奇異な小さな奉納の繪が壁に貼つてある。それは大抵、子供が風呂槽に入つてゐる光景、又は子供が頭を剃つて貰ふ光景を描いてある。また一二枚は子供の遊戲せる畫もあつた。さて是等の象徴と驚異を解釋すると、次の通りである——

たしかに讀者が知る如く、日本の大人と同じやうに、日本の子供も毎日湯に浴せねばならぬ。また極小さな兒女の頭を剃ることも、習慣となつてゐる。しかし遺傳的忍耐と古い習慣を守らうとする强い固有の傾向にも關らず、幼兒の柔かな皮膚に取つては、剃刀も湯もなか〳〵堪へ難い。何となれば日本の湯は非常に熱いからである。(槪して華氏百十度を下らない)して、西洋の大人でも、それを辛抱して、その衞生的價値を味得するには、徐々と馴れて行かねばならぬ。また日本の剃刀は、西洋のほど機械が完全でなく、また石鹼泡をも用ひないので、最も熟練な人が使用しないと、少々傷け易い。それから、日本の

兩親達は子供に對して暴虐でない。彼等は愛撫したり、賺かしたりする。滅多に强制したり、威嚇したりせぬ。だから、嬰兒が入浴に抵抗したり、剃刀に對して反抗する場合、兩親は全然窮境に陷るのだ。

頭を剃るのと湯に浴ることを拒む子供を持つた兩親達は、地行場の稻荷樣に賴む事にする。稻荷樣がその使者を一匹遣はし、子供を面白がらせ、頭を剃つたり、湯に入つたりする新生活に調和させ、從順で且つ幸福であるやうにして下さるやう祈願する。また子供が惡戲好きであるとか、或は病氣になつた場合にも、この稻荷樣にたよる。もし祈願成就の折は、聊かの献品をする――時としては、戶に貼附けてあるやうな、祈願の効果を描いた畫を捧げる。かやうな畫の數多いことと、また神社の繁昌から判斷すると、子供稻荷樣はたしかに、その評判に値ひするらしい。私がその境內で過ごした數分間にさへ、嬰兒を背負つた若い母が三人も、參詣してきて、祈願をかけ、献げ物をするのを私は見た。私は其內の一人の子供――非常に綺麗な子供――は、まだ一度も頭を剃られたことの無いのに氣がついた。これは明らかに頗る頑固な難物と見えた。

地行場の稻荷からの歸途、私をそこへ案內して吳れた、下男が次の話をきかせた。彼の

直ぐ隣りの人の息子、七歳になるのが、或る朝のこと、遊びに出てた限り、二日間見えなかつた。折々親類の內へ行つて、一兩日位泊まつてくることもあるので、最初は兩親もあまり不安に思はなかつた。しかし翌日の夕方、親類の內に來てゐないことがわかつたので、早速搜索にかかつた。が、搜索も、聞合せも無效に了はつた。すると、夜更けて、戶を叩く音が、その子供の家で聞えて、母は急いで出てて見ると、遊びに出てたいたづら兒は、地上にすや〳〵眠つてゐた。誰が戶を叩いたのか、それはわからなかつた。子供を呼び醒ますと、笑つて、語つていつた——彼が見えなくなつた朝、彼は殆ど同じ年配で、非常に美しい眼を有する子供に逢つた。その友達が彼を森の中へ誘つて、終日終夜とまた翌日も、珍らしい遊戲をして面白く遊んだ。しかし彼はたうとう眠たくなつたので、友達は彼を家へ送つてくれた。彼は空腹を感じなかつた。友達は明日また來るといふ約束をした。

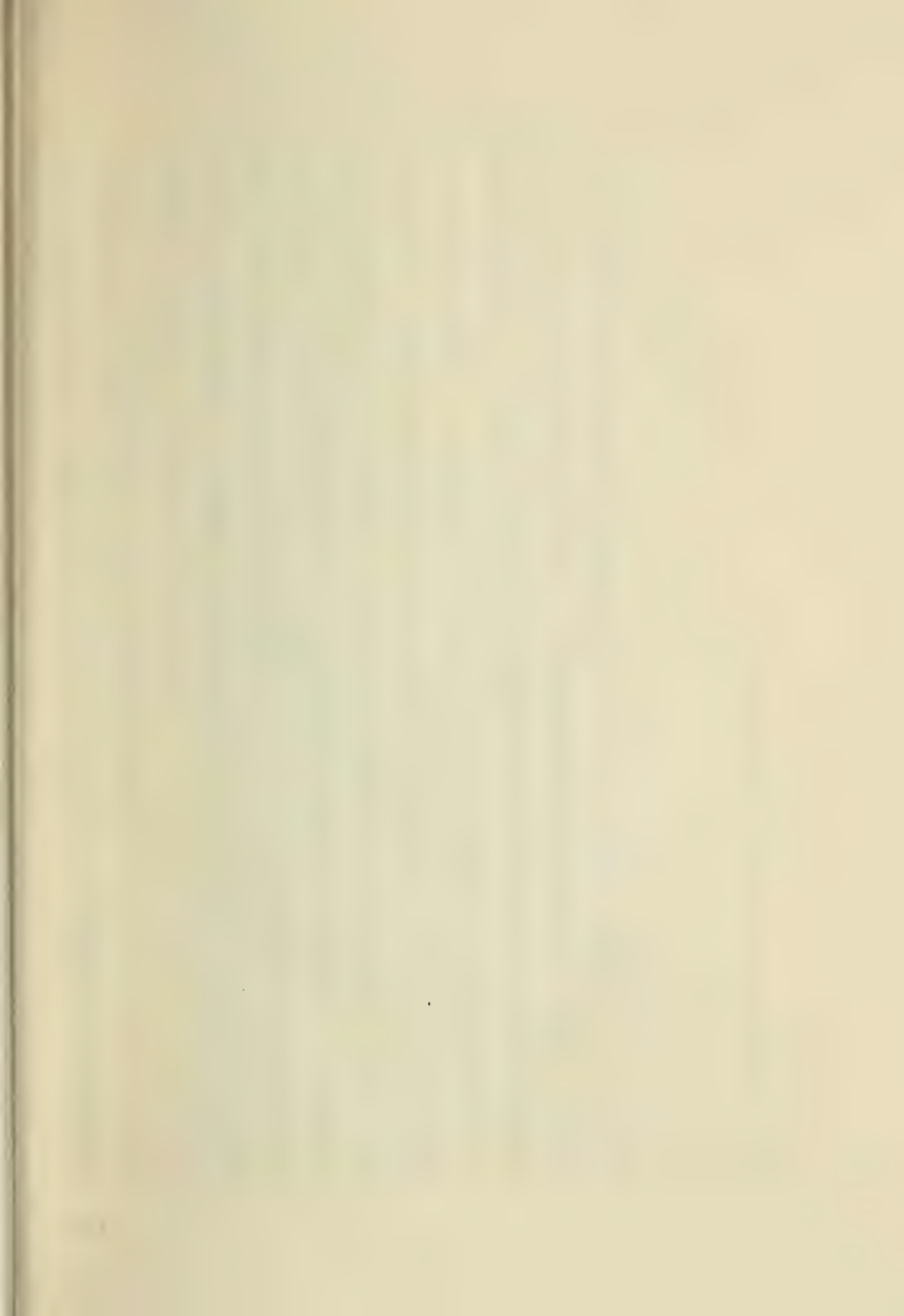
が、その不思議な友達は、決して來なかつた。またそのやうな樣子の子供も、近所にはなかつた。畢竟それは、狐が少しばかり惡戲を演じてみようとしたのであつた。惡戲の相手となつた子供は、いつまでもその愉快な友達を慕つてゐた。

一四

三十年ほど前のこと、松江に鳶川といふ力士上がりの男がゐた。大の狐嫌ひで、遠慮會釋もなく狐を狩り立てて殺した。非常な腕力家だから、大丈夫狐の怪力には擢らぬものと、一般から思はれてゐた。しかし彼は當り前の死にやうはしまいと、預言する老人達もあつた。この預言は當たつた。鳶川は餘程不思議な死にやうをした。彼は極めて惡るじやれが好きであつた。ある日、彼は翼や鍵爪や長い鼻のある天狗に變裝して、樂山に近い神聖なる森の中にある高い樹に登つた。暫くすると、無邪氣な百姓共が、そこへ蝟集してきて、いろ〳〵の品物を献げて彼を拜んだ。彼は此光景を見おろして、面白がり乍ら、天晴れ天狗の腕前を示さうと思つて、枝から枝へと、輕快に飛んで行かうとする際、足場を蹈み損ひ、落ちて、頸の關節が外づれて死んだ。

一五

しかし是等の奇異なる信仰は、急速に亡びつゝある。年々稻荷の社祠は、ます〳〵頽廢して行つて、再建されるのは決してない。年々影像師が作る狐の數は減じて行く。年々狐憑きの犧牲となつて、病院――獨逸語を操る日本の醫者が、最も進步せる科學的方法によつて治療を施す病院――へ送られる患者も少くなつた。その原因は古い信仰の衰頽に存するのではない。迷信は宗敎の亡びたる後にも殘るのだ。況してそれは西洋から來た宣敎師輩の勸誘的努力によるのでもない――彼等の多くは惡魔といふものの熱誠なる信仰を告白してゐるのだ。それは全然敎育のためだ。迷信に取つて萬能力を有する敵は、公立學校である。そこでは近代の科學が、宗派または偏見によつて、妨げられることなく敎へられてゐる。そこでは極貧な人々の兒童も、西洋文明に接することが出來る。そこでは十四歲位の男兒、又は女子にして、チンダル、ダーウキン、ハクスレー、或はハーバート・スペンサアなど、諸大家の名を知らぬものは一人もない。惡戲の際に狐の神の鼻を毀はす小さな手は、また植物の進化や、出雲の地質に關する論文を書くことが出來る。新しい學問によ

つて、新しい時代の人々に啓示されたる、美しき、自然そのまゝの世界には、妖狐の存すべき餘地はない。全能の陰陽師と改革者は子供なのだ。

第七回配本

小泉八雲全集第三卷

第一回豫約菊判背革裝 大正十五年八月配本開始 昭和三年一月配本完了

第二回豫約菊判總布裝 昭和四年六月配本開始 昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版 昭和五年十月配本開始 昭和七年三月配本完了

最初申込金五十錢（これは最後の會費に充當）

豫約者に限り每月一圓五十錢

家庭版【第四回豫約】

昭和十二年六月十五日印刷

昭和十二年六月二十日發行

著作者 小泉八雲全集刊行會代表 田部隆次

刊行者 東京市麹町區三番町一 長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一 第一書房 振替東京六四二二三 電話九段三三四四

牛込區山吹町一九八 印刷者 萩原芳雄

（家庭版）小泉八雲全集 全十二卷 内容

第一卷
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二卷
佛領西印度の二年間

第三卷（上）
知られぬ日本の面影

第四卷（下）
知られぬ日本の面影

第五卷
東の國から。
心。

第六卷
佛の畠の落穗。
異國情趣と回顧。
日本お伽噺。

第七卷
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八卷
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九卷
神國日本。

第十卷
文學論。

第十一卷
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戸クロニクル社說
隨筆八種。

別册
小泉八雲。